文豪夏目漱石

PL
812
.A8
Z48x

UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
PL812.A8Z48X C001
BUNGO NATSUME SOSEKI TOKYO
3 0112 077641626

新小説臨時號

UNIVERSITY OF
ILLINOIS LIBRARY
AT URBANA-CHAMPAIGN
ASIAN

夏目漱石氏新著

縮刷 虞美人草

數年前自然主義の全盛期に當つて『虞美人草』一篇の出生と、その盛んな賣れ行きとは、實に我が文壇に稀有なる奇蹟であつた。あの絢爛たる文章と、全篇に横溢するあの力強い理想主義とは、優に當時の平板にして無理想なる藝術界の全勢力に對抗して餘りあるものであつた。新理想主義樹立の期待の盛んなる今日、此の書の新版が如何なる感興を與ふるか吾々の樂しい期待は其處にある。

津田青楓氏装
カンバス燒書
金押圖案表紙
九ポイント活字組
定價 壹圓廿錢
郵稅 八錢

草枕
價四十錢
送料四錢

坊ちやん
價卅五錢
送料四錢

夢十夜
價卅五錢
送料四錢

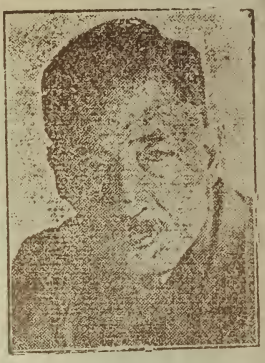
滿韓處々
價卅五錢
送料四錢

思ひ出す事など
價四十錢
送料四錢

切抜帖より
價七十錢
送料六錢

東京市日本橋通
春陽堂發行
電話本局五一
振替一六一七
各書店販賣

ASX
PL
812
.A8
Z45



逝ける文豪を記念すべき不朽の金字塔

＝漱石先生全傑作の精粋此一巻に在り

夏目漱石傑作選集

色鳥

本書の巻頭數十頁に亘れる「倫敦消息」の一篇は先生が滞英中の傑作にして、曾て如何なる集にも掲げられず、未だ發掘せざりし寶玉とも稱すべくまことに本書の異彩也。

＝増版出來＝

▼中版五百五十頁
▼特製箱入極美本
—津田青楓氏裝畫—
▼定價壹圓參拾錢
—小包料八錢—

『我が輩は猫である』以前の『倫敦消息』に溯り、爾後十數年間に亘れる漱石先生の著作中より**最も代表的なるものを選び**、その短きは都べてを採り、長きは最も要所切所を含める部分をとりて其の前後を解説し、而してこれを歴史的に排列し以て一冊となす。堂々五百五十頁、漱石先生全傑作抄と呼ぶ可し。匆忙の世の營みに拂はりて、先生が等身の作物を讀破するを難しとする人は、須らく本集に就け。我が文壇の巨匠夏目漱石先生が**藝術の精粋**は即ち凝つて此の一巻に在る也。

新潮社
東京市牛込区矢来町
電話番町二一二七
振替京橋二四三二番

「新小說」臨時號『文豪夏目漱石』目次

夏目漱石氏の逝去……『新小說』記者……一
夏目漱石氏剖檢……醫學博士　長與又郎……三
夏目漱石氏の一生……七

幼年と青年時代……森田草平
學生時代……文學博士　大塚保治
　齋藤阿具
　菅虎雄
松山時代……醫學博士　眞鍋嘉一郎
　松根東洋城
熊本時代……速水滉
　內丸最一郎
大學教授時代……畔柳都太郎
　松浦一
　野上臼川
朝日新聞時代……山本笑月
夏目漱石略傳……五三

□
□
□

夏目先生の人及び藝術……和辻哲郎……一〇
漱石先生の書事……津田青楓……二六
夏目先生と書……瀧田樗陰……三〇
禪の境地……釋宗演……四一

先生と俳句と私と …… 松根東洋城 四
漱石先生の追憶 …… 赤木桁平 五六
夏目漱石氏と英文學 …… 戸川秋骨 六四
夏目先生と春陽堂と新小説 其他 …… 本多嘯月 七二
病因の鵜 …… 大谷繞石 九〇
漱石先生の逸話 …… 一〇四

感想及び印象 …… 一

追想の斷片 …… 馬場孤蝶
溫情の裕かな夏目さん …… 内田魯庵
英文學の感化 …… 長谷川天渓
夏目氏について …… 正宗白鳥
腰の据つた人 …… 秋田雨雀
彫刻にしたら可い顔 …… 島田青峯
初めから固定して居た人 …… 島村抱月
新浪曼派の第一人者 …… 小川未明
夏目先生 …… 久保田万太郎
十年經たねば …… 與謝野晶子
歩いた道が異つて居た …… 山田花袋

漱石氏 …… 島崎藤村
夏目漱石氏と高山樗牛氏 …… 松江秋骨
『猫』のモデル …… 尼子四郎
青い着物のお爺さん …… 中村武羅夫
世話好きな方だつた …… 岡本一平
禪の感化 …… 上司小剣
『文學評論』の價値 …… 本間久雄
書齋の人 …… 徳田秋聲
天に則つて私を去る …… 中村星湖
三度の面會 …… 岩野泡鳴
夏目さん …… 泉鏡花

夏目漱石氏傑作梗概 …… 六一

『心』『行人』『彼岸過迄』

肖像及び遺墨 ……

漱石先生遺稿編纂につき謹告

私共今回漱石先生遺稿を編纂仕候に就いては先生の俳句漢詩書簡其他を汎く蒐集仕度存候間夫等の材料御所持の方は左記の條項御承引の上一時私共へ御貸與被下度御願申上候尚此旨御心當りの向へ御通告被下候はゞ幸甚に奉存候

一御郵送は大正六年四月三十日迄に願上候
一材料は凡て謄寫したるものでなく、先生の肉筆のみを希望仕候
一書簡は事務的のものをも拜借相願度御差支への部分は公刊の際削除可仕候
一取捨選擇は私共へ御一任願上候
一御貸與の品は謄寫の上順次書留郵便にて御返送可申上候
一御送附は東京市赤坂區青山南町六丁目百〇八番地小宮豐隆方漱石遺稿編纂事務所宛に願上候

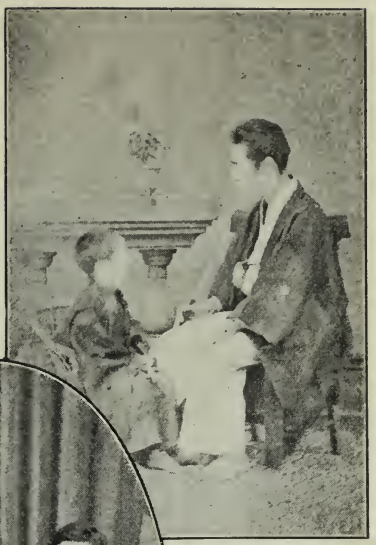
大正六年正月

寺田寅彥
松根豐次郎
森田米松
鈴木三重吉
阿部次郎
安倍能成
野上豐一郎
小宮豐隆

廻廊の柱の影や海の月　漱石

凩や海に夕日を吹き落す　漱石

豫備門時代（左）



五歲位

明治二十五年
二月（左）

大學時代（中央）

十二歲位

明治二十六年九月（右より二番目）

明治二十五年十月

明治二十七年六月（後列左より二番目）

明治四十五年五月

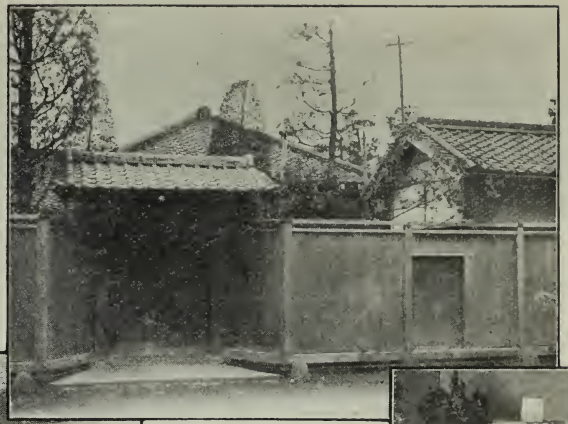
明治三十三年(左端)

明治三十二年

明治四十三年四月

明治四十一年十二月

大正三年（左端）



千駄木町五十七番地
明治三十六年三月より
明治三十九年十二月まで
『吾輩は猫である』
『漾虚集』『鶉籠』時代

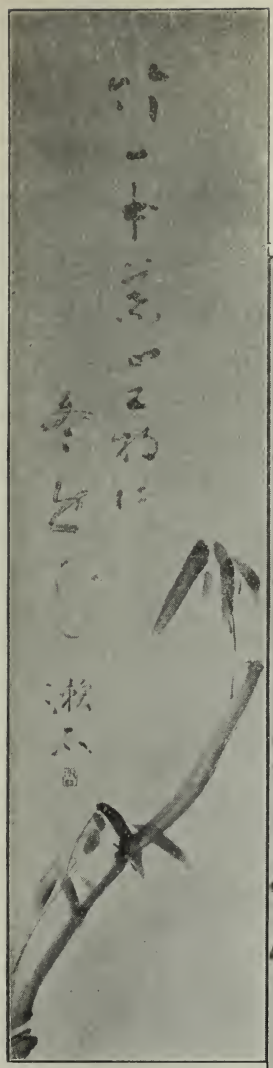
西片町十番地ろノ七號
明治三十九年十二月より
明治四十年十月まで
『虞美人草』時代

明治四十年十月より現在
『草合』以下『明暗』まで

靈室

漱石先生遺墨

漱石先生遺墨



夏目漱石氏の逝去

大正五年十二月九日午後六時五十分、夏目漱石氏は遂に逝いた。

顧れば、明治三十八年、「倫敦塔」「幻影の楯」「琴のそら音」「一夜」の諸作がつぎ〳〵に發表せられ、仝年十月、漱石氏最初の大作「我輩は猫である」の初版が出版せられて、我國一般の知識的所有に干つてから、今日迄の間には、僅かに十一年の歳月が挟まれて居るに過ぎない。而もこの、日露戰役を首途としたる十年間こそ、實に我が文明史上に於ける最も紀念すべき、而して最も有意義なる文運の勃興期であつた。

此時代に於て、筆硯に親しむこと十年、絶えず我が文運の先覺者として、文壇一方の雄として、而して亦仝國民の慰藉者として、一代の渇仰を集め來れる我が夏目漱石氏が、我が國民生活の上に齎した功績はその時代そのものと共に限りなく偉大であり有意義であつた。

吾等は漱石氏の此の偉大な生を結ぶ偉大な死に際して、特にその一生を紀念すべく、茲に夏目漱石氏紀念臨時號を編することになつた。

左に掲ぐるものは、漱石氏逝去の翌朝、東京朝日新聞紙が、氏が臨終の狀を叙するべく掲げた一節である。特に同新聞社の許諾を得て、氏が臨終の記に代へることにした。

午後二時（九日）食鹽注射を行ふと、呼吸も穩かになり脈博も減じたが、間もなく再び呼吸逼迫し「水と葡萄を呉れ」と云はれ、頻に胸の苦痛を訴へて「早く胸と頭を冷せ」と促された。時に午後五時

半頃であつたが、六時になると「苦しいから注射を爲て呉れ死ぬと困るから」と云はれた。それから漸次苦痛が增し「胸と頭に水を〳〵、水をぶツ掛けて呉れ」とせがまれるのであるが、それもならぬので、看護婦が手拭を濕して顏を撫でる、先生は聲を荒らげて怒られた。看護婦も已むなく水を含んで顏一面に吹きかけて上げた。すると先生は物靜かに「有難い」と一口云はれた。之が實に先生の最後の言葉であつた。之と同時に脈も出なくなり、六時四十分には言葉にも盡されぬ苦痛が起つて、遂に死の狀態に陷られ、六時五十分愈息を引取られた。斯くて夫人を初め友人中村氏以下門弟等四十餘人の人々が 涙ながらに末期の水を供したのである。

夏目漱石氏剖檢

醫學博士　長與又郎

十二月十日の午後、余は東大醫科大學解剖室に於て、夏目漱石氏の屍體解剖の刀を執つた。

この解剖の目的は、漱石氏の腦を研究し、死因を檢するためであり、延ひては消化機病の系統を調べるためであつた。したがつて、今回の解剖は、頭部と腹部とに限り、他の個所には及ばなかつた。

漱石氏の腦の重量は、千四百二十五瓦あつた。通常日本人の腦の重量は、千三百五十瓦內外であるから、氏のは七十五瓦重いわけである。腦の量の重い事は、優れた人であるといふことを意味する。しかしそれは絕對ではない。現に東京市の一行路病者の腦量は、千七百瓦もあつた。

日本では、偉大な人物の腦量を檢したことは、極めて少なく、僅か七八十例に過ぎない。その例の內で、普通人の腦量よりも輕いのが、七八例あるが、他はすべて重い。この點から見ても漱石氏は傑出した人であつた。

更に氏の腦の回轉狀態は、甚だ複雜であつて、左右の前頭葉顱頂部、わけても右が發達してゐた。腦の回轉狀態に關する詳細の研究は、今後に竢つて、玆には述べないことにする。

氏の死因は、胃潰瘍であつたが、既往症としては、明治四十三年六月、胃酸過多症に罹られ　輕度の糖尿病も認められた。翌四十四年八月上旬、氏は伊豆修善寺に療養中、俄然吐血されて、人事不省に陷つた。

その時には明かに胃潰瘍であることがわかつた。

最近の病狀の著るしい變化は、十一月十六日に粕漬の鯛を食されてからだ。氏はその晩から胃の膨滿を感じられ、疼痛を覺えられた。越えて廿一日にある結婚披露の式に臨まれ、歸られてからしきりと不快がられた。廿二日には疼痛不快を增し、嘔吐された。しかしその折には血液はなかつた。廿八日の夜十一時半頃、氏は不意に床上に起き上り、あつたと叫んだまゝ人事不省に陷つた。脈がなかつた。傍から冷水を注いだので、氏はやうやく意識を恢復された。その夜中三時頃に、胃或は十二支腸の內出血のあつたことが、便秘で知れた。

十二月二日午後三時頃、氏は大便を催して自身起き上がつた。そして强く腹壓を試みた瞬間に、またしても打ち倒れて人事不省に陷つた。血便があつた。

臨床の結果から見ると、氏には二つの病症があつた。一つは糖尿病であつて、これは明治四十三年に胃腸病院入院當時からであり、いま一つは胃の症狀、即ち胃潰瘍であつた。而して死の直接原因は、十一月廿八日および十二月二日の二回の大出血にあつた。

消化機の方の解剖の結果は、腹部が太鼓狀を成してゐて、非常に緊張してゐた。開いて見ると、それは瓦斯のためではなくつて、腸の內容が充滿してゐたのである。そして其の壁を通して大出血の跡が見え、虫樣突起を中心として、上行結腸肝臟橫隔膜の間に癒着のあつた事を發見した。第二回の大出血後、氏はしばゝ腸がひつぱられるやうだと愬えられたが、それは腹膜が刺激狀態にあつたからである。それに虫樣突起の形が變つてゐて、普通のものとは反對の方向に、まるで釣針狀に曲つてゐた。之は嘗て氏が虫樣

突起炎を患つたことを證するものであつて、氏の親友中村是公氏の話によると、氏は二十歳の書生時代に腹膜炎を病れたといふが、解剖の結果明かにその病歴が示されてゐる。

次いで腸及び十二指腸を開いて見たが、こゝには何等出血痕を見なかつた。胃に及んで始めて特有の潰瘍を發見した。それは、幽門部の上方約五センチメートルのところにあつて、長さは五センチメートル、幅は一センチメートル半あつた。この潰瘍の内には、大きく破れた二つの跡があつて、右の方は十一月二十八日の大出血を示し、左の方は十二月二日の大出血を示してゐる。胃の中は、最後まで胃酸過多症を持つてゐた。幽門部には、三つばかりの斑痕があり、閉窄症の疑ひがあつた。その他の諸臓器に於ては、何等の異様を見なかつたが、肝臓脾臓、ことに後者のごときは、灰白色になつてゐて、實質が非常に增してゐた。腎臓は、糖尿病の結果、小さく堅くなつてゐた。

十二指腸には、潰瘍の跡はなくつて一ぱいにどす黒い血液がかたまつて居、その附近の淋巴線まで、多くの血液を吸收した様が看取され、いかばかり大きい内出血であつたかを偲ばしめる。

茲に一代の文豪たる氏を知る上に、極めて重大な問題がある。氏は天才肌のカラクテルをもつて居られ甚だ我儘であつたが、近來、時として發作的に、追跡症の症狀があつたやうであつた。この症狀は胃潰瘍と何等關係はなくして、糖尿病から來た結果である。

由來、糖尿病には、一種の精神症狀が隨伴するものであつて、佛蘭西の學者ノルデン氏の著書によると、一般に糖尿病患者には、精神症狀があつて、仕事に對する倦怠が著るしいと書いてある。

事實、糖尿病患者は、よくメランコリーに陷ることがあつて、時とすると自殺をさへ決行する。從つて

糖尿病を治療すると、かうした精神症狀も同時に治癒することがある。

追跡狂は、ノルデン氏の言の如く、糖尿病患者に起る症狀であるばかりでなく、天才の人に往々認められる發作である。ロンブローゾの如きは、多くの天才的の人は、種々精神病的症狀を現はすものであつて、時としては全く精神病者さへある、云ひに換へれば、天才は精神病者に異ならない、とまで云つてゐる。

漱石氏のやうに腦の非凡な天才者には、恐らくこの種の素質があつたに違ひない。そして更に糖尿病の爲めに、この種の傾向を誘引されたのであらうと思ふ。

何れにもせよ、漱石氏と消化器系統との關係は、極めて興味深い問題である。氏の數多くの傑出した文學上の作物は、氏が常住胃を惱んでゐられる傍ら成つたものであることを思ひ、更に向來臨床上の貴重なる資料を與へられたことを深謝し、敬意と弔意とを併せ表するものである。（在文責記者）

夏目漱石氏の一生

幼年と青年時代

森田草平

先生は慶應三年正月五日牛込馬場下に生まれられた。今馬場下の交番から菊井町の方へ來ると、相摸屋といふ質屋がある。其質屋の隣位に當つて居て、入口の狹い、奥で廣まつた邸であつたさうな。交番の筋向ひに、昔堀部安兵衞が高田の馬場で敵討をする時、一升桝の角から酒を呑んだ桝を今でも保存してるとか云ふ古い酒屋がある。其酒屋が邸の裏にくつ着いて居たさうな。何でもあの酒屋とあの質屋との間位の見當だと思へば可い。

慶應四年は明治元年である。先生は慶應三年生まれだから、俺は如何しても明治生まれとは云へないと云ふやうなことを言つて居れたことがある。慶應三年の正月の五日は庚申の日に當つて居たさうな。昔から庚申の日に生まれたものは、出世をすればうんと出世をするが、一つ間違へば大泥棒にも成る。それを避けるには、名前に金の字を附ければ可いと云ふやうな言ひ傳へがあるとかで、幼名を金之助と附けられた。先生は其名前を一生擽ひ廻られたのである。

先生の阿父さんは小兵衞と云ひ、後に直克と云つた。小兵衞と云ふのは夏目家代々の通稱であつたらしい。維新前の赤坂に夏目將監といふ二千石の旗本

があつた。先生は生前俺のことをあの夏目家に生まれたものゝやうに言ふ者もあるさうだが、それは嘘だ。俺の家は馬場下の名主で平民だよと笑つて居られた。今系圖を繰つて見ると、馬場下の夏目家は鎭守府將軍六孫王經基の五男滿快から出て居る。滿快の末で夏目左近將監國平と云ふのが、信州伊奈郡に住んで夏目の邑を領し、將軍賴家に使へたとある。旗本の夏目も此國平から出て居ると云ふから全然關係がない譯ではない。が、其方は三河の幡豆郡に住んで、神祖淸康に仕へたとあるに對して、此方は甲州に移つて、武田信玄に仕へた。夏目彌三郎信賴なる人永祿四年川中島の合戰にも父と共に從つて軍功を立てたが、勝賴天目山に沒落後は、武州岩槻に移つて隱れ棲んだ。其間岩槻の城主太田十郎氏房に仕へる身と成つたが、小田原合戰の砌、太田氏も亦滅亡した。岩槻城が高力武藏守淸長の居城と成るに及んで、再び出でゝ仕へた。彌三郎の子權三郎氏正は近習馬廻役を勤めて居る間、病の故に致仕して高力家を退去し、武州豐島郡牛籠の鄕に隱れて鄕士と成つたとある。其子四兵衛の代に成つて、元祿十五年四月兩町奉行御役宅に於て名主役仰せ附けられた。これが夏目の家の名主に成つた始めである。此人から六代目で先生の阿父さんの小兵衛直克に及んだ。町名主とは云へ、苗字帶刀を許され、山の手では誰某と云はれる名主であつたさうな。

此處に長々と書き寫した夏目家の系圖の如きは、別段先生の本質と關係のあるものではない。恐らくはあらゆる系圖の信憑すべきが如く信憑すべく、あらゆる系圖の信憑すべからざるが如く信憑すべからざるものであらう。先生の家が淸和源氏の御末であるか否かは問題ではない。が、先生の祖先が甲斐國から出て、權現樣御入國以前から江戶の地に居住した、所謂草分名主の家であることは、著大なる事實として、此處に特記して置く必要があるやうに思はれる。

殊にそれが武士の家でなくして、名主の家であつたと云ふことが私には面白い。私の想像する所に據ると、武士は名主より威張つたものかも知れない、名主は武士の前へ出て頭の上らなかつたものかも知れないが、武士の前へ出るやうなことは、町奉行所へでも喚び出される時だけで、後は町人を相手に威張つてばかり暮したものである。これを武士が始終殿樣の前に鞠躬如として、何時知行に離れるかとおづおづしながら暮して居たのとは、心持の上に雲泥の差があると云つて可い。兎に角、名主の方が侍よりも獨立の氣象に富んで居たものと想像される。何でも町名主といふものは、區長と警察署長のやうな役目を遂行したもので、惡い奴があれば、手先を使つて捕まへて來て、口書を取る、それを奉行所へ送る。親孝行の表彰もすれば、泥棒の逮捕もする。殊に諸種の興行場、又は料理屋などは怖持てに持てたものださうな。先生のお祖父さんと云ふ人は、持てるに連れて隨分遊んだ人で、一代に身代を傾けた人ださうなが、死ぬ時は雜司ヶ谷鬼子母神の茗荷屋で酒の上で頓死をしたと云ふことだ。其頃の鬼子母神は今のやうなものでない、さま〴〵な見世物小屋などもあつて、山の手の盛り場であつたさうな。其のお祖父さんの子で、阿父さんは又一滴の酒も口にしない、一生貨殖に勉めて身代を盛返さうとした人だと云ふことである。其子で先生は又殆ど酒精分を口にされなかつた。先生のお祖父さんに酒呑みの道樂者——氣を負うた江子兒の豪奢な享樂主義者があつたと云ふことは、一寸注意に値することである。

お祖父さんが使つた人だけに、阿父さんが名主の寄合などへ出ても幅が利いたと云ふことだ。此の阿父さんの時代に明治の御代に變つた。それに伴れて、今迄は單に馬場下で通つたのが町の名も附けなければ成らない。今日の菊井町と云ふのは、先生の家の紋が井桁に十六葉の菊であつた所から、出入りの鳶

の頭が菊井町と着けたのださうな。尤も其時分はあの邊も孟宗竹が茂つて、「二百十日」の中にもあるやうに、藪の向うから西方寺の寒念佛が聞えて來るやうな。隨分寂しい所であつたと云ふことだ。先生の家の紋は其後井桁を除つて、十六葉の菊だけにしたが、天朝に憚りありと云ふので、再び菊の菱形にしたものださうな。

先生は生前何うも阿父さんよりは、阿母さんに美はしい記憶を持つて居られたやうである。阿母さんは名をお千枝と云つて、四谷の鍵屋といふ質屋から來て居られた。芝の將監殿橋で、薩摩樣の御用達高橋長左衛門と云ふのが實家と云ふことに成つて居た。阿母さんは明石の殿樣に十年餘りも御奉公に上つて居た人で、二十七の歳に二人子のある家へ後妻に來られたのである。永く御殿奉公をして來た人だけに、歌の一つも詠んで、品格もあり、何處か聡かりした人であつたらしい。先生ばかりでなく、其時分夏目の家に奉公して居た女どもの話を聞いても、皆好い御新造さんであつたと言つて居る。偉人の傳記を讀むに、大抵の人が皆父親よりも母親に好い記憶を持つて居るやうだ。先生も亦其の一人であつたらしい。

先妻の子は二人とも女の子であつた。先生の阿母さんには大一、榮之助、和三郎(後に直矩)、其間に夭死した一男一女があつて、先生は其の末子であつた。阿父さんが五十以上に成つてからの子である。兩親が年を取られて居た所爲か、生まれた時から里子に出された。家に居た女中の姉が四谷の古道具屋へ嫁附いて居た。其夫婦が實體の者だからと云ふので、其家へ預けられたのである。何でも其の古道具屋が四谷の大通りへ夜店を出して、先生も一緒に連れて行つて居た。一番上の姉さんが其前を通りかゝつて見ると、先生は笊に入れられたまゝ、師走の寒風に晒されて居たのである。餘まり可哀相だと云ふので、

姉さんは其場から抱いて自宅へ連れて來て仕舞つたこともあるさうな。これは先生の直話である。尤も、其の古道具屋は先生を可愛がるには可愛がつて育てゝ居た。

そして、先生は三つの歳まで其處で育てられた。

四つの歳に、先生は下谷の鹽原といふ家へ養子に遣られた。鹽原といふのは元先生の家に名主見習ひをして居た男で、其時分は下谷で戸長をして居た。戸長と云ふのは、明治に成つて名主が變名したので、今の區長の小さいやうなものである。先生に言はせると、俺は年寄の末ッ子で、親の眼からは要らぬ子だから、生まれた時から里子に遣られたり、養子に遣られたりしたんだと云ふのだが、鹽原の方では、自分が若い時世話に成つた御恩返しに一人は夏目家の子を貰つて育てたいと云ふので連れて行つたのださうな。鹽原の家では、隨分應揚に、從つて我儘に育てられた。五つの歳に種痘をしたのが原因に成つて、先生は疱瘡に罹られた。手に袋を嵌め

て顔を掻かせないやうにしたんだけれど、矢張痒くて耐らんから無理に引掻いた。其結果は鼻の頭に殘つて居る。又眼ッぱに成ると不可ない、それには柳の蟲を匐はせると可いと云ふので、柳の蟲を取つて來てはそろ〳〵顔に匐はせたものだ相である。其光景は一寸私どもの想像に及ばない。苦沙彌先生の痘痕は、實際見ると左樣でもないが、何しろ音に響いたものだから、此處に記して置く。

先生は其時分兩親のことをお祖父さん、お祖母さんと言つて居られたさうな。多分鹽原の家で左樣言はせるやうにしたのであらう。此時代の友達には、畫家の島崎柳塢氏だの、中川清二(?)理學博士だのがある。島崎の阿父さんが漢學の先生で、鳥越に寺小屋見たいな塾を開いて居たから、其處へ通つて居られたのださうな。又中川と云ふ子は、いろ〳〵名人もあるが、これは鼻を鳴らすことの名人で、一町位此方からでも聞える。それを遠方から聞くと、如何しても遊びに出たくて、自宅に靜乎として居られなかつたと云ふやうな話をされたことがある。

鹽原には滿四箇年程居られたさうだ。其間鹽原夫婦の間に離緣沙汰を生じて、主人は或旗本の寡婦と一緒に成り、細君は新宿の實家へ歸るやうなことに成つた。で、先生も再び夏目の實家へ引取られた。此時分の先生は隨分腕白振を發揮されたものらしい。依怙地で、强情で、云ふことを諾かないと云ふのが、今なほ一族の間に殘つた定評である。阿父さんと云ふ人は元來子供が嫌ひな所へ、先生の方で左樣だから、時々耐り兼ねては先生を土藏の中へ押入れたものださうな。先生は開けて呉れと言つて謝罪る代りに、手水がしたいと言ふ。開けて呉れなければ、此處でして仕舞ふと威嚇するのである。それがたび〳〵に成つて、毎もの嘘だからと拋つて置くと、本當にして仕舞ふのである。こんな風で勉强が嫌ひで遊んでばかり居るから、阿母さんも耐り兼ねて、

或時先生を土藏の二階へ喚んで、短刀を突き附けて、これから改心して勉強すれば好し、さもなければ此處でお前を殺して自分も死んで仕舞ふと言つて練められたさうな。それから少し先生も勉強する氣に成られたと云ふことだ。一番上の阿兄さんは大一と云つて、文科大學を卒業する一年前に病氣で罷めて、後には警視廳の飜譯課に出仕して居られたこともあるさうな。此人が大層先生を可愛がつて、自分で仕込むやうにした。が、これが又大の肝癪持で、出來ないと、先生の頭なぞ毆つたものださうな。皮肉で、氣難かし屋で、おまけに口が達者と來て居るから耐らない。先生もつく〳〵愜はないと思つて、矢張學問が出來ると、あんなに辯口も達者に成るものかと感心して居られたさうなが、餘り口惜しいので、一度前から言ふことを考へて置いて、言つて〳〵、言ひまくつて、到頭言ひ負かすことが出來たさうだ。それから何でも言はなくちや駄目だと、大いに自信を得られたと云ふことである。

此の大一さんが先生を可愛がる餘り、自分は病身で妻帶する氣もないから、先生を準養子に家督を讓りたいと言つて居られた。が、これは阿父さんが不承知であつた。處が、大さんは明治二十年の正月に亡く成つた。續いて、次男の榮之助と云ふ方も一週間許り置いて亡く成つた。三男の和三郎といふ方は生まれ附病身なり、いよ〳〵先生が家督を繼ぐと云ふ話に成つたが、先生は如何しても可厭だと言つて承知せられなかつたさうだ。で、三男の和三郎さんが後を繼いで、直矩と成つた。此方は今までも存命である。

序ながら、先生の阿母さんは明治十四年に亡く成つた。阿父さんは明治三十年に行年八十四歲で亡く成られた。これは又珍らしい長命である。此方の亡く成られる迄、先生の一家は馬場下に住んで居られたと云ふこと。

阿兄さんの大一さんが亡く成られる頃、先生は二十一歳であつたが、枕頭に徹夜して看護しながら、屏風の蔭で始終書物を開いて讀んで居られたさうな。先生の出られた小學校は、牛込原町の折原小學校と云つて、今の市ヶ谷小學校だと云ふことである。それから二松學舍などにも學ばれたことがあつて、先生の漢學の造詣は有名だから、此處に說く迄もあるまい。漱石といふ號は何時頃から用ひられたものか、後の考證を待つ。

大學豫備門へ入られる前、少年時代から講釋の席へ行くことは隨分所好であつたらしい。須田町の小柳などへも隨分足を運ばれたものだ。今眞打と成つて、琴凌だの、何だのと大きな名告を上げて居るから聞いて見ると、皆其頃の前座の若い者であつたと云ふやうなことを何處かで書いて居られたことがある。其他落語だの、義太夫だの、色物の寄席にも隨分行かれたさうだ。只芝居だけは昔から所嫌であつたらしい。

鹽原の家を出られてから籍のことで隨分ごた〳〵した相である。で、二十近く迄戸籍上先生は夏目の家へ戻らずに居られたらしい。漸つと話が着いた時、滿四箇年分の扶養料を出して籍を取戻した。これでは前の恩返し云々は一向當に成らないやうだ。が、鹽原の方ではまだ〳〵づ〳〵言つて、其時一札の證文を先生に入れさせた。何でも其證文には、「此度離緣に相成り候とも、生涯不人情のことは致すまじく候こと」と云ふやうな文句が入れてあるさうな。それを盾に取つて、鹽原の主人は四五年前其證文を百圓に賣つて行つた相である。だから其證文は今夏目の家にある。

こんな縺れがあるので、先生が鹽原家に居られた時代の面白い話は凡て書かぬことにした。

學生時代

大塚保治

自分は夏目君の性格や思想などを知つてゐる點で、恐らく隨一だらうとは信じてゐるが、學生時代の夏目君と云はれると、同君の性行を躍如とさせるやうなインシデントが記憶に殘つてゐない。さう云ふものは却つて、大學卒業後暫らく一緒の家にゐた菅虎雄君とか、同級だつた狩野亨吉君などの方が詳しく知つてゐる筈である。

初めて夏目君と相識つたのは、自分が卒業して、大學院にゐる時であつた。同君は確か自分より二年下だつたと思ふ。兎に角自分が大學院にゐて、寄宿舍にゐる時、夏目君も入舍して來た。其頃の文科生は數も少なく、寄宿舍でも二三室を占領してゐるだけだつたから、夏目君とは或は同室になつた事もあり、又向ひの室に居た事もある。

其時分話がよく合つたのは覺えてゐるが、果してどんな問題を喋り合つたものかは、毫も記憶にない。唯同君の學生時代の態度も、後の夏目君と異りがなく、所謂低徊趣味的と云はうか、俳味に滿ちてゐたと云つてもよい。其頃の文科は、割合に哲學科目が多かつたが、同君はそれに對し、殊に成績がよかつた。一體に勉强すると云ふ程勉强したとも覺えてゐないが、よく出來たのは確かである。

俳句は學生時代から子規と相知つて、作つてゐたらしかつた。大學にゐる時分日本俳句に出してゐたとか云ふ話を後で聞いた。不折と知つたのも其頃の事であらう。又文章の方面では、早く哲學雜誌の米山君の勸めで、「英國詩人の天地山川に對する感想」や、ウォールト・ホイットマンを論じた論文などを發表した。自分等は當時感服したものであるが、未だ文壇の耳目をひくには至らなかつた。

運動は同窓の阪卷君に勸められて、弓を少しやつたと覺へてゐる。その他にはこれぞと云ふ運動もせず、只散歩にはよく出た。自分なども一緒に出て、色々な事を話したものであるが、途上同君の輕妙な警句や又犀利な觀察に暫々驚かされと云ふだけしか記憶してゐない。

漢詩は其頃から讀んでゐた。自分で作つてもゐたらしかつた。私は夏目君が其頃、どんな場合だつたか忘れたが、

魂歸冥冥魄歸泉　只住人間十五年
昨日施僧薰苦上　斷腸猶繫琵琶弦

と云ふ三體詩にある哭亡妓といふ詩を、微吟愛唱してゐたのを今でも覺えてゐる。一體に高靑邱(?)の詩が好きであつた。專門の英文學の方では、何が愛讀書であつたか、私は知らなかつた。

座禪に興味を持つたのも、其頃からであつて、確か學校を卒業する夏だつたと思ふ、鎌倉で一ケ月ほど參禪した。

學生時代の事と云へば、先づそんな處である。洋行中の事は前後して英國へ行つた土井(林吉)君が、よく知つてゐる筈である。倫敦消息なぞで一斑は知れてゐるが、自分たちにも長い手紙を連名でよこして、詳しく狀況を知らして來たこともある。それは菅君か狩野君の處にあるかも知れない。何でも洋行中激しい神經衰弱に罹つて、土井君なぞが驚いて氣狂ひになつたのではないかと心配したさうである。その間の消息は例の文學論の序に委曲を盡してあるから、少しは世にも知れてるだらう。自分はよくは知らない。

私のよく知つたのは、洋行後と云つてもよい。洋行後ずつと續けて親しくして、色々な俗事で相往來もしたが、餘りに私人的な事情で發表の限りでないのを遺憾とする。

それから猶一言注意して置きたいのは、夏目君の

大學を去つた事、及び博士號辭退の件に就て、いろいろ大學側又は官省側に對する事情でもあつたやうに推測する向もあるが、私はさうは考へない。これは既に朝日の記者にも話したが、同君の徹底を欲する態度が、到底講義と創作の兩立すべからざるを知つたからに止まるのである。同君は隨分講義には骨を折られたから、講義をするとなると、同君の氣性としていゝ加減にして置けず、從つて時間をとられるので、創作に油が乘り出したからには、斷然教職を去つたのであらう。博士號辭退とても、一旦かうして野に下つた以上、從來の經歷から押して行けば當然同君の辭退するのが當然で、假りに同君の位置に吾々がゐるとしても、さうしたであらう。又博士會の方でも、推薦をするのに當人の意志を問ひ合せる必要を認めなかつたから、あんな事になつたゞけで、どちらも正しいと見るのが當然だと思ふ。

この二つは夏目君の生涯でも、最も公衆的な事件で、誤解があると困るから、一言附けくはへて置くのである。（談）

齋藤阿具

夏目君とは、大學の寄宿舍で同室であつたが、近頃古るい日記を出して調べて見ても、どんな事をどうしてゐたものやら詳しいことは書いてない。只一緒に散歩に出たとか、下宿してゐた菊池壽人君の所へ、借りた傘を返しに行つたとか、團子阪へ菊見に出かけたとか、淺草へ見世物を見に出掛けたとか云ふ、簡單な事實の記載がちよい〳〵ある丈で、纏つた感想などは少しもない。只此間「猫」を出して見たら、例の郁文舘の中學生が四つ生垣をくゞつて謎を取りに來る所に、清國人——先生もとか何とかと其樣子を聞へてゐるが、あれは其頃一緒に見に行つた事の

ある淺草の支那人の手品師で、檜の四方から突き出てゐる中を潜りぬける所から來たのを思ひ出した。「猫」と云へば今の私の家は夏目君の所謂千駄木時代にゐた家で、もと〳〵私の家だつたのを、私が仙臺に行つてる間、夏目君にゐて貰つたのである。私も一二度訪ねたが、同君は自分の前後左右に洋書を一ぱい積み重ねて、其中に入つてゐた。床の間には何か石摺の額が懸つてゐたのを覺へてゐる。(それは菅氏が贈つたものださうである。)「猫」を讀むのでも、自分の家の間取りを知つてゐると大變面白い。

夏目君の學生時代は、至極常識圓滿な人だつたやうに思ふ。後のやうに圭角のある人ではなかつた。而して非常に親切な人だつた。同窓の米山君などと異つて、決して一方にのみ偏した天才風の人ではなかつたと覺へてゐる。

菅虎雄

私も夏目君の學生時代の事は、餘り知つてはゐない。同君と知り合ひになつたのも、私が大學を卒業してからの事である。只夏目君が大學を卒業して、菊坂あたりに下宿してゐたが、そこを出て二三ヶ月間、私の家に同居してゐたことがある。それから傳通院の隣りの寺へ移つた。同居と云へば熊本でも、家が見つかる間私の家にゐた。卒業後一二年の夏、鎌倉へ參禪したのは、私が釋宗活氏に紹介したのである。それから之は他の誰もが知らぬ事實で、夏目君が横濱のメールの記者にならうとした事がある。其頃メールに頭本元貞氏などが關係してゐたが、私が中へ立つて、夏目君の確か日本の宗教を論じた大版十枚程の英文を送つた事がある。併しそれはやめになつたが、以て同君がもとから、何かしら筆で立たうと思つてゐた事が解る。もしあの時メール社に

入つてゐたら、其後どうなつてゐたらう。

其頃から骨董に趣味があつたし、俳句は勿論漢詩も作つたらしい。同君はもとより江戸つ子で、頼まれるとどこまでも親切に世話をする風があつた。感じ方の鋭どい事は昔も其頃も變りはなく、此方で云つた事が、一言一言すぐ目に見えて反應を起すと云ふ風であつた。

其頃の親友で今樺太中學校長をしてゐる太田達人君や死んだ形而上學者の米山保三郎君などと、紀元會と云ふものを起してゐて、夏目も其一員だつた。傑物の米山は早く死んで、夏目が其傳記を書く筈であつたが、それも果さずに逝つて了つた。

洋行の時連名で貰つた手紙は狩野君の許にあるかも知れない。それから私が京都に貧乏してゐた時代に、朝日新聞へ入りがけの夏目君から、二萬圓かを持つて迎へに來て呉れると云ふやうな面白い手紙を貰つた事もある。又最近に夏目君の處から、ある刻印を手に入れたから、其字を讀んで呉れと頼まれ、それを見た處が「版權許可之印」といふので大笑ひをした事もある。（談）

松山時代

眞鍋嘉一郎

松山中學時代の夏目先生は、先生から俳句を教はつた松根君や都新聞にゐる山本君や又船田君などの方が詳しく知つてゐるだらう。私は只、英語をよく勉強する男と云ふので、先生から認められてゐたゞけである。もとより私も、先生をそんなに偉人だとは思はず、只いゝ親切な先生だと思つてゐた。中には先生を嚴格な怖い人だとばかり思つてゐた人もあつたが、私には少しもそんな事はなかつた。

先生は松山中學で四年と五年の英語を持つて居られた。

私は先生が松山へ着く早々、殆んど三日目位かに、或る事情のため、或る他の先生を介して、先生の許へ一緒に置いて貰ふことを頼み入つた位で、先生とは初めから非常に縁が深かつた。其時承諾はされたのであつたが、不幸にして先生はやがて他の教師と同居するやうになり、私は私で他の先生と同居する事になつて、教場だけの關係にはなつたが、先生から受けた感化は忘れる事ができない。

其頃の中學の英語といふものは、一體教授法から何から無茶苦茶なもので、三年でラセラスの歷史、四年でヴイカー物語、五年でサー・ロジヤー・デカバリーをやると云つた風に、六ヶ敷いものばかりだつた。それで有志のものが、餘り六ヶ敷過ぎるから斟酌して呉れるやうに、縣會議員へ請願した事もあつたが、時の教師達は却つて、それを不都合とし、又難解なものをやればやる丈力がつくなどと云つて、無暗矢鱈に解らぬものをつめ込んだものであつた。所が夏目先生が來て、スケッチブックを講義し初めると、不思議によくわかつて、英語の面白味が初めて感ぜられるやうになつた。先生は吾々に四五年を通じてスケッチブックのヴオイエージとロスコーとブロークン・ハートの三章を講義されたが、其講義振りは、机に凭れて兩肘をつき、右手に鉛筆を持つて、細々と講義を進めて行かれた。能辯とか達辯とか云ふのではないが、非常に言葉の綾に富んだ話しぶりで、誠に明快を極め、熱心で正確で、其口吻が當時十七八才だつた自分の頭裡に刻せられて、今だにあり〳〵と殘つてゐる。先生の英語の教授法は、譯ばかりでは不可ない、シンタックスとグラムマーを解剖して、言葉の排列の末まで精細に檢覈しなければならぬと云ふので、一時間に僅に三四行しか行かぬこともあつた。そのため二年間にスケッチブック三章しか讀了じなかつたのである。プレフイックス、サッフイックスを始終やかましく云ふので、夏目さ

んのプイレフックス、サプイックスと云つて吾々の間に通つてゐた。私には此の根本的な語學研究法が、後々まで永く感化を殘して、いくら役に立つたか知れない。

此間も病氣になる前先生が此處（大學病院内物理的療養所の眞鍋氏が研究室）へ來られた時、私が松山の懷舊談をして、會々その感化に及ぶと、先生は「さうだつたか。僕はそんなに恩をきせたとも思つてゐないのに、君はそんなに難有く思つてるのか」と云つて笑はれたが、此の語學研究法は、私が獨逸語をやり佛語を學ぶ際にも應用して、大に爲めになつた。所が私の此の夏目式を、或る獨逸語の先生はまるで重箱の隅をほぢるやうなものだと笑つたが、私はこれを以て一生研學の方針としてゐる。啻に語學のみではない。すべてに細く頭を用ゐる夏目式は、私の醫學にまで感化を及ぼしてゐる。

序で乍ら先生の此感化と相並んで、同じ松山時代に式氏珠山といふ先生が漢文に於て之と同じ方法を取られたのを、いゝ對照として私は記臆してゐる。

兎に角かやうに熱心精確を極めた上に、私などには特に親切にして下すつて、私が其頃から醫者を志望して、獨逸語に手を染めかゝつてゐたのを知つてゐたため、教室で何か字義を解釋する度毎に語源の説明に加へて、獨逸語を引き合はして下すつたりした。今でも覺へてゐるのは、同じアングロサクソン語から出たものとして、Church（チャーチ）と Kirche（キルヘ）とを揚げられた事などの類である。それから又、一度私がスキントンの文典の六ヶ敷しいのを訴へたら、もつと解り易い文典を代りに教へて下すつて、「わしに文法も何もかも時間を持たせれば、君等をもつと解るやうにしてやるのだが」と云はれた事もある。發音などでも正確を旨とせられて、皆が Vicar of Wakefield をヴイーカーと云つてゐたのを、ヴィカーとなほさせたのなどでも覺へてゐる。

も一つ面白かつたのは會話の時間には初めから英語で話された事であつた。いつか拳闘の話が出た時私は not を聞き落して、先生から會話の際には先づ第一に肯定否定を聞きとるのが肝要だと、叱られた事もある。

作文なぞも實に叮嚀に熱心に直して下すつた。しかも他の教師とはちがひ、教授には充分餘力を餘してゐる事がわかつたため、生徒は全く先生に敬服して了ひ、私などは大惚れに惚れて了つた。而して生徒間にも、あんないゝ先生が松山なぞへ來たのは、道後の溫泉がある故、保養旁々教鞭をとるに過ぎまいなぞと云はれてゐた。事實先生は、毎日半里の溫泉まで通つたものである。

俳句は其時分可なり熱心で、試驗の時や、作文の間なぞには、教室でも頻りに俳句の本を讀んでゐた。

其時分の先生の風采は、背廣に鼠の中折れ帽で、いかにも英學者らしかつた。私は先生が初めてフロックに山高を着た時を覺へてゐるが、それは日清戰爭が濟んで、凱旋軍人の歡迎に出た時であつた。私どもが「似合ふ」と云つて冷かしたら、先生はにやりと微笑を洩らされた。その樣子が今猶私にははつきり思ひ出される。

ざつと松山に於ける先生の御樣子はこんなことで、私が多少語學を根本的にやれたのは、全く先生のお蔭であつた。

それ以來先生は熊本へ、私は東京へ、暫らく分れ〳〵になつて、往來すると云ふ程でもなかつたが、會へば百年の知己のやうに親しく話した。併しその頃は、醫師としての私の伎倆などはあまり信頼してゐなかつた。十年程前であつたらう、偶然新橋で會つて、糖尿病に罹つてゐると云ふお話だつたから、後から尿を送つて貰つて檢査して、可なり多量にあるのを發見して、注告はしたが、先生はまだ壯年のことではあり、「近處の醫者にかゝるからいゝ」と云

つたやうな調子で、餘り注意もされなかつた。

その中には私も洋行して來る。谷干城氏の病氣の時に、青山先生の助手として看病したのを知つてから、先生は初めて私の醫師としての存在を認め、爾後臨終の今日まで、多大の信頼を以て遇して下すつた。

最近何でも一年ほど前に左手が痛んで困るからと訴へて來られたのが最初で、それが糖尿病のためだと解ると、專心その方の治療に努めて、昨今それは大によかつたのであつたが、最近には宿痾の胃潰瘍のために、とう〳〵惜しいことをして了つた。先生も最近になつて、大いに心細さと自重の念と起したらしく、私にあてた手紙なぞにも、「老境に近づくに從ひ心細きことのみ多く」などと訴へて來られたこともあり、又十一月の二十三日には、病床から私を顧みて、「君はもと弱かつたが、今はそんなに丈夫になり、僕はもとは丈夫だつたが、今はこんな體になつて了つた。僕ももう五十だからねえ」と沁々述懐された。其時私は、「先生も洋行なすつたからにはお解りでせう。五十といへばまだ西洋人の働き盛りですよ」と云つたら、先生も、「僕もさう思つて力をつけてるのさ」と仰つた。死と云ふ事は全く豫期なさらなかつたやうに私は思ふ。

先生の死後、私は會ふ人毎に、「漱石先生は惜しいことをしましたね」と云はれ、又自分でも先生に就ていろ〳〵思ひ出しては話してゐた。何だか今の私の心持は、嘗つて少い時讀んだ西詩に海の底に鐘があつて、ふだんは汐騒で聞えぬが、偉人が死んで、一旦波が沈まるとその響が聞えて來る、と云つたやうに、絶へず先生を愛するの情は、胸の海中にあつても、今まで色々な俗界の風波に響を消されてゐたが、今その偉人の死と共に、波が靜つて、思慕の鐘の音がいつこともなく鳴り出でて止まぬやうな思ひである。もし私が文筆の士であるなら、今の此の思

ひを、書き殘しても見たい。（談）

松根東洋城

松山時代の先生の話は、ざつと「先生と俳句と私と」の方に述べて置いた。で此處では只先生の當時の外部的な樣子でもお話しやうと思ふ。

先生はいつも紺の背廣を着て居られた。而して私共には比較的小柄な人に見えた。教壇の上では、故意にすると云ふ程の誇張のない程度で、いろ〳〵な說明に身振りを伴隨させるのを常とせられた。

それが大變先生の考へを吾々にのみ込ませるのに、益があつたやうに思ふ。又一つの質問にも詳しい說明を吝まれなかつた。

しかも知らぬ事は平然として知らんと云はれた。それが當時の誤摩化し上手な教師だちと比べて、吾々を敬服させたものである。一體に此方が忠實で眞面目であれば、どこまでも眞面目な態度で接せられた。

而してその眞面目な嚴肅なものゝ底には、必ず溫情の滿ち溢れてゐるのが感ぜられた。決して高壓的ではない。飽くまで感化的であつた。先づ平凡に云へば先生の德といふものであらうか、態度に一種の力のあつたのは爭はれない。殊に生徒の能力をよく計量されてゐたものと見え、先生の云はれる事だけはよく吾々も消化し得た。ほんとに食つたゞけのものが悉く血になるやうに感ぜられた。それで元來私などは、英語が好きでなかつたけれど、先生に教はつて、やうやく其面白味が解つたやうな氣がした。

それからも一つ感じたのは、先生の態度が極めて氣取らぬ點である。先生氣質といふものはどこにでもあつて、どの教師でも厭に態度を作るものであるが、先生には初めからそれがなかつた。教場でも廊

下でも、先生は常に先生であつた。

休課時間などにはよく運動場へ出られて、鐵棒につかまつたり、棚の上にひよつこり坐つて居られたりした。當時そんな氣輕なことをするのは體操の先生位より外はなかつたので、吾々はその空前絶後の教師らしからぬ態度に敬服したものである。まづ其當時から一種の仙骨を帶びて居られたと云つてよからう。

も一つ覺へてゐる事は、先生が下宿から通つて來るのに、よく道側の溝の傍を歩かれてゐた事である。何でもひどく無雜作にやつて居られたのが、吾々には不思議だつた。

松山に來られたのは道後の湯のためだと云ふ噂が專ら高かつたのも事實である。而して先生があの意地惡な生徒から毫も反抗されたり嘲弄されたりしなかつたのも、それ以上に確固たる事實であつた。(談)

熊本時代

速水滉

夏目先生が松山から熊本に赴任されたのは、明治二十九年で、私が高等學校の三年生の時であつた。それから三十年まで、僅か一年間私は先生の薫陶を受けたゞけなので、熊本時代の先生と云ふ記臆に殘つてゐる處はさう多くはない。

吾々は其時先生からバークのフレンチ・リヴオリューションを教はつた。それは中々六ヶ敷いもので、當時吾々は先生をさほど偉らい人とも思はず、時々突つかゝつたものであつた。後々になつて此時分の話が出る毎に、先生は苦笑をされて、「あの本は今君らが讀んで見てもきつと六ヶ敷いと思ふに違ひない。併し今僕に教へさせれば、君等をすつかり感服させるのだが。」と云つてゐた。兎に角先生も赴任早

早ではあり、吾々もさう偉らいとは思つてゐなかつたのは事實である。

其外課外講義にハムレットを讀んで居られたが、この面白さは今だに印象に殘つてゐる。例の落着いた調子で、餘りに字句の穿鑿はせず、短評を狹んでの講義で、私共には初めてハムレットの面白味がわかつたのであつた。

一體に先生の其時の感じとしては、六ヶ敷い嚴格な態度で、快活な處が少なかつたやうに思ふ。生徒が下讀みを怠つたりすると、可なり手嚴しくやりこめられたと覺へてゐる。此間の朝日新聞に出てゐた高原君の記事で、股の間へ辭書を狹んで、先きを調べてゐたら叱られたと云ふやうな調子は確かにあつた。生徒の中で字義を聞くと、そんなことは字書を引けば解ると云つて、解答を與へて下さらない事もあつた。併し嚴格とは云つても溫味のある、一風變つた感じがあつた。

今から考へると其頃の五高には、夏目さんと小泉八雲さんと、此二人が同時に居られて、短日月ではあつたが此の兩文豪から學ぶことを得たのは光榮の至りである。併し吾々はこの兩方をさして偉らい人とも思はず、小泉さんなぞの時は、先生の近眼を利用して別な本を讀んでゐたり、後ろの方から逃げたり、教室へ來るのが遲くなると皆で去つたりした。夏目先生に對しては、皆が怖がつてゐただけに、遲れても教室を逃げると云ふやうな事はなかつた。

學校の龍南會雜誌には、何も書かれなかつたが、俳句はよく出された。私が出てから後、雜誌部から依頼されて、小論文を寄稿されたことがある。何でも俳文的な面白いもので、當時の先生の人生觀を述べたものだつたと記憶してゐる。

これは又他の人から聞いたのであるが、矢張り其時分先生は、白河鯉洋や笹川臨風などのやつてゐた「江湖」と云ふ雜誌へ、一度筆を取られた事があるさ

うである。此時代の先生の書かれたものは、右の二つ位なものであらう。

要するに熊本時代は、私も親炙する期間短く、先生もまださう偉らくない時代で、先生のあの偉大なる編著と云ふものは、恐らくそれ以後に出來上つたのではないかと思はれる。（談）

內丸最一郎

熊本で先生に教はつてゐた時代の私は、何しろ二部で英語が不得意な方であつたため、英語のうまい寺田寅彥君などと違ひ、嚴格な先生の講義ぶりを只管怖がつてゐた。而して自分でも先生の受けが余りよくないと信じてゐた。ところがそれにも係らず、其頃私が家の事情で、學費が送絶えたことを他の教授から聞かれた時、先生は或る方を通じて、自分に大學卒業迄學費を出してやらうと云はれた事がある。幸にして私は其時、故郷の育英會から資金を借りられるやうになつたので、先生の難有い志だけをお受けして、出して頂くのを御辭退したが、今だにあの時の御厚情は感謝の念に堪へない。他の學科などは少しはよかつたが、先生の受持の英語がさう出來もしない、赤の他人の私に、眞實金を出して下さらうとふのは、余程親切な心がなければ出來ない事である。しかも他の人々の口先だけとは違つて、先生のは心からさう云ふのであるから、自分はいくら感謝しても足りないと思つてゐる。それも先生が御富有でどもあれば兎も角、高等學校の教授と云へばさう收入もあられる筈がない。其後も西片町時代に、私が先生に向つて「あんな事を仰つて下すつたが先生は御金持だつたのですか」と聞いた所、「いや御覽の通り貧乏だが、君一人位どうかなると思つたのさ。併しあの時出してやらないで惜しい事をした。さう

すれば君は一生僕の前で頭が上らなかつたんだが」と云つて笑はれた事もあつた。猶其時私と貧乏に就ていろ〳〵お話があつたが、その時云つたことは後に野分の白井道也先生の演説となつて現はれた。あの演説を默つて聞いてゐる男といふのが、實は私なのである。

熊本での教壇の様子は、誰れか他によく記憶してるだらうと思ふが、私はジョン・ハリファックス・ジエントルマンと云ふのと、ジエムス・オブ・イングリツシユ・プローズとを教はつた。前にも云つた通り怖かつたが、よく解る講義で、後者の方にあつたスコットランドの雪景を叙した文を、得意で講義されたのを覺へてゐる。併し田舎者ではあり、鈍物の多い二部生の事であるから、ハイカラな先生の言葉を解し得ないで、或時先生が、「直覺」と云ふ言葉を使つたら、或人が直角と間違へたものか、「直カクとは何です」と尋ねた所、「直覺とは直覺だよ」と一言の下に叱りつけられたりしたのも覺へてゐる。

それから又一度私が課外講義でされてゐたジョン・ハリファックスの方へ聽講に行つてゐた時、課外講義だから假名を附けるなと云はれてゐたに係らず、復習の便利の爲めに附けてゐた處を見附けられ、叱られた上、「それぢや君やつて見給へ」と云はれて、兎に角立ち上つて讀んだが、それが箇人的に先生から物を云はれた最初で、その時の怖さが先生の第一印象となつて殘つて了つたのであらう。暫らく私は嚴しい先生とのみ思ふてゐた。熊本時代の先生の記憶と云ふのは先づそんな處である。兎に角私は先生が、あの時代に私のやうな者を、自分の貧乏にも係らず世話して下さらうとした御厚意を、繰り返して感謝して置きたい。もつと詳しい事實は寺田君などの方がよく知つてゐる筈である。（談）

大學教授時代

畔柳都太郎

君は(記者に向つて云ふ)戯曲を書く人だから解るであらうが、戯曲を書けばきつとエンファサイズした所を生じる。私が今茲で何か漱石さんの事を話すと、話す所だけ誇大された形になつて、云はない所が脱けて了ふから、そこに漱石氏を生きた纏つた人間として表はすことが出來ないで、世に誤解を生ずる懸念がある。それだから吾々が談話を徴せられた時も、先づ沈默しやうと云ふのが友人間の考らしかつた。

現に眞鍋醫學士の談として出た片言隻語を捕へて、もう漱石氏を知ぬ迄皮肉な人として批評してゐる人があつたが、私はそれを聞いてゐてひどく不快に思つた。而して更に、新聞雜誌に出てゐる世間の批評を讀むと、謙讓の沈默を出でゝ、矢張り何か一言辯解したいやうに思ふ。

第一に、英學者として漱石氏を取扱ひ、英文學史の如き學問の方面に入らなかつたのを、惜しむと云ふやうな事を云つた人もあつたが、區々たる一英文學の方などに沒頭しなければ、學者でないと云ふやうな口吻は、眞の意味の文學者たる故人に對して、失禮な批評だと思ふ。そんな意味で今日生きた文學をやつてゐるやうな人は、恐らく居らないであらう。

第二に、上田敏君と比較して、同じ方面に押し籠めて了うやうな批評を下してる者もあるが、あの性質と云ひ思想と云ひ、殆んど似ても似つかぬ二人を、どうして同じ範疇内に入れたのか、吾々には想像がつかない。會々兩人が英文科に席を置いたと云ふだけで相並べるならば、丁度雨宿りの時、同じ辻堂に休んだが故に、並べらるゝと變りはなく、休んだ兩人の間には何らの必然的關係がないやうに思はれる。

第三に、或事件を捕へて、ひどく「つむじ曲り」の人だと云ふやうな批評をする人もあるが、社會に行はれてゐる不善を改革せんとして、終始努力する人は同じ意味で皆「つむじ曲り」と批評すべきであらうか。正義正道などゝ云ふ問題では、隨分俗社會を敵手に戰はねばならぬ事が出て來るだらうと思ふ。私も誤解のないやうに、漱石氏の一端を其意味から社會に辯明して置きたいと思ふ故、與へられた問題の教授時代の事を、少しく述べて見やう。

もし學者と云ふものが、酒に醉つて立小便をして、巡査と喧嘩をしなければならぬ如く、或は草鞋を何十足も携へて洋行しなければならぬ如く、換言すれば、非常識でなければ學者でない如く考ふるならば、漱石さんはもとより無學者であらう。あの頭の中では非常な働きをなしてゐるに係はらず、行動に表れた漱石さんには、何らの奇も異常も見えない。尋常一様の静な一神士に過ぎなかつた。殊に君も承知の第一高等學校教員室の空氣は、世間の教官室の空氣と別に異る處もなく、只日常の談話が交換されてゐるに過ぎない。漱石さんも私と單に座席が向ひ合つてゐたと云ふだけで、静に入つて來て、静な擧動と、静な談話と、時に静な喫煙をされる位なもので、丁度君等が南町の木曜會での先生から、笑ふ聲をぬき取つて見たならば、教授時代の夏目さんがそつくり浮き出て來るだらうと思ふ。

漱石さんが一高に來られたのは、洋行から歸つて來られた際、東京へ置きたいと云ふのが主意で、當時の狩野校長が大學と一高とを兼任にして入れるやうに盡力されたのだと云ふ話であつた。狩野亨吉さんは高等學校に於ける無二の名校長として、今日に至る迄高等學校に名聲嘖甚たる人であつて、この人が又漱石さんの前任地たる五高の同僚であつたから、或はさう云ふ事もあつたらうと想像される。

丁度その事が未だ盡力中なりと云ふ噂が、どこか

らともなく傳はつた時、私は非常に喜ばしく思つた。

第一の理由は、所謂英語屋でなくて、文學や哲學凡べて思想の問題に、深く思ひを沈めて居られる人が、同じ學校に來られると云ふ事は、その教へを受くる上に極めて幸福だと思つたからである。

第二の理由は、夏目さんの教場に於ける教育法が、極めて嚴正であつて、笑ひ顏一つされないヤカマしい人だと云ふ事を聞いて、英語の教師と云ふものは講談落語家と同じく、生徒を笑はせるのを專門にしなければならぬやうな、所謂神田學風の微塵氣もないのを嬉しく思つたからである。

第三の理由は、夏目さんが私の舊識の人であると云ふ事であつた。此の舊識だつたと云ふ事に就て、少し話したいのである。

夏目さんは私が大學の一年へ入つた時は、既に卒業して、大學院に居られた。氏に就ては、まだ仙臺の高等學校にゐる時分から、夏目さんと同じ英文科に籍を置いた私の先輩の、玉虫と云ふ人から多少噂は聞いてゐたと共に、哲學雜誌に揭げた「英國詩人の天地山川に關する感念」を讀んで、其筆者なる夏目さんの、論理を行る仕方にひどく感服して了つた。今讀んだらツマラヌものかも知れぬが、當時高等學校の生徒たる私が、哲學雜誌を開いて右の夏の中頃から初まつた此小論文の、天が有意の時と無意の時と、人が有意の時と無意の時と、これをつなぎ合せてその何れのケースが成立つかと押してゆく論の仕方に、魅了されたのは無理もない。兎に角それで夏目さんなる名が私の頭に鏤刻され、東京へ出たら是非玉虫君の紹介で會ひたいものであると兼々から思つてゐた。

さて愈々東京へ出て來た私は、高等學校時代から借金で育つて來た體で、學資は極めて不充分なため、書物を買ふやうな餘裕はない。或る時オットーの佛蘭西文典を買はうと思つたが、金が無かつた。そこ

でどうしやうかと玉虫君に相談をした所が、夏目さんに借りたらよからうと言ふので、同君に伴はれて東片町の夏目さんの下宿へ借りに行つた。行つて驚いたことには、下宿の部屋へ入ると本が非常に澤山あつて、本箱に入りきらず、そこら一面に堆積した中から、夏目さんが顔を出してゐたので、ひどく度膽をぬかれて了つた。何しろ田舍から出たての事であるから、大學生といふものはかう云ふ風に澤山本を讀まねばならぬものかと、只管驚嘆したのであつた。其後この事を夏目さんに話した處が、すつかり忘れてゐて、私の訪問した事すらも記憶になかつた。よほど私を田舍の書生と思つて無視して居られたと見える。その又オットーの文典に、英語で Mr. Natsu 一八〇何年と書いた字が、すばらしくウマイやうに感じ、これ又英語をやる人はかううまく字を書くものかと吃驚した。尤も其後の英字には、さう感服もしなかつたが、私にはどうもあの頃の字が最も上手だつたやうに感ぜられる。

教場へは、ウード先生の時間に、大學院生徒として、聽講に二三度出て來たのを覺へてゐる。其中に、ウード先生から出なくともいゝと云はれたかして、姿が見えなくなつた。夏目さんは背廣の服を着てゐて、當時既に高師の教師だつたと思ふ。

間もなく或る事情のため、高師を去つて松山にゆき、熊本の高等學校へ行く事となつて、其間に田岡嶺雲、藤田劍峯、笹川臨風等の起せる東亞文學に、スターンのトリストラム・シャンディを論じた事もあつた。餘程語學の達者な人でなければ、あんな問題を取扱へないものであるが、それと同時に矢張り夏目さんの文のうまさが感ぜられた。

それ以後何をして居られたか、私はよくは知らない。が熊本から洋行して、病子規を慰めるために寄せた倫敦消息の、下宿の婆にいぢめられる所などは、面白く讀んで今猶忘れない。

かう云ふ關係だつたから、向ふは知らなかつたけれども、私から云へば、心中に尊敬して居る夏目さんが、同役に來られると云ふ事は、此の舊識の人であると云ふため、非常に愉快であつた。

いつ歸つて來られたのだつたか私は覺えてゐないけれど、其時千駄木の齋藤阿具君の邸宅にもう住んで居られる由を聞いて、私から出懸けて行つて、改めて初めての面會をした。而して嘗ての大學時代の話をした處が、前にも云つた通り、すつかり忘れてゐた。それ以來、私は殊に氣の置けぬ人と見ると、隨分色々な事を話す質で、そこで夏目さんの一面と相通じたものか、兎も角隔意なしに往來するやうになつて了つた。

此時分の夏目さんは、尋常一樣の教師だつたから、收入も不足で、丁度吾々と同じやうに困つてゐたらしく見受けられ、旁ら著作といふ方面へ手を染められた。併し本屋を對手の話は、私よりも知らなかつた位で、惡るい書物屋に引かゝつて、隨分迷惑を見た話もあつた。或るリイダアの校閲を賴まれてした處が、廣告には著作のやうに發表され、校閲料の二三十圓でヒドイ目に合はされたと云ふやうな事すらあつた。

それからそんな著作以外に、虚子などにすゝめられて、創作の方を初められたのも其時代である。初めて「猫」がホトゝギスに出た翌日、私は學校で「昨夜面白く讀みました」と云つたら、夏目さんは例の笑顏をして、「さうか」と云つただけであつた。その中に「猫」の好評が續々出て來て、大に呼物となつたため、自分では一二回でやめるつもりだつたのを、求めてホトゝギスの方から續稿を强請され、あゝ云ふ風に延びて行つたのらしい。あの話の中には私が他から聞いて來て、夏目さんに供給した材料もあり、私が望んで書いて貰つた場面もある。(篇中の猫が鼠をとる處がそれである。)

それから倫敦塔、カアライル博物館等續いて現はれる事となつたが、書くと共に教へると云ふ事は誰れも苦痛を感じると見えて、夏目さんも兩立し難い場合に際會したのであらう。時には學校を休まれる事も生じ、又試驗の採點が遲れて、私から催促に行つた事などもあつた。

間もなく西片町に移轉されて、茲で池邊三山さんの訪問となり、遂に敎職を擲つて、本郷方面の關係が無くなつたため、生れ故郷に近い早稻田南町に卜居し、今日に及んだのであるが、此間時々私は遊びに行つて、交遊今日まで繼續してゐた譯である。

從つて夏目さんと私とは、一種特別な關係になつてゐるので、先づ第一に私は弟子ではない。鈴木君や小宮君や森卷吉君や寺田寅彥君のやうに敎授を受けた事もなければ、さればと云つて、同窓同時代の友人でもなく、大塚さん菅さん、狩野さん中村さんなどの意味での友人では勿論ない。そこで弟子を超越し、さればとて友人には達せず、先づ私から云へば親しい先輩、夏目さんから云へば親しい後輩とでも云ふ事になるのであらう。私の知る限りでは、かう云ふ關係に在るものは自分一人らしく思はれる。

このやうに私が往來してゐて、第一に感ぜられたのは、漱石さんが先生といふものと、友人といふものと、弟子と云ふものとを、はつきり區別して居られたらしく思へる事である。これは別に夏目さん自身に聞いて見た譯でないから解らないが、弟子の者が友人顏して見たり、後輩のものが先輩顏でもするやうになることを、ひどく嫌はれて居つたのぢやないかと思ふ。私なぞも時代が時代故、かう云ふ點はひどく喧しく云はれて育つた爲、矢張り區別して考へるのが常で、例へばある學士で、もと元良先生に學び乍ら、後私らに向つて元良君と云つた男があつたが、其都度不快に感ぜざるを得なかつた如く、夏目さんにもそれがあつたやうである。現に今洋行中

の某學士を批評されて、「初めはあなた〳〵と話してる中に、君は〳〵と云ふおかしな奴だな」と云はれた事がある。どうもさう云ふ所は順序正しくされたのではないかと思はれる。

面會日を作られたのも、文名が高まると共に客來が繁くなつて、或る日などは私が十三人目の客だつた事もあつた位で、餘儀なく作つたのではあるが、私は木金が忙しく都合が悪るいと云つたら、「なあにあれは書生や一般の人に對して作つたので、君は差支ないよ」と云はれ、其間に自ら區別をつけて置かれると云つた風であつた。その爲私は勝手な時に訪問するを常とした。

猶又かう云ふ例もある。いつか私が手紙に漱石先生と書いてやつた處、そのあてつけに向ふから本だつたか何だつたか忘れたが、呈畔柳都太郎先生と書いてよこした事があつた。何でもこんな點はひどく氣にしてゐたと見える。

第二に感じたのは、如何にも話してゐて心持がよく氣取つた所がない事であつた。嘘言と云ふやうな事は身ぶるひされる程嫌ひで、物の正義といふ觀念が恐ろしい程鋭かつた。而して隔てなく眞心をこめて話さるゝ故、氣が置けないで私も隨分勝手な話をして來るのが常であつた。私が行く時には大抵土曜日の午後一時には向ふへ着くやうにし、成るべく早く歸らうとしても、大概電燈の點くのに驚いて歸ると云ふ風であつた。

目をしよぼ〳〵させて、所謂硝子戸の中のあの部屋から折々庭の方を見乍ら、口もとをもちよい〳〵後へ引くやうにして、比較的に低い聲で、警句を交へたり、又隨分笑つたりし乍ら氣持よく話されるので、どうしても釣り込まれて歸りが遲くなる。あの話方は小宮が遺鉢を傳へてゐるやうに思ふ。私も隨分勝手な事を云ふし、又遠慮なく反對もしたが、あの夏目さんの禪をされたり、書畫の鑑識が高く、俳

句も作れば、心理解剖にも秀で、哲學思想に富んだ高等な頭と、自分のやうな生物學や社會學などが好きな者との、意見の合はぬ事は無論多かるべき筈である。私の意見などは大部分幼稚だと笑はれてゐたらうと思ふ。現に「硝子戸の中」に出てゐる講演の報酬問題なぞも、歸つてから手紙で反駁もし、又手紙で論難されたが、今以て依然私は屈服してはゐない。かう云ふ事が頻繁にあつたが、實に氣が置けないので、漱石さんとの話ほど快感を感じた例は私の一生に無いのである。

第三に感じたのは、應接間の夏目さんと云ふものが、實によく努められたものだと云ふ事である。弟子の人から聞くと不機嫌な時には物も云はれなかつたと云ふやうな事もあつたさうであるが、私は全くそんな經驗に會はなかつた。もし不愉快で物も云はれなかつたと云ふのが事實ならば、應接間に於ける夏目さんのあゝいふ快活な態度は、餘程の克己がなければ出來ないと思ふ。私が他との應接によく努められたといふのはそこである。

私にはどうもその不愉快な無言といふのは、他人が夏目さんを瞞す時に看破されて、不興を釀すのではないかと思ふ。といふのは、私も只一度、ある人から賴まれて或る事を賴みに行つた時、こちらで依賴を云ひ終ると、一時から異樣な目の光を動かして、沈默された事がある。そこで私は兼て噂の不興はこれだなと氣がつき、改めて依賴された事件の性質を細かに說いて、決して夏目さんを擔いで私利を計るやうなサモしい目的ではない事を明かにした處が、又間もなく元の笑顏に立返へられ、平生と少しも異らなくなつた。それで私は夏目さんを利用しやうと云ふ人などのみに、さう云ふ不興をするのではないかと思つたのである。何しろ一切を看破するといふ自信を持つて居られたのであるから、見え透いた底意には何よりも反感を起されたのではなからうか。

第四に感じた事は、漱石さんのやうに獨立の思想を以て、獨立の生活を行つて、他より犯されず又他を犯さないやうにして行き得たのを羨しいと思ふ。丁度あの住まつて居られた硝子戸で固めた部屋のやうに、それから又小説のどれかにある空間を四五尺四方に切りとつて、其中に王侯のやうに住んでゐる人物のやうに、固く明瞭な輪廓を作つて此社會に住んで居られた事は、誠に羨ましい境遇であるが、同時に又社會學などに興味を持つてゐる私から云ふと、あの固い夏目さんの態度の薄い表面だけに、換言すればあの硝子戸の外側に、置いた霜が天日に當つて溶けたやうな薄い潤ひがあつて欲しかつたとも思ふ。

己れを少しも損せずして、それでゐて表面だけいくらか社會的社交的であり得ないとは、私ども斷言は出來ない。無論自己の人格を傷けられる時は飽く迄反抗すると云ふ、堅固な性格や鞏固な意志あればこそ、あゝ云ふ態度も持得るのであつて、そこが又吾々の及び難い點ではあるが、自己の人格を損せずして、同時に社會的な分子を加へ得たら、どんなにか嬉しかつたと思ふ。

その一例として極めて些少な一私事であるが、今猶私に未解決の儘で殘されてゐる事實を參考迄に云はうならば、曾て私は母を伴ふて歌舞伎座に越路を聞いた事がある。その時桝が餘つてゐたので、私は夏目さんとある他の博士をお誘ひした。ところが夏目さんは私の母に最後まで一言も口をきかれなかつた。それを先づ假りに私と夏目さんとの位置を逆にして考へて見ると、私なら余程コムペンションに近づいて、夏目さんの母に世間並の挨拶ぐらゐはしさうである。それを夏目さんは好まれなかつた。而して私の身から云へば何となく手持無沙汰になつて了つた。これは或は私の方から紹介すべきものであつたかも知れない。併し私なら進んで物を云ふ所であ

るやうな氣がする。こんな一些事をかれこれ云ふのは誤解の恐れがあるかも知れんが、私にはどうも夏目さんの色々な事に、かう云ふ風が見えはしなかつたかと遺憾に思ふのである。（談）

松浦　一

夏目先生が洋行から歸つて、初めて大學に出られたのは、自分が未だ一年の時の第三學期（明治三十六年）からであつた。それ迄は小泉八雲先生が居られた。八雲先生は知つての通り、人柄なり思想なりどこ迄も詩人で、先生が一度現はれ一度口を開けば教室全體が忽ちにして詩化され、紫雲靉靆といふやうな氣分に統一されて了ふので、久しく其詩的空氣に醉はされてゐた學生らは、先生が去ると聞くや痛惜する事甚しく、一年生の中には遂に轉科するものをさへ生じた位であつた。從つて新任の夏目先生に對しては、何らの期待をも持つてゐなかつたと云つていゝ。それは當時の英文科會が新任のロイド、夏目、上田（敏）三先生の歡迎を兼ねて開かれた時に先輩の或る人が其席上で一人の小泉先生が去つて、今度「頭數は增えたけれども」などと冷笑的に言及したのでも解る。兎に角小泉先生の後を受けて、ロイド先生及び高師の教授の上田敏先生と共に、夏目先生が任命されると聞いた時、吾々の仲間では夏目先生といふ人は大學在學中からでも英國の小說を澤山讀まれた人だ、又漢詩の古詩なども作られる、それから子規の友人で俳句を作られるなどゝいふ噂をしたり聞いたりする位のもので先生の眞價に就いては殆んど聞知する者が無かつたらうと思はれた。自分は始めから先生に就いては何にも知らなかつたのである。

講義を初められたのは、前にも云つた通り、自分

達の一年の三學期であつたが、先生が初めて教室へ現れた時、きび〳〵とした而して瀟洒な洋服姿に蝙蝠傘を持つて來られたと覺えてゐる。而して講義の初めに「私はアヴエレージな日本人の一人としてお話をする」と謙遜な前置をされた。其時分の先生の顏附きは晩年よりはずつと痩せて居られたが、都會趣味と俳人趣味と一つに混り、一癖ある鋭い樣子は後年と大した異りがなかつた。

其時の講義は文學論の方で、文學を形式と內容との二つに分け、先づ形式の方を取つて、詩の韻律などにも觸れて論ぜられたが、此講義はもと〳〵先生の得意の方面ではなかつたらうと思ふ。其外先生は圖書館あたりに澤山あつた書物の便利の爲でもあつたらうが、サイラス・マーナーを我々に讀まして居られた。歸朝早々の事であるから最初の一學期は先生にも左程授業上の成算はなかつたらうと察して居る。此間に吾々が先生から得た印象は先生には何だか面白い非凡なものがあるといふことを漠然と知つたゞけであつた。

ところが其翌年になつて、先生は愈々得意の題目たる內容の方へ入つて來て、例の F+f の議論になつて來ると、何しろ今迄小泉先生の詩のやうな講義ばかりに親しんでゐた學生は、此の文學の原論に突込んだ、心理學的美學的乃至哲學的な理智の議論に、等しく驚異敬服して了つた。自分の考への上に組立つた文學の原論を大學の講堂で堂々と聞かせてくれた先生に接して學生はどんなに啓發されたらう。夏目先生は此講義をされたと云ふだけでも、大學の講座に一生面を開かれた功績を沒する事はできない。それ以外にはシエークスピアの講義をされたが、講義其者が生きて居た、字句をほじくるよりも作を生かしたのはさすがに文豪の講義振りであつた。講讀の間々に挾む短評なども、非常に犀利だつた事を覺えてゐる。沙翁の講義には Methuen 發行の The Ard

enShakespeare を自身には使用され例のダイトン註の本も開けられた事はなかつたが始終一緒に持つて來られた。或る時先生は此二冊の本が無ければ、一日も勤まらないと言はれたことがあつた。かういふ氣取つた所の無いのが學生には却つて嬉しく思はれた。此講義が面白いので、二十番の大教室がいつも一ぱいだつたと覺えてゐる。

學生に對する態度は、毫も隔てを置かず、親切で氣輕であつた。私なども、或る時丁度大學の門を一緒に出て右左に別れる時お暇の時に伺ひたいがと先生に云ふと、來給へ、今日すぐ來給へと云つたやうな調子で、或晩又英文科會の歸りに復た大學の門前でお別れする時先生が輕く「失敬」と言はれたのに釣込まれて我れ知らず「失敬」と私の口からも出て了つてハッと思つたが間に合はない、急いで「左樣なら」と云ひ消して心中大に恐縮したことさへも一度あつた。私共より後の卒業生の某氏などは、寄宿にゐて正月雜煮が食へぬと云つて、先生に御馳走してもらつたと云ふ話もあつた。正月の年始の時は、鳥渡行つた學生にも吸物膳で屠蘇を馳走すると云つた風の、ごく親しみ深い人であつた。

後には訪問客が多くて困るとこぼされた先生も大學へ這入られて未だ初めの頃、未だ「猫」をやうやく書き出された時分は、寂しさうであつた。其頃私が訪問して辭し去らうとしたら、「まだいゝぢやないか。誰れも來やあしない。もつと話して行き給へ」と引止められた事があつた。木曜日を面會日と定められたのは其れより暫らくして先生の名が隆々として揚り訪問客の多くなつた後の事であつた。「猫」の評判が高くなつて、私がある淺草の寺の門番に非常に愛讀してる者があるさうだと或時云ふと、先生は微笑を湛へて「猫」の愛讀者を歷訪して見やうかなぞと云はれたことも當時の思出である。

私の知つて居る大學奉職時代の先生は生活と思想

の兩方面で奮闘されてゐたゝめか、形容には段々と人生の疲れと云ふやうな様子が加はるやうに見えた。洋服、時には和服で、(和服でも黒紋付などは敎室へは着て出られなかつたと覺える)片手に辨慶縞の木綿物らしい書物の風呂敷包をぶら〳〵と提げ、こけた頰をして大學の門を入つて來られた姿は、今でも目に見えるやうである。私はあのやうな疲れ衰へたやうな狀態から、草枕のやうな逍遙遊の文學が生れたのを、眞に意味のある事と思つてゐる。

先生は大學の講師兼高等學校講師で兩方の俸給を合しても充分な收入とは言はれない。或時私に明治大學へ行くので助かると云はれた事があつた。吾々は先生に深く同情した。

明治大學では當時文學部を設けて時々文學の講演會を催す事となつた。明治大學講師たる先生は講演に引出された。其後で先生が吾々の敎室で話した處に據ると、先生は只學生達にでも話をするだけのつもりで行つた處が、演壇の前に堂々と速記者が待ちかまへて居たのには驚いた。英吉利の雞の蹴合ひの話をして、それから持つて行つた本を鳥渡讀んで、壇を下りて歸つて來たといふ、先生の文名は其時は已に鳴つて居た。此時は先生ならでは出來ない事と笑ひながら感心した。

大學に於ては、年月の經つに連れて、先生の態度がだん〳〵鋭どくなつて行つたやうであつた。

文科大學は先達が三年になつた時から試驗は論文と口述といふ制度になつたのであるが、先生は學生に向つて、オリヂナルなものを盛に奬勵せられた。或る問題を捉へて研究して行つて其結果がつまらないものといふ事が分つても其つまらないといふことを知るのも有益な結果を得た事になると嘗て敎室で言はれたのは獨創を尊ぶ先生の豪い處だと敬服して居る。審査は嚴正で、又精密であつた。學生の論文の內容を、後々迄詳しく覺えてゐて、學生に會つた

時に批評を加へられると云ふやうな事は珍らしくなかつた。それやこれやで記憶のいゝのには、吾々が常に驚嘆したものであつた。

前にも此話は出たが英文科會即ち常に英文會と呼んで居た英文科の出身者及び同科の在學生の懇親會へは、いつも悦んで出席された。けれども其ういふ處で組織立つた演説めいたものをするのは絶對に好まれなかつた。ある時幹事の一人が、食卓の先生にたつて何かお話しをお願したら、「そんな必要はない」と怒氣を含んで斷乎として刎ねつけられた事もある。愉快に集つて肩の張らぬ話でもあつさりとして、愉快にあつさりと解散するのがさういふ會での先生の嗜好であるらしく思へた。

要するに先生は江戸つ子である。「坊ちやん」は大學の空氣の中にでも愉快に其特色を發揮した。（談）

野上臼川

先生は嘗て自分に、「大學の講義を三年して居れば、眞面目な人ならきつと神經衰弱になる」と云はれた事がある、教授時代の先生の態度は全く此の一言に盡きてゐる。先生はそれほど眞摯で、且つ嚴格であつた。

私が初めて先生に學んだのは第一高等學校の一年の時で、山川信次郎さんの代りに來られたのである。確か教科書にはラセラスの歴史を用ゐられた。教へ方はどこまでも嚴正で、少しもゴマカシがきかず、私共には實に厄介な英語であつた。一例を云ふと、venevolence と云ふ字があれば、vene は good と云ふ意味、vol は will と云ふ意味で、即ち good will と云ふ原義である。かう云ふ風に prefix, suffix を六ケ敷く一々解剖して置いて、扨試驗となると、melevolence といふ字を出す。さあ生徒は嘗つて習はぬ字

だからマゴつく。さうすると先生は、「benevolence を教へて置いたぢやないか、それから又 malicious と云ふ字は知つてるだらう。それなら其位の應用は出來る筈だ」と云つた調子で、一字の意味を分解して、あらゆる方面に應用せしめやうと云ふ、謂はゞ語原學的な態度であつた。だからそれに應じて下調べをするのには隨分苦んだ。厄介至極な語學の先生だと思つてゐたが、それでも皆何となく先先が好きであつた。當時は吾々は毫も先生を文學者としては認めず、僅かに私が九州であつたため、熊本時代に龍南會雜誌へ出した俳句を知つてゐる位であつたが、英學者として秀れてゐるのは皆々承知であつたため、吾々は先生を等しく歡迎したものである。併し教室での態度は、前にも云つた通りキチンとしてゐて、試驗問題などは一問も苟にしない底のものであつたから、皆はひそかに怖れをなしてゐた。其時丁度藤村操の事が起つて、先生のそれに就ての挿話がある

から鳥渡話さう。

先生は何しろ生徒の下讀みをして來ないのを嫌はれたが、藤村はその最近に丁度二度忘けたのだつた。最初の日先生から譯讀を當てられたら、昂然として「やつて來ません」と答へた。先生が「何故やつて來ない」と聞き返すと、「やりたくないからやつて來ないんです」と又答へた。先生は怒つて「此次やつて來い」と云つて其日は濟んだが、其次の時間に又彼は下讀みをして來なかつた。すると先生は「勉强する氣がないなら、もう此教室へ出て來なくともよい」と大變お叱りになつた。するとその二三日後に藤村は突然あんな自殺をして了つた。その報知の傳はつた朝、第一時間目が先生であつたが、先生は教壇へ上るなりに最前列にゐた男を捕へて、さも心配さうな小さな聲で、「君藤村はどうして死んだのだい」と訊ねられた。その男が「先生心配ありません。大丈夫です」と云つたら、「心配ない事があるものか、死

んだんぢやないか」と云はれた事があつたが、先生の心算では、あの時手ひどく叱つた故彼が自殺をしたのぢやないかと、ふと思つたのだつたさうである。後年小説のどれかの中で、藤村の死に對する先生の理解を示されたが、藤村とはこんな挿話があつたのである。

その中に先生は「猫」を書かれた。その頃のその方面の事は、虚子君や四方太君がよく知つてゐる筈だが、吾々は今度は先生を「猫」の作者として特殊な興味を持つやうになつた。先生の出る教場には、よく黒板に猫の繪を書いたり、吾輩は金之助であると書いたり、いろんな樂書があつたが、先生はそれを怒りもしなければ、喜びもせず、後には「ふん」と云つたやうな態度で、見ぬふりさへせられた。

其頃の先生の樣子は一體に高襟で、高いダブルカラーに、磨き立てのキッドの靴の、尖の細い踵高な奴を用ひて、歩きぶりから一種のリズムを持つて居られた。出席簿を讀むにもすべて英語を用ゐて、Mr. —— と云ふ口吻を吾々はよく眞似たものである。併し高襟とは云つても、毫も氣厭な分子がなく、他に隨分馬鹿にされた先生もあつたが、生徒の嘲弄の的には絶對にならなかつた。それだけ先生は所謂こはもてである。

私が先生と個人的に知つたのは同じく高等學校二年の中頃で、小宮と前後して學校以外の先生に接するやうになつた。先生は其頃汚ないニッケル製の、高く見て四五圓を出まいと思はれるやうな時計を、洋行時代から持つてゐて、教室へも持參されたが、いつかそれを忘れたので、私が自宅に届けた事があつた。先生は平氣で、「あゝ有難う」とか何とか云つたきりで、すぐ受取つたのを記憶してゐる。其時計を前に置いて、先生は極めて正確に授業時間を守られたものだつた。

何しろ其時分は先生が洋行後の、性格に大變化の

あつた時代で、その頃の日常生活を知るのが後の創作を研究する上に欠くべからざる事とは思ふが、今は問題外であるから云はない。

私はそれ以後教室では暫らく習はなかつた。が大學へ卅八年に入學して、又先生の講義を聞くやうになつた。丁度先生が講師になられた三年目で、もう文學論は濟み、今文學評論となつて出版されてゐる、十八世紀英國文學史が三時間、沙翁の講義が三時間あつた。其頃の英文科の講義には、上田敏さんの近代文學が二時間、ロイドとスキフトの語學があつたが、興味の中心は云ふ迄もなく夏目さん一人に集まつてゐた。先生も初めはヘルン先生の詩人的直感の後を受けて、あゝ云ふ科學的方法をとられたため、さう評判もなかつたさうあるが、其頃はもうすつかり人氣を集めてゐた。十八世紀英文學史は先生がやめられる迄續いた。沙翁は初めにオセロ、それからテムペスト、ヴエニスの商人等を教はつたが、其頃の自分にはどつちかと云へば文學史の方が面白かつた。併し今思ふと却つて沙翁の方に先生の持色が非常に現はれてゐて、此頃の本をとり出してふり假名を讀んでみると、大變面白いのを發見した。講義の方法は先生自身註釋や語解をすつかり見た上で紹介し批評し、自分の說を附け加へ、又は自分のを第一に持出して、いつも根柢と自信のある態度で批判された。だから或意味で沙翁から非常に離れたかも知れんが、日本人として二十世紀に住む夏目漱石として充分に沙翁を解釋され、戲曲術上にも又美學的にも解剖を加へて行つた。且つ此上なく學生に取つて有益だつたのは、沙翁作中の類型的な句に出會する毎に、他の數多の作から類例を摘出して來て、エッセイを作る上、又研究をする上に暗示を與へられた事であつた。何しろ此講義の面白さは、法科あたりの學生まで聞きつけて來て、廿番教室がいつも滿員だつたのでもわかる。

十八世紀英國文學史は文學評論になつてるから、敢て贅する必要もあるまい。

此頃の講義は、平生時間がないため、暑中休暇中に大半を作製されたさうである。草稿と云ふのはアイ版の洋罫紙に、釘の頭で突いたやうな細字を、頭から終まで隙間なく、行にも何にも關係なしに並べた奴を、毎日一二枚づゝ携へて來られた。

其頃の先生は生理的に嶮惡を極めた時代で、大神經衰弱の絶頂であつた。而して教室に於ける態度も、如何にも苦るしさうであつた。青い顔で、物を云ふ前にはき出すやうな「エーッ」と云ふ長大息をされ、食指を嘗めては机の上に字樣なものを書く癖があつた。吾々は先生がそれに依つていくら塵芥を甜めることかと心配した位である。而して頤をしやくつては講義を續けられた。

聞く處によれば、先生は其頃、教授室には入らなかつたさうである。そのためいつも教室へ、オーヴアーとステッキと帽子とを持ち込んで、卓上に置かれた。而して二時間ぶつ通して講義を終られると、其儘眞つ直ぐ歸られた。たまに教授室へ入つても、椅子を横にねじ向けて本を耽讀して居られたさうである。洋行後ひどく陰鬱になつて、あらゆる人が厭だつたのであらう。

それでも私が高等學校の頃は、洋行歸りの鳥渡見てもヴイヴイッドな處があつたが、此頃は頗る物倦さうに見えた。而してハイカラな洋服がいつしか和服となり、片手を懐に突込んでぐつと落し、出席簿をぶらさげ乍ら、教室へ入つて來た。いつの間にかもうMr.——もやめて了はれた。而して動もすれば沈鬱に陷つて、試驗の時などもドアの處で生徒の方へ脊を向け、獨り何かの本を讀んで居られた。

何しろ大學時代は先生の神經衰弱の絶頂期で、洋行中余りに謹嚴に過ぎたため、さうなつたのだと云ふ風說すらある。

これも最近ある大學教授から聞いた話によると、先生はよく圖書館に入られたが、教授室の隣りが事務室に當つてゐた爲、談笑の聲が洩れてそれが先生の神經に觸り、顏色をかへて「靜かにして呉れないと困る」と抗議を申込まれた事があるさうである。而してそれでも止まなかつた爲、學長にあてゝ手紙で訴へたさうである。それから又其近處で醫科の試驗用の犬が泣いて先生の神經を苦めた話は、朝日の入社の辭に圖書館攻撃となつて表はれた程である。何しろ先生は自分が眞面目だから、他人が對手にしないのをひどく怒られたのに相違ない。

學校は殆んど休まなかつた。前に云つたやうに謹嚴忠實で、不行儀などを非常に氣にされ、高等學校の時もよく頬杖をしてゐるのを叱つたが、大學でも曾つて左手のない男がゐて、恰も懷ろ手をしてゐるかの如く見えるので、或る日つか〳〵と其男の側に來り、「おい君、手を出し給へ」と咎められた。其時生徒は默つて顏を赤めただけで、先生も沈默して居られたが、あとから手のないのを聞いて非常に氣の毒がられた事もある。

それからもう一つ覺へてゐる事實で、或る時先生の授業中に、坪井學長が入つて來られたけれども、先生は知らん顏をして講義を續けられた事がある。坪井さんは傍まで行きかけたが、何と思つたか戸口まで退いて終るのを待つてゐた。而して授業が終ると初めて用向を述べたら、先生は簡單に「あゝさうですか」と云つたぎりであつた。

その頃はもう草枕や野分の作者として、押しも押されもせぬ吾々の興味をひいてゐた。

先生が大學を去られたのは、私が二年の中頃であつたと思ふ。ならば留任運動をしたかつたのであるが、先生のあの氣性で決心をかへぬ事は余りに明白に解つてるから、吾々もデスペレートな氣分で何もしなかつた。

先生の講義で吾々が第一に利益を與へられたのは、文學の研究又は鑑賞の態度に色々な暗示を與へられた點にある。所謂大學の厭なスカラスティックな分子や、西洋人の受賣りなぞは毫もなく、しつかりと自分の態度を定めて、しかもそれを生徒に押つけるやうな事がなかつたのは、他に得られぬ貴重な教訓であつたやうに思ふ。それを除いて私には大學にゐた價値がないとすら考へてゐる。

木曜會は其頃からあつた。寺田さんを主として、野村傳之、中川芳太郎、野間の諸君、虚子、四方太及び吾々の後輩等がよく集まつたものである。而して其頃の木曜會は最近のよりいゝ木曜會であつた。雜談が少なかつたし、作物を持ち寄つて、てんでに惡口を云ひ合つたものである。鈴木の諸作、森田の煤煙なぞ皆此處で讀まれた。先生自身も自作を朗讀された事がある。

先生の皮肉は其頃が最も激しかつた。併し決してあてこすりに墮するやうな事はなかつた。教室ではさほどでもなかつたが、家では新聞雜誌記者がもてあましたものである。いつかもある早稻田出身の雜誌記者の恨を買つて、讀賣紙上に一段半も惡口を書かれ、其時私が居たために、私まで引合ひに叩かれた事もある。何しろ今の文壇の通弊たる、新聞雜誌記者にお世辭を云ふ事が絶對になかつた人である。さればとて强ゐて反抗的に出るのでもない。只調子を合せる必要がなかつたのである。かうして先生は最後まで、記者連には厄介な人物として殘つたらしい。

それから此の談話の最後を飾るために、先生が愈々大學教授をやめられる時、私に下すつた手束の一部をお目にかけやう。

御手紙拜見、小生が大學を退くに就ては、懇篤なる御言葉を受け慚愧の至りに候。

僕の講義でインスパヤーされたとあるのは、甚

だ本懐の至り、講堂に上るもの丶名譽不過之と存候。世の中はみな博士とか教授とかを左も難有きものゝやうに申居候。小生にも教授になれと申候。教授になつて席末に列するの名譽なるは云ふ迄もなく候。教授は皆エラキ男のみと存候、然しエラカラざる僕の如きは、殆んど彼等の末席にさへ列するの資格なかるべきかと存候。思ひ切つて野に下り候。生涯は只運命を頼むより致し方なく、前途は慘憺たるものに候。それにも拘らず大學に嚙みついて、黄色になつたノートを繰り返すよりも、人間として殊勝ならんかと存候。小生向後何をやるやら、何が出來るやら寸分分らず、只やる丈やる而已に候。頻來大學生の意氣妙に衰へて俗に趣く樣見うけられ候。大學は月給とりをこしらへて、夫で威張つてゐる所のやうに感ぜられ候。月給は必要に候へども、月給以外に何もなきものどもも、ごろ〳〵して毎年赤門を出で來るは、教授連の名譽不過之と存候。彼等はそれで得意に候。小生は頃日ヘーゲルが伯林大學で開講せし當時の情況を讀んで、大に感心致し候。彼の眼中には眞理あるのみにして、聽講者も亦眞理を目的として參り候。月給をあてにしたり、權門から嫁を貰ふ樣な考で聽講せるものはなき樣子に候。呵々。(後略、談)

朝日新聞時代

山本笑月

夏目漱石さんが朝日新聞に入るやうになつたのは、主として鳥居素川君や澁川玄耳君が骨を折つたので、當時は文壇及び一般社會から非常に注目されたやうである。

その時分朝日新聞には文藝欄と云ふのがあつて、夏目さんがその部長をして居られ、文章の選擇なども氏の考へによつてゐたが、氏は從來の文學者など

と極めて交際が簿すかつた爲め、情實と云ふやうなことが更に無く、將來有望の文士と信ずれば、世間に發表してやり度いとの考でやつて居られた。隨分頼みに行く人もあつたとのことだが、自身の態度と社の態度との調和を常に計られてやつて行かれた。それで無名の作家などを引立てることはよく勉めたもので、あの「那迦」と云ふ人の小說を新聞に載せる時にも、自分が十分責任を持つからと言はれた。しかしどんな時でも人のものに就いて良いとか悪いとかを言はなかつた人で、これは悪いから載せまいと言ふやうなことはしなかつた。

夏目さんが新聞小說に一新境地を拓いたことは世の認めるところだが、元來新聞小說と言ふものが作家の方でどうも遲れ勝ちになつて困るものである。それは始めこそ乘り氣になつてやり出すが、毎日毎日に新しい氣分が續かず始終追はれたやうな氣持ちで書續けるからであるさうだが、漱石さんのは決してそんなことが無かつた。次から次ぎへと新しい氣分で書いて行つて盡きないといふ風であつた。この點は他の作家達も感心して居るとか聞いて居る。それで毎日定めて午前の間に筆を執つてと書いて、必ず机上には五六日分のものが出來て居る。その中からどう言ふものか毎日一回分だけ社へ送つて寄した。それもいかにも丁寧に毎日住所番地を細かく描いて郵便で寄すので、余りお氣の毒だから、こんど所番地を印刷した封筒を上げましやうと言つてゐたのに、亡くなられて仕舞つたやうな譯である。原稿がいかにも綺麗なことは知れて居るが、誤植などが在つたりすると、校正にまで、私はかう思ふが、かう言ふ文字ではいけないのか、と言つた風にして尋ねて來る。まことに此方が恐縮するやうな丁寧な言葉であつた。小說のことや社の記事のことなどで、電話で何か聞き合すと、必ず非常に委しくその返事を手紙で書いてよこされた。中々筆まめな人であつた。

漱石さんは社員とは云つても、漱石さん自身の氣の向いた時とか、社の記事の上などで相談があつたりする時の外は滅多に社に見えられなかつた。從つて編輯室に漱石さんのテーブルと云ふ定つたものも無く、時たま來られた時は、編輯長の横に掛けて居たり、重役室に居たりした。こんどから云ふ小説を連載するつもりです、筋はかうで、何回位と漱石さんに相談をかけると、他の人はよく小説を書くのに、筋をちやんと立てゝ、何回と區切つて書くと云ふが、よくさう言ふことが出來ますね、と言つたことがあつた。

文學者などにはよく新聞記者嫌ひと云ふやうな人があるものだが、漱石さんはお自身が新聞社員であつたせいでもあらうが、同じ社の社員ばかりで無くどこの人にも親切に別け隔てが無かつたやうである。それに新聞なども細かい個所までよく讀み味つて、常に意見を持つてゐた。社の人との個人的の交際もかなりあつたが、續き物の筆を執つて居る時には、みんな申合してなる可く想を散さぬやうに、あまり訪ねもしなかつた。社のことで私などが時々行くと、氏は椽端の日向へ机を持ち出して、頭からすつぽりと羽織などをかぶつて、原稿を書いて居ることがあつた。

一度新聞に文展の繪畫評を書いたことがあつた。その後も書いて貰はうと思つて何と言つて頼んで見ても、俺は本職で無いから書かぬ、と云つてどうしても承知しなかつた。今年の十一月六日のことだ。それが最終の遠出かも知れぬが、文展を觀に行つて午後一時頃から四時まで見て居た。そして側から人が何を尋ねても一言も云はないで見て居た。見終つてから伴れの人に、「室君」と云ふのが大變な評判だが何處に在りますか、と聞かれた。で、その人が委しく在る室を教へると、再び中へ入つて行つて見て來た末に、あれなら見て居た、と言つたさうだ。

同じ月の十五日に漱石さんの方から社へ、身體の具合が少し悪いから、五六日靜養します、大分書き溜めたのがありますから當分差支へが無いでしやう、との挨拶があつた。氏のつもりでは治ほれば直ぐ續けて筆を執る考であつたので、それほど病ひを輕く見て居られたのだ。しかし社の方では治つても無理をしてすぐ筆を執つて貰はず、三四ヶ月も靜養して頂く考へで、「明暗」はあれで一先づ打切りとして、次の小說の準備にかゝつて居ると言ふことを申してやつた。これが漱石さんと社との最後の交涉となつたのである。（談）

記者附記——本項「熊本時代」と「大學教授時代」との間には、先生の「英國留學時代」がはさまるべき筈である。其期間に於ける史料をも本誌に揭載する筈であつたが、不幸締切期日の間に合はなかつたため、遺憾ながら之を他日に割愛することにした。

夏目漱石略傳

慶應三年一月六日、牛込區喜久井町なる舊家の第三子に生る。金之助と命名。市ヶ谷小學校に入學し、後ち神田の錦華小學校に轉ず。同校卒業後一つ橋中學校に入りしが、業を卒へずして退き、三島中州翁の二松學舍に入りて漢學を學ぶ。

明治十七年、一時建築を學ばんがために大學豫備門の工科に籍を置きしが、後志を轉じて文科に入る。

同二十三年、大學英文科に入學。其頃正岡子規と交り俳句と漢詩とを作る。

同二十六年七月、大學英文科を卒業して、大學院に入る。同期生他になし。高等師範學校の囑託に應じ、

一ヶ年間同校に教鞭を取る。

同二十八年四月、正岡子規の介する處によりて伊豫松山の中學に赴任す。後年の「坊ちやん」は此の時に得たる題材なりと云ふ。

同二十九年、熊本第五高等學校教授に任ぜられ、高等官六等正七位に叙せらる。後間もなく高等官五等となり、從六位に叙せられたり。

同年、熊本に於て、夫人鏡子と婚す。

同三十二年、長女を擧ぐ。

同三十三年九月、英國倫敦に留學を命ぜらる。

同三十六年一月、歸朝、四月東京帝國大學講師となり英文學を講ず。兼ねて第一高等學校講師たり。

同三十七年、雄誌「ホトヽギス」に「倫敦消息」を連載す。倫敦留學中、病子規を慰めんがために執筆せるものなり。

同三十八年、「吾輩は猫である」上卷を大倉書店より上梓す。虚子らに勸められて雄誌「ホトヽギス」のために連載せる、處女作小説なり。發表即日よりして文名大に揚る。

同三十九年、「漾虚集」を大倉書店より出版。「倫敦塔」「カアライル博物館」「琴之空音」「幻影の楯」「一夜」「薤露行」「趣味の遺傳」等の短篇を收む。「鶉籠」を春陽堂より出版。「坊ちやん」「二百十日」「草枕」の三篇を集む。「吾輩は猫である」の中卷を大倉書店より出版す。

同四十年四月、帝國大學講師、及び第一高等學校講師を辭し、朝日新聞社の招聘に應じて入社。直ちに

長篇「虞美人草」を同紙上に連載す。此年長男を擧ぐ。「吾輩は猫である」の下卷を出版。又「文學論」を春陽堂より上梓す。

同四十一年、「草合」を春陽堂より出版。「坑夫」と「野分」とを收む。

同四十二年、「三四郎」及び「それから」を春陽堂より出版す。「虞美人草」「坑夫」に次いで何れも朝日紙上に連載せしものなり。「文學評論」を春陽堂より上梓す。

同四十三年春、滿韓に遊び、紀行文「滿韓ところ〴〵」を朝日紙上に掲ぐ。「四篇」を春陽堂より出版。「滿韓ところ〴〵」及び「文鳥」「永日小品」「夢十夜」等の短篇小品集なり。次で「門」を春陽堂より出版。「三四郎」「それから」と共に三部作となす。

同年八月、修善寺に旅行して胃潰瘍を病み、一時危篤に瀕す。「思ひ出す事など」は當時の追想錄なり。

四十四年正月、文學博士號を授けられたるも是を受けず。爲めに物議を醸す。「切拔帖より」を春陽堂より出版、「思ひ出す事など」外數篇の隨筆を輯せしものなり。

大正元年、「彼岸過迄」を春陽堂より出版す。

同二年、「行人」を春陽堂より出版す。

同三年、「心」を岩波書店より出版す。

同四年、「硝子戸の中」を岩波書店より出版す。小品隨筆集なり。「道草」を岩波書店より出版す。

同五年五月二十六日より朝日紙上に「明暗」を連載し來り、回を重ぬる事百八十八、遂に完結に至らず、十二月九日午後六時四十分再度の胃潰瘍を以て長逝す。享年五十歳。文獻院古道漱石居士と諡る。

（壹頁より九頁まで省く）

夏目先生の「人」及び「藝術」

和辻哲郎

夏目先生の大きい死にあつてから今日は八日目である。私の心は先生の追懐に充ちてゐる。併し私の亂れた頭はたゞ一つの糸をも確かに手繰り出すことが出來ない。私は夜更くるまで此處に茫然と火鉢の火を見まもつてゐた。

昨日私は先生に就て筆を執る事を約した。その時の氣持では、先生の事だけしか考へられない此頃の自分にとつて、先生の人格や藝術を論ずるのがせめてもの心やりである様に思へたのであつた。併し今日になつて見ると私は自分の心があまりに落ちついてゐないのに驚くばかりである。何を論ずるのだ。今此處で追懷の涙なしに先生の人格を思ふことが出來るのか。殊に先生の藝術に就ては、今新らしく讀みかへしてゐる暇がない。數多い製作の或者は朧ろな記憶の霞のかなたに殆んど影を失ひかゝつてゐる。或者はただ少年時の感激によつてのみ記憶され、或者は幾年かの時日によつて印象を鈍らされてゐる。それでなほ先生の藝術を云爲することが出來るのか。——私は敢て筆を執らうとする自分の無暴に改めて驚かざるを得ない。しかも今私は二三の事を書きたい衝動に驅られ初めた。私は斷片的になる危險を冒して一氣に書き續けやうと思ふ。(もう直ぐに先生の死後九日目が初まる。田舍の事とてあたりは地の底に沈んで行くやうに靜かである。あゝ、遙かに法鼓の音が聞えてゐる。あの海邊の大きな寺でも夜を徹しやうとする人々があるのだ。)

先生の追懷に胸を充たされながらなほ靜かに考をまとめる事の出來ないのは、たゞ先生の死を悲しむためばかりでない。餘計な事ではあるがこゝにもう一つの理由を附け加へる事を許して頂きたい。私は莊嚴な先生の死のあとにそれとは相反な慘ましい死を迎へる筈であつた。しかし先生の死の光景は私を激勵し興奮させた。私は過激な言葉を以て反對者を責め家族の苦しみを冒して、とう〳〵今日の正午に瀕死の病人を包みくるんだ幾重かの嘘を切つて落す事に成功した。生きやうとして苦しみ蠕いてゐた病人が、その瞬間に宿命を覺悟し、心の平靜と清朗とを取り返すのを見た時、私の心はいかに異樣な感情に慄えた事だ

らう。私は感謝し喜び、さうして初めてまじり氣のない感情でしみ〴〵と病人を悲しみ傷んだ。生と死の嚴肅さが今日から病室を支配し初めた。夜が明ければ私は何を措いても死んで行く者を慰めるために出掛けなければならない。——私は落ちついて先生を論ずるよりも、反つてこの方が先生に對する感謝を現はすに適してゐる事を感ずる。

——私は頭が亂れてゐる。書出しからしてもう主題にふさはしくない。

偶然であるか必然であるかは私は知らない、とに角私は先生の死に就て奇妙な現象を見た。この秋私は幾度か先生を訪ねやうとして果さず、殆んど三月振りで十一月廿三日に先生を訪ねた。その日はいゝ天氣だつたので、A君と共に戸山ヶ原を散歩して早稻田まで行つた。A君は仕事がいそがしいため先生の所へは寄らない筈であつた。私は一所に行きたいと云つていろ〳〵押問答しながら歩いた。突然A君は一所に行かうと云ひ出した。それから十分程で先生の所に着いた。すると丁度十分程前に先生が最初に血を吐かれた所であつた。——私たちは何かの手傳ひでも出來れば結構と思つて上る事にした。座敷に通つてからふと床の間を見ると、床柱にかゝつた鼻まがりの天狗の面が掛物の上に横面黑像（シルエット）を映してゐる。珍らしい面だと思つて床柱を見たが、そこにはそんなに大きな面は掛つてゐない。では小さい面が光の具合で大きく映つたのかしらと床柱の側まで行つて見ると、そこに掛つてゐるのはたゞ羽團扇と圓い團扇だけであつた。併し影は恰好から釣合からしてどうしても本當の面としか見えなかつた。あまりうまく出來てゐるのでその面が奇妙に氣に掛り、あとで惡かつたと感じたほど執拗にその面を問題にした。——この出來事が

ひどく氣になつてゐたゞけに、臨終の日「死面」といふ言葉を聞いた時、私は異樣な感じに」打たれざるを得なかつた。本當に惡い辻占であつた。鼻の曲つてゐたことも。

私が先生に初めて紹介された日にもそんな事があつた。十八の正月に「倫敦塔」を讀んで以來書きたかつた手紙を、私は二十五の秋にやつと先生に宛てゝ書いて、それを郵便箱に投げ入れてから芝居に行つた。私の胸にはまだその手紙を書いた時の興奮が殘つてゐた。その時に廊下で先生に紹介された。それまで曾て芝居や音樂會で先生を見かけた事のなかつた私が、その日特に芝居で先生と落合はなければならなかつたのは、私にひどく不思議に思へた。少くとも私だけにはその日がたゞの日ではないやうに見えた。

先生を高等學校の廊下で毎日のやうに見た頃は、たゞ峻嚴な近寄り難い感じがした。友人たちと夕方の散歩によく先生の千駄木の家を見に行つたが、中へはいつて行く勇氣はどうしても出なかつた。併し先生に紹介された時の印象はまるで反對であつた。先生は優しくて人を吸ひつける樣であつた。さうしてこの印象は最後まで續いた。私は如何に峻嚴な先生の表情に接する時にも、先生の溫情を感じないではゐられなかつた。

私が先生を近寄り難く感じた心理は今でも無理とは思はない。私は現在同じ心理を、自分の敬愛する××先生に對して經驗してゐる。それは恐らく自分の怯懦から出るのであらう。併しこの怯懦は相手が恰も良心の如く自分に働きかけて來るから起るのである。その前に出た時自分の弱點と卑しさとを恥ぢないではゐられない故に起るのである。私は夏目先生が氣難かしい癇癪持であることを知つてゐた。もとよりそれは

單なる「我儘」ではない。總て自己の道義的氣質に牴觸するものに對する本能的な氣短い怒である。從つて、自己の確かでない感傷的な青年であつた私は、自分が道義的にフラフラしてゐる故を以て無意識に先生を恐れた。さうして先生の方へ積極的に進んで行く代りに、先生の冷さを感じてゐた。かう云ふ感じを抱いた者は恐らく私一人ではなかつたらうと思ふ。

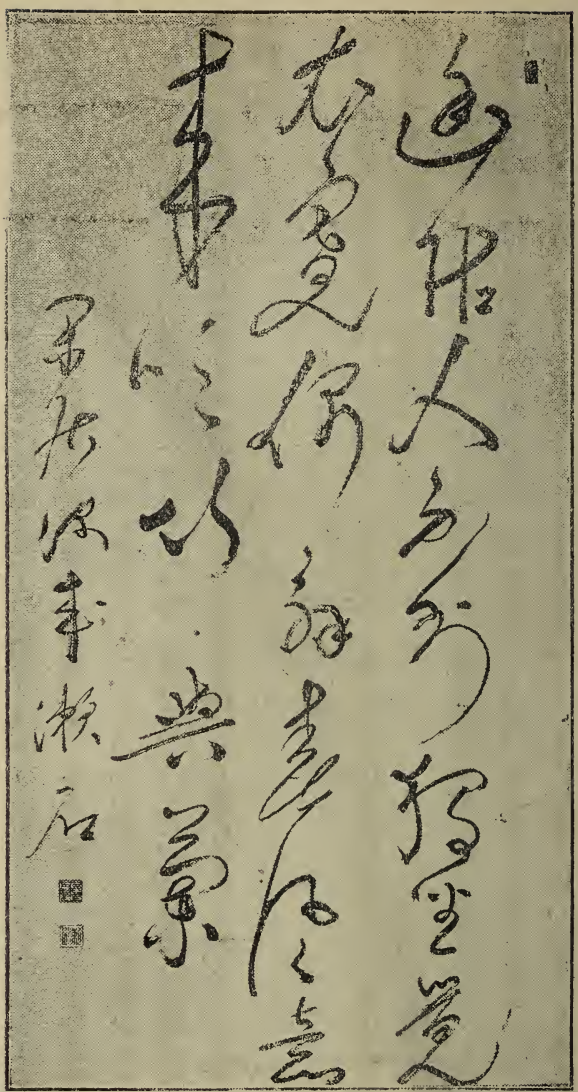
この事實を先生の方から見ればどうであるか。私はそれを明かにするために先生の手紙の一節を引く。——

……私は進んで人になつついたり又人をなつけたりする性の人間ではないやうです。若い時はそんな擧動も敢てしたかも知れませんが、今は殆んどありません。好きな人があつてもこちらから求めて出るやうな事は全くありません。……然し今の私だつて冷淡な人間ではありません。……

「私が高等學校にゐた時分は世間全體が癪に障つてたまりませんでした。その爲にからだを滅茶苦茶に破壞してしまひました。だれからも好かれて貰ひたく思ひませんでした。私は高等學校で教へてゐる間たゞの一時間も學生から敬愛を受けて然るべき教師の態度を有つてゐたといふ自覺はありませんでした。……けれども冷淡な人間では決してなかつたのです。冷淡な人間ならあゝ肝癪は起しません。

「私は今道に入らうと心掛けてゐます。たとひ漠然たる言葉にせよ、道に入らうと心掛けるものは冷淡ではありません。冷淡で道に入れるものでありません。」

それは先生の前に怯懦を去つた時直ちに解つたことであつた。先生は寧ろ情熱と感情の過冗に苦しむ人である。相手の心の動きを感じ過ぎるために苦しむ人である。愛に於て絕對の融合を欲しながら、それを不可



能にする種々な心の影に對してあまりに眼の届き過ぎる人である。そのため先生の平生にはなるべく感動を超越しやうとする努力があつた。先生は相手の心の純不純をかなり鋭く直覺する。さうして相手の心を細かい隅々に亘つて感得する。先生の心臟は活潑にそれに反應するが、併し先生はそれだけを露骨に發表することを好まなかつた。先生は親切を蔭でする、さうして顔を合はせた時にその親切に就て言及されることを欲しない。先生にとつては、最も重大なことはたゞ默々の内に、瞳と瞳との一瞬の交叉の内に、通ぜらるべきであつた。從つて先生は對話の場合かなり無遠慮に露骨に突込んで來るに關はらず、問題が自分なり相手なりの深味に觸れて來ると、直ぐに言葉を轉じて了ふ。さうして手觸りの

い、諧謔を以て柔かくその問題を包む。(勿論心の問題でもそれが個人的關係に即してではなく一つの人生觀思想問題としてならば、先生は底までも突込んで行くことを辭しなかつた。)これらの所に先生の溫情と厭世觀との結合した現はれがあつたやうである。

右のやうな先生の傾向のために、諧謔は先生の感情表現の方法として欠くべからざるものであつた。先生の諧謔には常に意味深いものが隱されてゐる。熱情、愛、痛苦、憤怒など先生の露骨に現はすことを好まないものが。さうして人々は談笑の間に默々としてこの中心の重大な意味を受取るのである。先生がその愛する者に對する愛の發表は主にこれであつた。(私の考ではこれが「諧謔」の眞の意味である。從つて諧謔は「痛苦」から「惱み過ぎる人」から、「厭世的な心持」から產れるのである。さうでないものは浮薄と卑賤の徵候である。)

今朝は夜明け近くまで書いてゐたが、體が疲れて來たので仕方なしに寢た。今日は追つたてられるやうな氣持で筆を執る。

——先生は「人間」を愛した。併し不正なもの不純なものに對しては毫も假借する所がなかつた。その意味で先生の愛には私がなかつた。私はこゝに先生の人格の重心があるのではないかと思ふ。

正義に對する情熱、愛より私を去らうとする努力、——これを他にして先生の人格は考へられない。愛のうち自然的に最も强く存在する自愛に對しても、先生は「私」を許さなかつた。そのために自己に對する不斷の注意と警戒とを忘らなかつた先生は、人間性の重大な暗黑面——利己主義(イゴイズム)——の銳利な心理觀察者

として我々の前に現はれた。

先生にとつては「正しくあること」は「愛すること」よりも重いのである。私は曾て先生に向つて、愛する者の惡を心から憐れみ愛を以てその惡を救ひ得る程愛を強くしたい、愛する者には欺かれていゝといふ程の大きい氣持になりたいと云つた事があつた。その時先生は、さういふ愛に最負だ、私はどんな場合でも不正は罰しなくてはゐられないと云はれた。即ち先生の考では、いかなる愛を以てしても不正を許すことは「私」なのである。たとへ自分の愛子であらうとも、不正を行つた點に就ては、最も憎んでゐる人間と何の擇ぶ所もない。自分の最も愛するものであるが故に不正を許すのは、畢竟イゴイズムである。

先生は自分の子供に對しても偏愛を非常に恐れた。親の愛は平等であるべきだ。もしそれを二三にする位なら寧ろ平等に愛しない方がいゝ。この事は不斷に嚴密な自己省察を必要とするのであるが、先生はこの點に就て非常に注意を拂つてゐた。さうしてこの心掛がやがて人生全體に對して公平無私であらうとする生先の努力となつて現はれた。

先生が偏屈な奇行家として世間から認められてゐるのは、右のやうな努力の結果である。最負眼なしに正直に云つて、先生ほど常識に富んだ人間通に滅多にない。また先生ほど人間のなすべき當然の行を尋常に行つてゐた人も稀である。たゞ先生はその正義の情熱のために、信ずる所をまげる事が出來なかつた。德義的背骨があまりにも固かつた。それが卑屈と妥協と中途半端とに慣れた世間の眼に珍らしく見えたまでゞある。

併し常識的といふ事が道義的鈍感を意味するならば、先生は常識的ではなかつた。先生はいかなる場合にも第一義のものを誤魔化して通る事が出來なかつた。たとへ世間が普通の事と認めてゐやうとも、とにかく虚僞や虚禮である以上は、先生はひどくそれを嫌つた。先生の重んずるのはたゞ道徳的心情である。形式習慣に無暗と反抗するのではなく、たゞ道徳的心情より出でゝのみ動かうとしたのである。これを奇行と呼び偏屈と嘲けるのは、世間の道義的水準の低さを思はせるばかりで、世間の名譽にはならない。

先生の博士問題の如きも、これを「奇を衒ふ」として非難するのは、あまり自分の卑しい心事を以て他を忖度し過ぎると思ふ。先生は博士制度が世間的にも亦學界の爲にも非常に多くの弊害を伴ふ事實に對して怒を感じた。その内にひそむ虚僞、不公平、私情などに對して正義の情熱の燃え上るのを禁じ得なかつた。これは先生として當然な事である。「博士」は多くの場合に對世間的な根の淺い名聲の案山子である。博士であると否とに關はらず學者の價値はその仕事の價値によつてのみ定まる。しかも世間は「博士」が大きい仕事の標徴であるかの如くに考へてゐる。そこに不正と虚僞があるのである。この點に就ては恐らく眞に眞理の爲に努力する學者たちが先生の態度を是認してゐるだらう。

徳義的背骨のあるものには四周から煩さい事苦しい事が集まつて來る。先生はそのために絶えず肝癪を起さなければならなかつた。しかも先生はその敏感と情熱とのために、更に内からその苦しみを強くしなければならなかつた。先生の禪情はこの痛苦の對策として現はれた傾向である。

先生の超脱の要求は、(非人情への努力は、)痛苦の過多に苦しむ人のみが解し得る心持である。我々は非

人情を呼ぶ聲の裏に溢れ過ぎる人情のある事を忘れてはならない。娘がめつかちになつて自分の前に出て來ても、ウンさうかと云つて平氣でゐられるやうになりたい、といふ言葉の奥には、熱し過ぎた親の愛が渦巻いてゐるのである。

超脫の要求は現實よりの逃避ではなくて現實の征服を目ざしてゐる。現實の外に夢を築かうとするのではなくて現實の底に徹する力強いたじろがない態度を獲得しやうとするのである。先生の人格が昇つて行く道はこゝにあつた。公正の情熱によつて「私」を去らうとする努力の傍には、超脫の要求によつて「天」に即かうとする熱望があるのであつた。

先生の諧謔はこの超脫の要求と結びつけて考へねばならぬ。もともと先生の氣質には諧謔的な傾向が（江戸ッ兒）らしく存在してゐたかも知れない。しかし先生は諧謔を以て總てを片付けやうとする人ではない。諧謔の裏には絶えず、厭世的な暗い中心の嚴肅かひそんでゐる。先生が好謔家として世間に通用してゐるのは、たま〳〵世間の不理解を現はすに過ぎないのである。我々は先生の人格が諧謔を通じて柔かく現はれるのを見る時、寧ろ一種の貴さを感じないではゐられない。そこには好謔家といふ概念にあてはまる何物をも認める事が出來ない。

先生の藝術はかくの如き人格の表現である。先生は自分の人格の内からさま〴〵な人物や世界を造り出した。（人格と製作との關係に於ては、先生はかなりドストイエフスキイと似通つた所がある。）この點に就

て私は先生の藝術の一特長を注意したいと思ふ。

先生は眼の作家であるよりも心の作家であつた。畫家であるよりも心理學者であつた。見る人であるよりも考へる人であつた。私は先生が小説家といふよりも寧ろ哲人に近いことを感じる。先生の作物に寫實味の乏しいことは、そのために左程氣にならない。(しかしドストイエフスキイが自分を寫主實義者と呼んだ意味でならば、先生もまた寫實主義者である。)

私は先生の藝術に著しいイデエを認める。一つの作物の結搆は凡てそのイデエから出てゐるやうに思ふ。この意味で先生の作物はかなり「作られた」といふ感じの強いものである。しかしその感じはイデエの力強さの下に直ぐに消えて行く。さうして我々は赤裸々な先生の心と向き合つて立つことになるのである。

我々は先生の生物から單なる人生の報告を聞くのではない。一人の求道者の人間知と内的經路との告白を聞くのである。

利己主義と正義、及びこの兩者の爭は先生が最も力を入れて取扱つた問題であつた。

「猫」は先生の全創作中最も露骨に情熱を現はしたものである。それだけにまた濃厚な諧謔を以て全體を包まなければならなかつた。この作は恐らく先生の全生涯中最も道德的肝癪の猛烈であつた時代に書かれたものであらう。念入りに重ねられた諧謔の衣の下からは、世間の利己主義の不正に對する火のやうな憤怒と、德義的背骨を持つた人間に對する溢れるやうな同情とがのぞいてゐる。しかしこの時にはなほ問題が先生自身の内生に喰ひ入つてはゐなかつた。その後の諸作は漸次問題が内に深まつて行く經路を示して

ゐる。さうして最後の「明暗」に至つて憤怒は殆んど憐愍に近づき、同情は殆んど全人間に平等に行き亘らうとしてゐる。顧みてこの十三年の開展を思ふとき、先生も遥かな道を歩いて來たと感ぜざるを得ない。

その經路を概觀して見ると、「猫」の次に「野分」に於て正義の情熱の露骨な表現があつた。「虞美人草」に至つては鮮やかな類型的描寫によつて、卑屈な利己主義や、征服欲の盛んな我欲や、正義の情熱や、厭世的なあきらめなどの心理を剔抉した。その後の諸作に於ても絶えずこの問題に觸れてはゐたが、それを著しく深めて描いたのは「心」である。その作に於ては利己主義は遂に純然たる內生の問題として取扱はれてゐる。私は利己主義の惡醜さをかくまで力強く鮮明に描いた作を他に知らない。また執拗な利己主義を窒息させなければ止まない正義の重壓の氣味惡い底力も、前者ほど突込んではないが、（殊に重大な所にギャップはあるが）、力を入れて描いてある。次の「道草」に於ても利己主義は自己の問題として愛との對決を迫まられてゐる。この作で特に目につくのは、主人公の我がいかに頑固に骨に喰ひ入つてゐるかをその生ひ立ちによつて明らかにしたこと、夫や妻やその他の人々の利己主義を平等に憎んでゐること、その利己主義を打ち碎くべき場合方法などを繰り返し〳〵暗示してゐること、結局それかだん實現されて行く光明ある結末が先生の作として極めて珍らしいことなどである。この作は明らかに次で現はれた「明暗」の前提をなしてゐる。「明暗」に於ては利己主義の描寫が辛辣を極めてゐるに關はらず、作者は各人物を平等に憐れみ勞はつてゐる。さうして天眞な心による利己主義の征服を暗示するのみならず、一歩一歩その征服の實現に近寄つて行つた。（先生はそれを解決しなかつた。しかし或は——自らの全存在を以て解決したのではないのか。）

戀愛と正義の葛藤、利己主義による戀愛の悲劇なども、先生が熱心に押しつめて行つた問題であつた。こゝに先生の人生に對する厭世的な氣分が現はれてゐる。愛も賴むに足りない。人と人との間には掛ける橋がない。——

「三四郎」「それから」「門」「彼岸過迄」「行人」などが右の題目の開展であることは明かである。「三四郎」に芽ざして「それから」に極度まで高まつた戀愛の不可抗の力は、遂に正義を押し倒した。作者はこの事を可能ならしめるために享樂主義者を主人公とした。しかし不可抗の力の强さを際立たしめるためには、あらゆる同情を不義の戀に落ちて行く男女の上に注ぐ事をも辭しなかつた。「門」はその解決である。押し倒された正義は執拗に愛する者の胸を嚙んでゐる。完全に相愛する男女の生活にも、慘しい寂しさがある。さうして遂に正義は蛇のやうに謀反者の喉に卷きつく。

「彼岸過迄」に於ては愛を双方で認めながら心も體も近づく事の出來ない宿命的な悲劇が描かれてゐる。更に「行人」は夫婦の間でどうしても心を觸れ合せることの出來ない愛の悲劇を描いてゐる。愛は遂に絶望である。

この問題に就も「道草」は一つの活路を暗示する。碎かれた心のみが愛を生かせ得るのである。「明暗」に至つてそれは正面から取扱はれた。「生」を去れ。裸になれ。そこに愛が生きる。その他に愛の窒息を救ふ道はない。

先生の厭世的な氣分は戀愛を取扱ふ態度に充分現はれてゐる。しかしそれが更に明らかに現はれてゐるのは生死の問題に就てである。こゝに先生自身の超脫への道があつたやうに思ふ。

元來先生は輕々しく解決や徹底や統一を說く者に對して反感を持つてゐた。人生の事はさう容易に片附くものでない。頭では片づくだらうが、事實は片附かない。——しかしこれは片附ける事自身に對する反感ではなくて、人生の矛盾や憧着をあまりに手輕に考へる事に對する反感である。先生は望ましくない種々の事實のどうにも出來ない根强さを見た。さうしてそのために苦しみ悶いた後、厭世的なあきらめに達した。顧みて口先ばかり景色のいゝ徹底家の言葉をきくと、思はずその內容の空虛を感じないではゐられないのである。

けれどもあきらめに達した故を以て先生は人生の矛盾不調和から眼をそむけた。わけでなかつた。先生はます〳〵執拗にその矛盾不調和を凝視しなければならなかつた。寂しく悲しく苦しかつたに相違ない。（たとへ種々の點で所謂徹底家よりもあきらめに沈んだ先生の方が遙かに徹底してゐたとは云へ。）

それ故先生は「生」を謳歌しなかつた。生きてゐる事は致方のない事實である。望ましいことでも望ましくない事でもない。たゞ併し生きてゐる以上は、しなければならない事がある、則らなければならない法則がある。それは苦しいかも知れないが、苦しくても止むを得ない。——抑も生きる事が苦しむ事なのである。生きてゐる以上は種々の日常の不快事を（他人の不正や自分自身の不完全や好ましくない運命やを）避ける事が出來ぬ。寧ろそれらの不快事が生きてゐる事の證據である。人生とはもと〳〵かくの如きものに他ならなかつた。

併し先生は「死」をも謳歌しなかつた。死も亦致方のない事實である。「死」は「生」よりも好くはない。また「生」より惡しくもない。從つて死んでもいゝし死なゝくてもいゝ。生きてゐてもいゝし、生きてゐなくてもいゝ。

このやうな生死に對する無頓着が先生のはいつて行かうとした世界であつた。先生はそこに到着するまでの種々の心持を製作の內に現はしてゐる。「門」「彼岸過迄」「行人」「心」などはその著しいものである。こゝにも開展のあとは認められる。「心」に於て極度までも押しつめられた生死の問題は、右の無頓着が著しくなるにつれて、もう再び取り上げられる機會がなかつた。

併し人生觀の如何に關はらず、先生の內の「創作家」は先生を驅使して常人以上に「生かせ」働かせた。殊に生死に對する無頓着は反つてこの創作家を強健ならしめたやうに見える。「明暗」を書いてゐた先生は或時かう云つた。「毎日すべつたのころんだのとクダラない事を書いてゐるのは、實際やり切れないね。」實際かう感じる事もあつたに相違ないだらう。而も先生は渾身の力を注いで製作しないではゐられなかつた。さうして藝術的勞力その者が先生の心を滿足させた。「明暗」の執筆中の如きは、製作の活動それ自身を非常に愉快に感じてゐたやうである。そのため生理的にも今迄になく快適を感じてゐたらしかつた。(その實は製作の興奮のため徐々に身體を疲勞させたのであつたらうけれど。)

先生が製作によつて生の煩はしさを超脫する心持は、私の記憶では、「草枕」や「道草」などに描かれてゐたと思ふ。

私は極めて概括的な、そのくせバラ〳〵になつた觀察を書いた。もと〳〵先生の藝術に就て適切な評論をなし得やうとは思つてゐなかつたから、これ位で筆を擱きたい。

先生の藝術に就てはなほ論ずべき事が多い。私は先生が「何を描かうとしたか」に就て粗雜な手を一寸觸れたのみで、「如何に描いたか」の問題には全然觸れなかつた。そこへはいればとても容易に出られないと思つたからである。それに、私の今の心持は、たゞひたすら先生の人格に引きつけられてゐる。先生の技能が提供するさま〴〵の興味ある問題は、たとへその興味が非常に深からうとも、今直ちに私の心の中心へ來る事が出來ない。併しそのために讀者諸君の注意をこの方向へ向けて惡いといふわけは少しもない。私は先生の死に際して諸君が先生の全著書を一まとめにして更めて鑑賞されんことを希望する。さうしてこゝに說いたやうな先生の人格と生活との表現が、いかなる姿とリズムによつて行はれてゐるかを仔細に檢せられむことを勸告する。先生の藝術はその結搆から云へば建築である。總ての細部は全體を統一する力に服屬せしめられてゐる。更にまた先生の全著書は先生の歩いた道の標柱である。總ての作は中心を流れるいのちに從つて並べられてゐる。これらの物に親しむのはいかなる意味に於ても我々を益し我々を幸福にするだらう。

漱石先生の畫事

津田青楓

先生が畫をお始めに成つたのは三年程前かと思ひます。何でも例の御病氣で寢て居られる時私は何かの要事で京都に歸つた時、八か間敷い西本願寺の寶物の入札があつた、それを見に行つて面白いものがあつたから、圖錄を先生にお送りした。それから東京へ歸つて御伺ひした時、病氣は大分いゝ樣で床の上に坐つて居られました。たいくつで困るとのお話でした。そして畫を描いたから見てくれとて紙片に描いたのを見せられました。これが此度畫を始めに成つて最初だと思ひます。最もその以前にも描いておいでに成つたかも知れませんがそれは私は知りません。猫などを見ると頻りに水彩の繪の具をいぢり廻してゐる樣な所がありますが それは無論先生お自身のことで以前は水彩畫に非常に御熱心だつた樣に思はれます。小宮の居つた下宿に先生の以前の水彩と云うのを二三枚見ましたが、それはまづいものでした。何が何だかぐしや〳〵で、ちつとも分からないのです。然し色は大變奇麗でした。此度お始に成つた畫と云うのは矢張り水彩繪の具で白雲紙の裏打の樣な紙を半紙判を少し長みにした樣な大さのものに始終かいて居られました。私の貰つた數がでた一面に靑色で描いてあつてその中に赤色で柿が三つ四つ樹になつてゐて、烏が墨色で二羽とまつてゐる所がかいてあるのです。それが一番最初に見せて貰つたうちの一つです。

その後行く度に同じ大きさの紙にかいた畫を必ずお見せに成りました。最も畫風はきまつてゐなかつた

様ですが、紙の大さと各繪畫に遣つて居られる點はいつでも同じでした。これが先づ第一期の筆ならしであつたと云へる様にその後は決してその式の畫はお描きに成らなかつた様です。その頃四五枚たまつたのを一時に出して、津田に一つ鑑査をして貰はうなどと云はれました。これは駄目でしようと云ふと目の前ですぐ破いて仕舞はれました。それから私が一つ審査をして等級をつけ様ぢやありませんかなどと云つて勝手氣儘に順番などをつけてゐるのを、そばで見ては只笑つて居られました。それから畫を見せて貰うたんでもう少し大きなかけじに成る様な半折位のものにお描に成つたらどうです、とよく云ふと、駄目だよやつてゐるのだから。そんなものが中々かけるものかと始終云つて居られました。

どうしてかいてどう繪の具を遣つていゝのがちつとも分からない、只無茶苦茶をやつてゐるのだから。そんなものが中々かけるものかと始終云つて居られました。

然しさう云つて居られるものゝ、非常に描いて見たくつてたまらないと云ふ心持ちのあつた事は言葉の外によくわかりました。

それから間もなく例の通りに見てくれと云つてお出しに成つたのは、土佐引の紙に描かれた半折ものでした。その畫はどんな畫だつたか、今私は覺えませんが何でも線を餘り遣はず薄墨を澤山ぬたくつて物の

形の不器用な畫だつたと思ひます。それからしばらくの間は、この調子のものを大分つゞけて描いて居られました。

この一時期の間の半折には風景は殆どなかつたと思ひます。主に二つか三つ位のものを配してそれを大きく描いたものでした。假令ば籔の中の小徑を坊主が歩いてゐる所とか、梧桐の下に描が眠つてゐるとか萩を描いて上の方に月を配するとか云ふ様な構圖のものが多い様でした。この時代のものは、これで又一時期を劃くしゐると云ふ事が云へる様にはつきりしてゐます。その頃描かれたものに亡くつた小さい雛子さんの畫像をかいて野菊を配されたものがありました。可成り不器用な下手なものでした。私はいつもその不器用と下手さとそしてそのうちに非常な眞面目さがある事をひそかに推服して居りました。

私は先生に「先生の畫の下手さは石濤と云ふ支那人に似てゐますね」と云つた事があります。其後は先生から「君、石濤と云ふのは支那の偉い坊さんだよ」と云はれた事がありました。私はいつでも生活に餘裕を持たないから人の傳記などをよんでゐる暇がないから寫眞版の畫を見てたま〳〵先生の畫に似てゐる様な氣がしたから無鐵砲にそんな事を云つたのでしたが、先生はその頃畫家の傳記などゝ非常に興味を持つて讀んで居られた様でした。

それはどうでもいゝですが、それから第三期にはいつて先生の畫と云ふものが急に立派なものに成つた様に思ひます。これは主に風景畫等です、山水畫です。ある時野上君の紹介で式部官の岡田と云ふ人の宅へ先生と一緒に畫を見せて貰いに行つた事がありました。その時二三十幅見せて貰つたそのうちで先生の一番氣に入つたものはおそらく高芙蓉のちつぽけな山水だつたらうと思ひます。その後四五日して先生を訪

問すると「君高芙蓉をやつたから一つ見てくれないか」と云つて半折の山水畫を見せられました。私はその圖柄を明瞭に頭の中に描く事は出來ませんが、非常にうまく成られたと思つて感心した事を記憶してゐます。その頃から非常に油がのつて來てずん〳〵いゝものが出來た樣です。その中で一幅私が非常に激賞たのがありました。何でもそれを始めて經師屋にやつて自分で表裝されました。その畫は矢張り山水で山の上の方に仙人の家の新なものがあつて鶴が飛んでゐて雲があつたと覺えてゐます。そして自分が作られた賛が上の方に書いてありました。私はその畫を非常に賞めて「この畫は先生生涯の傑作ですよ」と云つたら「馬鹿を云へ、おれはこれ位でいきづまるものか、おれは死ぬ迄に一つ津田をおれの畫の前でお辭儀させる樣なものを一つ描書いてやる」と云はれました。それから以後づん〳〵いゝものが出來ました。

「畫でも書でも自分の部屋にかけるものは自分でかいたのが一番いゝ」と云はれた時がありました。そして出來榮のいゝものは大抵自分で表裝をしてたれにもやられなかつた樣です。實際好い畫が出來た場合それをむざ〳〵人手に渡すのはおしくつてたまらないものです。それかと云つてまづい畫を他人にやるのは尙更いやなものです。現在持つてゐるものに比較してそれ以上のものが出來た時始めて前の畫に執着がなくなります。先生は、さう云ふ意味で最近のいゝものは自分の手元におかれた樣な氣がします。

夏目先生と書畫

瀧田樗陰

夏目先生がいろ〳〵の點でえらい事は各種の人達が各方面から話されようから、僕はたゞ書畫の方面だけを話しませう。

書畫のことで僕が夏目先生の許へ出入するやうになつたのは、昨年の御大典、——十一月の十四五日の頃からだと思ふ。當時僕はだん〳〵書畫熱が盛んになつて來てゐたので、御大典を記念する爲めに、書畫帖を拵へた、そして先生にも一つ書いて頂かうと思つて行つた。話は少し昔に溯るが、僕が先生を初めて知つたのは、大學の英文科でマクベスの講義を聽いたときである。其後、先生が『猫』を書かれてから二三年の間は『中央公論』の原稿の用事で時々伺つたけれども、朝日新聞に入られたのちは御無沙汰がちで、一年に一回お目にかゝるか掛らぬか位ゐであつた。

それで先生が書畫の方面で何處らまでやつて居られるか實は知らなかつた。御大典書畫帖の場合も、先生は書がうまいから書いて貰ふと云ふのでなく、唯えらい人だから書いて貰ふ積りであつた。その時は『壽山萬丈高』と書かれた。その書かれた字を見るとなか〳〵書家の風があつて、それ以前に書いて貰つた他の人々のよりもずつと立派なものだつたから、僕は大に敬服した。

尤もその數年前、鈴木三重吉君の家で先生の書を拜見したこともあつた。それは兩側に青竹の生へ續い

た細徑を後向きの僧が二人山門を指して歩いてゐる所を書いたものである。その畫は、近頃書かれた物と比較して、出來榮の上下は好く分らないが（當時、僕は餘り書畫の趣味はなく、從つて眼識もなかつたから）大變面白いやうに感じて、全く不思議に思つた。そして僕も何とかして一枚位ゐ書いて頂けないものか知らと思つた。けれどまだ書畫にさほど熱心でなかつた當時の僕は、さう思つた丈けで忘れるともなく忘れて了つてゐた。

然し例の書畫帖に書いて頂いてからは先生の書に非常に感服して、時々伺つて書畫のお話を承るやうになつた。そして近來僕は非常な書畫熱に罹り、先生にもときゝ〳〵書いて頂きたいと思つて、先生の御面會日である木曜日には毎々伺ふやうになつた、その日の午後は何時も會ふと云ふお話だつたから。

それが緣になつて、先生が發病せられるまでの丁度滿一年の間は、先生の御都合が惡いとか或は僕の方にどうしても手を離せない用事があるとか云ふ日の外は——恐らく五六回乃至七八回の面會日を除いては、御面會日には殆んど缺さず伺つたのである。僕はその日を樂しみにして自ら『僕の安息日』と名付け大抵午後の二時か三時から夕方の五六時頃まで何か書いて頂くのであつた。

その御面會日も、夜になると世間で云ふ先生の門弟の方々が集合して文學談に花を咲かせられたけれども、畫の間は殆んど書畫中心——或ひは僕を相手の先生の書畫揮毫の時間とでも云ふやうなもので、同じく書畫に趣味のあるお方は僕と一緒に矢張り先生から何か書いて頂いたけれども、書畫に餘り興味の無い方は甚だ手持無沙汰の體で、僕も實はそれを見て濟まないやうな氣がしてゐた。けれども正直に云ふと、これは僕の安息日なるのみならず、實は先生にも多少僕が行つて書畫をおねだりするのを待ち設けてゐら

れたやうな氣味がないでもなかつたやうだ。

それで何か書いて下さいと言ふ人があつても『今、例の先生がやつて來るから、やつて來てから書かう』と言つて、僕が行つて墨を磨つたり毛氈を布いたりするのを待つてゐられるやうな風もあつた。そんな樣な風だから、最近一年間には先生の書畫と云ひ御熱心なる態度と云ひ、そんなものは僕が一番見てをつたやうに思ふ。

それに僕にもう少し暇さへあれば、先生が何時頃からどんな風にして書畫の道に進まれたのか或ひは又平生どんな書畫に關する書籍を讀まれてゐたか、と云ふやうなことも調べて見たいと思つてゐるけれども、何しろ勿卒の際で、まだその準備もしてないし、又新年の雜誌の編輯に忙殺されてゐるので、實際に見聞したことも秩序立てゝお話する餘裕がないから、順序なく思ひ浮べるまゝを二つ三つお話することに止めて置く。

△

先生が書畫に志されたのは、恐らく今から十數年前からのことだと思ふ。當時書畫に趣味の乏しかつた僕などは、うッかり氣が附かずにゐたけれども『吾輩は猫である』の中にも主人公が猫の寫生をやつて、あの口の惡い猫から散々罵倒されてゐる所があつたやうだから、あの前から、既に幾らかづゝやつて居られたものと見える。その後、水彩畫も可なり熱心にやられたさうだ。その當時の物は、今、小宮君の手にあるとの話である。

また野上臼川氏の家で見た極密の竹林兼松林山水の如きは、その一部に不手際なところがあるに拘らず非常な苦心の作で、こんな密な物を先生は何時書かれたらうと臼川氏に聞いたら、今から三四年前に書かれたとのことだから、先生の書畫の道に志されたのは、僕が伺ふやうになつた數年前からであることは疑ひない。然し本當に熱心になつて、其の熱心の程度が側の人を驚かし且又その上達の著しく目に見えて、專門の書畫家をして殆んど驚嘆の聲を發せしめるやうになつたのは、最近一年間のことではないかと僕には考へられる。

熱心と云へば、先生の書畫熱といふものは、隨分高かつた。その熱度の百度以上の患者たる僕をさへ屢々驚かした程である。かう云ふことを言つて好いか惡いか分らないが、僕から見れば先生の近來の本當の興味は小說を去つて書畫に移つてゐたと云ひたい位ゐだ。現に『明暗』を書かれる一ヶ月前に、微恙の爲めに臥床されてゐた時に、小說の趣向はもう出來ましたかと訊いたら——

『まだ何にも考へてゐない、實は畫のことを考へて、小說が終つたならば、三幅對の大作を一つやりたくつて漸く考案が纏まつた』

と、云ふやうなお話があつたのでも、さう思はれる。また池邊三山氏の書を非常に褒めて、日本では德川時代にもそれ以後にもあの位ゐの人は無いと云つてゐられた。そして何處かで三山氏の書も見られたさうで、『書もまたうまい、あの男は書畫をやれば確かに日本一になつた、新聞記者などになつて惜しい事をしたものだ。尤もさう云つたら池邊は屹度書畫なんかは士君子の末技だとか餘技だとか云つて怒るだらうが、僕にはどうも新聞記者よりも其の方が好かつたやうに思ふ』と言はれて居つたのでも、先生の興味の

在るところが分らう。

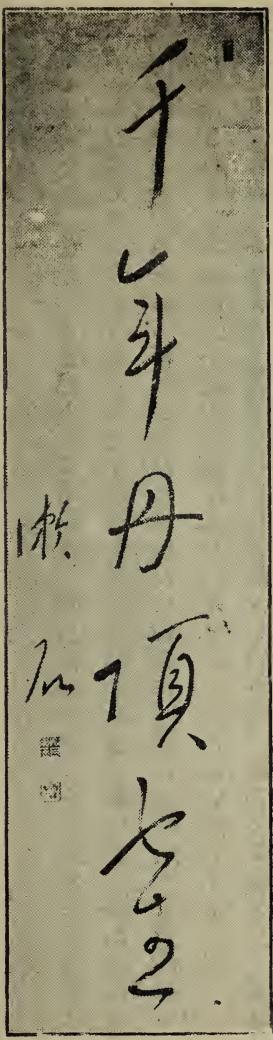
また僕も現に先生に對つて、——

『先生のこの頃の興味の中心は小說よりも書畫にあるやうですね』と言つた。と、

『そりやさうさ、一方は商賣で一方は道德なんだから、話だつて商賣よりも道樂の方が面白いんだよ』

と言つて居られたので益々明らかである。

先生の書は、書體はいろ〳〵に變つてゐて——即ち肉細の細長い字があつたり、又肉太の圓味を帶んだ字があつたりして、一見しては全く別人の手になつたやうな物があつて、一概に云ふことは出來ないけれども、大體坊主臭い字のやうに思ふ。俗字と云ふのは先生の最も嫌はれたもので、吾々が見て相當に好い文字だと思ふものでも、此は俗字でいかん〳〵、實にいかんと云ふやうな批評をよく下された。

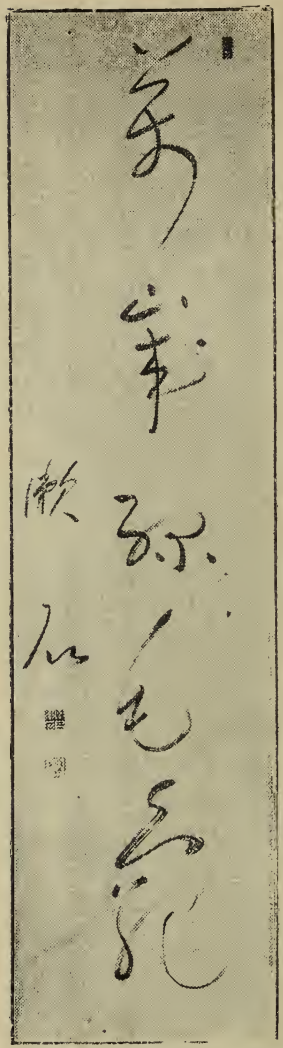


坊主臭いと云つても、先生の最も好く親しまれたのは、松山の明月和尚、越後の良寬、この二人の物は大分賞翫もされ、亦時には稽古もされたやうに思ふ。また黃檗の物も大分お好きであつたやうだ。先生の書かれる物には時として良寬風に見えたり、明月風に見えたり、或ひは黃檗の坊主らしい物も多いやうだ。

左も近來は『書苑』や其の他の法帖などを大分集められて、色々な書風に就て種々研究を重ねられたやうであり、從つて時として隨分變つた書風も試みられたやうだが、全體として見れば何うしても先生の書には禪坊主らしい風格が最も多いやうである。

△

先生は長鋒の筆を好まれて、吾々の使ふ物の二倍もあるやうな長い毛を自由に操られて、一點一劃にも細心の注意を拂ひながら、心靜かに書かれた。僕自身の趣味から云へば、もつと大膽に、もつと豪放に一氣に揮灑された方が好いと思つて、ときく〳〵そのことを申したこともあるが、さう一氣に書かれることは極めて稀れで（大幅で「幽居人子到」これは一氣に書かれたる方）多くの場合は、一字々々、或は一線々々、考へ〳〵書かれると云ふ風であつた。



けれども、それだからとて、筆に勢ひがないと云ふのではない。落着いた、品の好い、位置の正しい物を書かれるのが先生の御趣意で、僕等が見て筆力奔放などと思ふものは、恐らく先生には虚勢を張つたやうに見えたり、或ひは俗氣紛々たるもののやうに見えたらしい。

先生はよく『どうしてかうまづいのか、今少しうまい筈だ』と云つて、自分の書かれた物に多くは滿足の意を表はされなかつた。然しそれは先生の理想の標準に照して自ら卑下されるのであつて、他の人の文字よりも惡いと云ふ意味では決してない。現代の人で、先生の褒められたのは、前に言つた三山氏位ゐの者で、大抵の人のは『いかん〳〵』とか『ごまかしだね』とか云つて、中々容されるものではなかつた。そして又口癖のやうに、僕は少し稽古すると書に就ては自信があるとか、今に見てゐ給へもつとうまくなるからとか言つて居られたから、今四五年も或ひは今一二年でも生きて居られたら確かに今よりもずつと上達されただらうと思ふ。尤も今の物でも我國の現代のうちでは最も脫俗高雅の文字で、眞に眼識ある人士の驚嘆を博するに足り、後代に至つては益々その光輝を發する物たることは疑を容れないところである。

△

先生が御自分の書かれる書畫を苟くもされないことは非常なもので、氣に入らないものは何枚でもズタ〳〵に裂いて、誰が何と云つても決して之を人に渡されなかつた。尤も、餘り親しくない人に義理づくに書かれる場合には多少意に滿たない物でも渡されたやうであるけれども、僕等には先生の氣に入らない物は絶對に渡されなかつた。紙を十枚持つて行つて、二枚も出來るのは上乘の成績の方で、大抵一枚位ゐのことが多かつた。甚だしきは、半截を一枚書くに十五枚の紙を書きつぶされたことがある。さうなると紙の惜しいと云ふよりも先生の骨折られるのが氣の毒で、『もう大抵でいゝでせう』と言つても、先生は中々

きかれなかつた。も一枚、も一枚と云つて、紙の有りだけ書いて終ふまでは決して承知されなかつた。

二三年前の『日本美術』の口繪になつて出た、先生が横山大觀書伯に贈られた書の如きは、絹を十枚書きしくじられて、どうしても絹は駄目だと云ふんで、今度は紙に書きかへられた。つまりあれは十一枚目ださうである。

僕が屏風の二枚折一双（全紙四枚）を書いて貰ふ爲めに費した紙は無慮六十枚前後で、三四回續けて十五枚乃至二十枚を持つて行つて、辛うじて出來たものである。又『歸去來辭』の巻物も三度書き代へられたが、その前に稽古の意味で書かれた紙を入れると、やはり巻物に要した紙の二十倍以上費して居る。

そんなに書かれても、その中で先生の最も氣に入つたのを一枚だけを下さるので、他は皆いくら側で惜んでもべた〳〵と棒を引いて、それから一字も完字のないやうほど迄にこま〳〵に千切られるのを例とした。その一枚を擇むにも絶對に先生の眼識に依るので、他の人々が皆擧つて他の物を擇んだところで先生は頑として動かないで、『もしそれが厭なら止せ』と言はれた。

自分の書いた物を如何に大事にせられたかの一端は、今の話でも分るだらう。

先生が他人の書に感服せられなかつた事は前にも言つたが、先生のお宅によく見えた森と云ふ人にやられた手紙に依ると、僕が先に先生の私淑して居られたと云つた彼の明月和尚の書を批評せられて、近來は餘り感服しなくなつたと云ふやうなことを書いてあり、また正岡子規などもモット生きてゐたら明月のやうに成つただらうと書いてあるさうだ。つまり晩年の先生は勿論子規や明月よりも遙かに上になつて居ると自覺して居られたやうに書いてあるさうだ。これは又聞きに聞いたことである。いづれ、かう云ふことは

先生の書簡集の公けにされる時に明かになるだらうと思ふ。

曾て伊達家の第二回賣出しの時であつた。先生も見に行かれたが、そこには一休の書があつた。それが二千圓か三千圓かで賣れたと云ふ噂を聞いて先生は、それを評して、『何處が好いのか、僕があれを貰つたら糞を拭いてしまふ』と激語を發せられた。

それから僕が虛子の短冊を持つて行つて、『實に氣持の好い文字ですね』と言つたり、桂月の書は厭味がなくて好いと言つたりしても、どうしても先生は餘り褒められないで、例の通り『ごまかしだね』と言はれた。

△

話が餘り長くなるから書のことに就ては簡單に申しますが、僕の最も多く書いて頂いたのは、四君子がおもで、短冊とか色紙とか或ひは半截とかに其の四君子を書いたものは可なり多く有つて居る。中でも竹が一番先生のお氣に入りのもので、色々な格好の竹を自由自在に書かれた。蘭は僕が昨年半截に書いて頂いた時に、『蘭を書くのは生れて初めてだ』とのお話であつたが、百穗書伯や素明書伯などは、その初めて書かれた蘭を非常に敬服して居られたし、その後色紙に寫生をして頂いたりなんかして蘭も數多く書かれたがどうも竹ほどにはうまくないやうに僕には考へられる。

梅は最初のうちは最も困難を感じて居られたが、何時の間に稽古されたのか、近來は非常にうまくなつて、古木も、椎木も垂枝も直枝も自由に書れたやうである。本號所載の梅の半截は先生が最後の御面會日

に書かれた、つまり畫に於ける絶筆で、先生の畫が如何に專門家風に近づいたと云ふことを表はすものと思ふ。

蘭は不思議にも初めからうまくて、書でも畫でもあの位ゐ書きしくじられる先生が蘭に於ては殆んど書きしくじられる事がなかつたのはどう云ふものか。かの陶淵明の『採菊東籬下、悠然見南山』の詩句を愛誦された先生の氣分とよくよく合つて居つたものと思はれる。

その他山水畫にも大分研究を積まれて、この方面に於ては主として支那風のものを狙はれたやうだ。支那の古代の名畫の板本は大分集められて、これは最近の先生の最も心を喜ばしたものであるらしい。それらの影響が先生の畫にも表はれて、少し密な山水畫を書かれるやうになつたが、その作品は多く支那趣味のものであつた。

△

私の最も多く書いて頂いたものは、以上のやうに水墨を主とした四君子の様なものであるが、此の以外に先生は長い閑のある時分には、五日も六日も家の内に閉ぢ籠って、着色の極密の山水を試みられた。それはモウ非常な大努力で、その三四幅はお宅に深く藏して居られるやうだ。僕もその二三幅を拜見したことがあるが、水墨の四君子とは又違つた味のあるもので、他日先生の書畫集でも公にされることがあつたら、その苦心と努力とで世間を驚かすに足ることと思ふ。

△

概して云へば先生の趣味は俳句趣味と云ふよりも、東洋趣味若くは支那趣味といふ方で、それに幾らか禪味を加へたものである。その分量は正確に云ふことは出來ないけれども、俳味二分、支那趣味五分、禪味三分位ゐのものではあるまいか。

詩に於ては陶淵明や王維や眞山民などがお好きらしかつた。かの有名な『草枕』は最も好く先生の趣味を伺はせるに足るもので、小說に於ては西洋より得られた微細な心理解剖や精密なる性格描寫などもあるけれども、少くも書畫に對する先生の趣味は、純然たる東洋流である。で先生の書畫に對する正確な判斷をしようと思へば、何を措いても先づ『草枕』一篇を精讀する必要があると思ふ。

△

先生は近來、發病せられたる少し前まで、『明暗』の一回を書き終へられるのは正午若くば午後の一二時

頃だつたが、その後は必ず一日一篇づゝ七言律を作られた。それは、小說を書くと何うも頭が俗になつていかん、詩を作つて頭を元に戻して置かなくてはならん、と言ふやうな意味からであつたらしい。

それを以て見ても、近年の先生はます〳〵東洋趣味に成られて、詩・書・畵の三方面に一步々々深く進んで行かれる傾向が見えて居つた。ずつと前に書いて頂いた畵には偶には古人の詩句などを題されたが、最近に於ては題字に古人の句を取るのは近頃の無學なる南畵家のやることで、少くとも竹田位の男になれば、多分は自作を題したものだと云はれた。最近僕に書いて下すつた『山上の松』に『冬嶺秀孤峯』の句を題して頂かうと思つたら、やはり其のことを言はれて、代りに先生の詩一篇を題して下すつた。

之を以て見ても、先生の書畵はます〳〵本式になつて來て、少くともモウ四五年生きて頂いたら、其の造詣は蓋し圖り知るべからざるものがあつたらう。

明治より大正にかけて詩・書・畵三絕の大家の名を、明治大正年間の文壇に於ける、第一人者の名と共に併稱さるゝことは、決して空想でなかつたと思ふのである。（談）

禪の境地

釋宗演

漱石氏が私のところへ來たのは、よく記憶に存せぬが、何でも今から三十年程も前のことである。大學

を卒業したばかりで高等師範に教へに出て居られたとか言つて居たやうである。本統に飄然としてやつて來て、おほよそ半年ほども禪堂の生活をして居た。その間の氏は言ふまでもなく禪を修ぜられたり、また靜かに自らの生物觀を押し進めて行かれたやうに覺えて居るが、何にしろ私の宗旨などでは、たとひ雜談などの折にいろんなことを物語る機會はあつたとしても、互に深く語り合ふと云ふやうなことが無いところから、その時の漱石氏に就いては鮮やかな印象を有つてゐないのである。したがつてその節の參禪が漱石氏の人生觀や藝術觀にどんな風にして入つて行つてゐるのかは知る由も無い。

氏の小說「門」と云ふのを、或る人が持つて來て、漱石氏が始めて私のところへ來た折のことが描いてあるから讀んで見よと云ふので、始めて氏の小說を手にした譯だが、あの中に宗助と云ふ男が鎌倉の禪堂へ來て、「老師々々」と皆の言ふその老師に逢つて見ると、心の內でどんなに老人かと思つたら、まだほんの若い坊主だと驚く件、あれがおかしかつたので今でも覺えて居る。氏の參禪生活はあんな風な氣持であんな風にして始まつたのであらう。まあ一口に云へば氏の參禪生活は極めて平凡な普通なもので、とりあげて異彩と認められるやうなことはなかつた。

その後永らく相逢ふことも無かつたが、四五年前のことであつたが、ちやうど中村是公氏が滿鐵總裁であつた當時、漱石氏は中村氏を伴ふて鎌倉へ出向はれ、絕えて久しい會談の折を得た。それは中村氏が私に滿鐵の若い人達に何か話しをして呉れとの依賴に見えられたのであつた。また去年私が大病に冒されて居た時も、中村氏と二人で見舞に來られたのださうだが、死ぬか生きるかの折からとて後になつてそれを知つた次第である。爾來相合ふこともない中に漱石氏は死んでしまつたのである。五十歲と云へばまだ

まだ世が氏に期待する多くのものゝ在る間に逝かれたのは惜しい。氏の家はもと眞言宗なのであるが、死ぬ時に中村氏に言ひ殘されたと云ふので、禪宗の葬儀を行ひ私が行つて引導を渡して來た。近年にない靜かな嚴かな葬儀であつた。

私が何かの緣で漱石氏と結び付けられてゐるところは以上のやうな次第である。私はもとからの氏の作品も思想も識らず、最近の「明暗」なども人の噂によつて聞かされるだけで、どんなことが描いてあるのか判らないやうな譯で、最近どう動いたと云ふことも知らない。私が漱石氏に就いて知り度いと思ふ數々はこれからの月日を竢つて貰はねばならぬのは遺憾である。

たゞ私の知る限りの漱石氏の風格は、我が禪宗の白隱禪師が「吾は禪の俠者なり」と云はれて居るがそんな樣に思はれてならない。元來が江戶つ子に生れて、淸廉な氣稟を有つてゐた氏は、生れながら禪味を帶びた人柄であつたと思ふ。しかしながら、氏の禪の修業は、修業としては大したものではなかつた。修業は大したものでは無かつたが、氏の性根が佛敎乃至東洋思想の根本に觸れて居たことは知れる。「去私則天」と云ふのが氏の最後の頃の思想だと語られて居たとのことだが、それは明らかに大乘佛敎の眞精神なのである。

藝術としての氏のものを何も讀んでゐない私が、たゞ私だけの漱石氏に就いての智識から氏の藝術なり思想なりを推察して見れば、氏は自ら自然と融合して行つて、何人にも接し得ないさまざまな自然の姿を見出して來て、これを所有つて個人なり社會なりを押進め高めて行くと云ふやうな立場に居たのではないかと思ふ。禪では云ふまでも無く自然と融合することを目的とする。自ら自然に近寄るのか、自然の方か

ら近寄つて來るのかそれは知らぬが、唯融合するのである。漱石氏はこの境地に在つて、そこから様々な思想に具を與へて、小説を創つて行つたのではないかと考へるが、どんなものであらうか。

何も知らぬ私は、文壇で漱石氏と似通つた道を歩んだものを求めれば、或は幸田露伴氏の作品なり經歴なりがそれに近いかとも考へて居つた。しかしある若い人の説くところを聞くと、幸田露伴氏の思想、乃至は氏の作品に表はれた思想は、その深い佛教の智識佛教の思想を衒つたやうなところが在る。露伴氏にあつてはそれはたゞ智識であつて、漱石氏のやうに本統に自分の中へ領有して仕舞つたのでは無い、と云ふ。あるひは二人にはそれだけの違ひがあるかも知れない。（談）

先生と俳句と私と

松根東洋城

私が漱石先生に初めて御逢ひしたのは、先生が松山の中學校に赴任せられた時であつた。其時分私は勿論、先生が俳句を作られることも、まして俳句がうまいといふ事など一向知らう筈がなかつた。私はその頃自分一人で月並半分秋聲會半分の様な句を作つてみたりしてゐた。それが丁度松山では極堂氏が「ホトトギス」を創刊する時分のことであつたが何も知らない私の目には「ホトトギス」の俳句などあまり新派すぎて寧ろ厭やな位に思つてゐた。東京では、正岡子規氏が熱心に俳句を鼓吹してゐた。松山の方では柳

原極堂氏村上霽月氏などが盛んに俳句を提唱してゐたし、そして愛媛、海南の兩新聞紙などもしきりとこの方面を助勢してゐた。今でこそ交通も便利であり、雜誌なども多く、都と地方との連絡も充分であるが、その頃の、いはゞ俳句の創業時代に、子規氏の鄕里とはいへ而かも都に遠い一地方で、あれほど俳句が盛んであつたことは、充分注意していゝと思ふ。

處が私はさうした新派の俳句に對して、何となく心持がしつくりと合はないやうに思ひながらも、時々「ホトヽギス」の募集俳句に應じてみたり、海南新聞へ投書したりしたが一向に芳しい事もなく、要するに俳句界の事など全く盲目なので、その頃子規氏が歸省して先生の處に泊つてゐて毎日毎日此二俳聖が雲を呼び龍と嘯いてゐられた事など何の知る由もなかつたのである。斯うして私は此俳諧の大先達を目前にしながら雲煙過眼しつゝまだ機緣の到來を得なかつたのである。

先生は間もなく松山を去つて熊本の五高に赴任された。その後學校出の友人が熊本から歸省した折に、先生の俳句を作られる事、句が上手だといふことを初めて聞いた。時恰もいつまでも獨合點の句を作つてゐてはいけぬどうしても誰かを賴みに俳句を敎へて貰らはなければならぬと思ひ出してゐた事とてこの友人の話を聞いて先生に見て戴かうと決心した。先生は見て下さるだらうかと友人にきくと、君の事だ見て下さるともいとつて其人が肝入つてくれた。

□

少し餘談には渉るが私が生意氣にも當時盲滅法に子規氏始め當時既に錚々たる新派の大將達を何とも思

はず獨り先生に歸依せんとした私の心の狀態をいつて見よう、是偶先生の人格の俤の一片を偲ぶ事にもなると思ふから。

さて私がさういふ心になつたのは、松山に居られた頃の先生が何となく慕はしかつたからである。今から顧みると、先生が俳句の上にゑらいといふものは友達がさういふからさうかなと思ふ位で先生に見て貰ひたい先生に見て貰へばよいといふその時の私の心持は、寧ろ單なる舊の教師と生徒といふ懐しい情にうながされたものであつたらしい。そしてそれは通り一遍の師弟の間柄ではなく、この先生には教場で御目にかゝるだけだし、さう長い年月教を受けたのでもなかつたのに拘らず、何となく骨肉を分つ底な懐かしさを忘れる事が出來ないといふ風であつた。そこでそれは又どうしてであつたかと考へて見ると、そこに先生の先生たる處が躍如として居る樣に覺える。

最初に私達の眼に映じた先生は、一口にいふと、世の常の學校の先生とは全く趣を異にしてゐた。どこでもある事ではあるが、一體松山といふ土地は一段所最負の甚しい所で、土地の人といへば比較的よく互に相許し相助け合ふが、他の土地から來た者は何かにつけて排斥などする傾が多い。先生の傑作「坊ちやん」が果して松山を舞臺にして松山中學校を描かれたものであつたとしたならば丁度あれに描かれた樣に此學校も中々面倒な學校であつた。教師と生徒とは、よくごた〳〵してゐて、生徒は教師に中々心服しない、通り掛かる教師を綽名に呼び立てるなどいふ事はありふれた事になつてゐたところが中々いたずらな生徒があつて、あらはに理屈をこねたり甚だしきに至つては授業時間前に机をすつかり積上げてしまふて一同をそゝのかしてどつかへ隱れてしまひ授業も何も出來ない樣にしたり、或は授業中に揶揄嘲笑到らざ

るなしといふ有様であつた。かういふ風で一二松山出身の者をのけては教師は何等畏敬の念を以て迎へらるるどころか「餘所者」としては生徒の爲に翻弄せらるゝ者が多く面白くない風習であつた。自然師弟の關係の溫かい少などゝいふ所は至つて少なかつた。

先生はさういふ情弊の多い學校へ赴任して來られたのであつたが、謹嚴で眞面目な先生に對しては流石いたづらな生徒も毫も乘ずる隙を持つ事が出來なかつた。是は生徒一般の感想であつたらうが、更に仔細に私自身の印象を辿つて見ると、英語の先生だけでもそれ迄ずいぶん澤山に送り迎へたし、其多くの先生達には嚴い人もあれば優しい人もあつたが、先生は其どちらにもきつぱり屬するといふ風でなく、無闇に怒りぽい人でもなければ御世辭の様な事は毛頭もいはれない、授業より外に無用の言はきかれなかつた。其英語の教授法についても至れり盡せりで先生の學識が廣く高かつたからではあらうが、其事に從はるゝや極めて忠實で親切でしかも生徒の智識腦力を量つてよく了解のゆく様によく納得するやうに教へられた。私などは特別に語學が好きと思ふ方でもなかつたが、先生に教へて戴いてからは英語は面白いものだと心底から感じ出した。會話など西洋人に教はるより先生の教へて下さる方がよ程面白くむしろ西洋人の教師が教へても說明もしてくれないあるものを先生は我々に與へられた。要するに先生は人を教へるに餘りある學識と學才とを持つておられた上に教はるべき人達の能力をよく了解せられ、さて愈教を垂るゝに方つては人氣とか評判とか云ふ事は念頭になく只誠に親切をたるゝといふ事が餘の教師達と大いに異る所以であつたらしい。

□

この良師恩師たる懐しい先生が、俳句の上手であると聞いたのであるから添削して戴くべく私はすぐと友人を通じて先生に手紙を差上げた。それはたしか後の法學士の矢野義二郎君であつたが、それ以來私は句が出來るに從つて君を通じては先生に見て戴いてゐた。これが私の俳句に於ける先生との接觸の初めであつた。

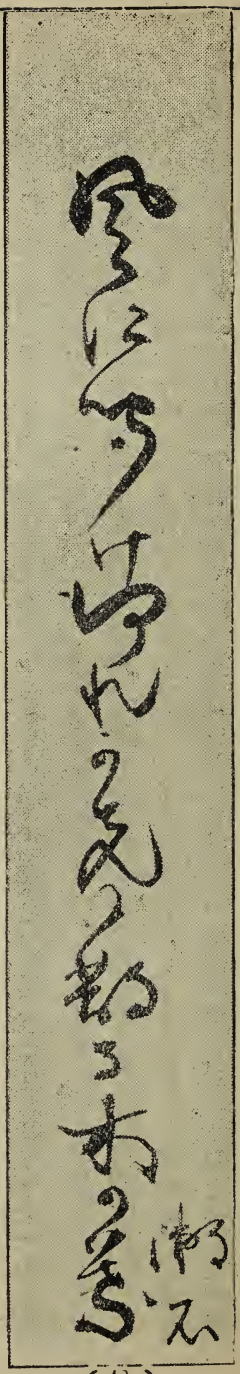
第一回の添削に、陳腐だとか平凡だとか一句〳〵の批評の中に『ゆで栗を峠で買ふや二合半』といふ句をほめて戴いてそれに俳諧の本道を得べき動機を得た事を感ぜねばならぬ。先生は私にとつては俳句の手ほどきをしていたゞいた方で此點に於ても忘れることの出來ない恩師である。子規先生を始め後に依て以て色々敎訓を得又助言を受けた人は多々あるが、俳句に就いての私の師匠は夏目先生一人である。

此先生に添削して貰ふといふ事についても一つ語つて置きたい事がある。其原稿を送るに當つて必ず本熊の友人を介したといふ點である。といふのは私は先生に直接書信をするのが何となく晴れがましく一種の羞恥を感ずるのであつた。矢野君は歸省の度に先生が君の事を話してゐたよとか君の俳句の事など語つてゐたよなど話して呉れるので先生はもはやよく自分の事を知つてゐられると分り乍ら猶直接の音信を憚つてゐた。是は矢張先生に對する私の畏敬の心に基くには違ひなかつたがさりとて一圖に恐縮するのではなくて同時に敬慕に堪へぬ情が伴ふてゐたのであつた。一方に畏敬一方に愛慕それに羞恥を感ぜねばならぬ順序になる。さてさうなるのが抑先生其人の例の表面極めて眞面目なのに內部は甚だ溫い情が籠るといふ事と相映照するのであらう。心の情は毫とこたへ乍ら屹とした森嚴さにたやすくは近よれぬ彼の意中の情人に對するやうなものであつたのかもしれぬ。是は私ばかりでなく又此添削の時分ばかりでなく後に親

く先生に私淑した人達の始終先生に就て斯ういふ溫嚴の二面のあつた事を見落さゞる所であらう。

□

話は先生の閲歴を辿り乍ら一寸横道に這入つた嫌ひはあるが、此時代先生は熊本で俳句の會などへも出られてゐたらし俳句を作つてゐられた事であらうが、尚是より先松山にゐられた時分やまだ東京を去られぬ時分に句も盛にやつてゐられた事と思ふ。其内私は一高に入るべく東京へ出たので根岸草廬へ通つたり



其他東京の先輩友人と共に研鑽する様になつて先生への方の添削は願はない事になつた。先生も亦其後東京へ移られ一高に大學に教鞭を執られる様になつたので、久しく疎遠になつてゐた先生を今度は私はお宅へ訪問して行つた。是が私が書齋に於ける先生、否寧ろ教室外に於ける先生との對面の最初であつた。其頃はもう例の猫が茶の間から書齋書齋から茶の間と家中を頻に横行し「吾輩は猫」の材料が篠々と醸されつゝある時代であつた。先生と一所に飯を食ふといふ事が後には當り前になつて宅へ歸つて食ふ様な心持になつてしまつたけれど第一回の御飯を戴いた時は只もう情の露で炊いた愛の飯と外思はれなかつた。

此頃には先生ももう俳句を餘り作られないで、私も亦先生に俳句の話を試みようともしなかつた。寧ろ先生を折角訪ねて來るといふはもつと大きな用の爲めでなければ總ての世の疲れから休む爲めに來るか或は却て俳句以外の小說とか文章とかのみならず寧ろ思想上の問題などまで伺ふ方が重になつてゐた。俳句に關しても別に多くの俳人と交際せられる事もなく只子規氏と交通せらるゝ位であつたらう。

その內「猫」が出て「幻の楯」が出て先生は「ホトゝギス」其他に創作を發表せられるやうになり、其後暫く連句や新體詩をやられる事はあつたが俳句からは益とほざかられた。

又程なく先生は大學を辭されて、朝日新聞社へ入社され、遂に小說家として立たれ、したがつて俳句の方は餘程稀れな場合を除いた外は、全く作られなかつた。

明治四十三年に先生は大病を以つて長與胃腸病院へ入られ、其快復期に於て久し振りで俳句の話が出て、作らうかといはれて一所に十句ばかり作つた事があつた。之を動機に其後もよく病後の要愼期の退屈凌ぎにとそゝのかしては句作をした。其後の度々の大病の豫後には尙讀書や執筆を禁じられてゐたので書や畵を始められたが其間々には時々私が句に誘ひなどした。そして古臭い句を作られると私がかまはず「先生の句は十八世紀だ」とくさすので外の人に「東洋城が來ると發句をつくらされるので困る。」などゝ負惜みを云つて居られたといふ。併しそれも不健康の時期の事で健康が回復するともうすぐ讀書三昧それから又執筆三昧と進んで行つて句作など打切りである。

其內に昔ほんの少し習はれた謠曲が始まる事になつて句を作つて遊ぶ代りに今度は一所に謠を歌つて遊んだ。謠は運動になるから先生の樣に坐つて書いたりいろ〳〵讀んだりばかりしてゐる人にはよいなどゝ

いふてすゝめたのが始めであつた。其運動用の謠がいつか下掛り連の乘ずる所となつて先生の書齋へ本式に實生新氏が通ふといふ事になつた。それからは先生からか自分からかどちらからか言ひ出して又しても謠に夜を更かす事が多かつた。先生は下掛で自分が觀世といふ二流合同で盛に亂聲を近隣に憚かしたものだ。さうして俳句の事は頓と出なくなつた。それでも先生は私の家の句會に來て下さつたことが二三度はどあつたが、其外には發句の會などに出られた事は皆無であつた。

句作などなさらなくなつた後には人が短冊などに染筆を乞ふ者ある時どうかすると短冊に向つて新らしく作つて書かれる事があつたが是とてもほんの氣まぐれの出來事で先づ其後は句作はなさらなかつたといふてよからう。

先生の俳句の歷史は大凡斯の如きものである。併し是とても私と先生との關係を辿つての叙說であるから私に緣の遠い處は漏れてゐる譯で其正史に對して是は外傳とでもいふべきであらう。尤も東京へ歸られての後の事は大體に悉くしてゐる積りだし、又其以前も朧ろ氣乍ら大體の輪廓位は是で窺はれやうと思ふ。

さて先生御自身の俳句の歷史は上述の如しとしてさらば先生の俳諧史上の位置とかいふ事はどうかといふに、是はもつとよく先生の俳句の全體を講究した上でなくては言へないが、少くも是だけの事は今言へると思ふ。即、先生は俳句界に於ける當面の所謂大立物ではなかつたといふ事である。といふのは私にとつてこそ師匠であるが世の一般には先達とか先生とかいふ側の方でもなかつたし、さりとて又作家として自ら銘を打つて出られる樣の人でもなかつた。俳句といふ者が士臺先生にとつては御自身の藝術的立場といふ程の者ではなかつたらしく、寧ろ先生の內にある或者を其時其折序是によければとて俳句に盛られ

たばかりの事ではなかつたらうか。殊に自らなる此先生の態度が先生として所謂俳句界といふ或範圍の内に押込ましめなかつたのである。斯く先生は俳句教育に關する側も自己製作に屬する側も孰れも俳句の社會的氣圍氣の外にあられたが唯先生の俳諧の氣分が高く優れてゐるから其作品が自然他より認識せられ高唱せられたに過ぎぬのであらう。要之先生の俳諧はもつと大きなものであつた。俳句にのみ依る以上に其俳味は色々な他のものを通して發散してゐた。即ちそれは小説にも現はれたらうし隨筆にも現はれたらうし乃至哲學書談話行動等一切に示現して衆庶を感化してゐられた。換言すれば先生の俳諧は俳句を教へるとかよい句を詠むとかいふ以上に更に大きな役目を果たされたものといはねばならぬ。

先生の俳句界に於ける位置とでもいふ樣な者は大略以上の如きで片附けて、さて、

□

斯く先生の俳句に就て語つて來ると、どうしても最後に先生の俳句其者を說かねばならぬ、が是は匆卒の際によく全體に亘つて究むる餘裕もない事であるから今は僅に手近に在る先生の短冊の內から二三を擧げて斷片的に deux mot を費す事としよう、且つそれも句其者の評釋に涉る事は避けて寧ろ一句々々によつて一回でも餘計に先生の俤を偲ぶよすがとなす事に重きを置き、追悼の意味に於ても紀念の意味に於ても可成最適當な方法を採らうと思ふ。先づ第一に

すみれ程な小さき人に生れたし

といふ句。是は流石先生でなければ云へない事と思ふ。寫生とか客觀描寫とかいふ事は多士濟々であ

るが斯ういふ理窟の句を作すものは太だ鮮い。元來さういふ理想の高い人が多くないからでもあるが。春ののどかな氣分の下に生れた小さい美しい菫の花、その菫の花の小さきが作者固有の情緒にあはれ觸れる、そこに菫と作者との間に或一致がある、即ち其菫の花をめでいつくしみ昵近になる極作者が菫と合體し同化する、そこに先生の人格が伴ひそこに先生の情調が流れる。此種の理想句は兎角に月並に墮して鼻持もならぬのが多い中に是は又非常に高遠な非常に純美な藝術を見せらるゝものかな。此句、一面に一種の人生觀を胚胎し他面に人情の溫かい處を保有してゐる。「菫程な小さき……」といふ處に自然の一微物に對する人間の省慮とその美しい同情とがほの見え「……小さき人に生れたし」といふ點に人、人と大きな顏をしてゐれど觀ずれば人亦天地の間の一粟に過ぎぬと悟っていつそ始めから小さい併し穢れも迷ひもない菫程な小さき物に生れて來たい、との樣な人生觀が根をさす。此句に斯かる二方面が現はるゝと同時に先生の斯ういふ二面が偲ばれるではないか。又

ある程の菊投げ入れよ棺の中

といふのは、大塚楠緒子女史の物故の際先生が悼まれた句であるが、是は先生が丁度或時の大病の揚句の事で、先生が女性らしい女性として、常に感心してゐられた楠緒子さんを此世から失はれた事ではあり尙自分の病氣につけて一入哀惜同情の思ひに堪へぬものがあつたと見える、此句を見ると何度見てもいつも涙でグッショリ濡れてゐる樣に思はれる。是も前句でいふた樣に人の情の溫い處から出立してゐる句であるが此方は又更にそれ一方で走つてゐる。或人恐くは世間の多くが先生を以て頗る人情に疎い偏屈な冷淡な人の樣に思ふてゐるが、若しそんな見えがあつたとせばそれは物に覆はれてゐる時で先生の胸中胸底は常

に溫い情の源泉たる心の焰がもえてゐたのである。先生は句を作る爲めに句を作られた人でないから徒に虛僞な句を作つて居られぬ。洵に此句の如き先生の溫かい美しい人情が溢れ流れてゐるではないか。自分以外の人には總て反抗的だとか學問以外に人情を解しないなどいふ世評は太しい誤解である。先生は唯物の順なるを立場にせられた、故に物順なれば唯々としてゐられるが一旦順でないと何人も容易に其關所を越えしめられないばかりである。

お降りになるらん旗の垂れ工合

蓮の葉に麩はとゞまりぬ鯉の色

いかにも自然で面白い。餘の人だと見た儘の寫生にしてもそこに多少の技巧を用ゆる、又多くは技巧を凝らして却て自然に遠いものにして仕舞ふが、先生のは始めから技巧などといふ事は更に無頓着である。それは誰しも句作の心得はさうなければならぬが先生程云ひたい事だけ言ひ出して知らん顏をしてゐるといふ樣なのは近代には珍らしい。想ふに是は先生の頭が非常によいので透視といふか何といふか物なり事なりとに角句境が疾くに頭の中に寫つてしまつて寫つたらそのまゝ直ぐ現はれ出るといふ風に句が出來一向に理屈がなく自然に無造作に萬事行く點が當代に尊く有りがたい。此無造作な淡泊な點はやがて先生の江戸子氣質を窺はしめるにも足る。晩年先生は先生一流の書をよく描かれたが、固より習はれたのでも何でもない言はばまあ自己流の書であつたに拘らず矢張拘泥しない無造作な斯ういふ點がよく出てゐた。

蓮切りに行つたげな緣に僧を待つ

良寬に毬をつかせん日永かな

蓮の句の如きは見たなり思ふたなりを言ひたい様に言ひ捨てた前句の様な無造作が玆にもあるが是は亦句に現はれた境涯其者が隨分と磊落である。毬の句に至つては磊落を通り越していつそ呑氣なものである。先生は書に於ても良寛をほめて居られ現に其幅をも所持して居られるがそれも畢竟良寛の人物を面白く思つてゐられた事と並行してゐたに違ひないが、此句でも面白い妙な坊さん良寛が一生子供を相手に遊んで暮らしたといふ事に立停つて見てゐる事が既に面白いが春の日の永きにつけても其坊さんに毬をつかせようと思ひつくなどは奇想であり又呑氣なものでなる。殊に其良寛に一番毬をつかせて見やう、と一寸考へる處などは蓋し解脫の人でなくては考へ得まい。良寛が先生か先生が良寛か毬が良寛か先生が毬か、先生に此種の磊落呑氣な氣分もあつた。今の俳句といふものとかくむづかしくやかましい今日の世の中にかうした呑氣な句が出來るといふ事に先生の貴い餘裕を思はせるといふのだ。

□

先生は俳句から出立された、と批評する人を聞く。言葉を嚴密に用ゐなければさういふてもよいかもしれぬ。大體から見て俳句に出發し、その後段々に外の者をも積上げ織り成して來てその積み上げた處に先生の藝術上の立場を置かれてゐた様だ。若し辭を正しくせよとなら、俳句の立脚點と同じ立脚點に立つて俳句と並行して進んでかの後日あるに至つたとは言ふても可からう。

□

私の書齋の柱掛に先生の短冊が掛けてある。それはいつかの大病の節に詠まれた句で後に乞ふて私が書いて貰つたので

風に聞けいづれか先に散る木の葉

といふのであつた。唯冬になつたから冬の句をといふ簡單な考のみから冬の始めに掛替えたのに過ぎなかつたが、悲いかな此短冊、偶然殘をなして先生は終に此の冬の落つる木の葉と散つて逝かれた。同じ時に重態に陷つてゐた公大山元帥よりも一日早く。

風が愈寒い。枯木夜半にいづこの家の庭にか鳴る。……短冊。今もそのまゝそこの柱の短冊掛に。

一句

死顏に生顏戀ふる冬夜かな

（十二月二十一日午前二時筏の舍にて）

漱石先生の追憶

赤木桁平

私は漱石先生に就いて云ひたいことのあまり多くを持つてゐる。この際何から先きに云つていいか、何を特に云ふべきか分らない。すべてを皆云つて終ひたいやうな氣持もする。すべてを皆云はずに藏つて置きたいやうな氣持もする。——何れにしたところで、決定的に先生に就いて語るためには、今姑らくの凝視と

熟慮とを要する。從つて、茲に私が述べるところは、かういふ私の氣持から滲み出た、何等纏りのつかない追想錄とも云ふべきものであつて、先生を永久に記念すべく、特に私が撰んだ言葉ではない。

私が初めて漱石先生の書かれたものを讀んだのは、今からもう十年も前のことである。その頃まだほやほやの中學生であつた私は、須田といふ文學好きの同窓生と相談して、お互ひに乏しい小遣ひ錢を出し合ひながら、東京から例の「猫」を取寄せて讀んだ。勿論文學に對する眞當の理解などといふもののあらう筈はなかつたが、それでも猶ほ二人にとつて「猫」は非常に面白かつた。その後須田が盛んに先生のものを買ひ集めるので、私は大抵須田のお蔭で先生の作品に親しんだ。その中で最も私を感激さしたものは、雜誌「ホトトギス」に發表された「野分」であつた。殊に「野分」の結末の方にある白井道也の演說であつた。私はあの演說の條を讀んだ時は、息が詰るほど昂奮して、眼から涙の滲み出たことを覺えてゐる。

そのうち文學好きの須田が肺病に罹つて死んだ。親しい友の死に依つて、私は偶々先生の作品から遠ざかりがちになつたが、併しそれもあまり長い間ではなかつた。恰度岡山の高等學校に這入つた頃から、私は再び先生の作品に親しむやうになり、それからといふものは、先生の署名さへあれば、何でも彼かでも手當り次第に讀んだ。そして非常に感激した。中にも「漾虛集」を讀んだ時の感激と、「それから」を讀んだ時の感激とは、七八年を經過した今日と雖も、猶ほありありと思ひ浮べることが出來るほど、それほど強く私の心を動かした。

先生の作品を愛敬するの念は、漸次先生の人格を愛敬するの念となつた。そして私は斷えず「猫」の苦沙彌先生を通して、「野分」の道也先生を通して、「虞美人草」の甲野さんを通して、「それから」の代助を通し

て、自分に最も親しい先生の影を空想の裡に描き出してゐた。そこへ例の博士問題なるものが持ち上つた。私は事件の成行をぢつと見戍つてゐたが、先生は到頭最後まで「博士號などは要らん。」と云つて頑張られた。その時私は涙が零れるほど嬉しかつた。現實に於ける先生と、私の空想の裡に描き出されてゐる先生の影とが、痛快なほど同じ方向にのみ動いて行つたからである。

それから私は「門」を讀んだ。「門」を讀んでから引き續いて、「彼岸過迄」を讀んだ。「門」に描かれてゐる宗助夫婦の生活と、「彼岸過迄」に出て來る松本さんの性格とが、またまた私の心を強く打つた。私は先生に逢ひたくなつた。親しく先生に逢つて、眼のあたりに先生の姿を見、口づから先生の言葉が聽きたくなつた。恰度そこに與へられた機會が來た。

大正二年の九月、私は法科大學に入學するために上京した。そして兼ねて相識の間柄なる鈴木三重吉氏の宅に繁々出入してゐる間に、よく鈴木氏の口から先生の消息に就いて聞いてゐた。ところが多分十月の中頃であつたと思ふ。或日用事があつて、鈴木氏と一緒に牛込邊を彷徨いてゐた時、不圖した機會から鈴木氏に連れられて生先の宅を訪ねた。慥か木曜日ではなかつたが、先生は宅に居られた。二人は早速書齋の隣りの應接間に通されて、そこで先生に逢つた。それまで私は雜誌の口繪などで二三度先生の寫眞を見たことはあるが、私が初めて眼のありに見た眞物の先生は、それらの材料から私が恣ひまゝに描き出してゐた想像裡の先生よりも、私にとつては遙に年寄り染みた感じのする人であつた。私は鈴木氏の傍らに坐つて、ぢつと先生と鈴木氏との間に交換される會話を聽いてゐたが、先生の態度は極めてイーヂーで、何物にも抱はるところがないといふ風に、時々微笑を交へながら、いろんなことを自由自在に話してゐられた。

そして私にも時々何か話しかけられたが、平素無遠慮に慣らされてゐる私も、さすがにその時だけはどうも思ふことがすらすらと口に出て來なかつた。先生との對座は約一時間ばかりで、二人はやがて先生のところを辭し去つたが、私は途中で鈴木氏と別れ、獨り本郷の下宿に歸る道すがら、電車の中で、その日初めて逢つた先生に就いての印象を、いろ〳〵と思ひ返して見た。

實際、その時の私にとつて、先生はまだ一面の識もなかつた他人といふよりも、寧ろこれまで私が屢々接してゐたところの、若くは屢々自分の頭の中に、或は理想の影として、或は要求の對象として、常に描かれつゝあつたところの、私の最も親しい、私の最も心安い「伯父さん」に會つたといふやうな氣持がした。そしてこの人にならば、すべてのことを打明けてもいゝ。すべてのことが許される。すべてのことが理解されるといふやうな感じがして、それまで先生に對して私の抱いてゐた愛敬の念は、さらに實感の着色を濃厚にして、何となく懷しい人、何となく慕はしい人といふやうな氣持の裡に移つて行つた。(しかもさういふ氣持は、今度先生が御亡くなりになるまで、始終一貫私の感情を司配して、すこしも渝るところのないものであつた。)

初めて先生に逢つて以來、さらに倍加した私の先生に對する感激は、私をして直ちに無謀ともいふべき企てを思ひ立つに至らしめた。それは先生に獻げるために、先生に對して抱いてゐる私の愛敬の念を披瀝するために、私の裡に漲つてゐる全感激を傾倒して、一篇の「夏目漱石論」を執筆しようといふことであつた。この意圖は直ちに實行となつて現れた。私は本郷追分の下宿屋の二階に立籠つて、まるで戰陣に臨むやうな意氣込で、先づそれまでに發表されてゐる先生の作品の殆んど全部を再讀し、それから愈々本論

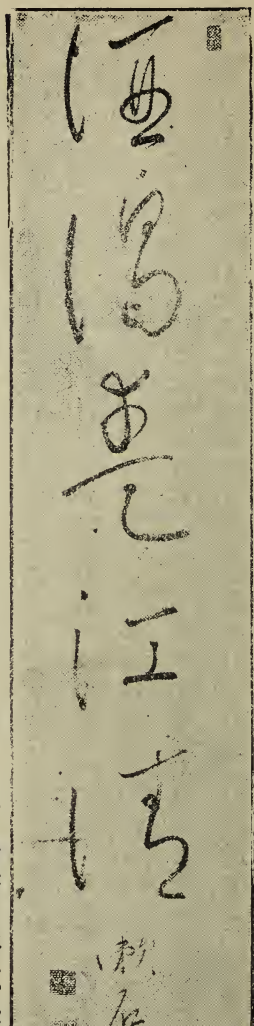
の筆を執つた。併し、頭の充分錬れてゐないのと、表現の技倆がかなり貧寒であるのとのために、私の筆は兎角澁り勝ちで、最後の一句に至るまで、遂に滿足といふ感情を經驗することが出來なかつた。私はそれが遺憾であつた。併し、雜誌の締切期日は切迫し、私の氣力は衰へてゐた。何れの意味に於いても再稿の餘裕は見出せなかつたので、私は半ば絶望的な氣持で筆を擱いた。

出來上つた「夏目漱石論」は、大正三年正月號の「ホトトギス」誌上に揭載された。大阪の自宅に於いて、如何にも麗々しく刷られてゐる自分の文章を見た時、私は何となく控怖ろしいやうな感じがした。併し、强ひてさういふ感じを自分の意識面から拂拭しながら、自ら先生に宛てゝ一書を裁し、「このたび『ホトトギス』に書いた私の『夏目漱石論』は、その實質に於てかなり貧寒なものに相違ないといふことを自覺してゐますが、私自身としては、それでも猶ほ世間の人々を對象として書くといふよりも、寧ろ先生御自身に讀んで頂くために書くといふだけの覺悟はあつたのですから、先生から御覽になると、いろ〳〵眼だるいところもありませうが、さういふ私の氣持に免じて、どうか終りまで御瀏讀を願ひます。」といふやうな意味のことを云つて送つた。折返して先生から返事が來た。その返事の內容は、私が私の近著「藝術上の理想主義」の卷頭に、嘗て序文として揭載したところのものである。

なるほど今から見ると、その時の實感が正直であつたごとく、私の「夏目漱石論」は洵にお粗末至極なものであつた。從つて、ああいふ惡文を臆面もなく發表したかと思ふと、泌々後悔の念が湧いて來ないではないが、併し私には唯一つの慰めがある。それは何であるかといふと、あの六十餘枚の文章が徹頭徹尾「感激」の產物であつて、その中には一字一句と雖も、浮の空や口の先きで云はれた言葉が無いといふこと

である。この慰めに依つて、私はこの文章を敢て自分の文集中にも採擇したわけであつた。

それから以後の三年間といふものは、私が親しく先生の謦咳に接して、心ゆくまで先生に懐しみえたところの三年間である。殊に、この一年半ばかりの間は、木曜日の夜とさへ云へば、雨が降らうが、風が吹かうが、のつぴきならぬ差閊えがないかぎり、必ず早稲田の漱石山房を訪れて、やつと終電車の間に合ふ頃まで、生先を中心に、そこに集つて來る多くの知己先輩と、極めて自由に、極めて我儘に、自分の思ふところを語り合つた。就中、木曜會に於ける先生は、何とも云えぬほど面白い（不適當な語彙ではあるが）人であつた。始終上品な皮肉や快惱を交へながら、例の先生獨特の警抜な比喩と、例の卓越した先生一流の創見とを以て、或は小說を語り、或は繪畫を談じ、毫も倦怠の色を示されなかつた。殊に、そこに集つて來る總ての人に對して、その地位身分の如何に關はらず、すべて平等の親密さと待遇とを與へて、如何なる人の言にも耳を傾け、如何なる話題にも興味を感ぜられた點は、自分等の心から推服したところであつた。さういふわけであるから、漸次先生との馴染が重つて來るに從ひ、かういふ私などは隨分無遠慮なことを云つて先生に肉薄することもあつたが、併し、先生は毫もそれを心にかけるといふことなく、例の調子で輕く受け流しながら、平然として微笑を續けてゐられた。私はその際に



於ける先生の態度を見て、いつも底の知れないほど偉い人だと思つてゐた。

殊に漱石山房に於ける最終の木曜會の晩は（去月十六日のこと）、先生の氣嫌が平生よりもさらに善く、始終にこにこしながら、例の「則天去私」といふことに就いて話された。だから、その次ぎの木曜日に漱石山房を訪れて先生が御病氣といふことを聞いた時にも、別に大したことはないのだらうと獨り決めにして、そのまゝ見舞も云はずに歸つて終つたぐらひであつた。けれども小宮豐隆氏から手紙を貰つて、先生の御病氣が並々ならぬ重患であるといふことを知つた時には、自分は心底から喫驚して、取るものも取り敢えず、直ちに漱石山房に馳け付けたところが、私はそこに深愁に包まれてゐる多くの人々を見出し、さらにさらに驚きを大きくした。——それから以後の事實に就いては、この際私は多くを語るに忍びない。

兎に角、先生は多くの家族と、多くの朋友と、多くの門弟と、さらに先生を敬慕する多くの人々とを遺して、永久にこの世から去つて終はれた。そして先生が非常な自信と意氣込とを以て、新らしい覺悟と信念との上に筆を執られたらしい最後の小說「明暗」は、終に未完小說として、永遠に先生の慘ましい死を記念することになつた。それが先生御自身にとつて、どれだけ心殘りのことであつたか、どれだけ遺憾なことであつたか、私はそれを想像するだに堪えない。併し、私一個の考から云ふと、假令「明暗」が未完のまゝに終つたにしたところで、その藝術的價値は毫も毀損されないばかりでなく、先生の表現せられようとした精神なり信仰なりも、恐らくは、あの裡から充分覗ひ知ることが出來ようと思つてゐる。それが、私にとつてせめてもの慰めである。

先生は死なれた時が恰度五十歲であつた。五十歲と云へば、かのトルストイが人生觀の一變に逢會し、

愈々宗教的生活の第一歩に入るべく、始めてグリーキの原書から聖書を讀み始めた年である。それに想ひ至ると、泌々先生の死の早過ぎたことが思ひ痛まれる。殊に最近の先生は、何處となく元氣に充ちてゐて、もう二三年もすれば、帝國大學で文學概論の講義がして見たいなどと云つてゐられたので、私は一入先生の死を殘念に思ふ。假令トルストイに於けるかごとき長壽を先生に望むことが出來なくても、もう十年ばかりでも生き永らへてゐられたなら、今後先生はどれだけ偉大な仕事を就し遂げられてゐたかも分らないし、またそれに依つて、われわれ人類がどれだけ利益を享けてゐたかも分らない。かういふ意味に於いて、先生の死は、獨りわが國の損失であるばかりでなく、廣く全人類の損失だと思ふ。

この私といふ一個の人間にとつては、親しく先生の謦咳に接して、眼のあたり先生の姿を見、口づから先生の云はれる言葉を聞いたといふことが、素より私の生涯に於ける大事件であつたには相違ないが、先生の死は、先生の死の床に待しえたといふことは、それよりも猶ほ私の生涯に於ける大事件であつた。從つて、私は今後長く先生の偉大なる業績と、先生の偉大なる人格とを追想して、新しく先生に對する感激の念を甦らすであらうとともに、また、親しく先生の死の床を見戍つた瞬間に於ける私の嚴肅なる氣持をも私の生あるかぎり永久に忘却することはあるまいと思ふ。それほど先生のすべては私にとつて偉大なものであつた。

鈴木三重吉氏は、讀賣新聞記者に語つて、先生の死顏が何となく淋しい人であつたといふ氣持がしたと云つてゐる。それに就いて想ひ浮べるのは、今から半年ばかり以前、私が先生に揮毫を願つた時のことである。その時私は特に李白の「古來聖賢皆寂寞」といふ句を選んで、先生にお賴みしたところが、先生は幽か

に微笑して、「君は馬鹿に李白が好きだね。」と云はれたので、私は直下に「はい。さういふ名句を吐くから李白は好きです。」と答へると、先生は唯「呵」と云つたまゝ筆を執られた。その時の先生は、この李白の句を見てどんなことを考へられたか、どんなことを思ひ浮べられたか、それは一切私には分らない。けれども、この私の眼に、藝術家の最後といふよりも、寧ろより多く哲人の最後といふ風に映つた先生の死顔は、また全く同じ理由の下に、鈴木氏の眼には淋しい人として映つたのかも知れないと思ふ。

滿腔の感激の下に、この貧しい追想記の筆を擱く。十二月二十一日午前四時、早稲田夏目邸に於ける先生生前の書齋に於いて、先生の新靈の前に通夜しつゝ。

夏目漱石氏と英文學

戸川秋骨

自分は夏目氏の人格に服して居たものである。氏の小説を愛讀して居たものである。その學識に敬服して居たものである。併し氏の英文學の講義を聽いた事もなければ、また不幸にして英文學に就て氏と語り合つた事もない。從つて表題の如き問題に就て筆を執るのは困難であるし、また心苦しく感ずる處である。恐らくそれには、別に適當な人があらうと思ふ。已むを得ずば、夏目氏の事につき、その英文學に關係があると思はれる點に關した、自分の追憶を語る事にしよう。

夏目氏はWatts-Dunton の Aylwin を疾くに吾が讀書社界に紹介して居られるさうである。其は氏の洋行中か、それとも其前の事であらうか、エイルヰン物語の出版が一八九八年の事であるから、孰れにてしも氏の紹介は此時日を甚しく隔つて居た事ではないらしい。自分はそれを一讀したいとかねて思つて居たのであるが、遂にまだその意を果さずに居る。あの神秘的なロオマンチックな而も近代的な作に對して、氏は怎う考へて居られたか、その感想を知るのは少なからぬ興味のある事と思ふのである。全體夏目氏の小説は非常に理性の勝つたものであるが、一方には中々ロオマンテイックな趣にも富んで居る。人事に對して深い洞察力解剖力のあると共に、その想像力が強烈に働いて居るのは何人も認める處であらう。この想像力が或る一方に馳せた場合、それが甚しくロオマンテイックな作を生む事になるのである。氏の初期の作にこれが多くあつて、「草枕」などがその一例になる。自分は何といふ理由なしに、この「草枕」とエイルヰンとを聯想せざるを得ない。兩者の間は全然何等の關係もないが、只何となしに幽玄な趣が共通して居るやうな氣もする。「草枕」の中の女とエイルヰンの中のヰンニイとが、全く別人であるに拘はらず、また其四圍の空氣が全く別種の者であるに拘らず、二人並んで眼に映ずるのを禁じ得ない。恐らくこれは單に新らしいロオマンテイックな趣に於て、一途に出るやうな點があるので、さう感じられるのでもあらうか、自分には理屈は一向に解らぬが、そんな事から氏のエイルヰンの紹介を一讀して見たいと思つて居るのである。

全體某の作家は、西洋の某作家に似て居るなどと云つて比較をする事は、極めて幼稚な話で、又そんな事を以て批評に代へるのは、頗る危險な事でもある、尤も日本には西洋の某々作家からヒントを得て創作を出す人もある、さうすると批評家と稱する人が、その作家を捕へて、直ちにこれをその原著者たる某國の某

作家に比すべきものだなどゝ斷定する、すると文壇の有象無象もなるほど左樣かと感心してしまうといふ事がある。甚だ罪のない話であるが滑稽ではある。夏目氏の場合にも、世間の人が、氏の作はイギリスの作家某某の作に似て居ると云つた事もあつたが、要するにそんな事は單に座興としてならば格別、眞面目で言ふべき事ではあるまい。今自分が夏目氏の作とエイルヰンとを聯想したと云つたからとて、それで直ちに兩者の間に類似があると云つたわけではないのであるから、その辨明のためにこれ丈の事を言つて置く次第である。

自分が夏目氏の議論に始めて接したのは、寧ろ氏の名に始めて接したのは、哲學雜誌上であつた。そしてその議論は實に英文學に關係のあるものであつた。則ち「英國詩人の天地山川に對する觀念」といふ一文であつた。題名は或は多少相違して居るかも知れぬが、題意はそんなものであつた。自分はこの一篇の論文に依り、始めて夏目氏の名を知つたのみならず、少なからずその文字と趣意とに敬服してしまつて、その時始めて英文學といふものに就ての明確な觀念を得たやうに思つた。この論題の天地山川とは素よと自然の事で、これはイギリス詩人の自然に對する觀念が變遷して居る事を論じたものである。その內に論じてある處を、今記憶を辿つて言つて見ると、十八世紀のイギリスの文人は人爲を主として居た、換言すれば技巧を第一とし、自然を第二位に置き、後者が前者に服從するやうに說いて居たのであるが、それが進んで十九世紀に入ると、劈頭から詩人が先づ自然の懷に投じ、自然を主位に置き、人爲をそれに服從さしたといふのである。これは或は自分の記憶が間違つて居て、論旨に於て多少違つた處があるかも知れぬが、何にせよたしか哲學雜誌三四回に亙つて頗るサッゼシイヴな議論であつたので、少くとも自分は以上の如くにそ

れを記憶して居るのである。

これは英文學には關係のない事かも知れぬが、この哲學雜誌の論文に次で、氏の筆に接したのは、ホトヽギス紙上に出た氏の「倫敦通信」なるものであつた。自分はこの通信からも少なからぬ影響を受けたと信じて居る。少くとも上記の論文並にこの通信に依り、自分は自分の有つて居る或るものを引き出して貰つたやうに感じて居る。そして特にこの通信は後に評判になつた「猫」の基調になつて居るのではあるまいかとも思ふ。

「文學評論」は誰も知つて居る通り、十八世紀の英文學を說いたもので、大學での講義であるさうだ。がこれに就てはその公刊當時自分は新聞紙上で卑見をのべた事があつた。その時自分は何と言つたか精しい事は今覺えて居ないが、その內には十八世紀のイギリスの社會がよく叙述されて居た事は、なほ記憶に止つて居る事の一である、自分はよくは知らないが、これに就にはLeslie Stephenの十八世紀に關した研究なども隨分參考になつた事であらうが、怎うもその內には夏目氏獨特の研究と言はうか觀察と言はうか、自分の少い智識から見ると、西洋の本には見當らないやうな點が多々あると思はれた。レエノオヅの繪畫などからの觀察は、西洋では普通に言ふ處かも知れぬが、自分に目新らしいものであつた。さらに自分の最も面白いと思つたのは、ポオプを論ずる場合、バイロンのこの絢爛な詩人に私淑して居た事から說き立てヽ、ポオプの必らずしも四六駢驪的技巧の詩人でなかつた事を斷じ、スキフトのガリヴア巡島記に、これも新說ではないかも知れぬけれども、變つた觀察を下した處は非常に面白く、且つ自分に利益する處頗る多かつた。その上或る意味に於ては吾々に緣の遠い、そして格別面白くもない十八世紀の散文を著者が澤

山に讀んで居られたには驚嘆した。たとへばデフォーの如き作家のあまり重んずべきでない事を斷言する迄には、この作家の浩瀚な作家を、可なり澤山に讀破して居られるのであつた。これ等の點に就ては、多少記憶の上の間違があるとするも、大體自分が以上の如き感銘を受けた事丈けは確かである。

この文學評論の出た當時、自分は早稻田大學で、英文學史のやうなもの——やうなものとは曖昧な言ひ方であるが、事實は西洋人の手になつた文學史を讀む位な事に過ぎなかつたのである——を講じて居たがその時試驗をして見た處、その澤山の答案の內には、この文學評論に書いてある事を丸呑みにしたのも少なからずあり、少くともこれを讀んで答案を書いたといふのに至つては隨分多數を占めて居た。

さて自分の平素考へて居る處に依ると、イギリスの文學は政治の文學である。治國平天下の文學である然るに夏目氏の文學は大分それとは異つたものである。イギリスの小說家は大抵社會といふものを眼中に置いて居る、風敎といふものを眼中に置いて居る。然るに夏目氏の小說には、關接に讀者がさういふものを摑み出すなら格別、著者自からが意識して、さうした考を作中に香はせたといふ事は自づないと云つても良い。果してさうであるとすれば、夏目氏の小說なりまたその思想なりは、イギリスの文學とは沒交涉であると云つても可いであらうか。蓋しこれは直ちにさう論斷する事は出來ない事であらうと思ふ。何となれば政治とか風敎とかの問題は、小說を論ずる場合の一問題に過ぎぬからである。自分の考へる處に依ると、イギリスの文學はまた一方から言へば意志の文學である。そして夏目氏の作にも、一方に理智の精透があると共に、一方には少なからず意志の力が働きを爲して居る。これが先づイギリスの文學と夏目氏の文學と共通する處で、夏目氏本來の面目が、英文學のためによく開發せしめられたとも言へると自分は

考へて居る。漢學流の四角四面な端正な態度は、思想の上でも行爲の上でも、大ひにイギリスの紳士風と似て居る處がある。この點が夏目氏の性格隨つてその作物と、イギリス氣質隨つてその文學との、相ひ通ずる一點ではあるまいか。

なほ可笑味を以てイギリスの文學と夏目氏の作物との關係をつける人も隨分にあるやうである。蓋し可笑味は德川期以來江戸文學の一特徵であり、また實に江戸育ちのものゝ特質の一であるから、東京人たる夏目氏にその片影の見えるのは當然である。またイギリス文學にも可笑味は隨時隨所に散見するが、元來可笑味はイギリス獨特のものであらうか。自分はつひ深くも考へて居なかつたが、あの莊重なイギリス人は由來特に滑稽味に富んで居るのであらうか。なるほどディケンスにもサッカレにも滑稽はある。ラムにもそれとは異つた實に精妙な可笑味はある。十八世紀にもあれば、十九世紀にも、二十世紀にもある。自分はイギリス文學にこの趣を認めるに人後に落ちぬつもりであるが、只それはイギリス文學に限つたものであらうか、その點はやゝ疑問である。大陸の文學にはこの趣味はないのであらうか。或はイギリスにあるほどのその趣味は大陸にも認められはしまいか。たとへばケルト民族の有つて居る可笑味はフランスにもありはしないか。全體文學の十分に發達して居る國ならば、その內に可笑味の文學のあるのは當然で、何もイギリス文學にそれが多いとは限るまいと自分は思ふのである。たゞ自分は大陸文學に就ては不知案內であるから何とも言へないが、隨分其內にも可笑味の文學はありさうに見える。

夏目氏はイギリス文學のみでなく、人に吹聽し廣告こそしなかつたが、大陸の文學に就ても隨分智識をもつて居られた。否恐らく世間の吹聽者以上の智識をもつて居られたらしい。從つて氏の有つて居る可笑

味が必らずしも英文學から來たと斷定するのは、それこそ少し可笑しいと思ふ。少くとも氏の可笑味の如何なる種類のものであるかを極めた上でなければ、そんな斷定は出來ぬと思ふ。要は可笑味の性質如何に歸着する。或は氏の可笑味は江戸式の餘裕から來て、それに氏一流の哲學若くは一種の俳諧味若くは禪味のやうなものが加はつたのかも知れぬ。

併し左樣の事は如何でも良い事ではないかと自分は考へる。只夏目氏と英文學とどう關係があるかと問はれゝば、自分は恁う答へる。今日日本に於て夏目氏ほど英文學に精通し、夏目氏ほど正確にこれを了解して居た人はなかつた、從つてその英文學を研究する社會に於ける勢力は、隱約の間に多大なものであつた。そして自分も少なからずその感化を受けたものであつた。從つて又氏の逝去は特に吾が斯學界に取つて多大な損失であつたと、先づ確かに恁う言ひ得ると思ふ。

夏目氏と英文學との關係交涉といふやうな事を說くのは、始めに言つた通り自分の甚だ困る事である、それでこゝには單に自分の感想と追想とを記すに止めて置く。

夏目先生と春陽堂と新小說其他

本多嘯月

▲大文豪の長逝

明治から大正の文壇に跨つての、一代の文豪夏目漱石先生は、痼疾の胃潰瘍のため、十二月九日遂に長逝せられた。今日以後東京朝日の紙上でも、先生の雄編大作に接することも出來ず、早稻田の御宅に伺つてもあの溫顏に對し、また口を衝いて發するあの警句をもお聽きすることは出來なくなつた。實に先生の長逝は、現文壇の珍重すべき尺璧の壞れたもので、而してまた帝國思想界に於ける大なる損失である。惜しみても惜しむべき事の限りである。

私も先生と同じ胃潰瘍で、今年の五月から病床に倒れて、今も尙床から離れることが出來ない。私は九日の讀賣新聞の文藝消息欄で、先生の御病氣の大きに快よくなられたことを見て蔭ながら喜んで居たのが昨日の今朝同じ新聞を一番先きに手に取つて、「書齋に於ける漱石先生」といふ寫眞を見て、ハテナと其下の欄へ眼をやると「漱石氏逝く」といふ一號の標題で愕然とした。

私は、先生と同じ病症に倒れて、九月頃には危篤をさへ宣告されたのが、薄紙を剝すやうに、どうやら

からやら日一日と快くなつて來る、そして同じ病床に倒れながらも、今朝の新聞で却つて先生の長逝を知つたのは、——死といふものが代り得らるゝものならば、——寧ろ先生と代つても何んでもないと思つた。

枕を擧げると、雨は蕭々と降つて居る。それに雪さへ時々加はる。硝子越しに、庭を隔て、生垣を隔て小川を隔て、反圃越しに、南、千駄木の丘を見ると、先生の舊居が想像される。今頃は先生の屍體は親戚故舊門下の方々に守られて大學へ運ばれて解剖に附せられてあられるか、新聞では午後一時に第一醫院で解剖されると報じて居る。先生の御遺言か親戚方の特旨か、學界の爲めにかうした事に御相談がなつたのであらうが、其某博士の執られる解剖刀の刃先が、先生の患部の局所に觸れる時、先生は如何に冷さを感ぜらるゝか、などとまだ先生の生きて居らるゝやうにも感ぜられて、窓を撲つ蕭々たる雨の音、そゞろに寒き激變の今日の氣候は、泌々とした冬を味はせるので、我知らず襟を霑はされる。

▲初お目見得と「草枕」

私が先生の眷顧をいたゞいてから、早いもので、もう足掛で十二年になる。今から十二年前の夏、たしか七月であつつたと思ふ。はじめて先生の本郷千駄木の邸（今の高等學校の齋藤阿具君の住邸）に伺候した。それは先生に當時の日露戰役の結果が日本の文壇に及ぼす影響に就て、雜誌『新小說』の爲に先生の御意見を伺ひに出たのである。丁度疊換をして居られた日で、先生は彼方此方と書齋から座敷と疊屋に追はれながら、それでも二時間ばかりも高見を洩らして下された。私は其頃動坂町に居て春陽堂へ通勤して居たので、動坂から大觀音のところへ出て、先生のお宅の前から高等學校の側を本郷三丁目へいつて電車

に乘るので、往返共に先生のお宅の前は屹度通る。で、一度お伺ひしたそれからは屢次お邪魔するのであるが、先生は決して五月蠅といつたやうなお顏もなさらず、いつも心持ちよく會つて下すつて、種々利益になる話を聞かせて下すつた。其内私は、『新小說』編輯といふ傍に春陽堂の外交部を主任することゝなつて、出版上の件に關して各著者の許にお伺することになつた。で、先生の『我輩は猫である』の第一編が大倉書店から出た當時、何か先生の新しい著作をいたゞきたいと、それは〳〵五月蠅ほどお願ひした。寧ろ强要したのであつたが、容易に承諾して下さらなかつたのが、漸く『新小說』に小說を一つ書かうといふ事になつて、その代り、さう毎日せがみに來ては不可ない、今日一週間後に來い、七日間の間に書いて遣る。といはれたので、うれし喜んで其日は歸つたが、どうも其七日間が待ち遠くて堪らなかつた。七日經つと其翌朝店への出がけにお伺ひすると、もうちやんと出來て居た、而も其原稿は實に奇麗な立派なもので、それで先生は殆んど書き流しだから校正は見せてくれ、といはれるのであつた。委細畏まり奉つて店へ持て來て頁數を改めると、十行二十字詰二百何枚、二百何枚が一週間、一日を待せないで書き上げられた健筆は敬服の外はない。これが「草枕」の一篇で、時の文壇は擧つて先生の手腕に嘆服し、其頃精勁俊辣の批評家を以て目せられた竹風登張君は二六新聞(今の世界新聞)の評論壇に於て「夏目漱石論」を草して、殆んど其全一面を盡して、この「草枕」を尤も意義ある明治文壇の一大傑作、最大雄篇なりと激稱された。されば斯篇登載の『新小說』は發行當日に於て其全部を賣り盡して、遂に追かけの注文を全部謝絕したのであつた

▲西片町時代

その後、『新小説』へ再度のお作をお願ひした傍、單行本の出版をお迫りしてこれも其の乞ひを容れられた。それが、「坊ちやん」、「草枕」、「二百十日」等を合巻した、『鶉籠』であつた。其間に先生の文名は愈々文壇に嘖々たる有様で、當時の萎微した文壇は先生に由て復活した觀があつた。先生が朝日新聞社の聘に應じて高等學校及帝大文科の教職を辭され、專ら同紙文藝欄の爲めに盡されるやうになつたのは此頃からである。この朝日へ入社の初めに連載された小説は、尤も世間一般から歡迎された「虞美人草」で、先生のお作としては、大に一般世間から受けたものであつた。これも單行本として春陽堂から發行するお許しを得た。さうかうするうち、先生はお宅を西片町十番地（本郷）阿部邸のならびの新阪上へ引き移られたが、こゝも御都合で二三ヶ月で他へ變らうといふやうなことで、「何處かないかね。」などとおたづねで、自分の住む動坂の附近で、田端一帶を眺望する松源の持家（松源とは元上野三橋際に在り大割烹舖として時めきしが、今は田端附近に逼塞せり）がある。間數も十室ほどあつて普請も却々に凝つて、其門の如きも曾て松源が三橋に在つて時めいた頃、丁度今の活動寫眞館の在つた邊に建つて居て、門扉の彫刻なども頗る寂び人の注意を惹いた門であつたと思ふ。これなら宜からうとお勸めして、先生も見る氣になられて出掛られたところ其前日他へ約定が出來て了つた後であつた。それから現在の早稻田南町のお邸へ引移られた。ちやうどこの移轉のお話しのあつた頃であつた、私がお伺ひした數日前、金尾文淵堂君がお伺ひして、居宅のお話になつて、金尾君が先生の爲にお家を建てゝ獻上しようといつたさうで、私がお伺ひすると、先生は「二三日前に金尾君が來て、其時僕のために家を建てゝやらうといつたが、まアそれにも及ばないと斷はつたよ。どうだい春陽堂には其勇氣はないかねえ。」と呵々として大笑された。

▲先生の著書

其後先生の大作を春陽堂で發行したものは、「草合」、「三四郎」、「門」、「それから」、「彼岸過ぎまで」、「四篇」(永日小品、文鳥、滿韓ところ〴〵、夢十夜)、「切拔帖より」、「思ひ出す事など」及び「文學評論」等で、こゝ一二年前までは、春陽堂は全く先生の單行本の出版書肆で、先生のお作が單行本として出る時は必ず春陽堂であると世間からさう思はれて、春陽堂の發行物の權威の一つとなつて居た。

▲著書裝幀上の趣味

先生がその著書の裝幀の上に付ては、最初は餘り苦心を爲れなかつたが、漸々とその趣味が加はつて來られたやうで、私がお扱ひした最初の「鶉籠」は表紙はたゞ青磁色を出すやうにとの命令で、橋口五葉君が引受けられた。爾來すべて橋口さんと先生との御相談で出來たのだが、「草合」の時などは、漆をつかつて見やうといふ橋口さんの發案で、表紙の刷りの乾かなかつたのには刷師が殆んど閉口したことがある。「文學評論」の出版の時は、扉に先生所藏の漱石山房の印を捺されるといふので、文學評論の文學も印刻して刷出すことになり、その文字と印刻を誰人におたのみしようといふことで、先生のいはれるには、漱石山房の印を彫つた人がよからう、これは營業にするのではないから、先方が承諾するか、否かは分らない何しろ好意で持つて來てくれた人だからといふので、兎に角其人をおたづねしておたのみしようと、私が赤坂仲ノ町に大舘といふその老人を尋ねると、この人のいはれるには、春陽堂といへば商賣人だ、その商

賣人がたのみなら、そのやうにした禮を貰ひたい、そして何日までといふことは請合へない心持ちの宜い時に彫つてやらうといふ御挨拶で、馬鹿に器計を惡くして引下がつた。が、さてそれでは誰にしやうといふので、遂々故濱村藏六君のところに私が持ち込んで納つた。『草合』の中の「鑛夫」は、先生自身は太く嫌つて居られ世間でもあまり受けなかつたが、それは鑛山內の狀景が連續して場面の變化がないために新聞小說としては色彩が寂しいからであつたらう。然し鑛山內の寫生の筆は生動して石も黠く想がある。これと合卷になつて居る「野分」、あれの扉繪の起つて居るフロック姿の紳士がシルクハットを手にぶら下げて居るのを太く氣にして居られて、どうもシルクハットをぶら下げて持つて居るのは閉口だと言つて居られた。この『草合』は全體に先生の氣に入らない樣子であつた。それからは挿畫は決して入れない事となつた。近頃先生の縮刷物の裝幀は津田靑楓君の手に成つて居るが、新刊の方は先生自身の考案に成るやうである。それで其表紙の色の選擇といひ、繪模樣なり、標題の字の配置なりのすべては禪味と俳味と支那式と英國式とをコンデンスしたやうなところに、先生の趣味の一端が仄見えるやうである。

▲裸體と裸體

私は先生の人格や、藝術觀や、人生觀やに付て、玆に何事をも書く資格はない、またさういふ事に付ては何等言ふべき智識も持たない。私は過去十二年間、先生に接近して申上げたり、伺つたりした「浮世話」の一端を始めもなく終りもなく、玆に双べて見やうと思ふ。而しそれでも先生のある面影はどこかに偲ばれようとおもふのである。

先生が東京朝日新聞に入社されて間もなくである。それまで大阪朝日記者として東京に駐在して閑散の地位にあつた長谷川二葉亭君が東京朝日新聞にも其筆を執ることゝなつた。そこで世間では何か兩氏の上に文藝上の競爭でも起るかのやうに噂して刮目したが、兩者の間にはそれらの考へは微塵もなく、從つて朋黨爭の如きものは天からあるべき理由もない。私は二葉亭君にも十有餘年の知遇を得て、且は同君の內裏にまで親昵した横山天涯君や黑川文淵君などとも二十年來の知友であつたゝめ心置きなく出入してお話もして居たが、そんな氣は些もないのと、夏目先生にも世間ではこんな噂がありますがなど申上げても、「勝手に見るやうに見せておくさ……昨日も長谷川君と風呂屋で會つたよ、兩方とも裸體だらう、そこで兩方で前をおさへて、ヤッ今日は、といふ始末だ、なんでも裸體が天眞爛漫でいゝね。」などと諧謔なことを言つて居られた。で、此間何等一點の邪氣は見えぬ、眞に天眞爛漫の眞つ裸體の樣子があり〳〵と見られた。此時は先生も二葉亭君と共に西片町に住まはれて居た時である。(當時東朝紙上には先生の小說の下の方の欄に古峽生の名で露西亞物の飜譯が載つて居てこれがなか〳〵評判がよかつた、で世間ではこれを二葉君の筆であるかと思つやうな人も多少あつたやうだが、これは中村古峽君の筆で、二葉亭君は『其の面影』の聯想に苦心中であつたのである。)

先生が、胃潰瘍の病みはじめの伊豆修禪寺で、其危篤を傳へられた時であつた。東朝主筆の池邊君が見舞金を持て行かれて慰藉されたのに對して、篤く其厚情を謝して、そして其東朝の見舞金を受けられなかつたといふことは、大分世間でも知つて居ることで、また先生の博士問題も、世間では一時評判の問題になつた。また西園寺首相の文士招待會にも出席を謝絕して「ほとゝぎす厠なかばに出かねたり。」といふ俳

句を咏んでおくられたことに付ても、世間は何か先生を人氣取りの政策を弄する人のやうに評判したが、私は先生は決してさうした意味でされたのでない、どこまでも、前の裸躰の話で天眞爛漫、自分の思つたことを思ひ通りに遂行されたに過ぎないのだとおもふ。

▲先生の幼時

私は些か三重縣地方に緣故があるので屢次伊勢に旅行する。そして四日市の某旅館に馴染になつて居るが、其旅館の妻君は二度添ひで五六年前に桑名から來た人である。此人の口から能く夏目先生の話が出るそして此人が先生は確か代地かとおもふ、何でも柳橋附近へ幼い時養子に行かれた方だといふ。私は此話を持て、先生にお目にかゝつた時、これこれの女で、先生を能く知つて居りまして、先生は少い時淺草の代地附近でお育ちになつたといふことでありますが、とお聞きした。すると先生は、さう自分は何でも少い時に代地附近の或る家へ里子にでもやられたのだらう。然るに其先方の家が零落でもしたものか、何でも其附近へ夜店を出すやうになつた。自分は其の夜店の側の籠か何かに入れられて泣いて居る、自分の實姉が心配しては牛込から來て、その有樣を見かね、終に自分を伴れて歸つて呉れたと聞いて居る、併し其の四日市の女といふのがどうしてそれを知つて居るのか、自分にはそんな女は一向におもひ出せないし、また此の頃其の遣られて居た代地の家といふのを探して見たが茲處らかといふ考へもつかない、といはれた。この話を申し上げてから、先生は何か小品（「思ひ出す事など」）の中にこの時分の事を書かれたと記憶する。

▲先生と北海道

或る時、私は三重縣の人物史傳を書くことを或る人からたのまれて、何となく紳士錄に目を通すと、夏目金之助といふ名を其紳士錄に探り當てた。不圖見ると北海道に籍を置いて居られる。私は江戸ッ子とばかり信じ切つて居た先生が北海道はをかしいとおもつて、先生へお伺ひした時におたづねした。すると先生は、「君は能く僕の身許をいろ〳〵と探つてくるね、仰せの通り北海道だ。それには些細があるので、北海道といふ處も知らない僕が北海道に籍があるなどは不思議だが、それは昔氣質の僕の親が丁度徵兵令の更つた時分に養子にやつたのださうだ。併しつまらぬ話は出來ないもので、これに付てつひ此間をかしな話がある。自家の娘が女學校に行くが、それが學校で先生の話に、日本國民の男子はすべて兵役の義務がある、然るに世間では兵役に服する事をどうかすると嫌ふ者がある。不心得な事で、皆さんも大きくなつて家庭の主婦となられたら皆さんのお子にかやうな不心得の男の子のないやうにせねばならぬ、それは主婦たるべき皆さんがさうした心がけを、今から平常に養つて置かなければならぬ。といふやうな意味の教訓をしたすると小兒は無邪氣なもので、いつか北海道か何かの話から、自分の昔を話したことでもあつて、それを聞き噛つてでも居たものか、娘は教師に向つて、妾のお父さんは徵兵除けに昔北海道に養子に往つたさうです、これは甚だ不心得で國民の義務に反しますね、とやつた。教師もこの質問には困られたと見えて、それは人に由るので、貴娘のお父さんは例令兵隊に出ないでも、文學といふ立派な事業を有つて國家に貢獻して居られるからそれでよろしい、立派に國民の義務を其方面で盡して居られる。すべて或る事

業を以て國家のために盡して居られる方は、國民の義務に背いては居られないのです、といはれたさうだ、こんなことがある。君などは小兒がないからいゝが、小兒には滅多なことは聞かされないよ。と笑ひ話をされた。

▲悲慘なる猫

私がお伺ひして能く世間話の次でに話題に上るのは、講談や落語、芝居などの話である。そしてそれらの噂について種々な質問が出るが、またさうした場所にあまり往かれたことのないやうに思つて居る先生にしては、甚だ精通した事を却て先生から聽かされる。「僕は先日ある會の餘興に寶井馬琴といふ人の講談を聞いたよ、あの男は一體何歳位になるのだらう、僕等の若い時分には寶井琴凌といつた男だが、あの時分から、頭があんなに禿て綺麗に光つてゐたのは同一だ、それにあの男の知識も藝術も、あの時代から一向に進んで居ない、時々變な乃公がなどといふ言葉を使つて客に對するところなどは二十年一日に下品な男だ。」などゝ評をされる。「本郷の岩本といふ日蔭町の寄席で松林伯知が僕の「我輩は猫である」を講談にして居るさうだ、一度聽きに往かうかと思ふが、まア往かない方が花だらう、とおもつて止めた。……此間この近所の寄席に柳家小せんといふ落語家の獨演會があつた、あの男は病氣なんださうだね、それであして高座に上つて三時間でも四時間でも獨りで話をするのは大事業だ……兎に角一大事業だ。併し落語は餘り旨くないね。現今の落語家で小せんを聽かなければ全く落語を聽かない人だと、誘つた人が大層な觸れ込みで伴れて往かれたのだが、どう考へても旨くない、其皮肉も其警句も其輕口も、どうも氣障だ。

それにあの身體であの大事業を遂行するのが、如何にも悲慘だ。自分はやはり圓喬や圓右を聽て居る方が心持ちがいゝ……。」といふお話しから私が「悲慘といへば、何とかいふ〇一の俄師でワキに据る男が俄か茶番の落ちに頭を仕手に打れて赤い手拭を逆に冠つて、我輩は猫である、といふ下げをするのがありますが、あれでは猫が悲慘ではございませんか。」と、申上げて笑つたこともある。芝居の事に付ては先生の小兒時代に牛込あたりから猿若町まで行くことの大變で非常な手數のかゝつた事や、其頃の俳優の噂などもあつたが、これは確か後に先生の物の本の中に出たとおもふから省略するが、先生の書かれたものゝうちで『虞美人草』を松居松葉君が脚色して舞臺にかけたいといふことを先生に御相談されたことがあつたさうだが、先生はこれを謝絶された。私しは先生のお心持ちは兎に角何だか殘り惜しいやうな心地がした。

▲序文のおことはり

先生が藝術に對する嚴正な態度は、今更ら申すまでもないが、或る人が繪畫の批評を書いた本で、それを先生の許に持ち込んで、先生の序文を乞はふとしたが、先生はこれを一讀されて後、まだいそがしいので讀んで居ないと言つて、奈何しても序文を書かれない。私は其人からたのまれて先生に伺つて願つて見たが先生はどうしても肯かれなかつた。そして先生の言はれるのには、藝術の批評はあゝした紅燈綠酒の間に出來るものではない、あれは藝妓でも批評するつもりで居られるのであらう。自分にはあゝした本に序文は書けない。批評は批評、遊ぶとこは遊ぶとこと其立ち場が定つて居なくては迷惑だ。尤も東洋では置酒豪興の間に昔の人の多くは行つたやうにも思ふが、僕はどうもそれは出來ない。全體あの人は東洋流

の豪傑の風采を帶びて居るよ。まア僕だけは序文は御免を蒙りたいと言傳てくれ。といふことで、共の人にはお氣の毒であつたが、よろしく私からおことはりの言傳をした。

▲猪苗代湖畔の大地主

後藤宙外君が『新小說』の編輯主任の頃、さやう今から八年ばかり前であつた。同君の假寓地たる猪苗代湖畔の地所を大擧合同して文士村にしやうといふ計畫で、後藤君の言ふには坪一錢五厘で引き受けようといふことで、泉鏡花、柳川春葉、其他稻門の文士連もまじり、春陽堂主人も一部乘らうといひ、鰭崎英朋、高崎春月、また私も加はつて、それに宙外君から依囑を受けて私が是非先生にも合同を願ふといふ使節に立つたところ、先生は坪一錢五厘は廉い、これは煙草を買ふより廉い、敷島三本を煙にすれば、猪苗代湖畔に一坪の地主となる、眞實かい、よし眞實なら三町か五町一番眺望の宜いとこを約束しよう、と笑ひ話にお話がまとまつた。春陽堂からは小林管理が實地踏査といふので出かけて行く、宙外君は必ず一錢五厘で取引が出來るかといふことを念を推にし行くといふので、この一連は猪苗代に出發する。鏡花君の如きは一坪でも地主といへば大したものだ、下へ堀れば其深さに於て方圖が知れない、それが何町歩と一躍しての大地主だと、例の諧謔を弄して居たが、數日して春陽堂の小林管理が歸つて來て、イヤ一錢五厘でも一錢でも大變なところですと、寒いのとさみしいのとで呆々の態で、漸く會津の東山で命だけ助つたといふ報告、これで少々落膽したところへ今度は宙外君から、今回翁島へ有栖川家の別邸が出來るといふことで、地の持主に慾が出て如何なる場所でも湖畔の地所は一體に値上げになつて、もう一坪何十錢といふ

ことになつたとのことで、遂に一同が岩代の大地主たることは出來ずじまひになつた。それからは私が先生の許へ伺ふといつも、「君、猪苗代の地面はどうなつたのだい。」とからかはれて、「新聞だか雜誌だかで、僕が非常に金が出來て、何處かへ大きな地面を買つたといふことを書いたさうだ、定めて猪苗代の地面の事を聞き間違へたのだらうけれど、僕は君のお蔭で非常に世間から金持のやうに思はれて、信用が出來たよ。」との皮肉で、恐れ入つて引き下がつた。

▲先生の食味識

先生の食味に付ての嗜好はどんな物か、私は其日常平素の事を知らないからこれに付て何事をも申す資格はないが、料理屋の事や、酒の事などについては、能く先生から質問がある。然し見聞の狹い私などに滿足のお答へが出來る譯のものではない。けれども先生は斯うした事までも能く氣を注めて聽くことを好まれた。野人の言を棄てられないで記憶に存して居られて、どうかした拍子にまた同じ事を訊かれて其時に、「デモ君は先日は斯ういつたぢやないか。」などと詰られるので、先生の前では餘程考へてお話しないとやり損ふことが屢次ある。で、能く昔しの古いお留守居茶屋の事などからお話がはじまつて、深川の平清は今はどうなつて居るかとか、近頃の深川ではどんな家がいゝのかとか、龜戸の橋本の料理は此頃はどうだらうとか、「近い内に友人が山谷の八百善で會をする、會費は七圓宛ださうだ、自分も當日は出かけるのだが、あの家はどんな家で、此頃も古風な慣例を守つて居るか。」などと訊かれる。私はこれらについて知つて居るだけはお答へをしたが、酒は上らないと言はれる先生で、これに對しても却々の通をいはれる、

そして廣く其醸造地の狀況なども知つて居られるには敬服する。

▲生活狀態と文士

また先生は、世間の生活狀態などに付てお話をなすつたが、それが却々些細に觀察されて、毎日外出をして歩く我々などの知らぬ事までもなか〳〵綿密に能く知つて居られた。それであるから一ト船の單行本を出す費用なども、私共の違算を却て先生から屢次注意されることがあつた。また文士間の一般生活などにも能く留意されて居て、あれこれと御門下の方にでも話で聞いて居られたことのないやうな思ひの外のお話まで爲れることがある。『草合』發行の時から春陽堂との印稅が更定されたが、其時に他の二三の作家の單行本の買收額などに付てもお話があり、深く現代文士と一般書肆といふもの〻間、世間の文士に對する待遇等に感慨が深かつたやうだ。そして先生の頭には一般の本屋といふものは、餘りに算勘にあだじけないといふお考へが一杯で、劇くこれを不快におもはれて居られたやうだ。

▲先生の綿密なる注意

先生はあゝした方であられたから、此頃のやうに頻々と出る多くの雜誌の隅から隅まで眼を通して居られるやうなことはなからうと思ふと、想像とは全く反對で、私どもに時々斯ういふ若い作家があるが知つて居るか、この間かういふ講談を何雜誌で見たがあれはもとどういふものから奪胎したものであらうなどゝいふお話があるので、つひ忙しいので眼を通して居ない時は、自分の不注意に愧ぢ入ることが往々ある。

當時賣出しの作家たる長田君兄弟（秀雄、幹彦）や、吉井勇君や、久保田万太郎君や、田村とし子君やに付ても四五年前から斷片的ではあるがその批評を時折拜讀したことであつた。

先生が大阪朝日の叡山講演から歸られた時であつたか、たしか四十一二年頃の事であつたと思ふが、其時のお話に、もう東京も十年とはいはない、もつと近い時間でだゞ政治區として存在し商業の中心は大阪神戸に移るであらう。更に二十年も經る歳月の間には、それより西に移動するであらう、といはれたが、今日の狀態から見ると全く其現象がある。これも、先生の觀察の綿密である一端を證する。

▲譯の分つた先生

大倉書店から先生の『文學論』の出たとき、その校正に少からぬ誤謬があつたので、先生と印刷所たる秀英舍との間に議論があつて以來、先生の物といふと、一時は印刷場でも恐縮して、一般本屋の番頭さんなども、太く先生を怖い物扱ひにした。それでも先生の物は頂戴したいといふので、此所痛し痒しの體態であつた。また先生を訪問する新聞や雜誌の記者の方々、文士の方などでも中には往々先生を理屈張つた窮屈な頑固な憍慢な方のやうに誤解して居られた人があつたやうだが、私は先生は決してさうした方ではなく、極めてお話の仕易い同情のある譯の解つた、禮儀の正しい方だと思ふ。私は先生の許にお伺ひすると、いつも二時間三時間と長座する、お忙しいと思つても、それでも遂ひお話に實が入つてお暇することが出來ない。先生もいつも溫顏で心持ちよく種々のお話を聞かして下さる。そして先生と差向に在る間は私の心持ちは春風駘蕩の感がある。私は先生の德にいつもいつも敬服した。それで歸りにも鄭寧に玄關ま

で送つて下さる、そして自から格子の栓差の釘を抜いて格子戸を開けて下さる、私は斯様なことにまで先生のお手を煩はすのを恐縮して、それでいつも歸りにはチョコ〳〵走りに先生より前へ立つて玄關に出て格子戸の栓差しの釘を抜いて先生にお手渡しゝて御挨拶をすると、先生は「また來たまい。」とおつしやつて釘を差して會釋される。尤もこの釘の栓差はいつの年の暮であつたかに、畫鳶が先生の外套の玄關にかゝつて居たのを攫つて以來の事だ。

▲先生に叱られた時

私が先生のお叱りを受けたことは一度ある。それは近い事で、先生の「坊ちやん」を春陽堂で縮刷する時のこと、事は鈴木三重吉君發行の叢書に「坊ちやん」を入れられるといふのと、新潮社からも「坊ちやん」の縮刷が出るといふ事で、私が鈴木さんと、新潮社に交渉の手紙を出すことの手順が遲れたのが間違の原因である。然し先生は鈴木さんと、新潮社の中村君と私とを三つ金輪に双べて置て、事の顚末を糺した後、その間違ひであつたといふ事が分つたので、私の粗漏と不注意を誡められて、そして其場から直ぐに御機嫌を直されて、其眷顧は從前の通り少しも變らなかつた。流石に江戸ッ子肌の理屈さへ分れば何の殘るところもない恬淡なものであつた。北海道に籍を置かれるが、四ッ谷(高田?榎町?)で代々の名主樣の家に生れた根元根生ひの江戸つ子であるから、學問から來た理屈はあらうが、洒々落々たる海濶な腹は何處かに潜在して居る。それだから其學問から來た理屈を除ければ、先生は矢張江戸つ子で、その如何にも話しいゝかゞ解る。先生は一部の世間の人が見るやうな嬌慢な理屈ぽい方では決してない。

▲先生のお作

先生のお作には或は大天才の閃々たる眼を射るやうな強烈な白熱のやうな光はないかも知れぬ。然し其落想は最も常識に富んだ平靜な、春風和朮の太陽の光りで、穩健な空氣に白玉を包んだやうである。で、それから織り出して來る先生の哲學上の人生の觀照も、運命の歸結も、それは確に我々の生涯に偉大なる大乘的說法である。また先生の文章は低徊趣味に富んでゐる、先生は虛子君(高濱)の『鷄頭』の序に、虛子君の小說を低徊趣味の小說であるといはれたが、先生の文章にも低徊趣味の餘裕がある。然し其論理は明晰で確乎たる立場に起つて斷常の見を離れて居る。先生には滑稽の分子がある、然しそれは三馬の如き一九の如き露骨なものでない、溫い或る物に包まれて居る。先生には機智があつて皮肉がある、然しそれには綠雨君(齋藤)のやうな氣障がない。先生は其想に於て、其筆に於て實に當代に於る一大文豪である。純なる藝術の範疇を示された方である。これは批評ではない。私が先生のお作に對して私の常に敬服して抱いて居る點を申したまでゞある。

▲先生が同情の慰藉

先生の御病氣の最初は、私が胃潰瘍を病み出したより一年程早かつた。で、私も胃潰瘍になりましたと申上げた時、先生は太く同情されて、同病相憐れむだお互ひに氣を注けて養生することだよ、とおつしやつて種々養生の方法に就いての注意をお話して下された。それから後、今から三年ばかり前に私が湯島切

通(本郷)の宅に居つた時、可成劇い吐血をして漸く恢復してお伺ひをした時は、非常に其不養生を叱られた。其後でも歌舞伎座や、帝劇などで先生にお目にかゝると、先生はお互にこん夜更しは可くないよ、なるべく歸りは早く歸つて安靜にする事だ、と誡められた。それが今、先生は私より先きに逝かれた、私は何か取り殘されたやうな氣がしてならぬ。

私が最近に先生にお目にかゝつたのは、去年の五月春陽堂を辭めた時と、それから二た月程して八月に先生の『漾虛集』の中から其ロマンチックの代表作として「倫敦塔」、「幻の盾」、「薤露行」の三篇を合卷縮刷して見たいといふ氣が出て、これを小宮豐隆君に御相談して、先生のお許しを願ひにうかゞつた、これが最後で、其時先生は、「それは君がやるのかい、また自由講座のやうな破目になるといけないから、——出版は差支へないが、君から本屋の手にかけたらどうだ。」と、私の上を心配してのお話で、そこで私は先生のお言葉に從つて友人堀尾君の經營する千章館に渡して發行することゝした、たしかもう五版位に上つて居るとおもふ。この時が私の先生にお目にかゝつた最終で、丁度午前中三四時間もお邪魔をしたかと思ふ。先生は血色も好く、大層お肥りなされたやうだなどゝお噂してお分れした。

其後お伺ひしやうとおもふ內、私はまた吐血で倒れて今年の一月まで寢た、少し快くなつて二月に伊勢地方に旅行する用事が出來たので同地へ往つて三月の中旬に歸り、それからおたづねしやうとおもふうち五月に入つて、また引續いて三回の吐血をやつて、遂に今日までも衰溺で病床を離れることが出來ない。

私が先生の訃を病床にありながら新聞で見て、せめてもと先生に對するこの思ひ出を書いて居る時、先生の御令息から先生御死去の通知が來た。あゝ、先生はもう此黑枠の中の御通知の紙となられてしまつた。

明日（十二日）は御葬儀の日である。私は脚部の水腫で、其齋場たる青山までもおうかゞひすることが出來ない。明日はもう先生は白玉樓臺に烟となつて上られるのである。吁、先生はもうお呼びをしてもお答のない方だ。お叩きをしてもお聲を聽くことの出來ない方である。と、黯然として眼を床に移すと、懸けた軸は私が嘗て先生にお願ひして書いて頂いたもので、曰く「人間道到三峯盡。天下秋隨一葉來。」（漱石山人）とある。これと故西有穆山禪師の「明月照松風吹。」といふ軸と並べかけてある。吁、先生にはもうどうしてもお目にかゝる事は出來ないのだ。と私は少時机に頰杖をついたまゝ沈默に耽つて居る間に、時計は午前二時を打つた。かうして居てはまた眠が足らないから明日心持ちが惡い、そしてそれがまた適切に身躰に利いて來て水腫が增すから眠に就きたい、とはおもふが何か心が騷いで枕に就く氣になれない。私は何時頃脚部の水腫が除れて運動も出來、俥にも電車にも乘れるやうになり、先生のお墓に香花を捧げることが出來やうか、さうだ、明日は早速お醫者樣に相談して見やう。と、獨り心を決めて、そして筆を擱いて、普門品一卷を讀誦して蔭ながら先生の御供養に捧げて枕に就いた。（大正五年十二月十二日午前三時）

病因の鶫

大谷繞石

「鶫の粕漬を食せしより胃痛を覺え終に持病の胃潰瘍を再發し」といふ東京諸新聞の記事を讀んだ時余の胸は早鐘を撞いた。

「猫」(下卷を除き)以來、著作の出版毎に一本を寄贈され、「それから」の如きは手數を厭はず遙々當時英國留學中の余に郵送された程で、しかもその扉に「謹呈大谷繞石様著者」とか「謹呈大谷繞石先生著者」とか自署し、いつも包紙も自分で認めて寄贈を受けて最近のものに至つて居る次第、御禮の致しやうも無いので、現住地へ赴任してからは、一年に一二度名産か又は自分が獲た魚かを差上げることにして居つたのである。今年の秋は一昨年かも郵送した鶫をと思ひつゝ、ついその採れ盛る頃には得送らず、稀になつた頃にさる問屋に命じて送らせた。いつ發送したものか判然せぬが、十一月の十九日の日付で先生からその禮狀が來た。それが今では余への最後の手紙である。例に依つて例の如き文句だと微笑んで讀んだ。かうだ。

拜啓昨日山鳥(きんてう)が到着致しましたので何處から來たのかと思つたら大谷正信といふ札が付いてゐました何うも有難う御坐います。私は貴方の事を忘れてゐるのに貴方は私の事を考へて下されるのみならず時々魚だの鳥だの御菓子だのを頂戴するのは勿體ない事です。尤もわすれるといつても記憶に消され

てしまふ譯ではないのだから御容赦を願ひます。一寸御禮まで草々

十一月十九日　　夏目金之助

大谷正信様

東京新聞所載の鵜の粕漬といふのが余の發送したものゝ粕漬にされたものらしいので、事實左うとすると、解剖の結果餘命長からざりし事と鑑定されはして居るものゝ、先生の壽命を或ひは縮めたのが余の所爲のやうに考へられて誠に〳〵御氣の毒に堪へぬ次第である。

余と先生との交際はたしか明治卅六年以來で、その後いたゞいた書翰で公表して然るべきもの多々あるやうに思ふが、目下試驗に際して多忙を極めて居るので探し出す餘裕が無い。手近の文庫を檢べて見たらこの六月十五日に投函されたのが見付かつた。「明暗」は最初は大阪朝日と東京朝日と仝日に出たので、學校で朝のうち大阪朝日で一讀し、歸宅してから午後着の東京朝日で讀みなほすといふやうな事も認めた拙簡に對して、全文を掲げると、

拜啓御惠贈の御菓子折正に頂戴致しました。毎度ながら御心にかけられての御親切ありがたく御禮を申上ます。小説も毎日二回づゝ讀んで頂くのは恐縮の至でありますが自分の我儘の方から申せば其方が嬉しいのには違ありませんさういふ熱心な讀者に對して何うか滿足の行くやうな旨いものが書きたいと冀ふ次第であります先は不取敢右御禮まで艸々

六月十五日　　夏目金之助

大谷繞石様坐下

とある。小說執筆中は御邪魔だと思つて、手紙は差控へることにして居たことであるが、不圖思ひ出して送らせたその鵜が或は病因になつたのかと思ふと實に恐懼の至である。

書きたい事は山々あるのだが、試驗といふ公務がゆつくり筆を執る事を許さないので殘念ながら、事實左うならすまぬことをした、惜い人を亡くしたと、思つて居る事だけ書きつける事にした。（十二月十三日）

漱石先生は英國も英國人も好かれなかつた事はその文學論の序文にも窺へるが、余はまた英國が好きで人間が總て紳士的なので英國人は好きである。日本語の紳士といふ二語が暗示する人間は好まぬが、英語のゼンツルマンといふ九綴りの語が示す人間は甚だ好きである。先生は英國人を好まれなかつたにしても先生それ自身は誠に立派なゼンツルマンであつた。

ゼンツルマンといふ語の示す人間は、解釋はいろいろあらうが、余には門地賤しからず、教育あり親切にして禮義正しく、己が義務を勵行して他人の權利と感情とを尊重する人、斯うで盡きて居ると思ふ。先生の門地賤しからぬ事は「硝子戸の中」の文で誰しもうなづく。そしてあれだけの學問があり見識があつた。然しどれだけ親切で禮義正しかつたか、親しく接した事の無い人には或は想像し得られまいと思ふ。余は先生と專攻學科を等しくはして居るが、餘程の後輩である。雅號の下半を等しくはして居るが、學問その他總てに於て名題役者と馬の脚との差以上の差のあるのを平素愧ぢてゐた次第である。にも拘らず余如きものに對しても甚だ親切で義理堅かつた。その例證ともならうし、先生は余等にどんな手紙を書かれたものを窺ふよすがともならうから、追慕の餘り玆にその五六を公表する事とする。

○

拜呈明星御親切に御送被下有難存じ候早速教師の一日と申すのを拜讀致候前半教科書の譯を挿まれ候は御趣向に候へども小生には別段の感も無之唯後半書齋中の出來事より食事及晩餐後の御相手の邊は甚だ興味を以て讀了致候小生の事を態々御推奬の樣に御記載被下候は難有仕合に候へども少々赤面致候人間に敬慕抔と申すは知らぬ古に遠方から見た時のみの迷かと存じ候釋迦も孔子も十年も仝棲致候はゞ凡庸の匹夫たるべきかと存候。是よりは再々御光來の上敬慕する漱石をうんあの漱石がといふ樣に變化する迄御交際被下度候。敬慕とは遠慮と評判と未知が重なり合ふとき發生する化物に候御高見如何に候や御禮旁妄言かきつらね申候御海恕被下度候早々頓首

三月十日　　金之助

繞石學兄　坐下

それは多分余が最初に受取ったものであらう。明治三十八年ので千駄木町五七發ので、余が東京に居た時のものである。

○

春暖の候御清適奉拜賀候小生も一寸伺ひ度と存じながらつひ色々な雜用にて御無沙汰致居候拙文御推賞にあづかり感謝の至に不堪候山嵐の如きは中學のみならず高等學校にも大學にも居らぬ事と存じ候然しノダの如きは累々然としてコロがり居候。小生も中學にて此類型を二三目擊致候。サスが高

等學校には是程劇しき奴は無之（尤も同類は澤山有之）候。要するに高等學校は校長抔に無暗にとり入る必要なき故と存じ候。山嵐や坊ちやんの如きものが居らぬのは、人間として存在せざるにあらず、居れば免職になるから居らぬ譯に候。貴意如何。

僕は教育者として適任と見なさるゝ狸や赤シャツよりも不適任なる山嵐や坊ちやんを愛し候。大兄も御同感と存じ候。右御禮かた〳〵卑見迄如斯に候以上

四月四日　　金

續石兄

これは三十九年の四月で、曙町宛のもの、

○

尊書拜見毎々御懇篤なる御褒辭を賜はり却つて慚汗の至に存じ候草枕はある一部の人々には大受にて小生も大にうれしく存候三度讀んだ人は大兄を入れて是で三人目に候。尤もある人は小兒を失ひて引き籠り中毎々草枕をよんだと書いて參り候が是は少々御まけの樣に候。今日明星と申す雜誌を見たら議論が多くて文章にも穴があると一二行程かいてあり候

二百十日は豫ての約束にて不得已執筆夫故可成骨の折れぬ樣會話に致し候あれを例の流義で長くかいたら依然として冗長なものになり可申か呵々右は先づ御挨拶迄草々頓首

十月三日　　金之助

繞石兄

これは三十九年、千駄木町發、曙町宛。

○

拜啓先夜は御立寄被下候處何の風情も無之不本意千万に存じ候偖其翌日は御親父様わざ〳〵見事なる菊花御持贈被下意外の幸福早速瓶中に插み朝夕眺め居候何卒御老人へよろしく御鳳聲願度候先は右御禮迄艸々以上

十一月二日　夏目金之助

天長節の前夜

大谷繞石様

明治三十九年、千駄木町より曙町への郵書。

○

暑中如何御暮に成るかと存候ひしに不相變御健勝の由大慶の至に存じ候下つて小生如例碌々乍憚御休神願上候。虞美人草御讀被下候よし難有存候小生もあれが爲今年夏も依然多忙實はいやく切上げて遊びにでも參り度と存候へども因果にて如何とも致しがたく弱り切り候。小説もかうだら〳〵では讀者より著作者の方が先へ參り候御憐笑可被下候いづれ其内拜眉万々先は御挨拶迄匆々

七月二十九日　　夏目金之助

大谷兄

右は明治四十年、西片町十ロノ七より曙町への郵書。

○

拝啓その後は御無沙汰奉多謝候當時不相變電車の如き生活毎日頭のみ忙かはしく御座候二三日來氣候も少々ゆるみ少しは春めき候へども氷はまだ張り候。北の方は嘸かしと存候。隨分御大切に御攝生可然と存候かしこ〳〵御贈御厚意深く奉謝候。あれは先年誰かゝら（四方太と氣が付き候。四方太のは鳥取の蟹で大兄のは金澤のかになるが味も鳥取と金澤との相違可有之か。風味の上批判可致候御地仕事の模様拝承外國人への御教授も面白さかと存じ候先日佐治秀壽の言にも其邊の消息有之。俳句は只今一句も出來ず。大兄は不相變御勉強。永日小品は面白いのと面白くないのと有之候よしどうぞ參考の爲め面白いのと面白くないのとを指摘被下度候右不取敢御禮申上候草々

二月五日　　金之助

繞石兄　坐右

明治四十二年、早稲田南町七より金澤櫻島あて。

○

春暖の候愈御清適奉賀候其後は存外御無音に打過申譯無之候。過日文學評論出來の節早速一部進呈の積の所初版は賣切とかにて漸く手元へ一部持參致したる迄にて其他は今日に至る迄いまだ納本仕らず從つて諸君へもまだ寄贈の運に至らざりし處御地にて態々御購求御一覽を賜はり候のみならずとくに御推奬の辭を辱うし加ふ御叮寧に誤植の表迄も御示しにあづかり感佩此事に候。万事行屆かぬと多く不滿足の箇處多々有之候へども若し御氣付の所有之候へば御示敎にあづかりたくと存じ候。永日小品はなぜ東京へ載せなくなり候や小生にも分らず候。四月下旬より又大坂の方へ少し續くものをたのまれ執筆の都合につき御讀被下候へば幸甚に候。東京の方は煤煙のあとを與謝野鐵幹がかきそのあとを小生がかくべき役割の樣に承はり候右御禮旁御返事迄早々不一

四月三日　　金之助

繞石兄　坐下

折角の御訂正二版には間に合ひかね候。もし三版も出る好機も有らば御厚志を利用致し度と存じ候

明治四十二年、金澤櫻畠あて。

○

拜啓其後は御無沙汰御地着の上只今はもはや御落付御研究最中と存じ候御出立後東京も別段の變化無し。正月も例年の通り。降雪三回。曇日は寒き方に候。倫敦抔防寒的に家屋の構造の出來てゐる處は却つて我々の書齋よりも遙かに暖國に候。芝居其他御遊覽に相成り候や。倫敦ほど雜駁な所は世界中にこ

れあるまじく、考へ様次第にては内地よりもずつと呑氣なものに候へば久し振りにて老書生に立ち歸り勝手に世帶の苦勞なく御消光可然と存じ候

「それから」出版致し候につき一部此手紙と仝便にて進呈致し候。日本の小說抔却つて御歸りの時の御邪魔にも相成るべくとは存じ候へどもかねて御愛讀を辱ふせる御厚意に對する記念として差上候もの故御落手被下度候

昨年末より朝日（東京）紙にて文藝欄なるものを開始し、毎日一段もしくは一段半位の批評もしくは文藝上の論文抔かゝげ候。其下に六號活字にて柴漬と申すものを置き是には西洋の雜誌等より通信、消息、報道等人の面白がりさうなものをごちや〳〵にならべ居り候。大體一項十行内外に候。

御地御見聞上の事にてもし現下日本の文藝上の時事問題に直接もしくは間接に關係ある御意見もしくは報知も有之候はゞ時々御寄稿被下度幸不過之候。又どこかへ御遊覽の節（ハンプトンコート抔）繪葉書の裏へ寫生文の樣なもの五六行御書き被下候へば消息として今申したる柴漬の後へ載せたき考に候。どうせ新聞故大論文や長時間を費やすものに就て御迷惑をかける料簡にて無之。たゞ霧が降つて人の顏がぼんやり映るとか、ショーの脚本をどこ座で見たが面白くなかつたとか何とか、云ふ事を五六行にてよろしく、もし又一二時間の御閑も有之ば文藝欄の五號活字として載せ得るもの一欄か一欄半位にて讀み切りのもの……何んとか蚊とか手前勝手のみ申し募り候。御笑ひ可被下候草々。

一月十九日　　夏目金之助

續石老臺坐下

明治四十三年二月倫敦着。

○

拝啓其後は手前にかまけつい〳〵御無沙汰に打過申候今年は諒闇に口實を得てと申すと申譯なき次第ながらつい年賀状も差出さず恐縮の至に候御送被下候「滯英二年」正に落手御芳情萬謝仕候相憎包み紙さかさに相成居候ため御署名さかさに相成候事殘念に存じ候。然しその他には異狀無之決して御掛念被下間敷候。

巻頭の小泉先生へのデヂケーションは甚だ結構に候いまだ日本の著書にて八雲先生にさゝげたもの一つも無之大いに嬉しく存候。此間沼波瓊音氏より「土」を讀んでゐると申越したる時愉快を覺候と同一の趣に候。「行人」御讀被下候由難有存じ候先がどうなるやら作者にも相分らずたゞ運次第に候御憫笑可被下候先は不取敢御禮迄草々

一月十日夜　　夏目金之助

大谷繞石樣　坐下

大正二年金澤茨木町あて。

○

其後御無沙汰に打過候日來稍輕鬆を覺え候も北國にては如何に候や矢張り雪に鎖されて御難儀の事と存

じ候。

却　先般御高著拝受ことにわざ〳〵御引換被下御厚志深く奉謝候拙著「社會と自分」出來につき御目にかけ申し候くだらぬものをあつめて殆んど御高覧の價値も無之と存じ候が極めて喋舌を弄し居候へば讀むに面倒も無し御寸暇も有之ば一二頁にても御覧願上候先は右迄艸々頓首

二月二十一日　　夏目金之助

大谷繞石様

大正二年金澤第四高等學校宛。

○

拝啓病氣御見舞被下有難存じ候其後漸く順當に快方に向ひ旬日にてどうにかかうにか本復可致と存じ候間乍他事御休神可被下候病中諸方の見舞狀に對し一言も返事を出さず書くのは是が始め位なものに候返事が書ける位故先々御安心願候櫻の時床につき起きる時ははや子規の鳴く頃と相成候世の中の推移は早いものに候が去りとて生れ變つた心地も不致妙に御坐候先は右迄艸々拝具

五月十八日　　夏目金之助

大谷賢臺坐下

大正二年、金澤第四高等學校宛。

○

啓上此間は御地名産長生殿と申す菓子一折御恵投にあづかり難有頂戴あれは熊本にゐるうち同僚の一人國元より取寄屢御馳走になりたる記憶のあるものにて長生殿といふ名は小生には至極縁喜よろしく候然し斯う死にかゝつては生きかへつてはいくら長生殿にても左程目出度もなく候近頃病氣の方は先々回復致し候へどもある道樂に屈托夫が爲めつい御禮申述る事を怠り甚だ不相濟候乍遅延一筆如此候初夏不順糠雨簷陶敷候へば隨分御厭可被成候以上

六月十一日　　夏目金之助

大谷繞石様

大正二年、第四高等學校苑。

○

拜啓御新著難有う存じます。私はガルスヲーシーといふ人のものを讀んだ事がありませんからあれをすぐ通讀しました。あれは全體として大陸ものゝやうな氣がします。あのうちの二つか三つには感心させられました。私はまた小說を書かなければなりません。書く前には氣分をそちらへ持つて行く必要があります。其には誰の小說でも讀んでゐるうちに自分も自然創作的氣分に侵されてくるやうになるものです。私はガルスヲーシーを讀む時さういふプラクチカルな考を懷いてゐました。さうして讀んで了つたら

幾分か自分の目的が達せられたやうに思ひます。偶然ながらあなたの御蔭です。御禮を申上ます以上。

三月二十一日　　夏目金之助

大谷繞石様

大正三年、金澤茨木町あて。

○

此間は奥さんが御出京の由に聞いてゐました處貴方も御供で暑い處へ御出のよし是非御目にかかりたいと思ひます。然し此暑いのに日中高輪から牛込まで御出は大變です。どこかへ御供してもいゝが世間知らずの私にはいゝ思ひつきもありません。夕方から拙宅で御飯を上げたいが來て下さいませんか。多少は涼しいでせう。あなたの都合のいゝ日を知らして下さいませんか。奥さんも一所に入らつしやれませんか御返事を待つてゐます。

大正四年七月十七日芝高輪寓居あて。

手紙を受取る度毎に、あの忙しい身でよくもこれ程にといつも感謝してゐたとである。高等學校の教師を勤めてゐたところで、小説を書いちやならぬといふ規則もあるまい。好い材料が頭に二た通りはある。人が話してきかせた材料で立派な小説になるのが此上二つはある。夏休か冬休に溫泉へでも行つて書き了へたい。出來たなら先生へデディケイションしてなんと思ひ〳〵として居たのだがその先生に生前デディ

ケイトするとは出來なくなつた。書きたくもなくなつた。

前掲の先生からの書翰は、筐底から得た三十七通のうち公表して差支あるまいと思ふものゝ一部であるが、先生が如何に後輩に對して親切で義理堅い人であつたか、自分の義務は勵行して他人の權利と感情とを如何に尊重された人であつたか、この手紙だけでも推知せられるであらう。即ち先生は余の所謂ゼンツルマンの模範的な人であつたのである。英文學者として、創作家として無論無上の尊敬に値する「人」であつたが人としても亦無上の尊敬に値する人であつた。幾度言つても言ひ足りぬ、實に惜しい人に死なれたものだ。

（大正五年十二月十六日）

漱石先生の逸話

□下手な飯焚　まだ氏が大學に居た時分のことである、中村是公氏等と五人許りで本所邊に自炊して、代る〳〵炊事をする事になつて居た。處が氏の當番の時には屹度飯を焦す、そして其焦飯と香の物を餉臺に載せて置いて、自分丈けは美味い飯を喰ひに自宅に歸り〳〵した。

□俳句の斷狀　世に阿る事の嫌ひな事は誰も知つて居る事で、虚名を欲しない事も博士號辭退で世に知られて居るが、西園寺侯が雨聲會を組織して當代の文士を饗應した時、氏も又招待狀を受取つた、然し氏は「ほとゝぎす廁半ばに出兼ねたり」と俳句で返事をして置いて其招宴に顔を出さなかつた。

□意地の張合　熊本の高等學校に在學中、同僚の山川信次郎氏が氏の家に食客となつてゐた。然し山川氏は假令友人の間でも食料を取て呉れと云つたが氏は取らぬと云つて肯かない。どうでも取れと云ひ、どうでも取らぬと云ひ、互に意地を張り通して解決が附かぬ、結局漱石夫人が中に入つて妥協を附け、大笑ひになつた。

□十二月の椿　去年の十二月中の或る日である散歩に出た途中松本亦太郎博士に會ふと「腰越の僕の別莊に今椿の花が盛かりだから遊びに行つて見んか」と言ふ話、「君、どんな處だつて十二月に椿の花が咲く筈がないよ」と氏が笑ふので博士は「でも事實咲いて居るんだからね、僕は遂二三日前行つて來たんだからね」と云つた、すると氏は苦笑一番「ぢやア仕方がない僕の負けだ」

□電話の苦情　電話は自分の用を足す爲めで他人の用を足される爲ではないとあつて、氏は自宅の電話機を外して置いた、すると或る友人がやつて來て

「君の電話はいくら呼んでも出ない、不都合ぢやないか」といふ。氏は「出やうが出まいが僕の勝手だ」と云ふ。

友人は「でも電話に直出る事は加入者の義務だ」と云ふ、氏は「義務かどうかそこまで研究しないが兎も角も僕は出ない」と云ふ。友人は憤つて歸つたが後から電話局の役人が來て「電話機を外して置くのは規則違反だから始末書を出して下さい」氏始めてギヤフン。

□海苔巻續き　大學時代に一頃氏はいつも海苔巻壽司を竹の皮に包んで辨當に持つて行つた。これが同級生の眼に止まつて食堂に入ると皆袖を引き合ひ、「見ろ〳〵夏目は今日も海苔巻だ」と笑つた。氏はそんなに笑ふといつまでも持つて來るぞ」と相變らず海苔巻を續けた。仕舞に根氣負けして皆が笑はなくなつた。

□懷手した男　大學で講義をして居た時分、いつも左の手を懷手して氏の講義を聽いて居る學生があつた。氏はそれが苦になつて講義をし乍らジロリ〳〵其學生を睨み附けて居たが學生は一向感じないと見えて、相變らず懷手をして居る。氏も到頭堪り兼ねたかッカ〳〵と共前に進み「講義を聽く時は懷手を止し給へ」と云つた。

學生は初て氣が附いたらしくサッと顏を赤らめて、其儘机に俯伏して了つた。講義が了へて教室を出ようとする時、其學生は氏の側に近寄り「實は私は左の手が無いのです」と低聲に囁いた。これには氏も可なり面喰つた風で、暫く學生の顏を見詰めた儘呆氣に取られて居たが、やがて云ふには「イヤ、それは氣の毒な事だ。然し僕も無い智慧を絞つて講義をして居るのだから、君も無い手を出して聽いたら如何かね」

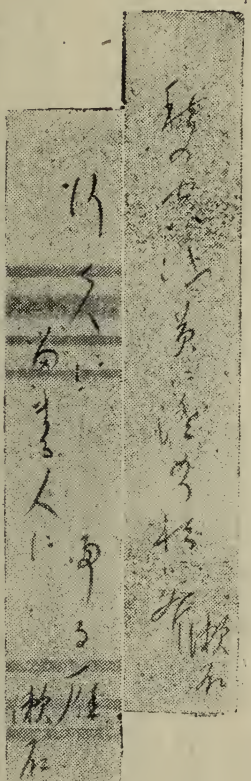
□米の生る木　子規隨筆中に「漱石は米の生る木を知らぬ」と云ふやうな事が書いてある。氏の辯明に

曰く「嘘を吐け！稻なんざ子供の時分から早稻田田甫を駈廻つて居たからよく見て居た。又何年となく白い飯を食つて來たから米も知つて居た。

只不幸な事には此二つを連絡して考へる事を知らなかつたから、其稻が其の米になる事を知らなかつた丈けさ」

□襟巻の洗濯　氏はいつも折目の附いたサッパリした着物を着て居た寺田理學博士が行くと「君は穢ない着物を着て居るなア」と云ひ〳〵した。

博士が「私が世間並で先生がおしやれですよ」と云ふと氏は「なアに僕の方が世間並で君が並外れさ、オイ其穢い襟巻を出し給へ」と女中に洗濯させて「さアこれが世間並だよ」



□簞か針金か　氏は髪の毛の柔かいのが自慢であつた。油など附けなくとも左右に分けた髪はペタリと頭の肌に附くので、一度刈ると三箇月も四箇月も刈らなくともいゝ、これが又經濟向の頭だと云つて大の得意であつたが、よく門下生に向つてこんな事を云つた。

これでも西洋へ行くと毛が硬くてシロ簞の様だと云はれたものだ、君等の頭を見たら針金が立つて居るとでも云ふだらう」

□新發見の價　解剖の結果で見ても、腦が人並以上に大きかつたと云ふ事だが、氏の頭は實際大きい方だつた。然しその大きな頭に比べると、肩幅が何にも狭い。何處か伊達男の氏はこれを苦にしてる時森田草平氏に向ひ「洋服を着ると僕は見苦しなア」と

いつた。乃で森田氏が「先生は實際肩幅狹いからフロックなどは着ない方がいゝですね」云ふと、氏は俄にムッとして「人の口眞似は止せ。云ふなら自分の發見した事を云へ、實用新案でも獨創でなくては登錄せんぞ」

□朝日の値段　氏はいつも戸外に出ると敷島を買つて吸つた。この莨が甘いと云ふ譯ではなく十錢で釣が入らぬからと云ふのであつたが、自宅では朝日を用ひて居た。或る時客が「君は大變安物を吸つて居るね、節儉家だよ」といふと氏は眼の玉を丸くして「これは家内が買つて置いて呉れるのだがね、そんなに安いのか、ナニ八錢だ？なアる程安物だね」とつく〳〵感心した。

□正義の少年　氏は子供の時一寸他家に養子に行つた事がある——尤も間もなく實家に歸つたが——其養家先の養母が何かの事から隣りの家の女房さんを散々惡く云つてゐた所へ、ヒョックリその女房さんが入つて來た。養母は少しくうろたへたが、俄にお世辭笑ひをして「エ、〳〵、私はいつもお女房さんのやうな感心な方は無いつて褒めて居りますんですよ、ホントにあなたのやうな感心な方はないわ」などゝ饒舌り立て始めると、氏は其頃まだ九つであつたといふが、突然奥から飛びだして來て「それはみんな嘘です」と叫んだ。養母は眞赤になつて了つた。

□足駄ばきで　氏の高等學校時代に生徒は皆下駄を履いてドン〳〵教室に出入してゐたものだが、訓令が出て、「自今靴の外下足の儘で登校を禁ず」と云ふ事になつた。それにも拘らず、氏は相變らず下駄ばきの儘で教室に出てゐたが、或る日足駄ばきで廊下をガタ〳〵歩いて行くと、曲り角でピッタリ時の校長杉浦重剛氏に出逢つた。氏はハッと驚きながらすぐ樣足駄を懷に入れて草駄天走りに駈けて歸つた。其後三十年振で此程杉浦氏に逢つたので、氏は其時

話のをすると、「イヤ下駄ばきで教室に入るのは私は實に賛成で、只文部省の訓令であゝ張り出したけでした」と云ふ。杉浦氏の事だから日本主義で西洋の靴を許し乍ら日本の下駄を許さぬといふ法はないと云ふ考へかと思ふと、少し違ふ、「イヤ靴は底一面の泥が附きますが、下駄は二枚の歯の泥きり附きませんからなア」氏は此話を聞いて杉浦先生は豪いと云つてゐた。

□筆蹟の返禮　氏を常々敬慕して居る横山大觀畫伯が、或る時其作品畫幅の一點を氏に捧げて敬意を表した。氏は其返禮に何を贈つたものかと考へた末「大觀君が心血を濺いで畫いたものを呉れたのだから、僕も心血を濺いで書いたものを以て、君の厚意に酬いねばなるまい」と氏自身の筆蹟を贈つた。

□猫を書いた家　飼つて居る猫に「夏目さん」と云ふ名を附けて居る家が市内に一寸々々ある。此出世作「我輩は猫である」を書いた時分、氏は駒込千駄木町五十七番地に住んでゐた。今其家には氏の同窓の友人で一高教授の齋藤阿具氏が住んでゐる。此家の間取りを知らぬと「猫」の眞の興味が解らない、氏があの時分書齋にしてゐた玄關脇の八疊の間は、今齋藤氏の應接間になつてゐる。

□好きな禪僧　氏の一番好きな人物は禪僧であつたやうだが、氏を禪に導いた人は今は故人となつた米山と云ふ大學時代の友人である。「猫」の中の獨尊居士といふのは此人をモデルにしたもので隨分變人であつた。氏は此人の傳記を書いて見たいと云つて居たが。果さずに死んだ。今頃は冥土で舊交を溫めて居るだらう。

□猫殿の冥福　「猫」の主人公の猫が死んだ時、氏は自分の世に出たのもお前のお蔭だと云つて鄭重に其死骸を庭の隅に葬り、碑までも建てゝやつた。奥さんは今でも此猫の命日には香華を供へて、猫殿の冥福を祈つて居る。

□繁昌の本尊　「猫」は相變らず購讀者が多く、始終増版をして居るが、氏の邸の坂下に住んで居る製本屋は、「猫」の製本專門で飯を食ひ、今では大分裕福になつた、此製本屋が一日氏の邸を訪づれ、「私の今日どうにかなつたのは全く先生のお陰、且又猫殿のお蔭です」と云つて厚く禮を述べた事がある。氏は其律義な心懸を愛し、俳句を一句短冊に認めて與へた。製本屋は大喜びで爾來それを神棚に祀り、商賣繁昌の本尊様だと大事にしてゐる。

□無言の恩惠　地方に居る或る若い文學士が、或る時氏に書を寄せて奉職口の周旋を賴んだ後、氏の返事を受取つた。開封して見ると、思ひ掛けぬ無愛想な手紙で「自分の口の事で他人を煩はさねばならぬ様な卑劣な者に就いて、僕は厚意を持つ事が出來ない事を記憶して居て貰ひたい」と書いてあつた。文學士は凋れ切つて最後まで讀んで行くと、ポタリと下に落ちたものがある。何かと思つて拾ひ上げて見たら五十圓の爲替手形であつた。而かも其金の事に就いては一言も書いて無かつた。

□看板の崇り　神保町の或る書店の前を通る時は、氏は屹度下を向いて歩く。何故かと氏に訊いて見ると其書店の屋根看板の文字を、書店の懇望に依つて是非なく書かされたが、出來た看板を見ると如何にも拙い出氣來で氣恥かしくてならない。それを見るのが苦痛なので、その家の前を通る時は上を向いては歩けないと云ふのであつた。

□拙劣い職工　先年大學の文科主任としてウード氏が赴任して來た時、三年生の氏は學生總代と云ふ格で、敬意を拂ふ爲めにホテルに訪問した。するとウード氏は切りにトランクを指して、錠前の壞れて居るのを直せと云ふ。氏は先生の此名譽ある註文に對して一生懸命で弄つて見たが、どうしても思ふやうに直らない、ウード氏はそれを自裂度がつて「何愚圖々々して居るんだ？」と怒鳴り出した。怖い先生だと

思ひ乍ら、遁げ出して歸つたが、其翌日教室でウード氏に會ふと「イヤ失敬々々、私は君を昨日錠前屋の職工だと思つたのだよ、でも君の其縞い洋服を見た時にはね」

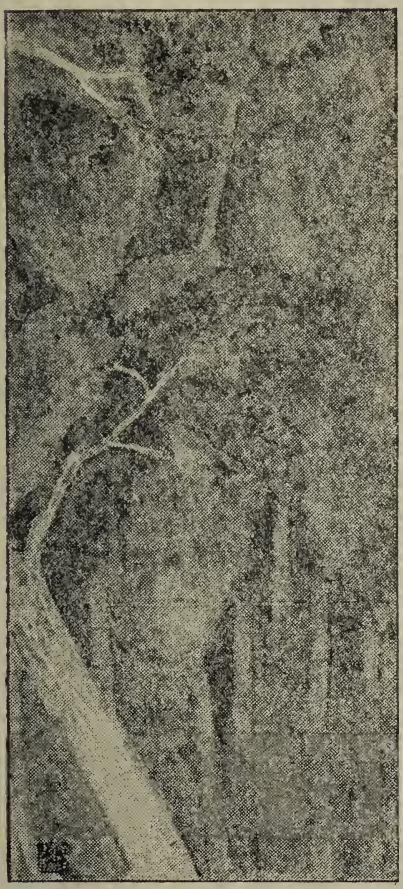
□世間を狹く

或る人氏に向つて「君は世の中をどう云ふ風に暮さうと思ふね」と訊くと、氏は横を向いて面倒臭さうに云つた「さうさね、ママ懷手して小さく暮したい」

（以上東京日朝より新聞轉載）

□とんだお世辭

惡戲ざかりの氏の令息は氏の顔さへ見ると、廻らぬ舌で「アバタ面」と言ふ。それでも子煩惱の氏は「家の子供はアバタ面と云ふのをお世辭と思つて居るらしい」と云つて他に話して居た併し氏も英國遊學時代には隨分此の痘痕面を氣にしたものだが、或る時電車に乘ると、向ひ側に腰を懸けた婆さんが、氏と隣の紳士の顏を見較べては頻にニヤリ〳〵と笑つて居る。妙だわいと思つて隣りの紳士を見ると、滿面の痘痕だ。此の時ほど氏は賴りない自分を心丈夫に思つた事はなかつたと云ふ。それからと云ふもの英國にだつて痘痕面が無いことはないと云ふ實證を擧げて、大にい自信を作りたいと云ふ考へから、散步の時には頻りに痘痕面を物色して步いたが、東倫敦の魚賣りのお婆さんに同じ痘痕面を見出した。是れで二人



見た譯だ、せめて三人ぐらゐ發見せぬばならぬと云ふ意氣組で、セッセと捜索を續けると、或る街の曲り角で小ぼけな醜男で而も立派な痘痕面を見付けた。ヤア來た〳〵と喜び勇んで近づいて見ると、何のこと鏡に映つた自分の姿であつた。

□十五人の中　漱石氏在學當時の文科大學は甚だ振はなかつたもので、氏の同級生は僅かに十五人きりしかなかつたが、其の中には三人の文豪が居た。一人は尾崎紅葉氏、一人は正岡子規氏、あと一人は即ち漱石氏だ。尤も紅葉子規の兩氏は中途で退學したから其の三文豪の中で、卒業したのは氏一人である。

□骨董屋廻り　氏の道樂は骨董屋廻りで、暇があると散歩がてら骨董屋の店先を覗いて歩いた。元より一の香爐に數萬金を惜まぬと云ふやうな贅を盡すことは出來なかつたが、氣に入りさへすれば贋物と知りながらもそれを買つて「偽物の方が廉いからね」と一人で喜んで居た。

□暖い日向で　氏は日向の暖かい處が好きで、秋から翌年の春まではよく日の當る緣側に机を持出して、日向ぼつこしながら原稿を書いて居た。さうして少し暑過ぎるやうになると、麥稈帽子を冠つて書き〳〵した。

□英國人嫌ひ　世間では氏を英國風の紳士などと云つて居るが、實は氏は英國人が嫌ひで英國遊學中は極めて不愉快な日を送つて居た。氏はやはり東洋趣味の人であつた。

□南畫の山水　氏は以前から繪を書くことが好きで、初めは水彩畫を中頃津田青楓氏に就いて油繪を、晩年は氏一流の南畫風の山水を描いて居た。氏は之を態々京都へやつて立派な表裝をさせて持つて居た。

□化學の趣味　氏は科學に對する趣味を十分に持つて居た。科學界の新しい發明などはいつも深く注意

して居た。さうして科學のやうな系統的な研究を文學の上にも應用したいと云ふ考へを持つて居た。

□機械體操が上手　學生時代に機械體操が大の得意であつた。學校庭のを取り巻いて居る塀に一寸手をかけたと思ふと、ポッと飛び上つて外の通りを歩く女などを見い〳〵した。氏の小説の中にも斯ういふ人物が出て居る。（以上大阪朝日新聞より轉載）

漱石氏に關する感想及び印象

追想の斷片

馬場孤蝶

夏目漱石君は長者の風のある人、客扱ひのうまい人、人によつて話をせられる人であつた。雄辯の人は概して客には話させないものだが、夏目君は客にも話させ自分も話されるといふ方の人であつた。私は明治四十年、森田君の家でお遇ひしたのが初めであつた。私の宅へも二度ほど來られた、私も行つたがさう度々は行かなかつた。

七月(大正五年)中旬、上田敏氏の葬式のとき式場の入口で一寸挨拶したきり、それから一度も會はなかつた。漱石君は實生活では複雜な變手古な生活をされなかつたが、あゝいふ人だから思想上ではいろ〳〵の生活をせられた。實際當つた生活は割合に狹い。作物の上に肉あり血ありと云ふ部分で十分でないといふことがあるとすれば、それは實生活に觸れた點が餘り無かつた所に原因することと思ふ。

作物、特に近頃の氏の作物を見て感服するのは、書いたところに拔目なく、此處にもう一句あつたらば

好く分るだらうとか。此處にもう一行欲しいとか云ふ感じの起らない點である。私どもは夏目君の注意力の廣く精密に油斷なく働いてゐるのを見て感服するばかりである。

夏目君は癇癪持ちだといふ話を聞いた事があるが、さう云へばさう云ふ所もあつたらうと思ふ。が、一方から言へば、多分腹の立つやうな心持ちになつて來ると、其の感情を抑へずにわざと口に出して見ることをやつてゐられたのではなからうかと思ふ。

頓才のすぐれて居られたのは誰でも氣のつく事であると思ふのだが、演說とか講演とか云ふものを聽いた人は誰でも皆夏目君の到意即妙の頓才に感服したことと思ふ。門下の某君が自身の小說の中に『子を作るのは awful なことである、何となれば自分の傳へて居る一切のものが子に傳へられ、子は亦それを子に傳へ、その子は亦その次の子に傳へると云ふ風で、親が有つてゐる凡てのものが永遠に傳へられて行く。子を有つのはオーフルなことである』と書いたときに夏目君がその某君に——『おれがクソをすると其のクソが野菜にかゝり野菜が育つて人に食はれ、人の血となり肉となる。で、その人は亦子を作ると云ふわけになる。故にクソの功果も永遠である、君の云ふ通りにすればクソをするのもオーフルだ』と言はれた。で、その某君が夏目先生は他人の熱心を打ち消さうとするやうに、戀愛のところへクソを持ち出したのは如何にもうまい、これにはひどく閉口したと話した事がある。

もう二年ほど前かと思ふのだが、私は外濠線の電車で圖らずも夏目君と一緒になつて、少しの間話をしたことがある。その時夏目君は自分の口髭と兩鬢とのしらがをさして『こんなに白くなりました、でも頭の眞中は黑いのだが、この通り帽子を被ると肝心の黑いところは隱れて白いところばかり出ます』と言つ

て笑つて居られた。

五十に近い私どもに取つては、あゝ云ふ夏目君のやうな理解力の豊かな人が知人の中からなくなると、甚だ淋しい心持がする。私が明治四十四年頃に、小説を少し書いたことがあるが、三田文學に出た『屈辱』に就いては夏目君が好く其の作中の人物の心持を理解して門下の人々にも説明されたやうに聞いてゐる。間接にも直接にも、私に小説を書けと勧めてくれたのは夏目君が一番度々であつたやうに覚えてゐる。我々の行かうと思ふ方面で教へを乞ふべき人であつた夏目君の長逝は我々所謂文壇の老朽者に取つては特に損失である。

これは私ばかりの感じではなからうと思ふのだが、夏目君がもう少し若い時分から作者生活を始められなかつたのは残念な事であつた。一方に於てはなか〳〵花やかな筆もあつたのであるし、感情に於ても決して乏しい人ではなかつたのであるから、それの盛んに流露するやうな若い時代に於て筆を執り始められたのであつたら、もつと盛んな作物が出たらうかと思はれる。夏目君の作物の如何にも結構布置井然としてゐて、作者は何處までも冷静であるといふところに何等かの不満を有つ人々があるとすれば、其の人々は私どもと同じやうに夏目君の若い時分に作を始められなかつた事を残念と思ふであらう。

然しそんな事は隴を得て蜀を望むと云ふことに過ぎないのであるから、我々は夏目君の與へられた丈けのもので満足すべきである。しかも十分満足すべき價値のあるものを夏目君が遺されたことには概ね何人も異存はあるまい。

要するに夏目君は人物として見ても作品から見ても全く特別な上等品である。手のこんだ念の入つた品

物である。出來合では決してない。隨つてこれから先も夏目君にひどく似たやうな人が出來やうとは思はれぬ、尤もそれには時代を考量する必要があるのではあるが。

夏目君のことでは、思ひ出せば色々のこともあらうと思ふのだが、今さし當つてはさう細かなお話をするわけには行かない。で、私の著書の中に書いた夏目君の事を左に引用する——

△

先生に始めて拜顏の榮を得たのは、明治四十年の冬頃かと思ふ。場所は、その時分森田草平氏の居た本郷の丸山福山町四番地——故樋口一葉の住んだ家——であつた。

その時に僕が受けた印象は、先生の態度は、話し振り等に寵つて居る或る物が、故中江兆民、齋藤綠雨の態度、話し振り等に寵つて居た或る物と同じであるといふ印象であつた。二人の故人に共通であつたウイットとしての風趣、即ち何處か飄逸とでも云つて宜いやうな趣が漱石先生にもあるやうに感ぜられたのだ。が、その感じは、漱石先生に僕が始めて拜顏の榮を得た時の感じであつて、今日ではさういふ感じは殆んど無くなつて居る。今日では漱石先生の寬大な、溫藉な方面が、より多く僕には感ぜられる。

△

漱石先生が帝國大學の學生で居られた時分には英文科の先生の組の學生といふのは先生一人きりであつた。所へプロフェッサア・ウードが英文科の教師として渡來せられた。ウード氏が始めて大學へ出席された

日、漱石先生に教科書彼此れは相談の上極めるから旅宿の帝國ホテルへ來て呉れと云ふのであつた。で漱石先生は外國人を訪問するのだからといふので當時の日本人の考で能きるだけハイカラに仕立てゝ帝國ホテルへ出懸けた。尤も當時のハイカラは今日の變からで漱石先生其の日のおん出で立ちといふものはその時分流行つた縮の――節は夏である――折襟の前は紐で締めるやうになつて居る襯衣の上に直接にフランネルの金釦附の制服を着して居られたのだ。所でホテルではボーイに案内されて行くとウード氏の寢室へ連れて行かれた。奇異な所へ案内するものだとは思つたものゝさういふ習慣もあるものかと思つて室へ入るとウード氏は『フン』とか何とか云つて一向に挨拶もせずに室にある革匳に指をさした。漱石先生には一向何だか合點が行かず無かつたが多分は革匳の中には書籍が入つて居るから開けて出せ、さうした上でいろ〳〵相談しやうといふ意味であらうと推察したので、直ぐ立寄つて跪がんで革匳の蓋を開けた、所が中には襯衣だの衣服の古いのなどが一杯入つて居るきりで書籍らしいものは影さへ無い。何うした事とも解らぬので、蓋を兩手で押し上げたまゝでウード氏の顔を凝乎と見あげて居ると、やがて氏は傍へ來て蓋に手を掛けて元の通り蓋を爲やうとするので漱石先生は直ぐに元の通りに蓋を下した。とウード氏は又蓋に手を掛け開けやうとするので漱石先生も一緒に蓋を持ちあげた。漱石先生には何の事やら一向に解らぬ。さういふ同じ事を二度三度繰り返した後で漱石先生も堪らへ兼ねて、これは一體何ういふ譯なのかと尋いた。ウード氏は『錠前が毀はれて居る』と云ふ。漱石先生はますます解せず『錠前は成る程損じてゐるがその錠前の損じて居ることゝ我輩との間に何等の關係があるのか』と斯う哲學的に尋ねた。するとウード氏は『でも御前は錠前直しだらう』と云つた。漱石先生こゝに至つて憤然と立ち上つて『否』と答へた。

所でその "No." なるものが如何にも激烈な調子で云ひ表はされたものなので、漱石先生その如何に錠前直しと呼ばれたのを憤つてゐるかゞ明に知り得られたからウード氏は少時呆れて漱石先生の顔を見て居た。がやがて『君はそれでは何ういふ人なのか』と尋いた。『イヤ自分は文科大學の學生で、かう〳〵いふ用向きで來たのだ』と漱石先生が説明するといふと、ウード氏大に慌てゝ『ヤアそれは飛んでも無い間違ひであつた。實は錠前直しを待ち受けて居た所へ入つて來られたので、一圖にさうと思つて誠に何うも失禮をした。疎忽の段は幾重にも堪辨せられ度い I beg your thousand pardons』といふ様な事を云つて、改めて漱石先生を應接室へ通らせて書籍の相談を爲たといふのである。一體ならば前日教場で差向ひで話を爲たのであるからウード氏は漱石先生の顔を覺えて居るべき筈であるがウード氏は日本へ來たての西洋人に有勝な通り日本人の顔が皆同じに見えて區別が付かなかつたので斯ういふ間違が起つたといふのである。漱石先生の云はるゝには、その後西洋へ行つてから考へて見ると自分の當時の服装は西洋人の眼で見たら何うしても錠前直し相當のものであつたといふのだ。

この話は僕等のやうなウード氏によし半面でも識あるものには特に面白い。あの人柄な訥辯なウード氏が初め漱石先生を錠前直しと思つて扱かつた態度と後の慌て方とが何と無く眼前にチラ付くやうな氣がするのだ。

△

これは明治二十三年の秋かと覺えて居るが、本郷の若竹へ越路が掛かつた。漱石先生はその時、令兒よ

り拜領の外套――中古ではあるが仕立のなか〳〵良い――を着せられて大分得意で聞いて居ると、傍に安座をかいて居たへんな男が『今日は休みか』と尋いた。漱石先生は無論先方が此方を學生と認めてさう尋く事と思つて『今日は休みだ』と答へた。それから先方がいろ〳〵のことを尋くので相當の返答を爲て居ると段々話が喰ひ違つて來るやうになつて、これは少し異樣だなと思つて居るうちに到頭先方から判然と『お前は造兵へ出るのか』と尋いたといふのだ。この話は漱石先生が前の話ほど描寫的には話され無かつたので是れ切りしきや書け無いが何にしろいろ〳〵な者に間違へられたものでは無いか。

これは明治四十年頃のこと、漱石先生の今の早稻田南町の家へしかも庭先へ入つて來て先生に逢ひ度いといふものがあつた。先生が出て見られると椽先に十四五の少年が立つて居る。『用は何だ』と尋くと懷から英語讀本を出して、『讀めぬ所があるから其所を伺ひ度いのだ』といふ。先生が『お前は俺の所へ來れば分かると思つて來たのか、それとも當て無しに來たのか』と尋くと『多分分かるだらうと思つて來た』といふのだ。――この問答では漱石先生の方が負けたといふ評である――で又『これから毎日尋きに來る積りか』と問ふと『いや今日だけで宜いのだ』といふのであつた。で少年を椽へ腰掛けさせて置て英語讀本の烏が木の實を啄つくといふやうな所を讀んで遣つた。前後を見ると一面に假名が付いて居る。烏の所ばかりは假名無しであるので何處でか習つて居るのかと尋くと、何處か牛乳屋かなんかに奉公して居て大學生の所へ夜學に行くのだが烏の部分だけは缺席して拔けたので尋きに來たといふのであつた。少年は二三ヶ月前に田舍から出て來たものであつたさうだ。夏目氏の直話を聞いた時には非常に面白く思つたが僕の取次では何うも十分にその興味を傳へることの能きないのは殘念である。

△

これは又聞きの物語であるのだが、漱石先生が帝國大學で教へて居られた時學生の中に一人何時も隻手(かたて)を懐にしたまゝで講義を聞いて居る者があるのに漱石先生は氣が付いた。一面に於て潔癖な几帳面な漱石先生は、その學生の姿勢が甚く癪に觸つたと見えて、或る日の講義中に講壇を下りその學生の傍へ行つて『手をお出しなさい』と少し鋭つた聲で云つた。學生は顔を赤くしたのみで何とも返答せず又手も出さ無い漱石先生更に強く『手をお出しなさい』と云つた。が學生は一層赤くなり魚の如く默して居るのみでどうしても手を出さ無い。夏目漱石先生も爲方が無いものだから講壇に戻つて如何にも不機嫌さうな樣子で講義を終つた。

とその後になつて何時も手を懐に入れて居た學生の友人が漱石先生の家へ行つた。そうしてその友人は、その手を出さ無かつた學生は手を怪我して居る男なので手を出さ無かつたのでは無くして手が出せ無かつたのだと漱石先生に向つて說明した末にその友人は『下世話にも無い袖は振られ無いと云ふではありませんか』と警句一番した積りで云つた。

眞面目な漱石先生はその學生に對して甚く氣の毒がつた。が重厚なる紳士漱石先生は唯だまことに惡るかつた氣の毒なことを爲た先方へ宜しく僕に代つて挨拶して呉れ給へと云ふやうな意味のことを云ふだけでは——普通の人がさういふ塲合には大抵云ふやうなことを云ふだけでは——漱石先生自身氣が濟ま無かつた。漱石先生は此の際自分をも笑つて了まひ度かつたのだらう——傳者はさう云つて居る——漱石先生

は澁い顔をして斯う云つた——

『僕等は無い學問を出して講義を爲し居るのだ。……君も氣が利かんでは無いか。無い手位出して呉れても宜いのに』

溫情の裕かな夏目さん

內田魯庵

夏目さんとは最近は會ふ機會がなかつた。その作も殆んど讀まない。人の評判によると夏目さんの作は一年ましに上手になつて行くと云ふが、私は何故だかさうは思はない、と云つて私は近年は全然讀まないのだから批評する資格は勿論ないのである。

新聞記事などに據つて見ると、夏目さんは自分の氣に食はぬ人には玄關拂ひをしたり又會つても用件がすめば『もう用がすんだから歸り給へ』ぐらゐに云ふやうな人らしく出てゐるが、私は決してさうは思はない。私が夏目さんに會つたのは、『猫』が出てから間もない頃であつた。夏目さんは氣むづかしい獸つてゐる人だとやらに平生聞いてゐたから會ひたいとは思ひながら、つひ其の時まで見合せてゐたやうな具合で……。初めて會つた時だつてわざ〳〵訪ねて行つたのではなかつたが、何かの用で千駄木に行つたが、丁度夏目さんの家の前を通つたから立寄ることにした。一體私自身は性質として初めて會つた人に對して

は餘り打ち解け得ない、初めての人には二三十分以上はとても話してゐられない性分である。ところが、どうした事か、夏目さんとは百年の知己の如しであつた。丁度その時夏目さんは障子を張り代へてをられたが、私が這入つて行くと、かう言はれた。

『どうも私は障子を半分張りかけて置くのは嫌ひだから、失禮ですが、張つてしまふまで話しながら待つてゐて下さい』

そんな風で二人は全く打ち解けて話し込んだ。私は大變長座をした。夏目さんは人によつて或ひは門前拂ひをしたり佛頂顏したりすると云ふが、それも本當だらう。然し私は初めてからそんな心はしなかつた英雄人を欺くと云ふから、或ひはさうかも知れんが、然し私はそんな氣持はしなかつた。その後は何かの用があつたりして、ちよい〳〵訪ねて行くこともあつたが、何時でも用談だけで歸つたことがない。お忙がしいでせうから二十分位と斷つて會ふときでも、矢張二三時間も長座をするのが常例だつた。

夏目さんは好く人を歡迎する人だつたと思ふ。空トボケた態度などを人に見せる人ではなかつた。それに話が非常に上手で、と云ふのは自分も話し客にも談ぜさせることに實に妙を得た人だつた。元來私は談話中に駄洒落を混ぜるのが大嫌いである。私は夏目さんに何十回談話を交換したか知らんが、唯の一度も駄洒落を聞いたことがない。それで夏目さんと話す位ゐ氣持の好いことはなかつた。夏目さんは大抵一時間の談話中には二回か三回、實に好い上品なユーモアを混へる人で、それも全く無意識に迸り出ると云つたやうな所があつた。

また夏目さんは他人に賴まれたことを好く快諾する人だつたと思ふ。隨分いやな賴まれごとでも快く承

諾されたのは一再でない。或る時などは、私は萬年筆のことを書いて下さいと頼んだ。若い元氣の好い文學者へでも、こんな事を頼まうものなら、それこそムキになつて怒られようが、先生は別に嫌な顏などはせられなかつた。たゞ『僕は困る』と言はれた。と、私は、『いゝえ、惡くさへ云はねば好いから……調法なものだ位ゐに書いて下さい』と頼んだ。そんな風で、云はゞこちらで書き上げた物に唯署名して貰ふ位ゐにしても快諾されたことがある。

私は夏目さんとは十年以上の交際を續けたが、餘り頻繁に往復しなかつたせいでもあらうけれども、たゞの一度も嫌な思ひをさせられたことがない。成る程、時としてはつむじ曲りだと世間に言はれるやうな事も有つたか知れない。千駄木にゐられた頃だつたか、西園寺さんの文士會に出席を斷つて、面白い發句を作られたことがある……その句は忘れたが、何でもほとゝぎすの聲は聞けども用を足してゐる身は出られないと云ふやうな意味のことだつた。

○

夏目さんは門下生には大變好かつた。また家庭も至極圓滿のやうに思ふ。近頃新聞など色々のことを書くさうだが、そんなことは何かの感違ひだと私は思ふ。尤も病身の爲めに時には氣むづかしくなられたのは事實だらう。子供のことには好く心を懸けられる性質で、日曜日には子供がめい〳〵の友達を伴れ込んで來るので、まるで日曜幼稚園のやうだと笑つてゐられた。

作から見れば夏目さんはさぞかし西洋趣味の人だつたらうと想像する人もあるやうだが、私の觀たとこ

ろでは全く支那趣味の人だつた。夏目さんの座右の物は殆んど凡て支那趣味であつた。

硝子のインキスタンドが大嫌ひで、先生はわざ〳〵自身で考案して橋口に作らせたことがある。ところがその出來上つたインキスタンドは實に嫌な格好の物で、夏目さん自身も嫌で仕樣がないとこぼして居られたことを記憶してゐる。

左樣、原稿紙も支那風のもので……。特に夏目漱石さんの嫌いなものはブリウブラクのインキだつた。萬年筆は絶えず愛用せられたが、インキは何時もセピアのドローイングインキだつたから、萬年筆がよくいたんだ。私が一度、いゝ萬年筆を選んで、自分で使ひ慣らしてからインキを一瓶つけて持たせてやつたことがあるが、そのインキがブリウブラクだつたので氣に入らなかつたさうである。夏目漱石さんは有ゆる方面の感覺にデリケートだつたのは事實だらうが、別けても色に對する感覺は特にさうだつたと思ふ。

『ブリウブラックを使へば帳面を附けてゐるやうな氣がする』と好く言はれた。

その割に原稿は極めてきたなかつた、句讀の切り方などは目茶だつた、尤も晩年のことは知らない。そのくせ書にかけては恐らく我が文壇の人では第一の達人だつたらう。

修善寺時代以後の夏目さんは餘り往訪外出はされなかつたやうである。その當時、私の家に來られたことがあるが、『一ヶ月ぶりで他家を訪ねた』と言はれた。その頃は多分痔を療治してゐられたかと想ふ。生れて初めて外科の手術を受けたとのことで、『實に聊かな手術なのに……』と苦笑して、そして手術の時のことを話された。

輕い手術だから醫者は局部注射の必要もないと言つたが、夏目さんは強ひてコカエン注射をして貰つた上に、いざ手術に取りかゝると實に痛がる樣子を見せたので、看護婦どもが笑つたさうである。そんなことを話してから夏目さんは『近頃、主人公の威嚴を損じた……』と言つて笑はれた。

前にも言つた通り、私は夏目さんの近年の長篇を殆んど讀んでゐないと云つて宜しい。よし新聞や何かで斷片的には讀んでゐるとしても、私は矢張り初期の作が好きだ。特に短篇に好きなものがある。『文鳥』のやうなものが佳いと思ふ。『猫』、『坊ちやん』、『草枕』、『ロンドン塔』、『カーライル博物館』、こんなものが好きだ。

要するに夏目さんは、感覺の銳敏な人、駘蕩落を決して言はぬ人、談話趣味の高級な人、そして上品なウイットの人なのである。我が文壇には此の方面で獨自の人であつた。夏目さんには大勢の門下生も在ることだが、然し皆夏目さんの後を繼ぐことは出來ない傾向の人ばかりのやうに思ふ。たゞ一人此處に擧ぐれば、現在は中央文壇から遠ざかつてゐるけれども、大谷繞石君が居るだけである。この人は夏目さんの最も好い後繼者ではあるまいか。

そしても一つ付加へれば、夏目さんは、殆んどと云つても好い位ゐ西洋の新らしい作を讀んでゐないと思ふ。

それは三四年前に、マローの『ファウスト』とかスペンサーの或る作とかを頻りに耽讀してゐられた事から見ても解るであらう。（談）

英文學の感化

長谷川天渓

夏目漱石氏と私とは特に親しい關係はなかつたけれども、私は先輩として常に尊敬してゐた。漱石氏が我が文壇に於ける大家であつたことは誰も知らない者はないほどに好く知れ渡つた方であるが、特に英文學の特色を最も好く我が國に輸入せられた方と私は見てゐる。つまり英文學の特色を日本化して自家の作に現はされた人であつて、別けても英國流の極くあつさりした上品なユーモアを有つてゐられた。この點では恐らく我が文壇に於ける唯一の人と云つて好い。

文章が緻密で隙間がなくて、しかも秩序井然としたところ、心理描寫の細かく行き渡つたところ、筆が自由自在に走つた所は英文學の最も好い特色を咀嚼して書かれたものと見られよう。元來、漱石氏はそんな方面に非常な特徴を有つてゐられたのであるが、それ等を助けてます〳〵鮮やかに成長せしめたものは即ち英文學の影響であると私は思ふ。漱石氏の作にも亦性格にもグルーミーな點が少しもなかつた。ロシア文學に現はれてゐるやうなグルーミーな氣分は全然見出されない。これは要するに英文學の感化であつたらう。

漱石氏は又一方から云へば悟りの人であつた。現實を認めることは好く認められた。と同時に理想も有

つてゐられた。しかし現實に走られることなく、また理想に執着されるといふ跡もないやうに思ふ。氏は張り詰めることをせられなかつた。夢中になられなかつたいつも〳〵綽々たる餘裕を以て生活もせられ亦作をもせられたやうである。いつも四方八面縱橫からものを觀察して作をせられた。そこがつまり漱石自身の所謂低徊趣味の生じたところであつて、これと英文學の特長とが相依つて氏の藝術を形作つたのである。

物を八面からよく〳〵觀察して書くといふことは日本文學——過去のものにも現今のものにも——に最も缺けた點ではないだらうか。この點で其の缺陷を塡めた者は實に漱石氏唯一人であつた。張り詰めた作ばかり多い我が文壇に於て、あのやうな態度を持して行かれたことは實に面白い。これは又とかけがへのない我が文壇の寶物である。この點では漱石氏の前に漱石氏なく、後にも亦無いわけである。

漱石氏は趣味が廣く、優れた學者であり、頭腦が非常に確かりして明晰であり、そして前述のやうな態度で人生を觀られたのだから、人生の有ゆる方面が能くはつきり見えたことを思ふ。氏の作品も初期のものは可なり洩らさず讀んだし、近頃新聞に發表されるものは斷片的には讀んでゐるが、作そのものに就ては特に言ふことが出來ない。この方面に批評をするには更めて今一度あらたに讀み返へさなくてはならぬから……

前に述べた、英文學の大家といふ事に就て念の爲め言うが、元來英文學の大家と云へば誤解せられる恐れがある。普通我が國で用ゐる英文學の大家なる言葉の意味に據れば、語學や歷史の大家を指すやうに聞えるが、夏目漱石氏はそんな意味での英文學大家ではない。氏は英文學を最も好く表はした人、日本化した人、その長所を取り入るゝに比類のない人なのであつた。上品なリファインされた紳士であり藝術家

であつた。

世間には、ともすれば、漱石氏が非常なつむじ曲りであつたかのやうに言ふ人もあると聞いてゐるが私は決してさうは思はない。私は却つて反對の見解を有つてゐる。ずつと以前、西園寺公が文學者連と會合をしたとき——詰り雨聲會のことだが——漱石氏や二葉亭が其の會合に出席しなかつたので、或る人々は氏をつむじ曲りのやうに思つたかも知れないけれども、氏自身に言はすればあべこべである。漱石氏は自身が餘りにまつすぐな人だつたのである。自身が餘りに眞直なところから却つて世間に誤解されたかも知れない。少くとも氏自身はさう解釋してゐられたことだらう。

『坊ちやん』の主人公のやうに漱石氏は餘りにまつすぐな人だつた。非常に垢脫けた、或る意味に於て交際の上手な人柄であつたことは否定されないけれども、決して世才子ではなかつた。また頭腦が人一倍明晰であり、洞察力が鋭く、江戸ッ子的のあつさりした氣質の人だつたから、つまり俗人離れのした性格の人だつたから、他人に對する感情は非常に淡泊であつたらうと思ふ。で、氏に毛嫌ひされたと思はれる人でも、本當は案外嫌はれて居らず、又氏に愛好されてゐたと思はれる人でも實際は案外あつさりしたものだつたかも知れない。好い意味で、氏のデリケートな觀察の好材料に供せられてゐた人が案外に多かつたかも知れない。

兎に角、漱石氏の氣質や態度は文學者として實に尊むべきものであつた。（談）

夏目氏について

正宗白鳥

私が初めて夏目金之助といふ名前を知つたのは、田舎にゐた時に取寄せた早稲田の規則書によつてゞした。英文學の講師として出てゐたので、名前に興味があつたゝめかよく覺えてゐました。氏の性行の脫俗的なことや學識に富んだことを初めて聽いたのは、讀賣新聞で大學教授の評判記を書いてゐた頃、畔柳芥舟氏をお訪ねした時でした。當時ホトゝギスに出て居た俳體詩を讀んで面白いと思ひました。

その後一時讀賣の主筆であつた竹越三叉氏の命を奉じて同氏を東片町のお宅に訪問して、日曜附錄へ載せる原稿を依頼したことがあつて、その際二度氏におめに掛つた譯です。私へ宛てゝ原稿を送つて貰つたり、西片町へ轉居された通知も頂きましたが、それつきり氏に接することはなくなりました。用事がないのに他人——殊に先輩——を訪問することの嫌いな私は、矢來に住んで、早稲田のお宅の前は毎日のやうに散歩してゐた時分にも、一度もお訪ねしませんでした。

新聞小說はあまり讀まない私は、氏の作物も極めて少しゝか讀んでゐません。「道草」と「心」とを略々通讀したくらゐで、他はほんの飛び〳〵に目に觸れたくらゐなものです。今になつて思ふと「道草」「ロンドン塔」などが氏の本領を發揮した今の文壇に類のない傑作で、道草などはさう大したものぢやないかと思はれます。もつと歲を取つたらどうか知らないが、今までゞは氏の作物に共鳴を感じたことはありません

「心」などは理窟でこねまわした作物のやうに思ひました。氏の作物には女同士の話がまるで外交談判でもしてゐるやうに思はれるところが多いやうです。

私が氏に同感してゐる點は氏の胃病で苦しまれたことです。私自身の前途が氏の病狀を讀んで不安になりました。「死んぢや困るから注射をして呉れ」と、醫師に歎願されたと新聞に出てゐましたが、この一言が氏のどの作物よりも私の胸に鋭くこたへました。文學藝術なんて畢竟遊戲文字に過ぎないかも知れませんが、「死んぢや困るから……」には私達人間のどん底の心の聲が感ぜられます。

氏は嘗て中央公論で漱石合評をされた時に、それを大變いやがられたとか聞きましたが、今また漱石號などを出されるのを生前に知つてゐられたらさぞいやがられたことでせう。

腰の据つた人

秋田雨雀

私は夏目さんの人柄も作物も餘り能く知つてゐる人間でないことを先づ御斷りしておきます——もう少し時すぎてから夏目さんの作や文學論や其他のものを比較して、夏目さんの持つてゐた人生觀とでも云ふやうなものを調べて見たいと思ひますが、今此處では夏目さんから受けた私の印象だけをざつと述べて見たいと思ひます。

私は、夏目さんといふ人は所謂出來上つた側の一人であると思ひます。一體出來上つたと云ふことは何を意味するのか、その言葉にも種々の意味はあるが、此の場合では單に作家としてゞもなく、亦思想家としてゞもなく、唯漠然とした意味で、腰の据つた人の意味である。而して何時でも夏目さんは、夏目さん自身の人生觀で生きてゐられたやうに思はれる。其の人生觀の善惡、高低、其の評價は別問題として、日本のやうな——特に今日の日本のやうな——動搖し易い、即ち何となく、そは〳〵として、前後左右を顧慮し、他人の思惑を慮り、時代の顏色を眺めたりして居ねばならぬ今日の日本人には、ちよつと珍らしいタイプであることは確である。

夏目さんその人は、隨分時代を構はぬ人である。西洋風にいふと、一種の時代錯誤の人である。嚴密な意味では夏目さんは現代の日本に生きてゐなかつた。さうかと云つて夏目さんの考へは、全然歐羅巴風かと云へばさうでもなく、亦純日本式でもない。例へば俳人の系を引いてゐる日本風の思想を持つてゐたかと云へば、さうでもない。矢張夏目さんは、自から作つた哲學の中に生きた人である。私は、氏が假令作家として立たずとも、餘程面白い人で、可成に仕事をした人ではないかと思ふ。而しそれかと云つて、文壇以外の社會で、あれだけ腰の据つた、自己の人生觀で生きて行く人が、日本の現代の他の社會で、立派にやつて行けるかどうか疑問だと思ふ。私は矢張、文壇の中に生き、文壇の中に逝かれた夏目さんを幸福であつたと思ふ。たとへ今の文壇の人で銀行や會社の仕事をしても、相當に仕事も出來、可成の成功を贏ち得る人があるかも知れぬが、今日の文壇で、自己の眞人生觀で物を云い、物を書いてゐる人は實に少ないのである。今日の日本文壇では、歐羅巴の保證がなくては、思切つて物を云はれないやうである。日本の

社會では正直に自己の考を述べたり、正直に自己の考を實行したりするのは、喜ばれない。かう考へて見ると、夏目さんは、やはり大學教授や、他の仕事よりも、文壇で生きられたのが幸福であつたと云はねばならぬ。夏目さんの如きは、時代に逆行することも出來、時代に全く無關心であることも出來た人である。時代に逆行し若くば無關心であることの出來る人は、何等か大きいある力を持つてゐなくてはならぬ。それは心持と金である。夏目さんは吾々の時代には珍らしくある心持を備へた人であつた。

作家としての夏目さんは、とかく歐洲の影響を受けて動いた現代の作家、例へば私達の先輩、島崎藤村、田山花袋、德田秋聲等の諸氏から、全く領域を異にした人のやうに思はれる。島崎藤村、田山花袋、德田秋聲の諸氏と同時代若くば以後の時代の人々は、殆ど同一の線上にあるやうに思はれる。所で夏目さんだけは此等の人々と全く行き方も、一生觀も藝術も異つてゐた。私達の注意を惹くのは其點である。夏目さんの初期の作『我輩は猫である』を許して歐洲作家の影響であると云ひ、亦其他の作『三四郎』や『門』などに現れてゐるユーモアやアイロニーを英國文學の影響と見る人もあるが、私は單に外來の影響のみとは見たくない。人は單に外來の影響のみで動くものでない。このユーモア、このアイロニー、何れも我々の祖先の血の中に潛んでゐたものであり、亦それが夏目さんの體質の中にも、境遇の中にも、沈澱してゐて徐ろに吐き出されたものであると思ふ。

想像の豐富な點では、日本の現代の諸作家の中に、全然比較を見出すことが出來ぬ。今、朝日に連載されてゐる『明暗』などを見ても、殆ど病的では無いかと思はれる程想像が豐富である。あとから考へると馬鹿らしい、夢のやうな描寫でも、氏の文章を讀んでゐる中は、眞の現實で、少しも僞がないやうに思はれる。

その點から考へると夏目さんは、近代の日本の文章に一個の力を與へた人である。其れが必ずしも歐洲の影響のみでなく、日本人が昔から持つてゐた所のものである。氏の文章の中では或場合は甚だゴタ〳〵した、投込んだやうな文章を用ひ、亦他の場合では甚だ幼稚な文章を用ひて、併も讀者を惹いて行くのである。此等の文章は其自からが力であると共に、亦氏の人格、性癖、生理狀態から離れて考へらるべきものでない。如何なる作家の作物も、その人の人格を離れて考られぬのは勿論だが、殊に夏目さんの場合に於いてさうである。私は近頃ある友人と語つたことですが、氏の作の中には極く短い文章があつて、それは夏目さんでなくては書けぬ癖、色彩が這入つてゐる。若しあの人格とあの生理狀態とを持たずして、あゝした文章を書いても、讀まれたものでない。此影響が若い門下の中に現はれたとしても、門下の人々には眞似られまい。其れと云ふのも氏の思想は若い人々に影響しにくいと云ふ理由もあらうが、亦氏の人格、性癖、生理狀態に特異なものがあるからである。

夏目さんの思想や、藝術が將來の藝術界に、どんな影響を齎すかは一口には言はれぬが、私の考へでは、在生時代に愛せられた割合に、次の時代では作家として明確な影響や感化を殘すまいと思ふ。其は吾々の時代に對して餘りに出來上つた人であつたからである。唯氏から學ぶべきことは『人は唯常に自分の人生の爲めに自己の人生觀を持ち、自分自身で自己の途を進まねばならぬ。將來どんな變動が起らうと、吾々は泰然と其れを切り抜けられる自分自身の力を養はねばならぬ。それでなくては如何程騷いでも、もがいても駄目だ。』と教へた所にある。

私は時々夏目さんに遇つた時の印象を思出す。氏は世間を知り盡し、人情を味ひ盡した人だと思ふ。世

の中には我々青年の生活を知らず、現代から全く離れてゐながら、求めて現代の仲間入りせうとする人々もあるが、夏目さんは現代生活を充分知つてゐて、併も現代に無關心であつた。これは甚だ大膽なやうであり、亦ある人にとつては殆ど堪へがたいことである。併し氏にとつては平氣の平座であつた。更に氏の人格をある人は『笑はぬ人だ』といふたが、私の考へでは夏目さんの目は同じ程度で常に微笑してゐるやうな氣がする——或は間違つてゐるかも知れぬ。（談）

彫刻にしたら可い顏

島田青峯

夏目さんの事をといふ御尋ねですが、これといふ深い思ひ出もありませぬ。私の知つてゐる事は大方新聞雜誌に出てゐる範圍を出ませんし、又夏目さんの門へ親しく出入される人達から聞いた事も無いではありませんが、それはさういふ人達からお話しがあらうと思ひますから、かた〳〵何にも無いわけです。

私が夏目さんのお宅へ伺つたのは國民新聞で文學欄をやつて居る頃が初まりで數回位しかありませぬ。それも差し當つての用事で行くのですから、しみ〴〵話を伺つた事は無いといつて可いのです。それから謠の會とか芝居とかで一緒になつた事もありました。いつであつたか二月頃だと思ひます。隨分寒い頃でしたが、あのお宅へ伺つて書齋の疊の敷いてある方の所でお話を伺つてゐました。その時シユークリーム

を一つ戴いたのです。私はいきなりバクリとやると、あの中のクリームがドロ〳〵と私の膝の上へ落ちました。聊かあわてゝそれをハンケチで拭き取りますと、夏目さんは、あのいつもの通りの非人情的とでもいふのですか、口許を少しどちらへか曲げて、微笑を含まれて、「そこにも付いてゐますよ」と私の胸のあたりを指されました。私の羽織の紐にくつついてゐたのです。私の頭にはこの時の夏目さんが一番はつきりと殘つて居ます。前掛を着けて泰然と構へてゐられるところ、溫容のうちに何物かを藏してゐて、親しむべくして、犯し難いとでもいふやうな態度と受け取れました。こんな事をいふと禮を失するかも知れませんが、夏目さんの顔は彫刻にしたら面白からうと、常々考へてゐましたのですが、臨終の晩、新海竹太郎氏がマスクを取つたといふ事を新聞で見て、自分ひとりでこれある哉といふやうな感じがしました事です。

夏目さんの作品は殆ど殘らず讀んだやうに思ひますが、それ等の評をする事は他に其人があらうと思ひますから差し控へます。強ひて私の好惡を言へば早い頃のものでは「倫敦塔」とか「草枕」とかいふやうなものが好きですし、近頃のでは矢張り「明暗」が好きです。「虞美人草」はどうしたものか私は好みませぬ。

夏目さんに世評の通りつむじ曲りとか偏介とかいふやうな性質があつたとしたら、夏目さんをして斯くならしむるに至つた何等か深い動機とか原因とかが早くどこかにあつたのではありますまいか。夏目さんといふものを徹底的に理解せんとするにはこゝまで遡るべきものではありますまいか。さうして初めて夏目さんの人生觀も分かるのだらうと思ひます。

何にしても未だ〳〵生きてゐて充分立派な藝術を見せて貰ひたかつた。まだ五十といふお年ですからね。

初めから固定して居た人

島村抱月

私は個人的に漱石氏と會つたことは二度か三度だから、直接人としての漱石氏は知らない。またその作品にも、特に最近のものは餘り讀んでゐない。だから最近どんな風に作品なり思想なりが變化したか私としては分らないのである。

私の知づてゐる範圍に於て考へて見ると、漱石氏の味ひは云ふまでもなくロシアでもなくドイツでもなく亦恐らくフランスでもないのである。やはり純イギリス若くば一歩を踏み出してアイルランドの味はひに違ひない。

あの人のものは、創作を讀んでも評論を讀んでも殆んど同じ味はひである。所謂低徊趣味といふ話もあつたが、それよりかあの人が多くの創作なり評論なりに依つて豐富にクリエートして與へて呉れるものはあのパラドキシカル・ヴユーである……丁度かゞんで股の間から景色を見るやうな具合に、尋常のものを逆樣に見るところに出て來る。そんな風にして出てゐる知識なり感情なりの味はひが人の注意を索いたものであると思ふ。

あの人の人生觀の如何なるものであつたかは私は知らないから、それは差しおいて、どうもあの人は最初から腰の据つた人生の觀方をしてゐた人ではなかつたかと思ふ。前にも言つた通り晩年の作品を讀まな

いから分らないけれども、恐らく餘り變化をしない作者ではなかつたか、人間に於ても創作に於ても。

世間には動搖する者と固定したものとの二者がある。一個人の生活にしてからが、初めから終りまで動搖してゐる人と、初めから終りまで固定してすます人と、概して若いうちに動搖して年齡の加はると共に固定して行く人などがある。西洋には固定した生活をしながらも徹底する人があり、また初めから終りまで動搖を續けながらに徹底した生活をする人もあること言ふまでもないが、日本ではさうは言はれない。これは日本の社會狀態の結果や日本人の生理作用の結果が然らしめるところであらうが、概して言へば、日本人は固定すれば徹底し、動搖をつゞければ徹底しないのである。隨つて、青年と老年とが、かつきり區別が附く。つまり動搖した生活は若い者の特有であり、年を取るに從つてだん〳〵固定して來るやうなわけである。

日本現代の作者を見ても、この二色がはつきり目立つて別れてゐる。そして動搖生活から固定生活に移らんとしつゝある中間の人も見られるのである。

漱石氏の如きは恐らく初めから固定した人生觀に腰をすゑた人ではなかつたらうか。尤も氏が文壇に出られたのは比較的年を取つてからだから、動搖はそれ以前に通過したのかも知れない。（談）

新ロマンチシズムの第一人者

小川未明

私は數年前に早稲田南町に住んでゐた時があつた。その時分は漱石氏のお宅はぢき近所であつたけれども、元來何處へも行くのを好まない私は遂に其處にゐる間に氏をお訪ねすることはなかつた。しかし氏の作物を通じて、また人の噂を通じて、其の人となりを非常に懐しく思つてゐた。氏は日に幾回となく近所の町外れの郊外を散歩するのであつた。そしてたび〳〵氏が江戸川の附近を歩いてゐられるお姿を見た。が、その後は永い間氏の姿を見ることがなかつた。

この夏、鈴木君の令閨のなくなられた葬式のとき、教會堂で氏の姿をよそながら見たが、その時氏のお頭が大變白くなつてゐるのに氣がついて、そして昔のことなど憶ひ合せながら、そこに長い月日の經つたことを考へさせられた。

氏の作のうち最も鮮かに記憶に殘つてゐるのは、『倫敦塔』や『幻影の盾』で、それらの作には靜かな冷たいものゝ中に輝かしい色彩のあるロウマンテイックなものが光つてゐる。私が氏に就て感じたことは、何よりも先づかの自然主義の當時であつた。今更こゝに云ふまでもないが、作品に對する嚴肅と云ふことは獨り自然主義の作家のものに止らないことである。美と詩に憧がれる心は浪漫派の作家に取りても嚴肅なものである。

單に外形に現はれた現實のみが現實の凡てゞはなく、我々の生活が生む幻想、想像、憧憬も亦人生の事實であること論を待たない。然るに自然主義の勃興した當時、既に可なり一家をなした文壇の人々は脆くも自己の主張や主義を捨てゝ直ちに自然主義に迎合して行つた。中には從來の自分の態度が誤つてゐたことを告白した人々もある。自ら自然主義の作家と名乘らねば恥と思ふやうな人さへあつたのである。

そんな間にあつて、漱石氏は自家の主義主張を執つて行かれた。當時の批評家は低徊趣味を笑つたりしたのであるが、しかし其の趣味が單なる一種の骨董的な趣味でないことは勿論である。此の所謂低徊趣味の中には、もつと深く人生を味識するところの深い考へがあつたこと言ふまでもない。そして其處にロマンチシズムの限りなく美しき情操も在つた。

氏が『坑夫』を書かれたときから、氏の純な神秘的なロウマンチシズムとは大分おもむきを變へて來た。けれども一種の人間生活若くは感情を哲理的に見ることはずつと變らずに續いたと思ふ。

遠い眞理の世界に魅せられるやうな此の味はひが私は懷しい。あくまで情味があつて、また遠く考へさせられる力は、過去の文壇を通して唯氏一人あつたばかりである。

今、忽焉として氏が逝かれたのは、私に取りて非常な驚きであつた。しかし五十年間に氏がなされたものは、藝術家として充分に偉大のものだつたと私は思ふ。私はこんな藝術家の死去を尊敬すると共に、これに依つて自分の今後を非常に激勵せられるものがあつた。（談）

夏目先生

久保田万太郎

夏目先生に、私は、機會がなくつて、とう〳〵、お目にかゝらずじまひでした。

ですが、先生には、私は、種々、御厄介になつてゐます。

私が、まだ、小説も何にも書かない前、私は、始終、松根東洋城氏のところへ、遊びに行つてゐました。さうして、始終、松根氏から、先生のおうわさをうかがつてゐました。

ところで、明治四十四年の夏、私の、はじめて書いた小説が、「三田文學」に出たとき、朝日新聞の文藝欄で、小宮豐隆氏が、大へん、同情のある、長い、批評を、書いて下さいました。そのころ、小宮氏はいふまでもなく、文壇に、知合といつては、唯の一人も持つてゐなかつた私にとつては、全く、それが、思ひがけない出來事でした。私は、嬉しかつたまま、松根氏に、それを話しました。

すると、その後、會つたときに、松根氏が、「先生がさういつてゐた、あの小説は、小宮よりもさきに、先生が讀んで、先生が面白いといつたのださうだ。」といふやうな意味のことを、話して呉れました。——私は、さすがに、なんだか、晴れがましいやうな氣になりました。

小宮氏には、その後、半年たつて、自由劇場の「寂しき人々」のときに、お目にかゝりました。それから、つづいて、學校や、芝居で、屢々、お目にかゝるやうになつたとき、時折、今度は、小宮氏から、先生のことを、種々、うかゞふやうになつて、そのうちに、一度、何かの機會に、先生に、お目にかゝりたいと考へました。

すると、一昨年の夏、朝日新聞で、武者小路氏や、里見氏や、長田氏の、十回づゝ位の、短い小説を載せる計畫が出來たとき、小宮氏を通して、先生から、「お前も何か書かないか」といふことでした。「もし書く氣があるなら直接に、先生のところへ返事をするやうに」といふ小宮氏からの何で、そこで、はじめて、

私は、先生のところへ手紙をさし上げました。

ところが、これが、私の、小説の書けなくなつた當時で、書きかけて、途中で、どうにも全く、アガキがつかなくなりました。期日を三度まで延ばして頂いて、それでも、なほ、五十枚に足らない原稿が出來上りませんでした。その都度、先生から、叮寧なお手紙を頂戴して、私はもう、何うにもならないやうな心もちになりました。そのときの苦しかつたことを、私は、いまに覺えてゐます。そうして、そのときの不始末を、いまに、申譯のないことに思つてゐます。

松根氏と、小宮氏のほかに、もう一人、本多(直次郎)氏が來て、よく、先生の話をして呉れました。本多氏の話によると、先生は、松根氏から聞いて、私が、小説を書くやうなことになつた前後の、それは、世間であんまり知らない事情を、種々、よく、知つておいでのやうな工合でした。——とにかく、今度、何か、キッカケがあつたら、本多氏に、南町まで、是非、連れて行つて貰ふつもりにして置きました。

何にしても、十日の朝、朝日新聞の五面をあけたとき、私は、ある、大きな、不思議な心もちに、そこに、被壓(ヘシ)れてゐたのでした。(十二月十八日)

十年經たねば

與謝野晶子

私は夏目先生とは殆んど交際がございませんでした。お亡くなりになりました時も、その御住所さへ知らないやうなわけで、御哀悼の手紙を差し上げることさへ出來ませんでした。四五日おくれて漸く森田さんの許へ御傳達をお願ひしたやうなわけです。

そんな風で直接お人柄にも親しみがございませんから、どんなお方であつたかは、ただ御作を通して、また人の噂を通して聞き知つてゐるぐらゐのもので、これと云つて取立てゝ申上げることもありません。

夏目先生は、ただえらい方だと思つてゐますだけでございます。御作も可なり拜見してはゐますけれど、ただ〳〵感服してゐるといふ以上には別に申上げる事もございません。私などはまだ〳〵今後十年も勉強しなければ、とても先生の御作に就いて批評めいたことを申上げる資格もないかと存じて居ります。先生の初期の作、たとへば倫敦塔などと近頃の『明暗』などとの間には著しい變化がありませう、が、これもまだ何とも申上げる資格がありませんから……。左樣、あまりおえらい〳〵と思ひ込んでゐるせいかも知れませんが、何しろ今十年も勉強しなければならぬと思ひます。（談）

歩いた道が異つて居た

田山花袋

私は夏目さんには一度も會つたことはなし、同じ時代に作家として立ちながら全く別の道を歩るいて來

たのだから、何等個人的の關係もないと云ふわけで、人としての夏目さんに就いてはお話しすべき何ものも有つてゐません。で、あの人の作品に就いてほんの鳥渡した感想をお話する事としませう。

私は夏目さんの作品が新聞などに現はれる都度、大抵は努めて通讀して來ましたが、その作品の孰れを讀んでも、一體何處がいゝのか解らない。いや、一口に云へば私は夏目さんのものに對しては理解の頭がないと云つた方が當つてゐるかもしれない。

併しながらあの人は本場まで出かけて行つて英文學を研究して來た人だから、作品の凡てが著しくその影響を受けてゐる事は明かです。例へばヂョージ・メレディスの如きは、詰らない事柄でも態と小むづかしく解剖して、小刻みに說明しようとしてゐるのであるが、夏目さんが矢つ張りその行方であつて、先づ最初に評判になつた「猫」などは煩鎖な英文學の影響を遺憾なく現はした好典型であると思ひます。

夏目さんは今まで吾々がたづさはつて來たやうな自然派の文學、大陸の文學を振り向かないで、充分英文學の味を咀嚼しめ、そして自分の創作を續けて來た人であるだけに、吾々とは全く行き方が違ふ。隨つてこれが私をして、夏目さんの作は何處がいゝのか解らないと云はしめる理由ともならうと思ひます。

ずつと以前に讀んだものは大方忘れてしまつたが、兎に角私が讀んだものゝ中で、まづ一等優れてゐると思つたのは「それから」です。道代とか云ふ女の心理描寫がなか〳〵巧いやうに思ひました。「門」なども前半は隨分面白いものゝやうに思ひましたが、後の半分が……さうですね。最近のものでは「明暗」も大分世間では評判になつたやうですが、私には矢つ張り解らない。

前にも云つた通り、煩鎖な英文學の、事物に對する諄々しい說明振りをそのまゝのやうな夏目さんのも

のは、普通一行ですむやうな事柄を細かく解剖したり、之れに面倒な説明を加へたりして十行ばかりも費してゐる場合が多い。例へば或る人物と他の人物とが相對した場合などの心理描寫が如何にも微細なところまで行き屆いてゐる。一人が何かを言へば他の一人がそれに對して、何んとか答へる、その一言一句に伴ふ相互の心理が實に細かい説明で以て描き出されてゐる。つまりあの人は凡ての人物を刻苦精勵して彫み上げようとしてゐたのです。

處で夏目さんの心理描寫は細かい、如何にも細かい所まで行き屆いてゐるが、それは極めて一般的な鎖細な場合を描いたもの許りで、グイ〳〵と首を絞めつけるやうな大問題には逢着してゐない。吾々が夏目さんのものを讀んで何時も物足りなく感じるのは此の點です、露西亞の作品などには恁うした痛烈な大問題に打つ突かつた場合が、抉るやうに描かれてゐるが、夏目さんのものにはさう云ふ所が皆無だと思ひます。尤も一面から云へば恁んなのは餘りに大問題に過ぎるのかも知れない。唯それだけです。（談）

漱石氏

島崎藤村

文學者の社會的な位置を高めるといふ上から言つても吾儕の時代に貢獻するところの多かつた漱石氏に對して、文學者としての獨自な態度を飽くまでも變へなかつた漱石氏のやうな頑固な日本人に對して、い

ろ〳〵な意味に於いて氏は英國風であつたといふことは、それが果して氏の賛辭になるや否やを知らない。學者であり、創作家であり、書齋の人であり、絶えず微笑をもつて人生の悲慘に對しつゝ筆を執つて居たやうな漱石氏は、何となく私にアナトオル、フランスの風格を偲ばしめる。

夏目漱石氏と高山樗牛氏

近松秋江

一つは私が若い時と、年を取つてからとから來る結果の相違かも知れませんが、大學出身の文士にして高山樗牛氏と夏目漱石氏とに對する私の心持ちには隨分の相違がありました。高山氏には私は殆ど隨喜憧憬してゐた。之に反して漱石氏には憧憬と云ふやうなことはなかつた。寧ろ專ら敬意を表してゐました。高山樗牛氏に比べると夏目漱石氏は飽くまでも智的であつて、意思の強い人であつた。樗牛氏も智意共に優れた人ではあつたらうが、それよりも感情の華麗なる點がより多く眼に立つた。尤も私が樗牛氏を憧憬した青年時代に漱石氏の文章に接したならば、或は樗牛氏に對して抱いてゐたと同じ感情を持つたかも知れませんが、既に壯年時のことであつたから、此方の批判も進み、盲目的でもなくなつて、自然幾許か醒めた心持ちで觀たからでもありませう。

が、樗牛氏には氏自身の感情の惱みが、私の胸に清新な共鳴を感ぜしめた。漱石氏にも自身の感情の惱

みがあつたかも知れぬが、氏はそんなことは努めて意思で殺して、智でそれに批判を加へた結果を表白する人であつたから、氏の書いた物には生な感情が出てゐない。その點が一面からいへば高山氏よりは老成してゐた所以でもあるが、何となく若々しいといふ味の失せてゐるところであらうと思ひます。

高山樗牛と夏目漱石とは赤門派の二大明星となつてゐるが、私は最初からどういふものか前いつたやうに樗牛氏に對したほど漱石氏に對してはその書かれた物に愛情を感じなかつた。併しそれは唯文章についていふことであつて、個人としては漱石氏ほどに樗牛氏には膝を接して話したことはなかつた。尤も樗牛氏は教室に於ける私の先生であつたが、自宅に於て親しく接したことは二三度に過ぎなかつたが、その時分は、そんなに打解けた話しもしなかつた。これに反して漱石氏には、之れよりもやゝ親しく接して居た。お目にかゝつて話をすると何でも人の話しをよく聞く人で、自身の方でもまた懇々縷々とよく話された。話の靜かな、懇切な、それでゐてその中に凛とした、冒し難い德義の感の迫つて來る人であつた。氏は五十年。樗牛氏は僅に三十二才であつたから、年齡から來る相違もあつたらうが、樗牛氏の常に感情が動搖してゐたのに反して漱石氏は夙に沈靜した人であつた。だから世間的に堅固な人格のお方であつて、樗牛氏のやうに不安動搖の人でなかつたゞけに、より多く敬意も表されるのだが、その敬意には、どこか畏れが伴つてゐるが、樗牛氏には恰も戀人に對する如き感がある。漱石氏は戀人とするには餘りに隙のない人であつたと思ふ。漱石先生は蓋し終生一人より他には婦人を知らなかつた、また知ることを欲しないほど道德堅固なお方でありましたらう。

要するに私どもの如き自墮落な人間にとつては、夏目さんは餘りに自墮落でなさ過ぎたけれど、それが

爲に文壇に重きを成した所以で、文壇を社會の他の部面に代表するには立派な代表的人格であつたのに惜しいことをした。十二月十日の朝の新聞を見て私は驚いた。そして頓に落莫の感に打たれました。

書かれた物では「草枕」などが最も特色のある、そして詞藻富麗な物と思ふ。五十年は少し早過ぎた。もうせめて十年存命へてゐられたらばと思ふが、併し文壇の人として十年餘りの仕事にしては隨分仕事をした方でありますから、五十年の生涯でもちやんと纏つた、そして十分生効ひのあつた一生であつたと思ふ。そして書畫などにも優れてゐられたといふことが、何となく、近代的のあはたゞしいのと違ひ、何處か文人らしい文人であつた。と思つて、倍々追惜の念に堪えません。

「猫」のモデル

尼子四郎

漱石さんにはお弟子その他の若い方々の交際も多かつたが、私などのやうな全く方面の異つた年寄り仲間とも呑氣な交際をされた。あの「猫」を書いて居た三十五六年頃は、千駄木五十七番地のつい私の家の近くに居たものだから、互に懇意して話しなどに行つたりしたが、私などが漱石さんのところへ行くのは、何もこれと言つて話しの種があつて行くのでなく、たゞ呑氣に遊びに行くだけであるのだから、それも長い間繁々と行つて居たので、これと言つて纏まつて思ひ浮ぶやうなことはない。

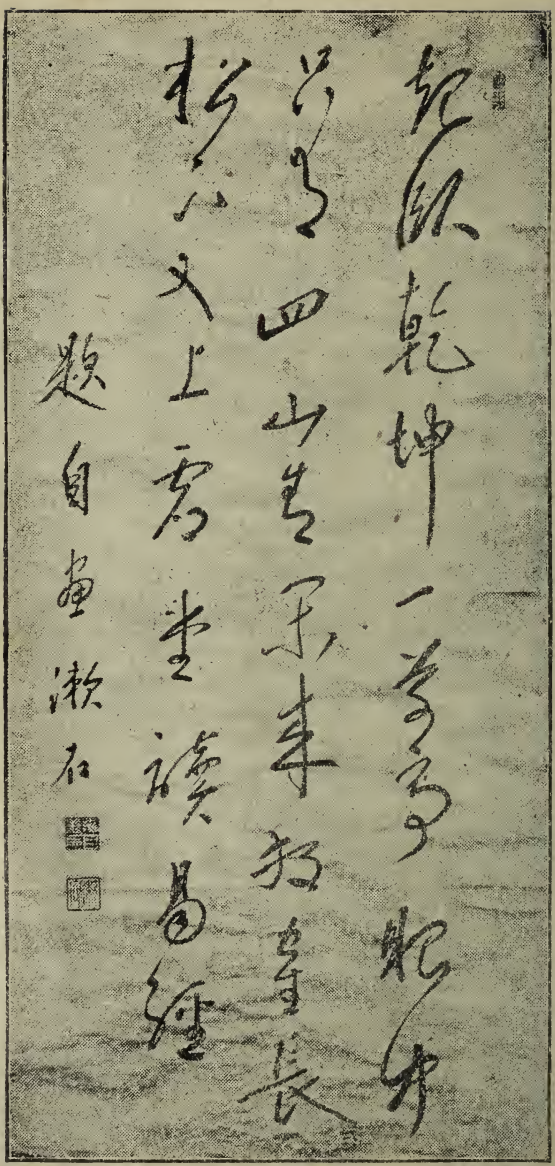
千駄木に居たころから胃の方が悪いと言つて、私なども診たこともあつたが、それよりは私の注意を惹いたのは、漱石さんの心理上に於ける醫學上の面白い現象であつた。言はゞ一種病的な現象なのである。尤もそれが漱石さんの藝術の上に現はれて居るとは思はない。しかし私は斷えずそれから目を離さなかつたし、それに就いて面白い話もある。漱石さんの紹介で懇意になつた寺田寅彦氏などもこの心理上の現象は認めて居て、時々私と語り合ふのであるが、今その現象について細かい說明をすることは、ある事情の爲めいさゝかはばかるところがある。

まあ私などの見た漱石さんは、いつも恐つたこともなく、不機嫌なこともなく、微笑をつねにたゝへた人で、こちらが天眞爛漫で行けばあの人ほど行きよいところは無かつた。漱石さんから云つたら、私などの行つて好きなことを言つたりするのは、小供の喋ぐのを親父が聞いて居るやうな量見であつたのだらう寺田寅彦さんなども、極めて交遊の少ない方なので、漱石さんの家が唯一の遊び場所であつたのが、亡くなられてからは遊び場所がなくなつたと言つて居られる。

私のことは「猫」の中に、天木醫師として書いてあるさうだ。あの時分千駄木の家に黑い大きな猫がのそり〳〵と歩いて居たが、ある時私が、これがさうですか、と尋ねると漱石さんは微笑をうかべて、これぢや無い、と云つて居た。

博士號の問題の時も私が、有効な清涼劑ですね、と云ふと漱石さんはたゞ笑つて、君もさう思つて居てくれるか、と云つたばかりで別に說明などをしなかつた。一體に自分のしたことを說明し無い人であつた。頼むことは嫌な顔をせずに何でもよく聞いて呉れた。昨年結城素明君が私に野原に雀が二羽居る繪を描

いて呉れた。漱石さんは兼ねて素明君を識つて居るから、その繪を漱石さんに見せて賛をしてくれと頼むと、この繪は漢詩で賛をしなけりあならぬが、漢詩は一寸困るなあ、と云つた。で私が、誰もあなたを漢



詩人と思つてやしないからいゝでせう、と云ふとハヽヽと笑つて漢詩を書いたが、あとで聞けば漢詩が得意であつたとのことだ。私共がどんな惡口を言つても唯だ笑つて居るばかりであつたが、小供が氏をあばた面と云ふのは敬稱のつもりだらうと言つて居たとのことだが、私共の惡口も、敬稱位に思つて居られ

なであらう。（談）

青い着物の御爺さん

中村武羅夫

私などが漱石先生のことに就いて語ることは、何だか差出がましいやうな氣がして、氣はずかしくてならない。

私が始めて先生をお尋ねしたのは、今から八年前のことで、住居は今の早稲田南町の宅であつた。當時私は新潮の訪問記者をしてゐたのでその用事からであつた。最近では紹介狀が無ければ會はれなかつたさうであるが、私はてんずけ伺つた。それでも先生は快よく會つて下されて、朝日新聞に入つて居るので書くことは出來ないが、談話なら差支へなからうと仰つて、私から提出した問題に親切にお話し下すつた。それから三四度雜誌の談話を取りに伺つたが、時によると、今差支へがあるから一時間ばかりして來て呉れとか、いつ何日に來てくれとか云ふ挨拶を、先生自身が玄關まで出て來てされた。一體訪問記者などをして居ると、見す〳〵ゐることが分つて居ても居ないと斷はられて、幾度も足を運ばねばならぬやうなことの多いものだが、そんな境遇にゐる自身に、先生自身が玄關へ來られて、親切にテキパキと仰やられた態度は、深く心に銘じて感謝したのであつた。

そんな關係から先生に尊敬と親しみを持つやうになつた。五六年前に私は自分自身の心持から、苦痛な絶望的の氣持になつたことがある。私にはいろんな知合もあつたけれど、自分の今の苦しい心持を打開けて、自分の行く可き未來の道を敎へて貰ひ度いと思つた人は、會つた度數も尠くまた深くもお近づきしない先生であつた。その時どうしてそんな心が起つたのだかは今でもよく說明が出來ない。先生の許へ行くといかにも親切に、私の苦痛をいろ〳〵と解剖したり說明したりされて、明快な判斷を下された。その時の先生の親切な心は忘れることが出來ない。

大抵私の行つたのは社の用や雜誌の用からであつたが、行けば三時間も四時間も話しをしたり、自分の考へを述べて議論めいた風になつたりした事もあつた。用事以外に個人的の親しみに接したのは、自分の色々の氣持から來る苦痛を先生に訴へて、先生の敎へを求めに行つた時であつた。先生はいつも親切であつた。いつも明快であつた。そして木曜の面會日などに行つて見るとすぐ分るが、どんな人にも同じ態度で、決して分け隔てをつけなかつた。

私はいつかも先生に話して笑つたことであるが、東京へ來てずゐぶん私は引越しもしたが、いつも漱石先生の家を中心にして引越して歩いて居た。それで湯屋や途上でよく先生に出會つた。そんな時に大抵大家などになると、一應挨拶だけで立話しをするなどと云ふことは無いが、先生はあの口元に微笑をうかべて寄つて來られて、途上でいろんな立話しをされた。さう言ふ時の先生の印象が忘れ難い記憶をつくつて居る。

去年の春頃から私の手が惡くなつたので、新らしく大學に眞鍋さんが物理的治療所を作つたと聞いて、

その人の治療を受け度いと思つて、先生と眞鍋さんとの關係を知つてゐるところから、先生に紹介狀を貰ひに行つた。私が恐縮してその事を云ひ出すと、先生は「書くことは何でも無い。人によつては書けないこともあるが、眞鍋君なら書いて上げるのは迷惑でも何でもない」と云はれて、いろ〳〵手當に關する注意をして下さつたり、永い紹介狀を書いて下さつたりした。

それが今年の九月頃、先生に治療の結果の挨拶もせずに、私は修善寺の溫泉へ行つて、歸つて來て挨拶に上らうと思ひながら、忙がしい身にかまけてお訪ねもしなかつた。

ところが十一月の半頃の或る日のことであつた。私は牛込のある通りの骨董屋の前に佇んで、そこの玻璃戸越しに店に懸けてある軸物などを窺込んで居た。すると私の後から青い衣物を着たお爺さんが、私の肩越しにやはり窺込んで居た。私はそれが誰であるかさへも氣付かずに、少時中のものを見て歸らうとすると、お爺さんはヒヨイと身を退いた。私は歩きながら振り返つて見ると、青い衣物を着たお爺さんが漱石先生だつた。ヤア先生と私が聲をかけると、ヤア君かと先生も二三歩寄つて來られた。君もこんな骨董なんかに趣味を持つてゐるのか、と先生が聞かれるから、趣味を持つと言ふほどでもありませんが、一寸見たんです、と答へた。この時私の手のことや、「明暗」のことを話したりして、二十分餘りも立話しをしたが、その時大變先生の影が薄いやうで、元氣が無いやうだつたので、健康の方はいかゞですかと御訊ねすると、いつもの通りだとお仰られて先生はいつものやうに口元に微笑をたゝへて居られた。私はそれつ切り先生に會はない。あの時の青い衣物を着た影の薄い先生の姿が、どう言ふものか深い印象をとゞめてゐる。

漱石先生の病氣を鈴木三重吉さんから聞いた時は、さほどヒドイのだとも思はなかつた。一度お見舞に

行かうとも思つたが、私などがお見舞に行つて、かへつて病氣を仰山にお考へになる刺戟を與へてはよくないと思つて、その後御無沙汰をして居た。

ところがあの朝いつものやうに臥床の中で新聞を開くと、漱石先生の死が報ぜられてゐた。それを知つた私には非常に苦痛な氣持がした。（談）

世話好きな方だつた

岡本一平

漱石先生は私よりはずつと早く朝日新聞へ出て居られた。それが一昨年の夏のことであつた。私の社の鎌田敬四郎君がある日先生を訪ねると、何かの話の末に四年前から朝日新聞へ描いて居た私の漫畫のことに話が移つて、あれはあのまゝで描き捨てにするのか、面白いから本に纏めたらどうか、と先生が言はれたとかで、鎌田君が是非私に一度漱石先生を訪ねろとすゝめるので、夏休みに早稻田町の先生の家へ行つた。それが先生と私との最初の交渉であつた。その後本をこしらへた時、先生は序文を書いて下さつた。が、その後は滅多に先生の家へ上らなかつた。ただ正月の七日に一度年始に行くことに定めて居て、その時に一年中の溜つた話をした。先生に合つて居ると何だか煙つ度くて、問答に骨が折れるので、あまり行けなかつたのだ。それで居て年中あの尋面が目の先にちら付いて、始終から白眼まれて居るやうな氣がして、そ

れを思ふと堅くなるやうで仕方がなかつた。

漱石先生は上べではいかにも突劒呑であつたが、一度人の世話をしたら徹底するまで世話をせねばおかぬと云ふ世話好きなところがあつた。世話ばかりで無く人を識ると云ふ上でもさう云つた風で、嘗て先生が私に、人はお互に會つて腹の底まで見透して仕舞はねば面白く無いから、度々お出でなさい。と云はれたことを覺えて居る。實際またよく人を觀たり識つたりした。同じ社に居た澁川玄耳君を評した先生の面白い言葉がある。それは「人は大概方々に穴が開いて居る。その穴を見つけてそこから窺くと、その人がよく見透せるものだ。澁川には穴が多いが、よく見るとその穴がみんな塞さがつてゐる」と云ふのだ。

私に氣付いた先生の美點を云つて見ると、どんなことでも飾らないで無雜作に云つて仕ふことで、實生活上の實驗談などをしてはよく細かく說いて聞かされた。ある時私が、世間の噂では先生が株や地所を買込んで居るやうに言ひますが本統ですか、と無躾に訊ねると、そんなことはない、しかし一年や二年病氣しても治療代に困るやうなことはしてない、それでもこの家も借家だ、それに小供が元來金のかゝるもんだからね、と話されたことがあつた。先生はまた世間でよく言ふやうに、文士などに一寸珍らしい禮儀深いところがあつた。例へば人がその著書などを先生に送ると、よほどの差障りが無い以上は必ず翌日すぐ手紙を出した。長い短いはその時の氣分によつてであらうが一言の挨拶は必ずあつた。先生はまた田舍から手紙を寄すのによく忠實に返事を出したと云ふことが言はれてゐるが、かう言ふことがあつた。ある田舍の人で先生を好きな人があつて、先生の書物は全部纏めて所有つて居るが、その人がまた私の繪を好きで全部切抜いてゐるさうで、その事を先生への手紙の中に書添えてあつた。すると先生はすぐその手紙を

私へ廻して寄こされ、先方へもその事を言つてやつて、一平君も喜んで居たと云ふやうなことを書いてやつたさうだ。

先生の繪のことは津田青楓君がよくお存じだが、先生は色としては綠が非常に好きで、繪は南畫を描いた。その南畫が用意周到と云はうか實に端から端まで念の入つたものであつた。ある時私は先生に、あなたの繪はどこを切離しても一枚の繪になりますね、と云つたことがある。實際幾つもの小さい繪が集つて一つの繪となつてゐるやうなものである。先生は私などと繪の話をすることも多かつた。ある時私に、君は何故日本畫をやらないんだ、と訊ねられたことがあつた。その當時私は考がこだはつて居たので、日本畫は材料と思想とが開放されて居ないやうでやりずらいと答へると、先生は、それはまだ考へが狹い、そこを一寸ぶち破つて自由に考へたら、どちらが便利な材料と思想だか分らない、と言はれた。よほど日本畫が好いて居たやうであつた。

先生はお弟子方にはどうか知らぬが、私共には繪の話のみで無く他の事でも、反對する時にでも決してムキになつて、眞正面から來るやうなことは無かつた。ただ「さうでしやうかね」と云ふやうな調子であつたが、かう云ふ時は必ず反對なのであつた。それで唯ださう云つて置いて當人に自覺させると云つた風であつた。曾て私が繪の文句に油が乘つて、澤山に書いたことがあつたが、その時先生は社の人に、この頃一平はあまり文句の方にかゝづらつて居るやうだが、あゝ云ふことはハタでいくら言つたつて仕樣のないことで、自分で變轉して來なければ仕方が無い、と云つたさうだ。先生は人の傾向などにはいつも左樣云つた解釋を付けた人で、その人自身の發意的の轉化を待つと云つた風であつた。（談）

禪の感化

上司小劍

夏目さんのものはずつと前に「坊つちやん」を讀んで感服した以外にあまり讀んでゐない。その作品が朝日新聞に出るだけで、他の雜誌などには一切出ないので、つい取り出でて讀む機會がなかつたのである。新聞の續物は飛び飛びに讀むには讀んだけれど、元來續物を讀むのが臆劫なので、讀み度い讀み度いと思ひながらに、まとめて讀むことをしなかつたのである。しかし夏目さんの書いたものは、長篇をとび〳〵に讀んで見ても、先づ第一にその學植の深いことが判る。そして表面にはいかにも飄逸なところがあつて內面にどつしりとした重味のあるところは、到底他の作家の及ばぬところである。

私は夏目さんの人生の觀方に對しては徹頭徹尾同意を表すものではないけれども、いかにも日本人らしい、あくぬけのした、ユーモアの下に涙をふくんで居ると云ふやうな描き方は、非常にいゝものと思つて居る。夏目さんは言ふまでも無く英文學に造詣の深かつた人である。日本には英語が非常に行はれて居るけれでも、眞に英文學に通達した人はほとんど無いといつていゝ。學校などで英文學をやつた人が、英文學を讀まずに、例へばディケンス一冊讀まずに、かへつて露西亞や佛蘭西の作家の書いたものゝ不完全な英語譯を讀んで、それで外國文學を味つたものゝやうな顏をして居るのは、一つには語學の知識の不充分によることでもあらうが、大變な話である。

夏目さんなどは眞に英文學を咀嚼して、それを自分の頭の中で十分に醱酵させて、全く日本人の藝術として、少しも外國臭く無く、渾然とした立派な作物に仕上げられて居る。これは夏目さんの藝術的天分の豐かであつたのにもよるであらうが、眞に外國ものを研究した結果であると思ふ。

夏目さんの描かれるものは、禪の感化から來たものが非常に多かつたやうである。元來が日本人にはすべて禪の感化が言はず語らずのうちに頭の中に在る。それはいろんな宗教が入つて來て日本人の思想や生活に影響を與へたけれども、禪の影響が最も廣かつた爲めで、いかなる人でも多少とも禪の影響を受けてゐない人はないのであらう。日本の風土とか食物とか云ふ上から、禪の趣味と言ふやうなものを受入れ易いところから來て居るのであらう。夏目さんは專門に禪の方をも研究したらしく、禪僧などの嫌にかう禪臭いところが無くて、その藝術がまた最もよく禪と調和して居た。

私は全體作物の上から言ふと、夏目さんのものよりは、鷗外さんの書かれるものゝ方に敬服するところが多かつたけれども、またホトゝギス一派の俳句趣味から來たやうな、いかにも垢ぬけがしたところ、それに十分の強い力を内に蓄へて居たところを尊いと思つて居る。恐らくはこれからも、夏目さんほどに學問もあり、天分も豐かな作家はちよつと現はれない。

夏目さんの文章はホトゝギス一派の寫生文式から來て、また一種の體を創つて居た。書くことに無駄が無くて、引き締つて居る點に於いては、高濱虛子氏の文に似てゐ、技巧の點に於いてはまた別の方面を開拓して居た。（談）

「文學評論」の價値

本間久雄

最近の夏目さんについては、殆んど作を讀んで居りませんので私は何も云ふことが出來ません。しかし夏目さんは、私の思出の中では非常に懷かしい人の一人です。

私が始めて夏目さんの文章に接したのは、私がまだ田舍の中學に居た頃（明治三十六七年頃）で、何でも『帝國文學』に載つた夏目さんの『マクベスの笑ひについて』といふ文章であつたと思ひます。その論文はマクベスが例のバンコー王を殺して自分の部屋に引込まうとするとき、眠つてゐる王の番人が不氣味な笑ひをする、その笑ひを心理學的に說明してあるものであつた筈で、非常に難かしいもので、何度讀んでもよくわからないので、國語の敎師などに切りに質問したりしたことを覺えてゐます。（尤もこの論文などは今見ても難かしい、學究的な立派な論文だと思ひますから、その頃わからなかつたのはあたり前のことです）

その次に見たのは、これも『帝國文學』に載つた有名な例の『倫敦塔』です。これはその頃紅葉のものなどを愛讀してゐた私に取つては全く驚異の世界が開かれたやうなものでした。私はそのロマンチックな、エキゾチックな味ひをどんなに喜んだか知れません。そして何度愛讀したか知れません。

その後上京して早稻田に這入つてからも暫くの間は私は全く夏目さんの熱心な愛讀者でした。『ホトヽギ

ス』に書かれた諸篇や『新小說』に書かれた『草枕』などはどんなに喜んで、丁度渴したものが水を求めるやうな勢ひで、讀み渉つたか知れません。そして『倫敦塔』以下『草枕』あたりまでの諸篇を諸雜誌から拔き取つて、一まとめにして製本して『漱石集』などと銘を打つて珍重したものです。(『草枕』の口繪は多分五葉氏の筆になつたものだつたと思ひますが、あれも今思ひ出すと非常に懷かしい氣分になります。)

その頃の私は、同じ夏目さんの作でも、『吾輩は猫である』とか『坊ちやん』とかいふものよりも、寧ろ『倫敦塔』とか『幻しの楯』とか『薤露行』とかいふロマンチックなものに興味を持つて居りましたので、さういふのを主として愛讀しました。一つは私自身の性情にもよるが一つは『吾輩は猫である』などに現はれたやうなユモアを解する能力がその頃の私には全くなかつたのであります。

その後自然主義の運動がおこつてから、私はそれにすつかり影響されて了つて、夏目さんの所謂『餘裕派』の文學、低徊趣味の文學には、先づ理論的に反對するやうな傾きとなり、それからは殆んど夏目さんのものは、讀まないで了ひました。氏の「朝日」にかゝれるもの、その他單行本として公けにされたのも、ただ評判をきいてゐただけで殆んど讀まないで了ひました。(尤もこれから讀みたいとは思つてゐますが)で、その後の夏目さんについては私は何もいふことが出來ません。尤も氏の論文は時々讀みました。殊に『文藝とヒロイック』などいふ論文で夏目さんがヒロイズムを高調されたときなどは、やはり自然主義の立場から『早稻田文學』などで惡口を云つたことを覺えてゐます。

夏目さんの小說はそれきり讀みませんでしたが、『文學論』や『文學評論』は讀みました。そして非常に益を受けました。殊に『文學評論』は批評家として又英文學者としての氏を最もよく現はしたものだらうと

もひます。あれは恐らく外國の名だたる英文學者に見せても立派なものだらうと思ひます。それと同時に夏目さんのユーモラスな味ひの作品は、英國のユーモリストの多くから餘程影響されてゐることは『文學評論』を讀んでもよくわかります。

夏目さんが逝かれたのは今の我が文壇に取つて非常に痛惜すべきことであるのは云ふだけが愚かなことですが、特に、上品なユーモアの味ひの文學が、夏目さんの死と共にこれからのわが文壇に失くなると思へば私は一層かなしくなります。

人としての夏目さんは、最も妥當な、本來の意味に於ける Gentleman であつたと云ふことです。これは氏の著作から推しても、又人の噂さから聞いてもいかにもさうであつたらうと思はれます。一度もお目にかゝらなかつたことを私は殘念に思つてゐます。

書齋の人

德田秋聲

私は漱石氏とは殆んど交際がなかつた。朝日新聞に私が小說を書くに就いて、氏から二三度手紙を貰つたことはあつたが、そして一二回會つたことはあつたが、別に私交はなかつた。で、氏の人柄は好く知らない。また作品も餘り讀んでゐない。近年氏の作が雜誌に載らなかつた關係もあらうが、新聞に載つた物

をちよい〳〵とかぢる位ゐのもので、これと言つて纏つて讀んだものがない。さういふわけでだけから、無論氏の作に就ての批評も出來ないが、其のちよい〳〵嚙つたところには屢々はぐらかされる樣な點があつたやうだ。

『彼岸過ぎまで』といふ作は面白かつたやうに記憶する。あの空想家の主人公が南洋に護謨栽培をやつて大成功して王者のやうな生活をすることを空想して喜ぶが、ふとまた自分の栽培した護謨林が十分に實入りのあるのは自分の死んだ後だと思つて、失望すると云ふやうな——つまり高尙なユーモアが面白かつたと思ふ。

『明暗』も始めの方五六回續けて讀んだ切りで、あとは續けて讀まなかつたから分らないが、あれに書かれてゐた婦人の性格は幾らかヘッダに似てゐたやうに思ふ。プロットも亦似寄つてゐるやうだが、然し行方は違ふ。イプセン物のやうに激しいところへは氏の作は行かない。

漱石氏から貰つた手紙にも非常に細密なことまで書いてあつたが、作にもそれが現はれてゐる。非常に細密なところにまで氣のつく人であつたらしい。文章がなか〳〵うまく江戸ッ子的に氣が利いてゐるので讀者は思はず引き釣られて行くのであるが、そして或る所にはすぐれた描寫も見出されたのだが、時としては書かなくても好い所まで——若くは作として書くべき筈でない所まで書いたと云ふ傾きがありはしないか。書き方がうまいので一見描寫のやうだが、實は全くの說明で行つたところが多くはなかつたか。

然しあの人のユーモアはあの人獨特のものであつた。或る人も云つてゐたやうに、あの人に於て東西の趣味が融合一致してゐた。この點は鷗外さんも似たところがある。が、私は漱石氏と獨歩とを比較して、

果してどちらがえらいか、と考へたことがある。尤も此の二人は、出發點も違ひ、氣持も、社會的境遇も又死方も違ふのであるから、同じ標準で比較するのはどうかとも思ふ。獨歩は本當の詩人であつた。漱石氏には無論オリヂナリチーも多分に有つたには有つたが、何をやつてもやれる人だつたやうな氣がする。

氏の作に現れた所から考へれば、氏は讀書の人、書齋の人、趣味の人であつた。初期の作には特にそれが出てゐるやうに思ふ。讀書餘瀝、と云ふやうな氣持のする物があつたやうだ。『猫』や『二百十日』などは詰り其の部類に屬するものだらう。然し其の後の作には變化が來た。本當の小説になつて來たのである。

氏の及ぼした社會的影響、と云つても私は別にこれと云ふはつきりした見解は有たないが、まづ單に社會的の意味から云ふと、氏に依つて文藝の品位が高まつたらう。何しろ大學の先生が、小説を書かれたので、ただそれだけの意味でも、社會の人々は多少小説家といふ者に對する意見を變へたらうし、そして氏の作は大學の學生や高等の教育ある人士に多く歡迎されたらしいから、最も多く婦女子にもてたと謂はれる紅葉とは大分違つた意味で、社會に影響を及ぼしたらう。尤もこれは文學上の問題ではない。單に社會的に觀たことなのだ。

漱石氏の作には殆んど血腥いやうな現實が描かれてゐない。殉教者的の熱は見出されない。ともすれば氏の作は理窟に陷いりがちだ。これは氏が、學者であり、讀書の人であり、趣味の人であつたからであらうが、また氏の境遇が氏をして最も多く然らしめたのではなからうかと思ふ。

直接間接に見聞したところによると、漱石氏は概して自分より上の人には强く、下の人には優しかつたやうだが、これは紅葉などと好く似た點である。で、或る人にはつむじ曲りのやうに觀られ、或る人には

君子と觀られてゐる。私も氏の立派な人格の人だつたことを疑はない。私の知つた範圍では極く潔白な義理堅い、そして常識の發達した人で、社交的のことには特にきちんとした紳士であつたと思ふ。然し社交的の美德と人道的德義とはおのづから別であることを忘れてはならぬ。この二つのものを混同してはならぬ。

作に依つて私の知つた氏は、之を一言にして云へば、書齋に在つて忠實に文藝的事務を執つた人のやうである。然しこれは私のちよい〳〵斷片的に接した氏の作に現はれたるものに據つて出來た私の判斷であることを斷つて置く。（談）

天に則つて私を去る

中村星湖

個人としては一面識もない。只一度、僕と片上伸君と神樂坂の通りか何處かを歩いてゐたとき偶然、夏目さんと出遇つたが、その時片上君が氏に挨拶するあひだ丈けしみ〴〵お顏を見た位ゐのもので、少しも氏とは親しみがなかつた。どんな性好の人か、どんな日常生活を送られる人かを直接には知らない。たゞ人の噂や書かれた物を通じて推量するだけであつた。

一度お目にかゝらうと思つて、お訪ねしたことがあるが、面會日の決つてゐるのを知らないで行つたの

て、會へなかつた。用向は手紙で足し、返事を頂いたことがある。その時の用事は濟んだが一度お目にかゝりたいと思つてゐたが、その機會を作らないうちに亡くなられたので、僕は非常に殘り惜しい氣持がする。

夏目さんの書かれたものは、僕の學生時代から中々愛讀したもので、『薤露行』や『幻影の楯』などの花やかなロウマンチックな物を書かれた時代から最近の物まで、すつかり見たわけではないけれども、機會のある毎に愛讀して來た。學生時代に我々の仲間では『新しい泉鏡花』と云ふやうな評語が行はれた位ゐで、それ以前に泉鏡花の愛讀者であつた僕などは夏目さんが現れたと云ふことは大變な喜びであつた。

そのうちに段々、自然主義運動が盛んになつて來て、先生の初期の作風には背中を向けるやうになつたのであるが、先生自身も時勢につれたのであるか、いや實はさうでなくて、先生自身の心持の自然の發展から餘程リアリスチックのものを書かれるやうになつて來たと思ふ。晩年になつて、『天に則つて私を去る』と云ふやうな境地にまで達せられたのである。いろんな經驗と修養との結果、特に東洋思想の眞髓を摑まれたものらしく見受ける。天に則つて私を去る、これは言葉としては自然派のモットーとしても少しも差障りがないやうな言葉である。內容から云つても亦確かにさうである。

學識に就て云へば、先生は英文學は勿論のこと、漢學や禪學の素養が十分におありになつた。それが詰り晩年のあのやうな博大な思想を形作る根柢になつたものに違ひない。それからモウ一つは、その爲めに先生がとう〳〵死なれた病氣のことだが、これが先生の日常生活の上に、趣味の上に、思想の上に重大な關係を有つてゐたらしく考へられる。それは、ずッと以前から持病のやうにして有つてゐられたやうに聞いてゐたが、その病氣が明らかに先生の思想の上に影響して來たのは明治四十三年だかに修善寺の溫泉

て吐血された頃からではないかと思ふ。その以前にも『吾輩は猫である』の中にさへ既に胃病のことは出てゐるので、もッと以前からこれが先生の思想感情に影響してをつた事は勿論であるが、古來いろんな宗教家や思想家が一番それが爲めに苦しんで來たところの『死』といふ重大問題に出會して——所謂生死の覺悟をしてゐかなければならないと強く考へられたのは、第一回の吐血以後ではないかとは、僕の推量するところである。

天に則つて私を去るとか云ふ先生の言葉の内容としては、生の問題が十分に這入つては居るが、その言葉を讀んで直ぐ僕の頭に感じられたのは、死の暗い影であつた。死の問題に苦しんだ人でなければ、死をどう處分しようと考へた人でなければ、發することの出來ない言葉のやうに思はれる。であるからして亡くなられる以前に於て、既に死ぬる覺悟が出來て居つたやうに見える。普通に云ふ『悟り』を開いて居られたわけである。

それで特に晩年に於てトルストイやドストエフスキーの作品を讀み味はれたと云ふことは、直接先生の此の悟りには何の關係もない事かも知れないが、そとから觀ると、ちやんと連絡が付いてゐたやうに考へられる　或る人の言葉によると先生がトルストイやドストエフスキーを讀まれたのも、それらロシアの大作家達の技巧方面の研究だけに止まつてゐたやうに聞いてゐる。そして彼等大作家の思想に就ては餘り興味を有たないで、寧ろ彼等にはまだ〳〵『私』といふものがあるから、藝術家としては感心するけれども、人間として乃至思想家として十分に到れる者ではないと言はれたやうに聞いて居る。が、それはさう人に言はれたかも知れないけれども、トルストイやドストエフスキーの作物の形式に計りでなく、其の内容

に——精神に同感し共鳴するところが少くはなかつたらうと僕は推量する。

何故そんなことを言ふかといふに、先生のやうな『自己』といふものは普通の人の有つてゐる個性とは可なり違つた特色を供へて出來上つてゐる場合に於ては、其の一言一行が先生の個性の發露に相違なく、隨つて先生のふとした機會に發せられたそんな言葉にも十分信用を置くべき筈ではあるが、然し僕はかうも考へるのである。つまり、天に則つて私を去ると言はれた丈けそれだけ先生は天に則つて私を去ることの出來難かつた人ではなかつたらうか。それが自分の一番の修養だと思はれればこそ、さう言はれたのではなからうか。

かう言つてしまふと、言葉の上だけで屁理窟を捏ねて先生の大悟徹底をまで十分その堂奥に入つたものでないと否定するやうに解る人があるかも知れない。それで僕は或る新聞の記事で見たことを此處に引用することにしよう。その記事はたしか夏目先生の主治醫であつた某醫學士の語つた先生の臨終談であつた。新聞を讀んだ人は誰も知つてゐることであつて、此處に繰り返すまでもないか知れないが……最早臨終間際になつた先生が、苦しくて堪らなかつたと見えて、自ら醫者に向つて注射を要求せられた、その時の言葉に『注射をしてくれえ、死ぬと困るから』と言はれたさうである。

それから頭や胸が非常に熱苦しかつたと見えて『どん〳〵水をぶッかけてくれ』といふやうなことをも看護婦に請求されたさうである。看護婦は、水をかけるわけに行かないので、氣をきかして僅かばかりの水を口に含んで、先生の胸へ霧を吹いてあげた、すると先生は『有り難い』と言はれた、そしてそれが最後の言葉であつたと新聞は傳へてゐる。此の記事は十分に信用の出來る記事だと思ふ。で、この新聞に傳

へられた先生の最後の言葉が非常に意味深いものとして僕の頭に殘つてゐる。先生の色んな作から受けた印象よりも、此の臨終の光景と最後の言葉とは長く僕の心に殘つて居つゝ、人間と生活といふものを考へさせることであらう。

人の一生の終りと云ふものは、それがどんな人の終りであらうとも、意味深い問題を我々に與へるものである。特に先生の臨終は非常に深刻な暗示を有つて居つたと思ふ。すでに斷末魔の苦惱に陷つて居られたときだから、日頃の聰明も何處かへ影を隱して、たゞもう無意識に本能的にのみ命といふものを持續して居られた場合に、譫言の一種として發せられた言葉を以て、直ちに先生を批評することは出來ないが、『死ぬると困る』と云はれたのがどうも本音だらうと思ふ。

悟られたやうに見えたのは知識や理窟の上のものであつて、先生の生命の根本にまで徹した悟りではなかつたらしい。割合に健康狀態に在る場合には、自分でも可なり悟つた積りで居られたであらう。そして其の悟つたと云ふことは何れの方面から見ても、事實であつたであらうが、僕の見るところでは將に死なうとする刹那に於て、其の悟りは破れたといふ樣に考へられるのである。天に則つて私を去ると云ふ入口までは行かれたのであつて、まだ十分に這入り切つてゐられなかつたらしい。

孔子なぞも言つたやうに、人間は五十にして天命を知るといふから、年齡から云つても生活の經驗から云つても、確かに天命を知る時に到り着いては居られたのである。で、少くとも後十年位ゐは生きてゐて開け始めた道をもつと〳〵明かにして貰ひたかつたと思ふ。けれども一番最後に、看護婦が霧を吹いてやると、餘程氣持が好かつたと見えて、『有り難う』と言はれた。その言葉を發せられた時の心持は何とも云

はれない好い氣持を我々に與へる。これは、求めたものを得たといふ心持である。乾いてゐたものが濕つた心持である。自己を確かり押し包んで、他から來るものを拒んでゐたものが、自己を開いて平らになつて、そとから來るものを受けたと云ふ心持である。

此處に至つて始めて先生の悟りが完成したのではないか。前にも述べた通り、既に無識狀態に這入つてゐられたらしい臨終の場合の不用意な一言一句にかやうな解釋を下すのは、餘りにセンチメンタルなやり方、餘りに持つて廻つた解釋かも知れないが、僕にはどうもそんな風に感じられる。（談）

三度の面會

岩野泡鳴

夏目漱石氏とは僕は師弟の關係もなければ、何等の恩義を蒙つたこともない。その上、自然主義の論戰の時代には、彼の低徊趣味的思想や創作に隨分反對の鉾先を向けた。然し彼を以て通俗小說家と高級藝術家との間を行く一作家としては十分に其の位地を僕も認めてゐた一人である。大阪朝日新聞が一時菊地幽芳氏を押し立てたのに比べて見ると、朝日新聞が夏目氏を買つたのは、遙かに意味のあることであつた。

彼の創作は時代と餘りに緣が遠かつた。これは僕の最も不滿に感ずるところであつたが、時代とさう密接に關係を感じない一般人の有する極くのんきな方面には、彼の其の缺點であるのんきさ、即ち、むづかし

く云へば低徊趣味的態度は一寸面白いものであつたらう。それは彼の通俗作家たる資質であつた。まして其の上に、一般人が特別には學んでゐない理知的方面のことが隨分彼の作を讀んでゐると分つて來るに於てをやだ。

僕が彼に初めて會つたのは、僕の長篇小說『放浪』を東京朝日新聞に——單行本として出版する前に——一度載せないかと云ふ掛合をしに行つた時だ。ところが、載せても好いが、ずつと前から交涉中のがあるので、そのきつぱりした返事を聞かないうちは、請合はれないと言つた。それは長塚氏の『土』であつて、それが出ることになつたので、僕のは斷はられた。その後、長谷川二葉亭の追悼會のとき、夏目氏は演說をして、自分は世間から猫が好きだと云はれてゐるが、近頃は石に趣味を有つやうになつて、切りに石の面白さを研究してゐると言つた。この時、僕も一寸演說して、彼が石を好きになつたのも尤もだ、低徊趣味よりは內容が充實してゐるかも知れないからと冷かした。

その後であつたが、僕の放浪がいよ〳〵單行本に成るので、その自序をその前に朝日新聞の文藝欄に送つて見たところ、夏目氏から『內容が充實してゐないから』と斷つて來た。つまり、僕の以前に彼を批評した言葉を以て彼がまた僕をひやかしたのであつた。僕は此の時、彼の眞面目腐つた皮肉を面白いと思つて吹き出したが、これは其の當時生田長江氏に僕から語つたことがある。その時長江氏が答へたには、夏目と云ふ人はどんな眞面目なことをも不眞面目に解釋してしまはなければ滿足できない人だと。

その後、夏目氏が大阪の旅館で病氣になり、とう〳〵病院に這入つた。そして僕は當時大阪新報社員として同社を代表して彼を見舞つたことがある。これが三度目の面會であつた。第一回の時にも第二回の時

にも彼は少しも自分のことを語らないで、僕のことばかり訊いたが、第三回目には——病氣で少し感傷的になつてたからでもあらう——彼自身のことをも或る程度まで打ち明けて語つた。そして今水落露石氏が來てこんなことを言つて呉れたとか、昨日は青木月斗氏がどうして呉れたかと云ふことまでも語つた。然し彼はそのうちわの弟子に對して隨分思ひ切つた皮肉や惡罵を大膽にあびせかける人のやうに聽いてゐるが、僕のやうな外部のものには、どうも大膽に出られず、實に卑怯らしいところが見えるので、相對して氣持のいゝ人ではなかつた。

その後、僕は彼に會つたこともなかつた。彼の創作を讀んだこともなかつた。野上臼川氏がよく僕に向つて一度一緒に漱石老を訪はうと云つてゐたが、とう〳〵其の折もなくなつてしまつた。兎に角、僕は彼を觀ることは丁度坪内逍遙氏を觀ると同じやうな心持であつた。僕は逍遙氏を以て僕等一般の先輩として過去に於て既に仕事をしてしまつた人と見做してゐるが、漱石氏も——實際は僕等と同時代に働いてゐながら、時代に痛切でなかつた爲めに——僕等には過去の先輩のやうに見えて居た。

夏目さん

泉鏡花

臨時に漱石さんの特別號が出ますんですか、結構でございますね。あの方のことを、私に。えゝ、そり

や、一寸はお目に掛りもしましたし、お世話に成つた事がありますから、思つてる事はお話し申しますけれども、恁うね、いきなりでは何うでせうか。しかしお急ぎなら、たゞ、ほんのおいで下すつた御挨拶だけですよ。

はじめて、夏目さんにお目にかゝつたのは、然うですね、もう七八年に成ります。私がまだ土手三番町に居た時ですから、明治四十何年、と御覧なさい、すぐに其の年を云ふのにも差支えるほど用意のない處で、不整な事です、御ゆるしを願ひます。

實はね、膝組で少しお願ひしたい事があつて、それが、月末の件ですよ。顔を見て笑つちや不可ません此方は大切な事でさあね。急いだもんですから、前へ手紙もあげないで、いきなり南町へ驅つけたもんです。まだ、それまでに、一度だつて逢つた事がないんでせう。八月だと思ひます、暑い眞盛り。特に用向が用向と來て居るし、當人汗に成つて取次を賴んだものゝ、豫ての風說なり、容子を思ふと、一面の識もない、唐突の客なんか、なか〳〵逢ひさうもない方だと知つて居ながら、不思議にまた、身勝手だが何だか、逢つておくんなさりさうにも思つたのが、幸ひ實に成りましてね、すぐ通して下すつた。

あの、滿韓ところ〴〵の出來た、丁ど其の旅だちが、二三日中と云ふ處で、旅行鞄や何か、お支度最中の處の大分お忙しさうだつたのに、ゆつくり談話が出來ましてね。ゆつくりと云つたつて、江戸兒だから長いことを饒舌るには及びません、半分いへば分つてくれる、てきぱきしたもので。それに、顔を見ると此方に體裁も、つくろひも、かけひきも何にも要らなくなる、又夏目さんの、あの意氣ぢや、行らうたつて、體裁も、つくろひも、其のかけひきも人にさせやしますまい。そこが偉い、親みのうちに、おのづか

ら、品があつて、遠慮はないまでも、禮は失はせない。そしてね、相對すると、まるで暑さを忘れましたつけ、涼しい、潔い方でした。

姿と、人がらは覺えて居ますが、座敷の模様だとか、床の間の様子なんぞは些とも知らない、まるで見なかつたんでせう。いづれ、あの方の事だから、立派な書架もあんなすつたらうし、確と心持、氣分ですか、其の備はつた軸もの、額の類と云つたものもありましたらうけれど、何にも知りません。逢つて氣が詰つて、さうした事に心をうつす餘裕をなくされるんぢやない、夏目さんさへ、其處に居れば、何にも、そんなものは要らないのです。まあ、其の人さへ居れば、客に取つては道具も、裝飾も、もう、ひといき申せば、座敷も、家も、極暑に風がなくつても可いつて云ふ方でした。

それだのに、それだけに尚ほ、其の人が居なくなつては困りますのにね、——夏目金之助さんと云ふ名ばつかりになんなすつた。十二月十二日の朝、青山の齋場で銘旗にかゝれた、其の名を視た時には、何とも申されない氣がしましたよ。私は不斷から、夏目さんの、あの夏目金之助と云ふ、字と、字の形と、姿と、音と音の響とが、だいすきだつたんです、夏目さん、金之助さん、失禮だが、金さん。何うしても岡惚れをさせられるぢやありませんか。

あの名に對して、禪坊さんが、木魚を割つたやうな異聲を放つて、咄なんて喚いたのは變ぢやありませんか。いや、こんな事を云つて怒りやしませんか、夏目さんは怒りやしなさるまい。

夏目漱石氏傑作梗概

「心」

「心」は、私と稱する一青年が、自分と、彼の先生と呼ぶ人との關係を說くところから始まる。これが最初の「先生と私」の篇である。

彼が先生を最初に見たのは、鎌倉の海水浴場の雜閙の中であつた。その頃毎日無聊に苦んでゐた彼は、非社交的な、周圍の雜閙などには超然として、一定の時刻にひよいと來て、ひよいと去つて了う先生に興味を有つた。彼は先生と話をする機會を覗つてゐた。その中に、先生が眼鏡を落したのを拾つてやつたり、沖の方へ一緒に泳ぎに出たりして、とう〳〵口をきくやうになつた。さうして先生の宿へも訪れた。併し先生は懷をあけて、彼を迎へるやうにも見へなかつた。

その中に二人は東京へ歸つた。彼は機を見て二度先生の宅を訪れたが、二度とも不在であつた。外出嫌と聞いてゐた先生が自分の行く度に留守だから、彼は不審を起こした。が、それは、毎月その日には、雜司ヶ谷のある佛の墓に詣でるのであつた。彼は先生の奥さんに敎へられるまゝに、その墓地へ行つた。さうして先生に會つた。自分を見ると、先生の眉間には曇りが射した。先生は只友達の墓といふのみで、例月、どういふいはれがあつて、誰の墓に詣るのか敎へなかつた。

其後彼は度々先生の宅へ出入するやうになつた。が、墓參についてはついぞ明瞭な答を得なかつた。のみならず、その話が出る度に先生の顏が曇つた。

先生は淋しい人であつた。奥さんとの間柄は、世間並に云つて、寧ろ仲のいゝ夫婦であつた。が、二人の間には子供がなかつた。その上親しい交際をしてゐる親類も、友達もなかつた。さうして先生は學問も見識も多分にあり乍ら、何の職にも關はらずに、書生に閉ぢ籠つて日を消すのを常とした。人間嫌ひな、と云ふより寧ろ、人間を怖れてゐた先生は、他人との交際は殆んど一切避けてゐたのである。先生は僅かに、彼との一點が世の中と接觸してゐたやうなものであるが、その彼さへ實直で、純眞で、熱誠で、世の濁りに穢されない青年であつた。從つて結局先生は、世から全く隱栖してゐるわけである。彼は段々深く先生の家庭に入つた。彼は先生を心から尊敬し、且つその孤獨を氣の毒に思つた。先生も亦彼を愛して、色々な話をした。

ある時は、滿開の花の下を漫步する若い男女を見て、「戀は罪惡です」と先生は彼に告げた。或時は、人間全體を信用しないと言つたこともあつた。先生はひどく厭世的であつた。

或晩先生の留守に、彼は奥さんと對坐した。さうして先生の厭世の原因が、或は、まだ先生が大學に居た當時、親友が變死したのによるのではなからうかと仄めかされた。併し雜司ヶ谷にある墓が、この親友の墓であるかどうかは、奥さんも話さなかつた。

冬が來た時、故國の父親が腎臟病で卒倒したといふので、彼は歸國した。その時、先生の奥さんが矢張りこの病氣で逝かれたのだといふことを聞いた。彼は歸國したが、幸にも父の病氣は快方に向つた。で、彼は冬休みが了ると早速東上して、向生のところへ顔を出した。彼はそれから、四月中に提出すべき卒業論文の製作に熱中して、先生の宅へは自然足が疎くなつた。

世が葉櫻の節に入つた頃彼は自由になつて、早速先生の宅へ來た、さうして先生を散步に誘ひ出した。

その時先生は、自分がもと財産家であつたことを話した。それから彼の父の病狀を尋ねて、父の達者な中に財産の處理をつけておいて貰うがいゝ、いかに身内のものでも、「人間はいざといふ間際に惡人になる」ものだからとさとした。先生は身内のものに瞞されたのであつた。その結果として先生は、當事者を憎むのみでなく、人間全體を憎むやうになつたといふのである。

彼はある時、この憎人的な、厭世的な思想の基礎となつてゐると思はれる先生の過去を物語ることをせまつた。先生は愕然とした。けれ共遂ひに彼の眞面目に動かされて、一生に一度は、一人でもいゝから人を信用して、その人に過去のすべてを自白して死にたいと言つた。さうして何時か適當の時機を見て、彼にすべてを話す約束をきめたのである。

彼は首尾よく卒業した。さうして九月になつたら上京して職を求めることゝして、一ト先づ歸國することになつた。彼は九月に再び先生の玄關に立つ樣を夢み乍ら、先生の元を辭し去つたのである。

中篇は「兩親と私」である。

父は案外元氣であつたが、彼は先生夫妻からの注意によつて、絶えず警戒を加へてゐた。併し父も母も直き死なうなどとは思はなかつた。兩親は、丹精して育て上げた息子が大學を卒業したので大喜びであつた。さうして卒業祝をして、客をしやうといふ計劃までした。ところが明治天皇の御惱のことが新聞に見えたので、それも遠慮することになつた。父は日々新聞を手にして、陛下の御惱を心痛してゐた。が、つひに陛下はおかくれになつた。父は力を落して了つた。

彼は一二度先生に手紙を書いた。先生からは返事が來なかつた。その中に父母のすゝめで、無駄だとは思ひ乍らも、兩親を安心させんが爲め、就職口の周旋を先生に依頼した。併し返事は來なかつた。彼

は兩親に相談の上、就職の爲め上京することにきめた。ところが計らずも、出立の間際になつて父が卒倒した。彼は出京を延ばした。その中に父の病狀は次第に昂進して行つた。母はそれには餘り氣がつかなかつた。さうして先生からの返事を待つてゐた。兄も九州から歸つて來て、父の枕頭に待つた。そこで先生から、すぐ來いといふ電報が來た。瀕死の父を放つておいて彼は上京するわけには行かない。彼はその譯を長々と手紙に書いた。先生の返事は又電報で、そんなら來るに及ばないとあつた。

その頃になつて父の容態は段々險惡になつた。併し先生の方からは、口のことについては何も云つて來ないし、兄弟は寄つても財産についての遺言を强いて聞かうとしない內に、父の病は重つて行つた。さうして愈々今か今かと、皆がその死を待つてゐる時に、先生から書留郵便で、大きな封が屆いた。彼はそれを切つて讀む機がなかつた。しばらくして浣腸の效果があつたので醫者は歸つた。彼は一瞬の時間を造つて、原稿やそのさきの手紙を見た。彼は手紙の結末に近く、「此手紙があなたの手に落ちた頃には、私はもう此世には居ないでせう。とくに死んでゐるでせう。」といふのを見出した。彼は吃驚した。彼は汽車の時間割を見て、家を飛び出した。さうして停車場で家に宛てゝ手紙を出した。彼は思ひ切つて東京行の汽車に乘つた。さうして先生の手紙を讀んだのである。

下篇は「先生と遺書」である。すべてその先生の遺書から成り立つてゐる。

先生の父母は、先生の二十歳の頃腸窒扶斯で、相繼いで死んだ。死ぬ時母は萬事を父の弟に托したのである。先生は後事は一切叔父任せで、學問の爲め上京した。その間に叔父は、自分の都合のいゝやうに、先生の家を切りまはした。それが爲め兎角の風評もあつた。その上叔父の娘を、彼に嫁けやうとし

て拒絶されてからといふもの、叔父の家のものゝ様子が、がらりと變つた。彼はとう〳〵叔父に向つて談判を開いて、父の遺財の引渡しを迫つた。けれ共受取つた資産は、遺財として父が殘したものゝ、幾分の一にも足りなかつた。彼は叔父の不德を憤つた。さうして二度と兩親の墳墓の地を踏むまいと決心して、田地などを金にして、上京したのである。

かうして自分の財産が確實に出來て、金に不自由のなくなつた先生は、一軒自分の宅を探さうと思つてゐる矢先、偶然にも都合のいゝ、素人下宿を見付けた。小石川の本鄕臺に面した閑靜な宅で、軍人の遺族であつた。家族としては、未亡人と、年頃になるそのお孃さんと丈であつた。先生はそこから角帽姿で毎日學校に通つてゐた。

とかうする內に先生の心は段々お孃さんに引きつけられて來た。敎場などへ行つても、何を考へるともなく、只ぼんやりしてゐる日などが多くなつた。彼が家を出る時抱いた厭世觀は、こゝの家族に加はつてから大に和げられたのであるが、それと同時に彼はお孃さんを戀し始めたのである。未亡人は、二人の仲を接近させたがつてゐるやうでもあるし、彼から娘を警戒してゐるらしくもあつた。或る時この三人が連れ立つて買物に出たのを、どこで見たのか、先生の友達が翌日學校で、何時結婚だなどゝひやかした。先生はそれを未亡人に打ち明けると、彼女はそれはお迷惑だらうと言つて、暗に彼に鎌をかけた。先生は戀を打ち明けやうかと思つたが、その手は食はないとばかりに、そこで立ち留まつた。

その頃先生の友達のKといふのが、實家や養家と切れた揚句神經衰弱なども手傳つて、ひどく困つてゐたので、彼は未亡人の反對をも顧みず、自分の宿へ引つぱつて來た。Kは宗敎家の家の人となつた、自立自營の志の强い、强直な男であつた。さうして無口な孤獨な男であつた。で、先生は未亡人やお孃

さんに頼んで、つとめてKを快活に向はせやうとした。

その中にKは段々人間らしくなつて来た。始めの中は皆がこれを喜んだ。ところが少し過ぎると先生の胸が穏でないやうな時が来た。Kの部屋で、お嬢さんが話してゐるやうなことが度々あつた。先生は氣を揉んだ。

その中に夏休みが来た。二人は房州へ旅行した。先生はお嬢さんに對する自分の戀を大に打ち明けやうと思ひ乍ら、つひ打ち明けずに了つた。二人の間には或る障壁が出来た。

歸つて見ると、お嬢さんが先生に好意を有つてゐるらしいので安心したが、それも少し經つ間に又元通りになつた。十一月のある寒い雨の日、先生は泥濘の通路で、お嬢さんと一緒のKに會つた。先生の胸には強烈な嫉妬が萌した。

正月のある日、朝から未亡人もお嬢さんも留守であつた。さうして先生とKとは、各々の部屋で同じやうな戀にいためつけられて、默つてゐた。その時とう〳〵Kがお嬢さんに對する切な心を、先生に打ち明けた。先生は失策つたと思つたが、もう追ひつかない。Kに先じられたのである。先生の心は擾された。けれ共Kも迷つてゐた。家人の誰にもそれを打ち明けずに喜んでゐた。先生はそれを見て、彼に同情を寄すべきところを、利己と嫉妬の心から、殘刻にも彼の平素口走る理想をもつて、Kを鞭つた。さうして彼をひどく罵つた。Kはその非難を受けて、悄然と「覺悟——覺悟ならないでもない」と答へた。先生は又この「覺悟」を、Kの果斷の性格が戀の方面に發揮されるのが覺悟であらうと思ひ込んだ。先生は居ても起つても居られなくなつて、とう〳〵未亡人に、お嬢さんを自分の妻に欲しい旨を申出た。未亡人は即座に快答を與へた。併し五六日經つても先生は、絶えざる不安と、良心の呵責を有ち乍ら、そ

のことをKに語らずに居た。Kは未亡人から先生の結婚の申込を聞いた。さうして平常の態度で、祝辭をのべた。Kは泰然たるものであつた。それから間もないある夜Kはとう〳〵一片の簡單な遺書を書いたまゝ自殺をして了つた。この深い理由は先生が知つてゐるばかりであつた。

二ヶ月程たつて先生はお嬢さんを妻に迎へた。併し夫妻の間は、以前の戀仲ではなかつた。Kの死が先生の生活を全く灰色に染めて了つたのである。先生はKの死因を妻に話さうかどうしやうと迷つた。けれ共彼はそのまゝ過ごした。叔父の事件に他人を信用しなくなつた先生は、Kの死で、自分をも、その人間の一員として見なければならなくなつた。先生はこゝに、自分の罪、併せて人類の罪を感じた。それと同時に、Kの死因も、失戀のみからではなく、理想と現實との衝突か、さもなくば更に進んで、全くの孤獨を淋しがつた結果であらうと思つた。

其内に妻の母が病氣にかゝつた。先生は罪滅ぼしのやうな氣で、人間の爲めに、母を精々懇切に看護した。母が亡くなつた後では、妻を愛した。これも一個人をとほして、更に深い、廣い背景の上に働いた愛であつた。

先生が毎月雜司ヶ谷の墓地に參るのは、かうした事件と心理の爲めであつたのである。

その後先生は幾度か自決しやうとして、その都度思ひ止まつた。併し幾度か思ひ止まつた揚句遂ひに到達したのは、この苦しい牢屋をぬける道として、自殺のみが自由に先生の選擇の中にあつた。その時、明治天皇の崩御にあつた。ついで乃木大將の殉死に逢つた。先生は明治の精神に殉死する覺悟で、こゝで自殺を決心した。さうしてそこで初めて、彼に約束した機會が來たので手紙を書いたのである。尤も彼の父の病中電報を打つて、彼の上京を促したのは、彼に直接面會した上これ丈のことを書へる積りであ

つたのである。

「行人」

夏のことである。自分といふ代名詞を用ゐてゐる本篇の說話者長野二郎は、大阪に着く早々、母の遠緣に當つてゐて、以前彼の家の厄介になつてゐたことのある岡田夫婦の元へ使を走らせた。一つには一緒に高野登りを約束した友達の三澤と落ち合ふ爲め、一つには母から賴まれた岡田の所謂「例の一件」の用向きの爲めである。例の一件といふのは、長野家に厄介になつてゐるお貞さんを、岡田の口入れで貰ひたいといふ佐野の緣談のことである。さうして彼の役目は佐野の人品や何かを豫めしらべるのである。

緣談の方は程なく佐野に會つたので、簡單な報告書で役のがれになつたわけであるが、三澤は中々來なかつた。が、それは三澤が大阪につくが早いか、胃を惱つて、入院してゐたのであつた。彼は岡田の家を引き拂つて、病院の近くに宿を求めた。さうして毎日三澤の見舞に行つた。幸ひ三澤の病は重大にならずにすんだが、三澤が「あの女」と呼ぶ藝者が、偶然潰瘍の爲めに同じ病院に入院するに至つた。女といふのは、三澤が大阪に着いた夜、友達と一緒に飮んだ酒の席へ出たので、その時女も彼も胃が惡かつたのである。三澤は女に酒を無理に强ひしたりした。で、女の病氣は、三澤自身が重らしたのだといふ氣がしてゐる。で、愈〻自分が退院するといふ時になつて、長野が岡田から借りて來た金を女に與へた。その女が、以前三澤に惚れたらしいとかいふ精神病の「娘さん」に似てゐるといふのである。三澤はそのまゝ東京へ立つた。彼は殘つて母と兄夫婦とを迎へることになつた。

母と兄夫婦の來阪によつて、佐野とお貞さんとの緣談は纏つた。

その頃の大阪はひどく暑かつたので、皆が早く大阪を出たがつた。そこで四人は和歌の浦へ行つて見ることにした。

兄は交際などの餘りない學者で、東京に居る時は多くは書齋の人であつた。思想家として人からも許され、大學の講座をもつてゐる身であつた。が、世間からも孤獨な彼は、又家の内でも孤獨であつた。さうして最も親しかるべき妻とさへ、何處となく不和であつた。兄が神經質の人であるのに反して、妻は又冷然たる態度ですべてのことに向つた。それが特に兄に向つて冷淡のやうに見えた。兄は弟の二郎と妻との仲を疑つてゐたのである。

和歌の浦へ來てから、兄は弟を促して、人の居ない社の境内に導いた。さうして弟に果して嫂との關係がないかどうかを尋ねた。弟は無論即座に否定の答をしたが、結局其次には嫂の節操を試すことを乍迷惑約束したのである。

翌日はその約束をする日である。弟は兼ての兄との手管通り嫂と連れ立つて和歌山へ行つた。さうして夕方までには何とか策を施して、自分の觀察なり試驗なりを兄に報告する筈であつた。ところが二人が和歌山について暫らくすると、大暴風雨が起つて、通信機關や交通機關の一切が利かなくなつた。二人は和歌山へ宿るべく餘儀なくさるゝに至つた。二人には和歌の浦の暴風雨の渦の中に居る母と兄とのことが氣使はれた。併し何とも策の施すべき術もないのである。電線が切斷されたのか電燈も消えた。二人は猛り狂ふあらしに取卷かれて、寢苦しい一夜を送つた。弟は、困つたことになつたと思ひ乍らも、かうして嫂と居るのに妙に心持よさを覺えた。併しこれと言つて兄に報告すべき何物も有てなかつた。

翌日歸へると果して兄は探るやうな眼差を二人の上に投げた。併し嫂は平氣であつた。

暴風雨で怖氣がついて、皆が早く歸京することに

なつた。出立の前に兄は彼を別室によんで、約束のことを尋ねた。彼は簡單に嫂の性質は分らないと答へて兄を怒らせた。さうして結局は歸京した上ゆつくりその時の模樣を物語ることゝした。四人は大坂に出て、岡田夫妻や、佐野の見送りをうけ乍ら、歸京の途についた。

歸京後の兄の樣子は、表面可成り平靜に見えた。兄は始終書齋裡の人となつて、次學年の講義を造つてゐる。弟も兄と約束したことを別段言ひ出す必要もない位に思つた。併し內實兄の心は淋しさで滿されてゐたのであつた。さうしてゐる間にもお貞さんの嫁入仕度は追々に出來上つて行つた。又一方妹のお重と嫂との仲は面白くなくなつて行くのであつた。弟が嫂の肩をもつやうなことを言はうものなら、家中のものが皆顏をしかめた。お重は事毎に嫂のことが氣に喰はない中にも、殊に兄の子の芳江が嫂にばかり懷いてゐるのを、嫂が殆んど故意に見せびらかすやうに振舞ふのを憎んだ。無論お重は兄の同情者で、表裏のない正直者であつた。兄の額には段々學者らしい皺が深く刻まれて來た。母はこんな面白くない一家の樣を見て氣を揉んだ。さうして弟にも早く嫁をあてがひ、妹にも早く嫁の口を探さうとした。父は世間の御世辭上手な所謂交際家の類で、こんなことにはさして頓着もしてゐないらしく見えた。

兄の胸には常に弟に對する隱れたる暗鬪の種があつたが、弟は態々快活に弟の書齋を訪れることが多かつた。ある日兄の心は弟に向つて爆發した。兄は弟を、父に似た輕薄兒だと罵つた。さうしてそんな浮薄な信用の出來ない男から、和歌山の件も聞くには及ばないと斷つた。表面なほりかけたと見えた兄弟の仲は、この時深く裂かれて了つた。

弟は最早家に居るに堪えなくなつた。彼は友達の三澤を訪れて、家を出る相談をした。さうしてとう〳〵下宿することに決めて了つた。彼は家へ歸つて

この話を第一に妹のお重にした。お重は、自分ばかり一人この厭な家に殘ると言つて泣いた。それから母にも父にもした。

それから彼は愈々難關の兄にその話をした。兄は、出るなら勿論一人で出るのだらうねといふやうな妙な答を發した。そうして彼と嫂との間を疑つてゐるやうな口吻を洩らした。

それから二三日して彼は下宿に移つた。そうしてそこから、有樂町の事務所へ通勤してゐた。彼は段々實家の方へ足を遠けた。もし行つてもなるべく兄を避けるやうにした。そうしてゐる中に、兄の頭腦に少し變調が來やしないかといふ注意を二三ヶ所できかされて心配したが、それもさしてひどいことでもなかつたらしかつた。

とかうする中に愈々お貞さんの結婚の日が來て、この平凡ではあるが處女らしい處女は、岡田と佐野とに守られて、この家を去つた。後は又いつもの家庭の樣が續けられた。兄の精神狀態は益々面白くなくなつて行く模樣であるし、それにつれて嫂の措置も母やお重に不快に映ることが增して來た。彼は中々家へ寄りつかなかつた。母やお重の來訪によつて家の模樣を知るのであつた。けれ共嫂はついぞ一度も姿を見せなかつた。彼は母の意で、お重を三澤に嫁せたいと思つて、それとなく氣を引いて見たが、三澤は別に動かなかつた。お重の嫁入と、彼の妻を迎へることゝが、兄の氣を靜め、併せて家庭の平和を致す所以だとして、皆から認められた。併しいづれにも中々良緣は見付からなかつた。

冬が來て冬が去つた。そうして世は彼岸となつた。その頃のある夜のこと、嫂が不意に彼の下宿を訪れて、彼を驚かした。それのみならず、問はれてもいゝ加減にうけ答してゐた嫂が、この夜に限つては、彼から問ひもしないのに、兄と嫂との關係が、近頃は一層好くない一方であることを語つた。嫂は誰を

恨ずるでもなく、唯々自分の愚から來たのだと諦めてゐた、そうして男は、いやになればいつでも勝手なことが出來るから幸だいつてゐた。

このことがあつてから三四日の間といふもの、彼はひどく嫂の幻になやまされた。彼は不相變實家へは餘り顔出しをしなかつた。そこへ或る日父が態々彼を迎に來て、家に連れて行つた。そうしてそこで兄の精神狀態が益々思はしくないことを聞いた。そこで彼は皆と合議の上、三澤の保證人であつた、兄の親友のH.さんに賴んで、兄を旅行に連れ出して貰うことに議をきめたのである。

翌日彼は三澤と一緒にH.さんを訪問して、この旨を賴んだ。H.さんは承知はしたが、請合ひはしなかつた。その中にとう〳〵春休みには兄は行けないといふことが、H.さんから傳へられた。

三澤は兄の旅行よりも、彼に結婚をすゝめた。そうしてとう〳〵ある音樂の會で見合までさせた。その時には三澤は已に婚約をすませてゐたのである。併しH.さんに賴んでおいた兄の旅行も、こちらの思ひ通りになつて、六月の試驗を了はると、H.さんと兄と二人で旅行に出かけることに決まつた。

正式ではないが、兎に角一應見合はすませたものゝ、彼はその女の方は餘り考へなかつた。寧ろ彼の氣は實家の方へ多くとられた。偶々女のことを考へ出しても、兄と嫂のことを一緒に考へずには居られなかつた。

愈々二人の旅行が決まつた時に、彼はH.さんを訪れて、旅行中兄の容子に變つたところがあつたら知らせて呉れるやうに賴んで、兎も角もその承認を得た。

兄が旅行に出た晩、久々で彼は實家の敷居を跨いだ。そうして自分の結婚問題を母やお重と語つたが、嫂とはその黙で一言も言を交はさなかつた。

翌日からH.さんからの通信が心待ちに待たれた

が、それが中々來ない。併しとう〳〵十一日目にH
さんから重い封書が屆いた。無論旅行中にHさんが
見た兄のことが細々と書いてあつた。

Hさんの書信によるとざつとかうである。

旅行の初め兄は絶えず不安を感じてゐた。場所に
も、自分の頭の中にも、少しも安住する餘地がない
のである。彼は睡眠不足で、すべてのことを自烈た
がつた。そうしてよくHさんと論爭をした。けれ共
Hさんの無心の時の平和な顏に慰められ、和らげら
れることも度々であつた。二人は神のことも論じた、
人間の運命も語つた。そうして兄の不眠についても
話した。併し結局は兄の頭と胸とには、死か、狂か、
宗教か、この三つの中の一つを自分の生活の行くべ
き途として擇むしかないといふ思ひがあつた。さう
して死も神も兄には手が屆かなかつた。殘るものは
唯狂の一つである。かれはそれを思ふ度に慄然とし
た。不安の日はなほも續いた。二人は一寸尻を卸ろし
ては、すぐ又場所を代へた。そうして轉々として海
岸に出たり、山へ入つたり、溫泉に漬つたりするの
であつた。

兄は敵意のない自然には、默つて快く壓迫されて
ゐた。そうして一本の花を見て、あれは自分の所有だ
と言つた。さうかと思ふとHさんとそのことを喧嘩
をしてゐ乍ら、その後では又宗教觀を語つて、どう
しても生死を超越しなくては駄目だとも言つた。
そうして彼は研究から實行に入りたいと希つた。

二人は小田原修善寺箱根等に不滿を抱いて、閑靜
な草庵めいた紅が谷のHさんの友人の別莊に落ちつ
いた。そうしてそこへ來てから土地の模樣やら、別
莊生活の有樣がすつかり兄の氣に入つた。兄は熟睡
した、そうして笑つた。曩のやうに怒るやうなこと
はまるで無くなつた。或は蟹に見惚れたり、禪僧の
話をしたり、お貞さんとHさんとを結びつけて、上
氣嫌であつたりした。それでもお貞さんの話をして、

結婚前と後とでは女は、夫の爲めに邪にされるに決つてゐる。自分も妻の天眞を害ねた、そうして蟲のいゝことには、その害ねた妻から幸福を期待してゐるなどゝいふことも言つた。

長い長い日さんの手紙は、兄の睡つてゐる間に書き始められて、そうして又睡つてゐる間に書き上げられた。慥かに旅行に出てからの兄は日さんによつて、いくらか頭をとり卷く黑雲を拂ひのけられたやうであつた。(完)

『彼岸過迄』

「彼岸過迄」は著者の自序にもあるとほり、六つの短篇を集めて一の長篇を作らうとしたものであつて、その各篇の主人公は各々異つた主人公である。只田川敬太郎なる青年が、始終出て來て、時には事件の傍觀者となり、時には物語の聞者となつて、各篇をつないでゐるのである。本篇の構造に倣つて、爰にも敬太郎の出會つた事件或は物語として書いて行くが、原作の面白味は、無論一つづゝの短篇にあると思ふ。

一、風呂の後

敬太郎は大學を卒業して就職口を探してゐるが、どうも好い口がない。彼は運動や奔走に疲れ氣味で當分は騷ぐまいと決めて、朝風呂に行つた。そうしてそこで同じ下宿にゐて、鐵道に勤めてゐる森本といふ男に逢つた。森本といふ男は、謔見たいな、出鱈目話をする、剽輕な、それでゐて過去にも未來にも放浪的な存命を盛られてゐる不思議な性格である。冒險好な敬太郎には、謔とも眞ともつかない森本の話を聞いてゐるのが愉快だつたのである。敬太郎は湯屋からすぐその足で彼を自分の部室に招じて色々な話をきいた。

ところが、そのことがあつて幾日かの後、森本は飄然と、下宿の拂を踏みたほしたまゝ、姿を見せなく

なつた。が、暫らく經つて敬太郎のところへ森本の手紙がついた。敬太郎はそれによつて森本が大連に居ることを知つたと共に、森本の愛用してゐた蛇の頭のついた洋杖を記念に貰つた。蛇の頭は握りのところ丈についてゐて、開けた口は、何物をか呑まんとして呑み得ないやうなものが、彫つてあるのである。

二、停留所

敬太郎には、須永といふ友達があつた。須永の家庭といふのは母一人子一人で小川町の附近に住んで相當の暮し向きをしてゐた。敬太郎はその家の中に入る若い女の後姿を見たことがある。敬太郎は須永に、冒險の話もした。それから口の話もした。さうして須永の叔父で、方々の會社に關係してゐる田口に紹介された。彼は田口を訪ねることにした。

併し田口のところに行きはしたものゝ、玄關拂を食はせられたりなどして、うまく行かなかつた。彼はどうしやうかと迷つた。で或る日彼は藏前で、一老媼から文久錢の占易を見て貰つた。それによると今やりかけたことは、一時うまく行かないでも、それを耐へて先へ出ればいゝことがあるといふこと今度何か事件があつたら、自分のものゝやうで他のものゝやうで、長いやうな短かいやうな出るやうな這入るやうなものを持つて行けと言つた。彼は田口の方の望を捨てなかつた。

その中に田口から、其日の午後四時から五時の間に、小川町の停留所で下りる、四十恰好の眉の間に大きな黒子のある男の、その後二時間の動靜を探偵して呉れといふ依頼をうけた。彼はその時老媼の言を思ひ出して、あの謎のやうな言葉に相當するものは、蛇の洋杖だと思つた。彼はそれをもつて指定の小川町の停留所で、件の男の電車から下りるのを待つた。日の短かい頃で、曇つた日であるから五時には日が暮れた。併し中々その男は來ない。氣がつい

て見ると、自分と同じやうに、若い女が、誰かを待つてゐるらしい。彼はそこで極りの悪るい思や、自烈たい思をして男を待つた。男は六時になつてやつと來た。そうして若い女と歩き出して、西洋料理屋へ這入つた。彼れもそれに續いた。彼はこんな具合にして、女が別れて歸へるまでつきとめて、男と一緒に電車に乘つて、その電車から下りるまで見たが二三の斷片的の言葉の外この男女の關係や、名前や等はまるで知ることが出來なかつた。

三、報　告

翌日彼はこの偵察の報告に田口へ行つた。田口は色々尋ねたが、尋ねられたことは大抵敬太郎には分明になつてゐないことであつた。で、敬太郎はとう〳〵、こんなまだるいことをせずに、直接あの人に會つて、その人の職なり、女との關係なり名前なりをたづねるのが一番いゝ方法だと思ふと告げた。田口はそれを褒めて、そんなら黒子の男を訪ねる氣はないかと問ふた。彼はあると答へた。で、田口からの紹介狀を貰つて、この松本と呼ぶ黒子の男に會ひに行くことになつた。

敬太郎の最初の訪問は雨の日であつた。松本の取次は雨の降らない日に來いといふ挨拶をした。

會つて見ると松本は、田口の萬事小心戈々たる實業家であるのに反して、これは又自ら高等遊民と稱する丈あつて萬事が禪僧式であつた。彼はこゝで初めて田口の妻と、須永の母と、この松本とで兄弟であるといふ關係、從つてこの間の若い女は、田口の娘の千代子で松本とは叔父姪の關係であることを知つて驚かされた。併し彼は田口のこの惡戲によつて職を得ることが出來た。

四、雨の降る日

雨の降る日に松本が面會を謝絶するわけを、敬太郎は千代子から聞いた。

松本には五人の子供があつた中に、一番季にいた

いけ盛りな宵子といふのがあつた。松本夫妻はいふまでもなく、千代子などの鐘愛の的であつた。ある雨の日千代子は松本の家を訪れて、宵子と遊んでゐた。と、不意に宵子が頓死をして了つた。その時松本は紹介狀をもつた來客と應接してゐた。一家の悲歎は大きかつた。ことにその時まで相手をしてゐた千代子の歎きは、又人一倍であつた。涙に濕つた通夜や葬式や骨上げがあつた。すべてはいとしい涙に始まつていとしい涙に終つた。そうして愛せられたいたいけな美しいものゝ姿は、永久に愛したものゝ手から奪はれて了つた。松本はかくして雨の降る日に紹介狀をもつて來る客を、不吉の象徴として遇するに至つたのである。

五、須永の話

敬太郎は、須永の門前で後姿を見てから、千代子と須永とを常に、何等かの想像の糸で結びつけてゐた。敬太郎が須永の口から二人の關係を聞かされたのは、大分後のことであつた。

須永には小さい時妹が一人あつたが、それは早世した。妹は須永のことを「兄さん」とは呼ばなかつた、いつも「市さん」といつた。市藏といふのが須永の名前である。妹が死んで後は彼は全くの一人子で父母の愛をうけた。併し父は須永の子供の中に死んで了つた。父母はその後も少しも慈愛の變らない慈母といふ言葉が最もよくその性質を表はしてゐるやうな母として、彼をいつくしんで來た。そうして須永はこの母の膝下で、我儘一ぱいに成長したのであつた。

千代子と彼とは、まだ物心のつかない時分、双方の親の間に漫然と夫婦約束を取り交はされた仲であつた。併し自由に育つて、自由の空氣を呼吸して、幼い時分から兄弟同樣に近しくしてゐた二人の間には、普通の男女關係は湧かなかつた。女としての千代子、男としての須永を、二人お互に感じたことが

なかつたのであつた。けれ共母は千代子を飽くまで須永に貰はせたがつた。彼は斷はり兼ねると、まあ考へて見やうとか、そんなに急ぐことはないとかいつて、延ばし延ばしておいた。又田口の方でも須永に千代子を呉れるやうな氣もなかつた。只母丈がその間に立つて氣を揉んでゐた。彼はなるべく田口の家を遠ざかつて、そんなことを忘れて居やうとした。

すると須永が田口から疎くなればなる程、母は千代子の方へ突進して行つた。そこで須永は反つて自分の處置の不利なのをさとつて、又田口に行き出した。ところがある日須永が田口を訪れると、千代子が一人風邪をひいて、留守をしてゐた。千代子は須永が以前書いて呉れた繪などを出して、以前の須永の親切などを話した。彼はそおつと探りを入れてまだ結婚が極まらないかなどと問ふた。そこへ電話がかゝつて來た。そうして千代子には咽喉をいためているといふので、受話器は彼女が耳にあてがつたまゝ、彼れに先方への問や答を取り次がせた。彼は何となく不安であつた。

千代子は女の感情をそのまゝ表へ出して振舞ふやうな快活な女であつた。須永は寧ろ男らしくない、引込み思案な、そうして隱忍のこころを備へた性格であつた。二人は中々氣の合ふ仲ではなかつた。彼は何とかかんとか母の手前を取り繕うてゐる中に、千代子が嫁入するだらうと思ひ乍ら、矢張り他人へ千代子が嫁入するのが堪らなく不快であつた。

ある夏、田口一家は鎌倉に避暑してゐた。須永は母を連れてそこへ行つた。するとそこへ高木といふ青年紳士がゐて、千代子へ親しくしてゐた。彼の胸に不思議な程強い嫉妬が起つた。笑ひさざめく團樂の中にゐても興がなく、蛸釣りに出ても快々として樂まない、彼はすべてのことに腹立たしく感じて、皆のとめるのもきかずに、母を殘したまゝ東京へ歸つてからも高木のことが氣にかゝつて仕方がなかつた

彼は、あの賑かで、さうして複雑な鎌倉の一團より淋しいが單純な東京の家を懐かしく思つた。

二三日經つて思ひがけなく千代子が母を伴つて歸つて來た。彼はこゝで千代子から煮え切らない男らしくない卑怯な鎌倉での振舞を指摘された。さうして、愛してもゐず細君にしやうとも思つてゐない千代子を何故嫉妬を起こすのかと、彼女は泣き乍ら須永を攻めた。

六、松本の話

松本の話をかひつまんで書くとかうである。須永の一族の中で、須永が最も傾倒してゐるのは松本であつた。松本は須永に色々な感化を與へた。須永の隱遁的なところなどは、或る點までは松本の影響であることは否めない事實であつた。從つて須永の母は、千代子との結婚などについても、松本から須永を說明して貰うやうな方法を屢々取つた。

須永の卒業前に松本は彼を呼びよせて、母からの依賴の結婚の話をした。須永には無論その氣はなかつた。その時彼は、こんなにいじけた僻んだ己の性質は、皆が彼に隱してゐるから生じたのである、だからどうか松本にその秘密をうち明けてくれと賴んだ。松本は一切の秘密を秘密でなくした時に、始めて新しい光明が射すと信じたから、彼の乞のまゝに思つてゐること丈を話したのであつた。

その話によると、須永は今の母の子ではなかつた須永の父と召使との間に出來た子を、子がないので生れる早々須永の母が自分の子として養育して來たのであつた。生みの親は須永の生れる間もなく死んだ。その墓も何處にあるか松本は知らなかつた。松本の記憶や知識丈では、すべて須永の滿足を得るには不充分であつた。けれ共須永はこれによつて、母が千代子をたつて望む理由は、血統上の考からであることを知つたのである。

元來が引込み勝ちな須永は、この話を聞いてから

一層氣が鬱して來た。さうして母に對しても氣兼ねがされた。然し彼は默つて己一人の胸に疊み込んでおいた。彼は思ひなやんだ。どうにも家にゐて母の顏を見て居られないやうになつたのである。

卒業試驗が終ると、彼は京阪地方へ旅行に出かけた。母も松本もその擧に贊成した。彼は泊つた先々から松本に宛てゝ手紙をかいた。それで見ると彼の昂つた神經も、煩はされない旅の風物で、余程穩かにされたらしい。

七、結　末

敬太郎はこんな風に色々な事件や物語に打つ突つて、「世間」といふものを見るには見た。併し結局彼はそれらを見る人、聞く人であつて、自身その中に出て役割を演ずる立役ではなかつた。彼にはそれが物足りなくもあり、又仕合せにも見えた。彼は彼の頭を撫して、これから先き如何に、これまで續いて來た劇が流轉して行くだらうかを考へたのである。

編輯後記

□新小說新年倍大號の編輯の最も多忙を極めて居た眞中に、突如として計畫された此の臨時號が、計畫發表後、二週間を出でない今日、兎に角に、これ丈けの內容を具へて世に出ることが出來たことは、吾々に取つては、實際奇蹟にも等しい成績でありました。多數の方々から、一方ならぬ御助力を仰ぎ得たことに、あらゆる可能性が含まれて居たのは勿論でありますが、しかし夏目漱石氏その人の偉大を外にしては、本號の成功は得られなかつたことゝ思ひます。

□しかし出來上つて見れば、吾々の意に滿たない點も數多く見出されます。例へば、森田草平氏に御願ひしてあつた臨終の記や、芥川龍之介氏に御願ひしてあつた葬儀の記を初めとし、漱石氏英國留學時代に關する記事、漱石氏傑作梗概の數篇、興味ある書簡の十數篇など、總て締切期日の間に合はなかつた爲めに、遺憾ながら掲げ漏らしました。吾々はだゞ本書が、今後世に出でるであらうより善き「夏目漱石傳」の重要なる資料となり得ることに充分な喜悅を感じて、總てを割愛いたしました。

□終りに、本書寄稿家の皆樣を初めとし、貴重な漱石氏の筆蹟を貸與し下さつた方々、筆記その他の煩雜な勞をお取り下さつた方々に、深厚な謝意を表します。

本號に限り
實價 金四拾錢 送料金二錢五厘
海外送料十四錢但支那は內地並

送先 / 冊數	內地	外國（支那は內地並）
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢

送料共
但臨時號及特別號に對する增額は前金中より差引計算す。

注意 御注文は必ず前金のこと
（送金は振替貯金が御便利
（郵券代用は定價の一割增

大正九年十二月三十日印刷納本（每月一回）
大正六年一月二日臨時發行（一日發行）

編輯兼發行人 小林直造
印刷人 林保廣
東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所 株式會社秀英舍
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂
電話本局五十一番
振替口座東京一六一七

■夏目漱石氏著■

書名	版	定價	送料
三四郎	大形本	一圓三十錢	十二錢
門	大形本	一圓三十錢	十二錢
それから	大形本	一圓五十錢	十二錢
鶉籠	大形本	一圓三十錢	十二錢
虞美人草	大形本	一圓五十錢	十二錢
文學評論	縮刷本	一圓三十錢	八錢

東京日本橋通 振替一六一七

春陽堂

電話本局一五 各地書店賣販

◎夏目漱石氏著

縮刷

鶉籠 虞美人草

津田青楓氏裝

十八版

内容

●坊ちやん ●草枕
●二百十日 ●虞美人草

縮刷

三四郎 それから 門

十四版

『三四郎』と『それから』と『門』とはもと三部小説（トリロジイ）として書かれたものである。それを今度縮刷にして一巻に纏めた爲め、今迄個々の別冊として全く無關係に取扱はれ勝であつたものに、始めて貫通した一種の意味を與へる事が出來るやうになつたのである。

縮刷

彼岸過迄 四篇

九版

内容

●彼岸過迄 ●永日小品
●文鳥 ●夢十夜
●滿韓ところ〴〵

讀者諸君の御注文により弊堂は特に著者漱石先生の許諾を乞ひ從來の菊版型以外に合本縮刷として發賣す

定價 各壹圓五拾錢（送料各八錢）

□新式ポイント活字組
□模樣更紗表紙天金
□九百餘頁帙入

發行所 東京日本橋通四振替一六一七 春陽堂